
のほほんとおごすために

うしおなとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のほほんと過ごすために

【Nコード】

N7920M

【作者名】

うしおなとら

【あらすじ】

とりあえずのほほんと過ごしたい主人公ののほほんとしたお話。マジ恋らしく戦闘描写もありますが基本ののほん。オリ展開多数です。感想制限をなしにしてみました。酷評もガンガンお願いします。

2011年7月8日より原作突入。

河原でのほほん（前書き）

ヤマ無しオチ無しな駄文小説、こんなもんでよろしければどうぞ。

河原でのほん

「澄み渡った空……スバラシイネ」

眼の前を流れる川を見つめつつ、俺はふうと溜め息。

ジジ臭いというなかれ、平穏平和というものは素晴らしいものなのだよ。

『まったりとした人生』これこそ俺の人生目標なんだからそれにきわめて忠実ではないか。

なんて誰がいるわけでもないがクワツと瞳を見開いてみる。
散った砂埃が入ってきた……痛い、涙が出てきた。

コシコシと眼をこすりもう一度俺はごろりと河原に寝そべってみる。

「うむ、イイね河原は」

特に何があるわけでもないが俺はここが好きだった。

だって雲の形見てたり川の流れ見てたら時間ってあっという間に過ぎていかない？

いかないか……。

と、我ながらガキの言葉ではないことを思う。

水面が近い位置に俺はねっ転がっているが、やはりこここそ俺の中のベストプレイス。

魚も気持ち良さそうに泳いじゃって、今日のご飯は焼き魚がいい。

そんなことを思わせてくれるんだから魚好きの俺にはやっぱりたま
んないんだ。

物騒だ？ H A H A H A 魚はみんな食べるじゃないか。
食べられてこそ魚は幸せなのさ。

今度はずいぶん利己主義だつて？
そりゃそうだ、人間みな利己主義なもんだ。

妙な奴がいりゃあ避けるし、馬が合わない奴がいりゃあ相手にしな
くなつていくだろ？

要するに自分と合うやつといっしょにいるんだよ、みんなみんな。
それで楽しく世界は回ってるんだからいいじゃねえか。

はあとも一度溜め息一つ、俺は川の中へと目を向ける。

そこに居るのは一人の少女、真っ白な髪と赤い瞳のカワイ子ちゃん。
何？ 言い回しが古いつてか？
いいんだよ事実だから。

おーおー、しかし服がびつしよぬれだなあ。
てかアレ俺が洗濯すんのか？

……いつものことか、諦めが肝心、妥協が肝心だよな人生なんてよ。

どうせ祖父さんに家事させられてんのは俺だしな。
家事はいいね、リリンの生み出した最高の文化だよ。
なんたって仕事するだけでみんなハッピーになれんだから。

将来の夢に主夫も追加すべきか？

しかしそうなりや嫁さん選びが肝心になってくるな……。

ちつちええ顔川に突っ込んでるアイツに期待するか……いや、無理だな。

残念ながらアホの子だもんな、でもガッコの成績は俺よりいいんだよな。

理不尽だよな。

あ、こけた。

ハア。

「だいじょぶか」

「だいじょぶだ」

心配なさそうか、身体は丈夫でいいもんだ。

「今日の晩飯何がいい」

「ん、マシユマロ」

「おし、じゃあマシユマロ鍋にするか」

「お」

マシユマロ鍋か……、うん、それ無理。

マシユマロは寝る前に食おう、それで歯磨きして寝よう。

だいぶ日も傾いてきたもんな、帰ってご飯炊いて晩御飯の用意しね

えと。

「見て見て、タニシ」

「タニシか、よし！今日はシジミ入り炊き込みご飯にしよう」

「タニシは？」

「食べるのか？」

「食べるのめんどくさそうだからいや」

俺の方によってきた少女はそう言ってポイツと川の中へと投げ込む。ポチャンと波紋を生み出したそれが気に入ったのか、彼女は石を拾って何度も何度も投げ込んでいく。

「びしょ濡れはいかんぞ、ほりや、拭いてやるからこつちこい」

「ん」

持ち合わせのタオルでクシクシ拭いてやると眼を細める。ん、猫みてえだな、小動物的なかわいさがある、いいこつた。

あ、ヤベ、俺の汗ふいたヤツだ……。とつと風呂はいらせよ。

「およ？後ろの人たちいなくなってる」

「おお、ホントだ。」

遅くなっちゃったか」

そっぴゃあ後ろでガキンチョどもが騒いでないもん、いつの間に消えたのか……。

忍者か？最近のガキはすげー……、まあ同年代だけどな！

「僕らも帰る〜？」

「そいつはいいこった、帰るさあ」

「さあ〜」

ガシッと背中に乗ってきやがった。

だが甘いわ！俺をただの小学生と思うな！！こんなもん慣れたわ！！！！

……でも重い、言ったら怒るかな〜。

「いざ、しゅっぱつしんこー」

「しゅぽー」

首じゃなくて肩に手を置いてくれるようになったか、コイツも進歩したもんだ。

前は締めりかけたからな……。

そう言っつて俺とコイツは家へと帰っていく。

夕日に照らされて帰宅っつてなんかドラマみたいじゃね？

は？オチもねえしヤマもねえって？

そりゃそうだろ、俺の人生目標は『まったりとした人生』ですよ。

波乱万丈なんてこっちから願い下げだ。

……そいえば自己紹介がまだだったか。

小学生な俺の名前は『洪川晃気』、背中に乗った小学生は『さ』僕は榊原小雪だよ」……まあ二人仲良しだ。

河原でのほほん（後書き）

とりあえず一話完成、週一では更新したいな。

夕飯でのほほん（前書き）

眠い頭で書きあげた、微妙な気しかしないぞこれは。

夕飯でのほん

「ほいじゃあ、シジミご飯を作ることになりましたコックの昇気で
す」

「アシスタントの小雪だよ」

さてはてスーパーでシジミを買ってきたはいいがこのままだと食べ
られない。

砂だらけ、ジャリジャリいったもんなんて食べたくねえもん。

「というわけで砂取しまゝす」

「おゝ」

「まずはボールに水を張ります」

「じゃばじゃばじゃば」

溢れかえらんばかりに入れおった、この娘は……！
多いんでしゃばーと戻す。

残念そう……だと、水好きだっけコイツは？

気にせずお次だ。

「塩を一つまみ入れます」

「どばどばどばー」

関取のごとくブチ込みおった。

超濃厚塩水参上。

……薄めの塩水がいいんだよ。
後で理科の実験をしよう。

「というわけで塩水の完成です」

「ぱちぱちぱちー」

ボールにシジミを入れて少しの間待つかねえと。

よし、待った。

は？時間が飛んだ？気のせいだろ。
酒で臭みを緩和させてやんよ。

「シジミの身をとって炊飯器にGO！」

「生臭いぞコウキ」

「はいはい、ぺっぺ」

よりによって生を食うとは、逆にすげーよ。
さすがの小雪さんだ。

「きぎぎむぎぎむぎぎ」

「るるるるるる」

ニンジンとえのきでいいか、適当に刻んで炊飯器に。

「しょうゆにさけ、昆布だしも」

「ららららら、らららららら」

「焼き豚はまた今度な」

「メンマも？」

「メンマもだ」

ラーメンライスもウマイもんだ。

濃いめがいいよな、あんなもんは。

白米をおかずにするのが俺のジャステイス。

みんな入れ込んだらスイッチをぽちつとな。

だけどそうなると暇だ。

暇なのはいいことだ、けど今は生臭いこいつを洗ってやるのが先だな。

「風呂だ」

「お風呂だ」

というわけで小雪を引き連れ一路風呂へ。

今時珍しい五右衛門風呂に。

祖父ちゃんいなくてよかったわ、いたら薪で炊かなきゃならんもんな……。

さすがにそれはめんどくさい。

風呂桶の底に当たらないように曳かれた木板の上に俺たち二人。無しでやけどは苦い思い出、二度とやりたくねえよ。

しかし小雪のヤツかけ湯もせずに飛び込みやった、やっぱり祖父ちゃんいなくてよかった。ま、俺もだけどな。

「どうせなら派手にいこー」

「おー」

んなわけでハメでも外そう。そんな俺の手の内には手作り石鹸、小雪の手の内には手作りシャンプー。

俺らがいるのは湯船の中。

「わしゃわしゃわしゃー」

「わしゃわしゃーわしゃわしゃー」

風呂の中での泡だらけ、テレビ見てたら誰もが憧れるだろう？なに、そんなことないって？

海外のホームドラマの鉄則だろあれは。

「見る小雪！……ひつじ」

「お」

キラキラを眼を輝かせてやがる。

さすが俺、お笑いの才能があるのか。

「僕も、……ひつじ」

小雪はあえてのひつじ……。

ふむ、なるほど認めざるを得ぬようだな、この才能には。

「さんた」

サンタか……、そいやあクリスマスなんて家じゃあしないんだよな。まあウマイもん食えてプレゼントもらえるから一緒か？

サンタなんて知らんって祖父ちゃん言ってたしクリスマスじゃあないが。

「ん」と……かつら」

俺は大丈夫だよな、祖父ちゃんもまだ健在だしな。

しかしズラか、髪型ってどうやって変えるんだ、ありやあ。

一年通して変わってなかったらばれるわけだしどっかで変えてんだろ？……わからん。

「コウキ」お腹すいた」

「そか、じゃあそろそろご飯の準備としゃれこみますか」

川の水で濡れたこいつも石鹸のにおいになった。
これで陽気に飯が食えるもんだ。

炊飯器からほかほかの湯気、実にグッドだ。

「おいしそうだ」

茶碗片手にうれしそうだな小雪よ。

てな訳で盛りつけ盛り付け、ネギを上にかけて完成。

「ついでに冷や奴の野郎もつけてやろう」

「しょうゆ」

「ほい、ありがとな」

かしかしと髪の毛を撫でてやる。

な！頬を染めてる……だと……。

これが噂のナデポというやつか、しかしナデポってなんだ？

風呂上がりで俺頬も熱いし、それが普通だわな。

しかし犬っばいところがある、尻尾がほしいとこだ。

「では手を合わせて、いただきます」

「まゝす」

もにゅもにゅと咀嚼を開始、なかなかの出来栄え、これで主夫への道を俺は進んでいける。
夢をかなえるってすんばらしいな。

「こぼれた」

「ほい、台拭き」

「ご飯食ったら俺、マシユマロを食べるんだ……。」

歯磨きして寝ないとな、歯医者なんざだいつ嫌いだ。

夕飯でのほほん（後書き）

晃気と小雪の口調を固定せねば

散歩でのほほん（前書き）

テストがやばくてむしゃくしゃしてた。明日のためにがんばらないといけないのに……。

散歩でのぼん

散歩ってのはいいもんだ。

運動にもなるし、面白いもんも時には見つかる。

でも当事者になるのはめんどうだよな。

あくまで傍観者、野次馬チックに過ごしたいね。

まったり、のんびりにはそれが一番。

「ちようちよだ〜」

「小雪〜あんま離れんなよ〜」

「うえ〜い」

わかってんのか？あいつは。

追っかけてんのは黄色い羽の、モンキィチョウか。

最初名前聞いた時はサルみたいなやつかと思っただぜ。

サルの背中にチョウの羽……、お〜まさにもんすたー！。

「コウキー、カマキリだ〜」

「でっけー、……てか死んでんじゃん」

「おちてたよ〜」

女の子がためらいなく拾うんじゃないありません。

いや、小雪に女の子らしさを求めた俺が間違いののか？

間違いなく美少女なのにな……もったいないこつて。

悪い男に騙されないか心配ですよお兄さん的には！

背中あたりをつかんで小雪のやつ、嬉しそうにはしゃいでやがる。
……けど確かカマキリの死骸って、なんかいたよな？

「うおうー!!」

「こつち投げんな!」

「虫付いてるぞ」

「お前のせいだろうが」

白く細長い虫が俺の顔にイイイイ!!

「ベチツとオオオオ!!」

「つかんだ、変態さんだ」

お前が言うな。

ハア、カマキリにやあ寄生虫がいるんだっとな。
ハリガネムシだっけか？

そいやあ昔の拷問に使ってたって祖父ちゃんが言ってたか。

爪と皮膚の間に置くと入り込んでいくんだっけ。
めっちゃいてーってホントに痛そうに言ってたけど……体験済みなん
かな？

祖父ちゃん変ってるもんね、片目義眼だし。

「コウキー、マシユマロ買った」

ん？なんだかんだいってる間に駄菓子屋まで着いちまった。

ポケットを探してみると百円玉が三枚ありました。

ラムネを一本づつ買って、小雪に買わせてやって、俺は何買っかなあ。

「いらっしやい、相変わらず仲良しだね」

「照れるぜ」

「るぜ」

あらあらと笑ってるばあさんはうちの祖父ちゃんと仲良しだ。
今度お茶飲みに来てくれたらおはぎを作ってもらおう。

「ラムネが一本70円でマシユマロが40円、スルメが50円だから230円だよ」

「むーコウキのほうが高いぞ」

「じゃあなんか追加するか？」

悩む小雪。

腕を組んでみて悩む小雪。

頭を抱えて悩む小雪。

んゝ、なんて高めの声を出して悩む小雪。

「ててーててーててーて」

「んゝ、はい……マシユマロ？」

「一緒かよ!？」

というわけで二十円の飴玉三つポケットに俺と小雪はさらにぶらぶら。

河原に行っておいしく頂くのではないか。

「大丈夫なのか、大和？」

「うん、川神院つてところから強い人連れてきたから」

およ？河原で遊んでるいつものグループだ。

バンダナ少年に黒髪の頭の良さ気なやつ。

なんかイベントでもあんのか？

それに川神院つて言ってたっけ？

確かすんげー強い爺さんがいるとこだよな……。

これはまさか格闘大会的なヤツか！

男の子としてWAKUWAKUすんぜ！！

「よし、小雪隊員！我々はあの二人を追うぞ！」

「お〜」

「観戦しつつラムネで一杯しよう」

「ましゅまろぱーちーだ」

気の抜けた返事の俺と小雪。

んでやっぱり小雪は俺の背に乗ってきおった！

……予測済みだがね。

「こっきたーば全開だぁー」

「WRYYYYYYYYYYYYYY！！」

頑張って走る俺。

小雪の持ったラムネがゴツゴツ当たって痛い……。

「きゃっほう」

いっか、まあね。

散歩でのほほん（後書き）

やはりキャラが定まりきらん。

観戦でのほほん（前書き）

もうテストは捨てました

観戦でのぼん

みんなは中国のカンフー映画つてもんを見たことあるか？

たった一人でめちゃくちゃいっばいいる敵の中に突っ込んで、余裕かましながら制裁を加えていくアレ。

ぶん殴れば人が飛んで、蹴り飛ばせば人が舞う。

簡単に言えば異常な世界ってやつだ。

ストーリーなんて難しいもんはいまいちわからんが、俺としてはとっても好きなジャンルだ。

正に一騎当千、天下無双、万夫不当、もうあんたが大将って言える。

見てる分にはこうスカッとした快感を覚えるね、ちっちゃいことは気にしなくなる。

んでやつぱりちよつとは憧れる、だって男の子だもん。

現実問題そんなふうになれますよって聞かれたら全力で却下なところだが。

だってほら、あれじゃん。

刺客に狙われたり、恋人みたいな人がさらわれたり、肉親とかがラスボスだったりするんだろ？

そんなへヴいな人生御免です！

まあそれは置いといてだ、どっちにしたって現実じみてない。

だってありえないもん、どう考えても物語の中だからこそ成り立つもんだろ？

だからありえないはずなんだよ、黒髪の少女に殴られた男の子らが吹き飛んでるなんて。

吹き飛んだ男の子が俺と小雪の目の前に突き刺さってるなんてさ。

あれ？俺と小雪はいつの間にそんな世界に入り込んだんだ？

確かガキンチヨ二人追いかけて、河原に来たはずだ。

で、今俺と小雪は河原にいるわけだ。

俺のベストプレイスで、小雪と最初に会ったところ。

ここでのんびりガキンチヨの喧嘩を見に来たはずだった……んだけど……。

は？趣味が悪い？

ほっとけ、格闘技の試合見るのと違って大して変わらんではないか。お金貰って鍛えこんでやるか、その場のノリと雰囲気でするかの違いだけだろ。

ええと、どこまで話したっけか……。

「コウキ―、刺さってるよ」

「ツンツンするんじゃないやありません!!」

いかん、いかんぞ小雪、そんな人外魔境に首を突っ込んで。

その根源は最後の一人に手をかけてるし。

かけられた方はきつそうだなあ……しかしおお、なんときれいな土下座！

泣きながら謝ってるがああレヴェルだったら許してくれるか？

「いたそー」

「……Oh、ジーザス」

駄目か……現実なんて無情なもんなんだな。

おうおう、あんな少女に集まって喚いちゃって。
最近のガキンチョはわかってねえな。

いくら助けてもらったからってあれは異常だろ。

怖いわ、純粹にあの子怖い。

俺の人生的には全力でかわりを拒否したい相手だね。

「……ハッ!？」

眼が合った……そんなバカなッ!!

そりゃそうか、こっちはずっとあっちの方見てたんだもん。
あっちがこっち向けば眼も合うはずですもんね。

拙い……非常に拙いぞこれは!!

考えろ! 考えろ 洪川晃気!

なんとかして俺と小雪をあの子の意識からそらさねば!!

廻れ! 俺の脳細胞!

十年足らずの人生だけど最高の回転ってやつを見せてくれ!!

へ？マシユマロ？

わかってる、後で一緒に食べような。

……これだー！！

「コウキスライダー！」

「ひゃっほー」

というわけで河川敷を滑り降りる俺と小雪。

俺を下に、ソリ見たいにしながらずざざーっと。

痛い、痛い。

石が当たって草が目に入る。

だけど負けない！俺の人生のために！！

「コウキー、もう一回〜」

「待つて……ちょっと休ませて」

「じゃあ十秒ね、い〜ち、に〜い……」

疲れた……。

おんぶで鍛えた俺の足腰がガタガタ、段ボールのヤツはバケモノか！

「おい」

「はいお嬢様、今日のメインディッシュは雑草のマリネ〜泥臭さを添えて〜です」

「おいしそ」

「いやいやいや、あきらかに不味そうだから」

話しかけられた。

逸らさねば、話を逸らさねば！！俺の人生的にかけ離れたもんにな
つちまいそつだ。

「じゃあ帰ってご飯でも食うか？」

「えゝ、でもさっきご飯食べたよ」

憎い……いつもはかわいい小雪の天然が憎い。

気付いて、俺の思いに！

僕らはいつも以心伝心だろ？

「んゝ……、おおー！」

気付いたか小雪、伊達に一年近く一緒に暮らしてる仲じゃねえって
ことだな。

「コウキもマシユマロ食べるゝ？」

……ですよねゝ、さすがの小雪さんだ。

「お前のやってた遊び、楽しそうだな」

つてへ？俺じゃなくて？遊び？

そりゃそうか、俺なんかただ眼が合っただけですもんねゝ。

「大和！」

「はい、なんですか」

「敬語はやめろ、気色の悪い」

「えっと、じゃあ何かな？」

「お前段ボールになれ」

「は？」

何さ？恨みがましい目で見ちゃってさ、とぼっちりいくなんて知らなかったんだよ！！

ま、俺にやあ関係ねえけどな！
ケケケー、この間に逃げるぜえ。

「よし、商店街の方に行こう小雪よ」

「お〜」

小雪を背負っていざ行かん。

「そつえばお前の名前はなんていうんだ？」

「鵬龍堂幻佐です」

「何？」

「だから「渋谷コウキだよ」です……ってマジで

「そうか……、お前暇だったら家に来い」

やっぱり眼付けられてた。

観戦でのほほん（後書き）

なんか違和感

縁側でのほほん（前書き）

かなり無茶な気が……

縁側でのほほん

あの物凄そうな子に目を付けられてからも二週間くらいたった。た。

なのに何の音沙汰もない！

忘れられたのか？それとも辛抱強く探しているのか？

いやいや後者はない、きつとない。

「というわけで自由だ……」

ばんざーいと手を挙げて見る。

ああ、のほほんと過ごすごことができるってスバラシネ。

駄菓子屋のばあちゃんからもらったおはぎを片手に、こくこくお茶を流し込む。

いいね……、お茶はいい。

最近のやろーはコーヒーだの紅茶だの言ってるけどやっぱりお茶が一番だわな。

「コウキー、僕のおはぎなくなつたよ」

「そうか」

「コウキのそこにおはぎあるよ」

「そうか」

「おいしいね」

「そうか……ってオイ」

「はみゆはみゆ」

油断も隙もねえよこの御大臣は。

まあ半ばこいつのフリーダムっぷりにはあきらめるところがあるからいいさ。

しかし小雪よ、貴様が食ったのはおはぎだから見逃したのだ。これが羊羹だったら……俺は逃がしはしないぞ、ククク。

へ？何からって？

そりゃあマシユマロからだ。

好きでも度を過ぎると異常、過剰。

むちゃくちゃに食わせて気持ち悪くさせてやるわ！

「ん」

にしてもここは気持ちいいえ。

祖父ちゃんの家、つまり俺と小雪の家は純和風って感じ。

古臭くって、ネズミも出て、ガタもあちこちで来てるが俺はここが好きだなあ。

「日向ぼっこはいいねえ」

「くあっ」

縁側で、少しばかり日が陰っていい感じの日差し。

風が頬を撫でて気持ちいい、チリーンと自己主張する風鈴がまたこれを際立てる。

最近の軟弱物はすぐクーラーなんぞに頼るが自然の風がいいもんだ。うちわもいいね、夏の風物詩だけど俺は一年中愛用してるさ。

扇風機があれば完璧だ、あゝってやるのは誰もが通る道、俺は今でもバリバリにやってるけどな。

どちらにしてもクーラーなんざ邪道だ。

べっ、別に古くってクーラーないから嫉妬してるわけじゃないんだからね！

「ふみゅう」

何の音かと思いきや小雪のヤツがあくびしてたのか。

まるまって、手で顔を掻いてら。

……しかしマジで小動物、耳か尻尾がほしいぜ。

「ほれほれ、板の上じゃあ体痛くなっちまうだろ、畳に移るぞ」

「おゝ」

皿を持って部屋へと入る俺をころころ転がる小雪が追う。

平和だ………実に平和だ。

いいなあゝ、これぞ理想ってやつだよ。

友達がいて、家族がいて、そいつらとのんびりのほほんと過ごす。俺の将来の夢の縮図がここにあるわ。

ピンポン

おろ？お客か？珍しいな。

「くう……くう……」

寝てる小雪をおこさねえようにしないとな。

ハンコ、ハンコ、ハンコはどこかね。

「と、ほいほい、お待たせしました」

ハンコ片手に鍵を開けた俺、なんと目の前にはチンピラが立っていた！

チンピラのターン。

「坊やこの子？おじさんたちここにいる榊原小雪ってなに用があるんだけど？」

チンピラの攻撃。

チンピラは晃気に対して質問した。

「……あ、この表札渋川って書いてると思っんですけど」

ミス、晃気は表札を指してトボケて見せた。

俺の「嘘言っちゃいけないよ」、ちゃんと調べはついてるんだからね」

チンピラの攻撃。

チンピラは晃気の肩を手に取り威圧感を醸し出した。

「あのだか」「おじさん嘘つく子は嫌いだな」

チンピラの連続攻撃。

チンピラは晃気の肩をがっしりとつかんできた。

晃気のターン。

だめだ、掴まれて動けない。

チンピラのターン。

「あの子の母親、知ってるでしょ？おじさんたちに借金してるんだ」
それは知っている。

ほのぼの路線で始めたはずだがここは越えなきゃいけないからとつとと、って何の電波だ？

なんにせよ小雪と俺が合った時あいつは母親に（以下中略）。

要は小雪を虐待してた母親がお金欲しさに借金してて、その担保に小雪をかけたって話だ。

てか担保に人間なんて普通できんだろ、どんな組織だよ。

警察関係者の祖父ちゃんが動いてるって言ってたけどまだまだっ
たんだなあ。

ちなみに母親の方は留置所の中、ブタ箱で臭い飯食ってるYO！

「そんなわけを出して欲しいんだ、彼女を。

君も痛い目なんか見たくないだろ？」

今まで俺と話してたインテリチックなチンピラは脳筋チックなチン
ピラを促す。

うおー！シャドーボクシングー！！

小学生の俺相手にやることじゃねえだろ！

さあさあとニヤつく二人。

俺は……さて、これだな。

えふんと咳払い、囁むなんてみっともねーぜ。

眼を細めて雰囲気出して、低い、渋い声を絞り出せ。

「地獄で閻魔に会ったらよろしく伝えてくんな」

決まった……一度は言ってみたかったんだよね。

よし、俺の決め台詞にしよう。

そんなことをボンヤリと俺は考えていたんだ。

「起きろ」

「へう」

モチみてえに延びるな、こいつのほっぺは。
むにむに、むにむに、むにむに。

「いひゃい」

「起きたか」

「お」

「んじゃあご飯だ」

「ん、今日は何作るの？」

小首をかしげた小雪。

確かに何を作るんだ？考えてなかったわ！

「めんどいから出前にするか？」

「ラーメンラーメン」

「そうと思って頼んでいる！この気配りこそ主夫ってやつだ」

「ぱちぱちぱち」

手をたたく小雪を見てると照れる。

このドキドキ……まさか恋！？

「ちゃららららら、ちゃららららららら、ちゃらら」

いや、ないか。

まあ妹、もしくはペット？意表について俺がペット？

どっちでもいいが小雪よ、箸でお茶碗をたたくのはやめなさい。

ピンポン

「来た」

とととて駆けてゆく小雪の後に俺は続く。

「チワッス、出前持ってきてくるえ！？」

素っ頓狂な声をあげたラーメン屋の兄ちゃん。

「見て見てコウキー、人が刺さってる」

おお、と感嘆の声を上げる小雪に俺は言うんだ。

「よし、思う存分ツンツンしよう」

「らじや」

縁側でのほほん（後書き）

なんかやつぱり変だ

壁際でのほほん（前書き）

シンデレは至高

壁際でのぼん

スイングするどこかの高校の男子生徒が言っていた。

人間は基本的に二種類に分けられるらしい。

彼が言っていたのはその場その場で違っていたけど大方間違っていないと思う。

んでもって俺の話、今俺は小雪と小学校にいる。

そんなところでも人間は二種類に分けられるみたいだ。

つまり俺らみたいに友達のいないヤツと友達のいるヤツだ。

小雪はって？小雪はもう家族だからなく、微妙なところだな。

小学校にランドセルを背負ってやってきた俺ら。

すると俺の上履きがペンで真っ黒になっていた！！

いつものこといつものこと、気にしちゃ負けさ。

……でもなんでだろう、涙が出ちゃう……だって男の子だもん。違うつて？それも気にしちゃ負けさ。

「コウキ？」

「ん、なんでもねえよ」

しまった俺ともあろうものが小雪に沈んだ顔を見せようとは、渋川晃気不覚也！

小雪は聡いところがあるから俺がいつもの調子を崩しちまったら自分で責任感じちまう。

いかん、それはいかんぞ小雪さん。

女の子は泣かせるもんじゃねえ、鳴かせるもんだってなんかの本に書いてたしな。

しかし鳴かせる……？

ピーチクパーチク言わせりやいいのか？

だったら俺と小雪は大丈夫だな。

「ぽっぽっぽー、はとぽっぽー」

「くるっくー、くるっくー」

「よしよしい子だ、帰ったらマシユマロをやるっ」

「わーい」

完璧じゃねえか、俺もやるもんだ。

それに小雪にはどちらかといえば感謝してるところがあるしな。

『小雪菌』なんざ言われてたこいつとつるむ様になって適当に話してた友達はさっぱりになっちった。

小学生を侮るなかれ、情報網はホントすげーんだ。

小雪の母ちゃんがアウチな人なのもどこからともなく嗅ぎつけてきたし。

その上小雪と遊んだもう次の日には俺の机がなくなってたからな。
なんと陰湿！絶望したよ諸君って感じた。

その代わりかけがえのねえもんを手に入れた。

一つは小雪、今じゃ大事な俺の家族。

もう一つは掛け値なしに付き合ってくれる大事な友達。

祖父ちゃんがいつか言ってた『百人の友達より一人の親友』って意味がよくわかるわ。

「お、忠勝、わりーな机なんか拭いてもらっちゃまって」

「お前のためじゃねーよ、ただ汚れてんのが気に食わなかっただけだ」

ほら、すげーいいヤツ。

「ふんなんてそっぽ向いちまってかわいいー忠勝」

「かわいいー」

「だーってろ、それより宿題やったのか？」

「もちろんさあ」

「みせてやるーか、タダカツー」

「当てられそうだったらな、確認くらいさせてくれ小雪」

「アレ？俺は？」

「…………お前のは信用できねー」

さつくりとひどいことを言いおつてからに……。
ハンと小学生らしからずニヒルに笑う、渋いぜ。

そんな目つきの悪い少年は……、そだ。

「エントリーナンバーいっぱい番、忠勝くん、それでは自己紹介を
張りきってどうぞ」

「意味わかんねーぞ」

「どうぞ」

「…………ツチ！源忠勝だ、白飯と納豆と味噌汁が好きだ…………これはい
だろ」

やっぱりすげーいいヤツ。
ちよつと赤くなつてら、もし俺が女だったり忠勝が女だったら惚れ
てるわ。

…………ん？両方女になつた気がするのはいのせいか？

昔は、一年前は完全に逆だった。

孤児院の出つてことで敬遠されてた忠勝んとこに俺がひつついてた
んだよね。

足しげく忠勝に話しかけてたけど適当にいつも流されてたのはい
い思い出。

『俺がいなくなつてお前の周りにはいるじゃねえか、ダチがよ』な

んつつて振られちまったんだ。

んで今度はそれまでは普通だったのに小雪が虐められ始めて、俺が気にせず話しかけてたら俺に矛先変更。

小雪に当たりかけそうになったもんな。

お前のせいだってよ、俺って馬鹿じゃね？

そしたら今度は忠勝から来てくれたんだ。

「『お前の周りにいねえなら、俺がダチになってやんよ』だってさ」

「テーマはいい加減忘れやがれ！！」

「大丈夫だ忠勝、結婚式の友人代表でスピーチしてやら」

「殺す！」

友達がいて、家族がいて、うん、俺ってばめっちゃ幸せなんじゃね？

でっかくなっても三人でのほほんまったり過ごしたいもんだわ。

「晃気、覚悟はいいか……」

「待て、壁際に追い詰めるのは……」

アーーーーー！！！！

壁際のほほん（後書き）

ゲンさん、かわいいよゲンさん

■でのぼん（前書き）

テストオワタ

畳でのぼん

人生唐突に襲ってくるものが大量に蔓延ってるもんだ。

出会いだったり、別れだったり、喜びだったり、悲しみだったり。

まあ何が言いたいかってつと今この瞬間を大事にしなきゃいけないってことだ。

てな訳で今日ものんびりまったりいこうじゃねえか。

「……遊びに来てやってんのにずっと寝てるってのはどうなんだ」

「いいじゃんいいじゃん、気にしたら禿げるぜ」

「ツルツルタダカツー、ツルツル」

「小雪、そいつは男相手に言っちゃいけないぞ」

呆れたのか、諦めたのか、忠勝も畳にゴロンと転がる。

井草の青臭さが鼻につく、それがまたイイね。

畳ってのはなんでこんなに落ち着くんだろうか？

これは世界七不思議にも認定していいはずだ！

すべすべというか、ざらざらというか、何というか。

さわり心地も、こう何というか押し返してくる感じも、畳はいいね。

日本人はやっぱ畳、好きなのかなあ？

「んゝむにゅう」

寝ちまったのか二人とも。

規則正しく聞こえる忠勝の寝息と何かつぶやくような小雪。

悪態ついてた割に忠勝のヤツはすぐに寝おった。

なんだかんだ言って疲れてたんか？

孤児院じゃあお兄さん役でも買って出てたし。

ちみっちええくせに、年上ぶるところあるからな。

誰かに甘えりやいいのにプライドが高いのか、一匹狼だもん。

は？俺？

俺はこれでも祖父ちゃんにべったりだぜ。

しかし甘い、甘いぞ忠勝！

この家では俺が兄貴だ！！……同い年だが。

……言っててなんか空しくなってきたんだ。

だから俺も寝ることにしたんだ。

二人の間に滑り込む。

てか正にそこが俺の特等席みたいに空いてたしな。

ねっ転んでシミだらけの天井を見上げる。

きたねー、煙草の煙か？

アレ？祖父ちゃんって煙草吸ってたっけ？

俺？H A H A H A、小学生の俺が煙草なんて吸うわけねえじゃん。
だったら何なのかっておりよ？

「ふみー、ふみゅー」

小雪か、腕なんか掴んじゃってかわいいもんだ。
くつついてくるか……抱き枕化した俺は。

って忠勝もかよ!?

誰かと一緒に寝るなんて経験こいつもなかったのかもしれないな。

平和だな、平穏だな。

アニメとか漫画だったら刺激を求めたいなんて言って危ないところに
首突っ込むやつがいる。

でもあれって途中でだいたい元の生活に戻りたくなるんだよな。

それで知り合った仲間と平和を謳歌できるために戦う。

そう考えりゃあこののんびりした雰囲気はずっと保っていききたいっ
て思ってる俺って、実はすげーんじゃねえの?

祖父ちゃんから護身のために柔術ちょびつと習ってんのも、祖父ち
ゃんの話にそうだよな、って思えたからだし。

『真に護身が完成したら危うきには出逢えぬ、己の危機に気付くま
でもなく危機に辿り着けなくなる』だっけか?

この言葉聞いて俺も祖父ちゃんのしつこかった勧誘に付き合うよう
になったんだもん。

たった一人の肉親だからってそこまでやんなくてもいい気がするん
だがなあ、てくらいしつこかったな、祖父ちゃん。

祖父ちゃんの言ってたこと聞いて、俺が頑張ってみれば小雪と忠勝は危なくなるもんな。

きっとあの物騒な子みたいなのに会わずに過ごせるはずだもんな。

いや、我ながらホントガキの考えることじゃねえや。

でもまあ人生目標のためだ。

『まったりとした人生』、これにたどり着きたい……もんだ……。

……俺も寝よう、今は三人でぐっすり。

「コウキー、おはよ」

「おせーぞ起きんのが、じゃあ俺は帰るからな」

「は？そんなに遅いのか、もう？」

至近距離に小雪の顔が！

ま、いつものことだけだな！！

ホントだ、カラスがないてら。

何時何時？つてもう五時半過ぎてるじゃねえか！！

「やべえ！ドラゴン ライブが！」

「まだ始まるまで時間あるだろ？とりあえず米だけ洗って炊飯器に

入れといてやったからな」

「僕も手伝ったよ」

「大儀であるぞ二人ともよ！」

「ははー」

「ハア、じゃ今度こそ俺は帰るぜ」

呆れてら、荷物まとめてとつと帰ろうとしてら。
まあ荷物なんて持ってきてないんだけどな！！

「一緒に見て帰ればいいだろ？」

「ガキどもと見るって約束してんだよ」

ヒラヒラつと手を振り忠勝のヤツは帰って行きおつたわ。
あ、そだ。

「自転車使えばいいぞ」

「もう借りてる」

鍵がねえ！

俺のコウキライダー一号が！

「ばいばい」

消えていっちゃった忠勝、あれめちゃくちゃ急いでるよな？

んなことよりテレビテレビ。

セーフ、ちょうど前ふりのCMとは危ないところだったぜ。
忠勝のやつは最初のほうみれねえな、明日教えたる。

お、始まった始まった。
やっぱかっこいいぜ。

「しんじたい」

小雪よ、アニメのOPは静かに見るもんだぞ。
ま、俺も歌うけどな！

「わすれたい」

「あの日感じたいのみ」

量でのぼん（後書き）

一年余分にかよわならん気がする

お墓でのほほん（前書き）

心理描写は難しい

お墓でのほほん

「クーララ、クーララ、クーララ、クーララ、エベレスト」

はいはい、ご機嫌そうに歌ってるのはいいけどコケないようにしろよ。

山道上るが日差しがきついぜ。

木陰木陰、木陰プリーズ。

「ごらんあそばせ、ピンチにパンチ」

今やってんのもいいけどやっぱ初期か二期が好きだわ。
紫髪の子はかわいいぜ。

「パンパン！タラッタタラッタ、パンパン！タラッタタラッタ、パ
ッパンパン！タラッタタラッタ、パンパン！タラッタタラッタパン
！」

「ぷりてい、ういっちい、小雪うち」

くるっと一回転して頭のへんをおさえる、さすが小雪さんだ。

「コウキー、これで僕も魔女っ子？」

「おうよ、似合ってたぞ」

「えへへ」

はにかむ姿にやっぱりドキドキ。

これは風邪？それとも恋？

いや、やっぱないな。

だって俺の初恋はもうやってきたんだから！

「ハートに巻いた包帯を」

ふふふと鼻歌交じり、つかつか行こう。

「コウキー、僕使い魔がほしい」

「フハハハ！地獄元帥KOUKIE！主の名にて只今参上！」

「お」

クフフ、さいきょーの俺が来たからには小雪は無敵の魔女っ子だ。

腕を組んで仁王立ちの俺。

そんな背中に小雪がダイブ！

「いけーKOUKIEー」

「WRYYYYYYYYY！！！」

フハハハ、景色すら止まって見えるわ！！

上に行ったら自販機でスポーツドリンクだ。

……あ、下にしかなかった。

桶に井戸から水を酌み入れじゃばじゃばと。
溜まった桶をえっちらほっちら。
柄杓を持つてばしゃばしゃと。

「僕もやるよ」

「ん、ありがとな」

小雪に柄杓をほいっと渡して俺は線香に火をつけねえと。
マッチをシツとすり合わせて小さな火種。
一発で出来るとは、さすがの俺だな。

「お」

照れるぜ小雪……ってそこ違う家の！

さすが小雪さん、俺の予想をはるかに越えてくれるぜ。

「僕もやる」

「いや、お前は水かけっていう仕事があるだろ？」

「え、僕もやりたいよ」

フツ、ガキめ……まあ同年ですけど何か？

火傷には気をつけると一言マッチ箱をポイッと取り出してシュツと擦るがポキッと折れる。

だが小雪はあきらめない。

続けて擦る擦る擦る、そして折れる折れる折れる。

「むう」

むくれるな小雪よ、マッチ擦りとは高く険しい道のりなのだよ。俺みたいになると毎日石油ストーブを点火している俺とは経験が！技術が！才能が違うのだよ！

エアコン？何それ、食えんの？

暖房器具はストーブと炬燵さえあれば生きていけるんだっての。

新聞に火を移して線香に点火。

線香の匂いって結構好きなんだがどう思う？

二本まとめてサクッと刺す。

しかし線香は刺さらなかった、どうやら土が硬くなってるようだ。

どうしますか？

倒しておく

？小石で耕す

むしろ線香を立てない

俺こそが線香立て

「よっしゃ、刺さった」

「お米は？」

「ん、ちゃんとあげないとな」

花は立てたし水も入れたから後はそれだけだな。

「ぱらぱらぱらー」

「ぱらぱらーぱらぱらー」

んでもって少し下がって手を合わせる。

電車に揺られてガタンゴトン。

やってきたのは少し進んだ山近く。

名前の彫られた石がいっぱい、要は墓地だ。

さて、えふんえふん！

拝啓、親父殿、御袋殿、俺は元気です。

小雪つつう家族もできたし、親友もできたしそれなりに充実してま
さあ。

フリーライターだった親父殿についてった御袋殿は戦争に巻き込ま
れて逝っちまった。

そのせいで墓はここ、川神市から少し離れたここにあるけど骨も何
も帰ってこんかったな。

唯一届いたのは祖父ちゃんとか俺含めた家族四人の写真だけ。
しっかり部屋に置いてるよ。

まあなんだ、俺は祖父ちゃんとここにずっといてあんまり死んだ時も感慨つてもんが無かったが……。
とりあえずはやっぱ俺は元気です。

『まったりとした人生』歩んでいけるように応援よろしく!!

「じゃあ小雪、帰るさあ」

「さあ」

ニパツと笑いかけてくれる小雪の気遣いがうれしいとこだ。
無邪気な無垢さに癒されるぜい。

「コウキー、今日のご飯はなに？」

「おお、それがな祖父ちゃんが寿司屋に連れてってくれるってさ」

「おすしか」

「だな」

「僕プリン食べるよ」

「廻ってるのだったらな」

お墓でのほほん（後書き）

読み返してみると一話一話が短いな、まあいいか。

鍛錬でのほほん（前書き）

クロスしちゃった

鍛錬でのぼん

『合気』っていう技術がある。

危害を加えようとする敵の力に対して、己の力を加えて返す。

敵の加える力が強大であればあるほど、敵自身に変える力は強大になってしまう。

なんともぶっ飛んだ、ありえねー技術だわ。

実現不可能な、日本古流柔術の奥義ってやつ。

てか合気つつたら漫画でもよく出てくるアレだろ？

確かに俺の住んでる世界でも合気はあるって言われてるけどどれもこれもお約束の中じゃねえと発現されてないんだとさ。

でもなくいるんだもん、それを再現しちまう、そんなむちゃくちゃなバケモンが。

しかも今俺の眼の前に。

たのしそーな顔しちゃってさ、俺は楽しくねえよバカヤロー。

「カッカッカッ、どうした晃気？もう終わりかの？」

「え？マジで？終わっていいの？」

「……いいわけないじゃろ」

ですよねえ。

と思った瞬間俺の足は地面を離れてら。

ままよつと逆立ちで支える。

でも俺の目の前に祖父ちゃんの足……あ、詰んだわ。

ベキつと鼻に食い込んで俺はびゅーんとボールみたいに。

孫に対しての行動じゃねえだろ。

そんなこと思いながら叩きつけられた床、あゝクラクラする。

「おお！意識があるとはさすがワシの孫だの」

気絶してりゃー良かったアアア！！

嬉々として突っ込んでくる好々爺。

『達人』だの『武の体現』だの言われてるが俺にとっちゃあ只の祖父ちゃん。

俺の目の前で立ち止まって、ニンマリと笑ってら……むかつくぜ。

「ほれほれ、殴ってみんかい」

「殴ったら合気とやらで吹き飛ばされるじゃねえか」

「技術つつもんは喰らって初めてものになる、ガンガンやられとけいゃ」

「ヘイヘイどゝもッ！！」

祖父ちゃんの足元めがけて足払い、なのになんで俺は浮いてんだ？
足で投げたのかよ！無茶苦茶だねえ……。

祖父ちゃんの手が俺の頭に添えられる……ってマジで！？

「おしまいじゃ」

Oh!

さすが祖父ちゃん、くそつえーや。

「まあだまだだの、晃気」

「だの」

ワザとらしく溜め息をはいてるのは俺の祖父ちゃん『洪川剛気』。年齢76にして『洪川流』っていう柔術の看板背負ったすげー爺さんだ。

てかジジイの動きじゃねえよな。

全国のご老人は足腰の痛みと戦ってるってのに、なんで俺と戦ってるんだか……。

ハア。

まあ俺が申し出たわけで、最初は祖父ちゃんが言ってたからだとしても、今は自分からやることになったわけで。

「しっかし進歩せんの、ジジイにいいようにされて悔しくないんかい？」

「一日やそこらで何とかなるか!!」

「阿保ウ！おまんさんのもつとる漫画でも見とるアニメでも一日あったら強うなつとろうが！」

「現実と幻想を一緒にすんな!!」

「じゃったらワシはその幻想の担い手でい」

いつ、言いかえせねえ……。

殴ったろうかこのジジイ。

でも殴ったら確実にブツ飛ばされるしなあ。

いやしかし……だが……。

「帰ってから思つとつたが……乱れとるの、焦ってんのか？」

はいイ？いきなり何言つてんだこの耄碌ジジイは。

焦ってる、……焦ってるなあ。

祖父ちゃんが死ぬまでに祖父ちゃんの持つてるもんでできるだけ貰えるように、とは思ってるが……。

このジジイあと五十年は生きそうだ。

中国の方には150近いジジイがいるんだろ、家のも余裕だな。

「コウキはなんか大変なこと、あったの？」

「いやいや、そんなつもりはねえさ」

小雪にまで心配されるとはなあゝ。

思い当たる節はねえはずなんだけど。

いつもみたいに起きて、飯食って、学校行って、小雪と忠勝と遊んで、鍛錬して、風呂入って、寝て。

うむ、実に普通。

だがそれがいい、実にいいぞ。

「何考えとんじやいお前は、余計なことはいらん」

む、いつもと違って少々真剣だ。

「怖いもんにでも会った……ちゃうのウ、会わせてしもったんか？」

細められた祖父ちゃんの視線が俺を射抜く。

怖いもん、か。

思い当たる節でできちまった……。

もう一月以上前だから忘れてたはずなんだがまだ居たわけね、あの子。

ストーカーってやつか、いやいや居候か。
どっちにしたって傍迷惑なヤツ。

でだ……そゆことね。

危機に出会いたくなくって祖父ちゃんに柔術習い始めて一年ちよつと。

なのに危機に出会わせちまった、出会わせまいとした相手を。

だから悔やんでんのかね、それがどつかで焦りにつながってんのかね。

「晃気、一つ言わせイ……、テメエ柔術舐めてんのか？」

「いや、んなつもりはねえけど」

「じゃあ焦んなや」

スイマセン祖父ちゃん、意味がわかんね　ッス。

「ワシが、六十余年人をぶん投げることだけ考えてきとった、そのワシが真の護身を完成させたんが一年くらい前じゃい」

そいやあでつかい兄ちゃんにアキレス腱噛み切られたんだっけ？
でもそれまでの祖父ちゃんはかつく良かったよな。

「だのになんでシヨンベン臭エガキが身につけられんだ？」

「……」

「焦んなや晃気、焦りは何も生みやあしねエ……特にワシら柔を使
いよるもんには」

そうだよな。

祖父ちゃんがやつとこさ身に付けたもんを俺が早々に身につけたら……ってんなもんできるわきゃねえや。
傲慢ってやつか……みっともねえ。

「安心せい晃気、お前もきつと身につけられらあ……、なんたつてワシの孫だからの」

パチツとウィンクしてみせた祖父ちゃん、さすががつくいてぜ。

「お祖父ちゃん僕もやる」

「いかにいかなの小雪さんよ、痣でも出来たらどうすんじや」

「俺は？」

「はあ……齡イ取っちまうと耳がとゆーて」

このジジイは……！

「でも僕もなんかやりたいよ、僕も強い方がかつくいーもん」

「だかの、あぶないやろ？」

「ぶーぶー」

ケケケ、ブーたれた小雪にそっぽ向かれてやんの、いい気味だぜ。

およ？携帯だ。

ジジイのくせに近代文明にしっかり順応してやがるからな、こいつは。

「はい、渋谷ですわ、烈さんですかの？」

何やってんだアアア！！

鍛錬でのほほん（後書き）

基本的に刃牙シリーズの登場人物は晃気くんとその周りとししか関わり合いません

傘でのぼん（前書き）

テストもほとんど終わった

傘でのぼん

暑い……今の心情を一言で表すならそれだけ。

まだ六月になったばかりのにさ。

25 ですよ25、ふざけてるぜ太陽のヤツは。

もつと俺みたく慎ましく生きるべきだろ。

第一なんだ、いつも燃えてるなんてバカじゃねえのか？

燃えるのが生きがい？そんな生きがい捨てちまえ！！

もう爆発しろ。

へ？太陽がなくなったら地球に光が来なくなるって？

……でかい電球ぶら下げりゃあよくね。

ダメなの？電力がない？

んなわけねえじゃん、電気はコンセントに繋げりゃながれるじゃねえか。

は？出力？

電力会社の人に頑張ってもらえばなんとかなるだろ。

「ならねえよ」

「マジで？」

「当たり前だろ、エネルギーの大きさが違うんだよ」

小馬鹿にしたような忠勝の視線。

アホの子を見るみたいだ……。

俺か？俺なのか？

チキシヨウ、算数はできるんでい、得意なんでい。

「俺はむしろ算数得意なのにそんなことわかんねえのがわかんねえよ」

パタパタ手をうちわに扇ぎながらてくてく三人は進む。

小雪は背中であうんしてるよ。

「コウキー、自販機だ」

ぐでぐと気の抜けそうな小雪が言うみたいに確かにそこには自販機が。

これは買いの一択だろ。

五年生に上がっても相変わらずの俺と小雪と忠勝。
変わったことを挙げりゃあ忠勝がおっさんに引き取られたことが。

兎魚人だっけか、すげー名前だ。

ぴょこんと立った耳に鱗だらけの皮膚、水中で暮らしてニンジンを食べうけだろな。

アレ？忠勝は人間じゃない奴に引き取られたのか？
つまりあの皮を破ってなんか出てくるわけだな！？

「てことは忠勝の引き取り人は……地球侵略を狙った宇宙人だったんだよ！！」

「なっ、なんだっ……て」

「晃気、殴るぞ、いつもみたいに」

はいはい、ごめんごめん。

てかそれより小雪がヤバイ。

いつもみたいな無駄な元気の良さがなくなっちまってる！

走るしかねーだろこれは！！

「ういり」

あ、俺もヤバイ気がするわ。

という訳でやってきた自販機の前。

ポケットに入ったお金は50円玉が一枚。

足りない……だと……！！

「悪い、お金かしてくんね？」

「ほらよ」

パシッと受け取ったあつたかくなつた鉄の感触。

こいつなら……！

「勘違いすんじゃない、俺は小雪に倒れてほしく、イヤイヤイヤ、足りねえから」は？」

渡されたのは50円玉。

俺のと合わせて100円だ。

普通は買えるもんだ、ちっちゃい缶のヤツだけだな。そんなもんはだいたい自販機の下の段に並んでるはず。そつ、はずなんだけど何で一番上にあるんだ？

届かねえ、手を伸ばしてみてもリーチが足りねえ。もうちょっと、もちっとでかけりゃ届くのによ。

忠勝も同じだ、ジャンプしても微妙に届かねえ。

もしかして……これってかなり拙い状況ってやつ？

「ッチ！」

ここで忠勝が動きおつた。

ランドセルを地面に置いて……まさか踏み台にする気か？

ヤメロー、そんなことしたらランドセルのヤツが……！！

ゴロンゴロン

おりよ？ボタン押されてる……。

誰が？何時？俺らに気づかれることなくだとオ！！

「コウキー」

ハッ！んなことより小雪に飲ませてやろつ。

「んぐんぐ」

こくこく喉が鳴ってら、イイ飲みっぷりだぜ。

にしてもホントどうやって……ってコイツは！？

まさかお前が！？

チラツと向けた先には首を振る忠勝、違うつてのか。

となれば……小雪、お前なのか？

すげー、すげーよ小雪。

こいつがあれば俺は誰にも……誰にも負けやしない！

伸ばせ、それを！

イメージしろ、手の一部、その延長だと！

掴み取れ、栄光を！！

ホアッ！

ズズズズ……。

「リモコンげっちゅ！」

すげー、やっぱすげーよ。

傘すげー！！

遠くのもんも取れるし、高いところにあるもんも取れる。
アレ？もしかして俺今無敵なんじゃね？

今の俺なら何でもできる気がするわ！

だってさ、だってさ、自販機が一番上にも届くんだけ！

棚の上にあるもんも取れるんだぜ！

隙間に入り込んだもんも取れるんだぜ！

クフフフ、家にある棚は全部制覇した！

後は祖父ちゃんの部屋だけだ！！

「傘使い晃気、参上！」

「傘使い小雪、けんざーん」

相変わらずあんま物のない部屋だな。

む、あそこに獲物が！

バカな祖父ちゃんめ、あんなわかりやすい所に棚を置いておくとは

……。

「コウキー、箱がある」

「行くぞ小雪よ！あれこそが我らの憐れな犠牲者だ！！」

「何が入ってるかな」

伸ばしてガツガ、ちつと取りにくい。

だがまだまだ、俺は一人じゃない……仲間がいる！

「ん」

俺の黄色い傘と小雪の水色の傘が箱を挟む。

捉えた！！

ツフ、なかなか歯ごたえのあるミッションだったぜ。

さてさて何が入ってたかな。

「おまんじゅだ」

「おお、これは食うしかねえだろ」

「いただきます」

茶色っぽい生地か……。

！？これは！！

「おいし〜」

やわらかすぎず、かたすぎず、適度な硬さの生地。
これが甘すぎないこしあんとマツチして……旦那！イイ仕事してや
すね！

「はむはむ」

「もにゅもにゅ」

うめ〜。

和菓子羊羹が一番好きだったけど鞍替えしちまおうか？

しかしこうなりや緑茶がほしいところだ。

やっぱお茶は緑茶だよな。

暑いが……あえて熱い茶で行くか？

そうなりや準備準備。

腰を上げて襖をカバリ、そこには祖父ちゃんがいました。

ノンリアクション……。

無表情が一番怖いんですが……。

クイ。

親指立ててどこかを刺した〜、刺した先には道場が〜、そして祖父
ちゃん歩いてく〜。

傘でのぼん（後書き）

ちっさいころはみんな思ったよね、傘すげーって

ウサギでのほほん（前書き）

初めに謝つときます、ごめんなさい

ウサギでのほほん

学校でもなんでも幼馴染ってもんは同じクラスになるのが常識ってやつだ。

世界の常識か、世界の意志か。

いやいや単純に一緒にいる方が書きやすいから、やりやすいんだよなそっちの方が。

だってクラスのイベントとかやりやすいから！

大事なことだから二回言っただぜ。

なのにな、なんで俺は違うクラスなんだろうね。

小雪と忠勝の奴らは一緒なのに……。

アレか？世界は俺が嫌いなのか？

むしろ俺が世界を嫌いなのか？

ん、む、んなこともないつもりだがな……。

世界ってもんは思った以上に面白いもんだ。

すげー人はいっぱいいいて、すげー事もいっぱい起きてる。

まあ俺はブラウン管越しに見るくらいでいいんだけどな。

『まったくとした人生』に必要なのは間接的な刺激だ。
直接的だったならまったくとは生きねえさ。

刺激は俺じゃなく他人、それを観戦が一番。

つまんないってか？いいんだよつまんなくて。

つまなくつても明日が確実に来る日常ってやつを俺は取りたいね。

「バイキン、今日は飼育小屋掃除しとけよな」

「汚れてんだから、家に帰れるんだからうれしいだろ？」

ははは、と笑うのは同じクラスの男子二人組。
うわ、いじめだよ。

やだね、五年生にもなつてさ。

「お前だよ、わかってんのか」

「クラスのためにバイキンを働かせてやってんだから喜べよ」

はいはい、わかってますよ。

ターゲットはいつも俺！ってやつですね。

こういうのはだいたい運動ができるヤツかちよつと頭の良さげなヤツが引つ張ってるよな。

周りを見渡してみても誰も眼を合わせてくれねえ……グスン。

三年生から続いたいじめは今でも絶賛継続中。

てか教師は何やってんだよ！

アレだぞ、突っ込むぞ教育委員会に。

モンスターチャイルドになるぞ俺は！

と、ぶつくさ言いながらも俺は飼育小屋にGO！

慣れってさ、怖いよね。

みんなみんな、俺をいじめるってことが学校の常識みたいになって

んだからな。

でも負けない、だって男の子だもん。

まあ俺とちゃんと遊んでくれるヤツが二人いるからいいのさ。

クラス違っても休み時間はいつも小雪と忠勝とつるんでるし。

今は放課後だけど終わってから一緒だしな。

でも今俺一人……小雪、忠勝、お前もか！！

という冗談は置いて、二人はホームルーム中。

俺らの担任は帰りのHRをほとんどやらないんだけど二人のここはめっちゃ長いんだわ。

ま、二人が来る前にとつと用事は終わらせとくさあ。

カシャンと鉄網の扉を開けて、すり寄るウサギをなでりなでり。

かわいーなー、癒されるなー。

ハッ！しかし待て、こいつらはウサギ……ウサギなんだ。

まさかこのかわいさで俺を籠絡するために送り込まれてきた兎魚人の先兵だったのか！？

全国の、いや全世界のウサギ愛好家を手中に収めているとは兎魚人

……恐ろしい子……！！

へ？ああ、わるいわるい。

水は今換えてやつからな。

水道にもってってたわしでゴシゴシ、ほら綺麗。

貯めてやって、ほいよー水だぞー。

簞を持って床をぱっぱ。

ウサギのウンコがいつぱいいっぱい。

ちっちゃくてコロコロしてるよな。

鹿のフンチョコはあるんだから、ウサギのフンチョコなんて出した
ら売れっかな？

しかしウサギは自分のフンを食うって聞いたことがあるな。
フンってうまいのか？

む、ここで唐突な便意！しかも大のほう……だと……！

これは神様がくれたチャンス！？

男ってのは思い切りが肝心！

いざ行かん！新たな境地へ！！

あまりの臭さに萎えてしまった俺です。
ですよね、やっぱ無理ですよね。

へ？大を学校でできるってすげーって？

俺は勇者だから……なんか勇者っていい響きだ。

まあもういじめられてるからこれ以上いじめられようがないだけな
んですけどね！！

……自分で言って悲しくなってきたぜ……。

そんな事よかチビども！飯だ！！

今日のメニューはニンジンとキャベツ。

しっかり食ってでっかくなれよ。

カリカリ食べるかわいさはもう無敵だな。

もう百万ペリカくらいの価値はあるな。

しかしペリカってなんだ？

ほいほい待て待て、焦んなくてもいいぞ。

ほい、お前な、おーよしよし。

ほい、お前もな、おーよしよし。

へい、お前もだな、おーよしよし。

はいよ、お前も、おーよしよし。

「ありがとー」

返事ができるって素晴らしいね……ってマジで。

俺がちらつと見てみりや制服の女の子。

HAHAHA、昨日祖父ちゃんに投げられすぎて俺の頭もアウチになったか？

こしこし眼をこする。

……こすりすぎて眼が痛いぜ。

キラキラした眼でこっちを見てやがる……バカなッ!!

「う……うまいか」

「おいしーよ、ありがとー」

カリカリ俺の手にあったニンジンスティックが消えていきやがる。
まさか新種のウサギ!?
俺は世紀の発見者だ!!!

「コウキー、来たぞ……っておお」

「……変態か、テメエは」

夏休みまであと少しの放課後おゝ、学校の飼育小屋でえゝ、俺こと
渋谷晃気があゝ、蒼髪系眼の女の子にいゝ、出会ったあゝ。

「ニンジンもうないのー」

ウサギでのぼん（後書き）

辰ねえ降臨、ここから小学生編最大の山場にGOです

昼寝でのほほん（前書き）

カオスだ

昼寝でのぼん

流れてるものとかいつも動いてるものって見てて楽しくなることってないか？

川を見て水がどう流れていくんだらう？

空を見て雲がどう流れていくんだらう？

たんぽぽの綿毛とか見てそれがどう風に揺られていくんだらう？

物の動きとか流れを見ているとなんとなく落ち着くものってのがあるんだよな。

「イイね、やっぱここはイイ」

ほふうと溜息を吐いた俺がいるのは俺のベストプレイス。

多馬川に臨む河川敷、ゴロンとねっ転がってぼさーっと視線をあちらこちら。

しかしながら昨日はビビったもんだ。

てかあの後が大変だった……いや、マジで。

忠勝にはぶつぶつ文句言われるわ、小雪はためらいなく祖父ちゃんに話すわ、祖父ちゃん俺を投げるわ。

あんときの祖父ちゃんちょっと本気の目だったかな……。

できればもう会いたくないわ……なんて思った人間に限って会うんだよなあ。

「んうゝむにゆう」

それでさあ、なんで昨日のお嬢さんが俺の隣で寝てるわけ！
んな宝くじ当てるより低そうなもんなのにさ。

どうすんの……どうすんの！俺！！

続く「あー、昨日の人だー」、心の準備もためですか……？

「昨日のニンジンうまかったか？」

こうなりや軽いノリで乗り切るべきだろ。
あはははって笑い飛ばしてくれるさ、きっと。

「うん、給食以外だったら久々のご飯だったよー」

重い……予想外に重いぞこの子は！

「おりよ？親は飯作ってくんないの？」

「うん、今二人ともいないんだー」

「旅行か？」

「違うよー、ほって行かれちゃったんだよー」

地雷踏んだ！？

確実にめっさがデカイ地雷踏んだよ、今。

「亜巳ねえがねー、お金頑張って稼いでるんだー」

「そつかそつか、大学生のねえちゃんがいるんわけだ」

「違うよー、中学生だよー」

敵軍ミサイル多数、回避できません！！

「大変なわけだ」

「そっだよー……ぐう」

「寝んな！」

「おおっ！」

どこぞの軍師様だお前は。

ハア、こんな時どんな顔すればいいかわからないの。

笑えばいいのかねえ、深刻そうな顔作って見せりゃあいいのかねえ、わかんねえや。

「どうかしたー」

クイツと小首をかしげたら。

……辛いとかそんなもんじゃなくて、こいつにとっちゃあそれが当たり前ってことなんかな。

飯が食えねえのも、姉が働いてるってのも。

ここに居んのも空腹紛らわすためってことか？

そんなにできるだけ寝ようとしてる、寝てりゃあ辛いこともなくなるから。

自分から率先して、迷惑かけたくないから。

ううゝ、知らないかった……。

名前も知らなけりや会ったのも昨日の今日なのに、聞いちゃったじやねえか……。

聞いちゃったら情ってもんがわいちゃまうじゃねえか……。

あゝあゝあゝ、うゝうゝうゝ。

ダメだ！追い返せねえ……。

この子はどこにいるゝ、ハートのド真ん中ゝってやつだ。

「ええい、名前何てんだ？」

「？」

「いやいや、お前お前」

「板垣辰子だよー」

「そうか、んじゃ板垣、お前ここいろ」

「なんでー？」

「いいからここ居ろ、ダチヨウ的な三人組じゃねえからな！ー」

ポケットの中は……虎の子の千円札。

今月のこづかい……カード、青眼の竜たちが出てくるカード……。

カードかそれ以外か、使うか使わざるか、それが問題だ。

「あむあむ」

忠勝と一緒に買いに行くって約束してたのに……、ダブリが出たら貰お。

にしてもどんだけ腹減ってたんだ？

おにぎりもパンもガンガン消えてってら。

しかもコンビニ物なのに美味そうにしちゃってさ。

コンビニのもんも嫌いじゃねえけど家で食うのが一番だよな。

あり？唐突に手を止めちった。

「食べねえわけ？」

「ん〜ん、あのね、これ持って帰っていいー？」

「なんでまた？」

「家に帰って亜巳ねえと竜兵と天に食べてもらいたいから」

何？この健気な子？

姉ちゃんと弟妹に食わせるために我慢してんのか？

ングウ

「あははは」

……頭掻いてごまかしてるし。

腹減ってるつてのに……、ヤバイ、この子はヤバイ。
ヤバイくらいに優しすぎるだろ。

そこで俺はかつこわりー、こんな子を見捨てて帰ろつとしてたわけか！？

渋川晃気一生之不覚也！！

「いいか板垣、もっかい待ってる」

「はい」

……行くしかないだろ、男の子として。

[W R Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y Y ! ! !]

「あつほう」

到着！あらん限りの重箱に詰め込んでやったわ俺の料理を！！

聞いた感じだったら四人だろ？

冷蔵庫があれば五日は持つだろこの量なら。

「コウキ、誰もいないよ」

「^?」

む、確かに小雪の言うように板垣のヤツいねえや。

「ってそりやそうか、俺を待つ義理がアイツにはないもんなぞ。」

うわ、一人はしゃいで恥ずかしいんですけど。

「くう」

って居るし！

ほとんど落ちそうなくらい川近くにいたから気付かなかったんか。

「起きろ、板垣」

「ぐう、んむにゆ」

「起きないね」

「そだな」

しっかし気持ちよさそうに寝るなあ。
俺までつられちまいそうだぜ。

「起こした方がイイの？」

「まあそりゃあな」

「お、じゃあはい」

……落としおったアアア！

俺の予想の斜め上に行くとは、さすがの小雪さんだろ！

ってんなこと言ってる場合じゃねえ！

助け「おはよー」、は？彼女？普通に上がってきましたが何か？

「小雪イ、溺れたらどうする気なんだよ！」

「僕は一向にかまわん」

「かまえよ！！」

「僕は一向にかまわん」

「ああもう！！板垣もなんか言ってるやれ！」

「えーと、お友達になるー」

「僕は一向にかまわ〜ん」

「なんでそうなんのオオオオ!!」

頭が痛くなってきたわ。

なるほど、天然な小雪とマイペースな板垣が絡めば混沌を生み出す形になるわけだな。
しっかり覚えとこ。

「タツちゃんって呼ぶよ〜」

「私はユキチーって呼ぶねー」

あだ名まで決めあってるし、何これ？俺が全然ついていけない。

「タツちゃん」

「ユキチー」

こんな空気、俺はどうやって集結させればいいんでしょうね？

昼寝でのほほん（後書き）

書いてて思った、何だこれ？

体操でのほほん（前書き）

やっぱなんか変な感じ

体操でのぼん

小学生である俺らが夏休みに入って最初にやることって何だと思う？

友達のところ泊り、スイカ割り、山登り、プール、海水浴、肝試し、夏祭り、花火、それとも宿題。

どれも必ずと言っていいほどやるようなことばかり。
だがすべて違う、違うんだよワトソン君。

最初にやることってのは……。

『腕を大きく上げて、はい、いちにいさんしー』

「ごーろくしちはち」

ラジオ体操だろ。

なんで朝っぱらから起きてそんなところ行かないやいかんだ！なんて思っかもしれない。

しかし甘いぜ！

体操したらハンコが貰えるんだぞ、しかもハンコ七つでお菓子が貰えるんだぜ！

こいつは行くしかねえだろ。

「んゝ、あうゝ、にゆうゝ」

これこれ小雪さんよ、寝ておらずちゃんとやらねえと。

「朝っぱらからこんなこと……意味わかんねえな」

「そう言うなや、早起きは三文の得なんですよ」

忠勝のヤツもあくびしてら、まだ七時くらいだからな。

だがしかし、俺の頭はすつきり、祖父ちゃんに付き合わされて朝が早いだけだな。

柔術習い始めてからは五時までに道場に行けるように起床、遅れたらヒドイもん。

皆はぐっすりの時間から毎日欠かすことなく汗だく、イヤになっちゃうね。

朝風呂はその分気持ちいけどさ。

「タツ姉！遅れちまったじゃねえか！！」

「寝みい……」

「あー、コウちゃんだー」

間延びした声、こつちに視線を合わせて一直線にやってくる三人組。

「おお、タツちゃんだ」

「ユキチー」

いえいとハイタッチする小雪と辰子、いや〜仲良しになったもんだ。

「「ぐう」」

「そして寝んのかよ!?!」

相変わらずのフリーダムっぷり。

俺も見習うべきなんだろうかねえ。

夏休みに入って一週間くらい、あれから辰子のヤツは毎日のように家で飯を食うようになった。

てかほつとけるほど俺は大人じゃねえってことだ。

……アレ? 今俺ってカツコイイ? 輝いてる?

「たったたたたたタダ兄、おはようだぜ!」

「おー、元気だなテムエも」

「げっ元気が取り柄だからな!」

忠勝の近くで天パツてんのが辰子の妹、『板垣天使』。
しかし相変わらずすげー名前だな。

「えんじえる」

「誰がだコラア!」

口の悪いヤツだ。

しかし俺は大人だからな、そんなもんで怒るほどガキじゃねえんだ。
というより多少寛容にならんと祖父ちゃんの暴走とか小雪の天然についていけなくなっちまうもん。

自分の事大人っていうやつは子供だって？

違うな、大人って言えることは少し大きな目線で物事を見れるってことだろ。

その時点で少しだけ本当に大人なんだよ。

えんじえるもとい天と隣で立ったまま寝てる男も辰子の弟妹。

男の子の方は竜兵って言うんだってよ。

お、深呼吸をして終わりつと。

さてさてハンコを押してもらわんとな。

「はい、お菓子だよ……ありゃ？新しい友達かい？」

「いいだろ、あげねーぞ」

「マシユマロはいつてた？」

「朝ごはんができたよー」

お菓子を提供してくれんのは駄菓子屋のばあちゃん。

珍しく小学校のグラウンドに集まってラジオ体操する俺らの学校。その生徒、全員分に好意で上げてるってんだからすげーよな。

「辰子さ、んなこと言わずに家で飯食ってけよ」

「でも悪いよー」

「僕は一向にかまわーん」

「お前が決めんなお前が」

えへんと胸を張る小雪にとりあえずツツコんどっつ。

「忠勝はどうするよ？」

「俺はガキども連れて帰ってやらねえといけねえから無理だな」

「だっただだったら手伝うぜタダ兄！！」

「別にいいんだぜ？そんなことしてもらわなくなっただけ」

「ううゝ……でも……」

「……ああ、けど一人だけだったらちよつと大変なんだわ」

「ふえ？」

「暇な奴とか天、お前しらねえか？」

「ウチ！ウチが行く！リュウ！テメーも行くぞ！！」

「おい！引つ張んな！」

尻尾だ、尻尾が見えるぜい。

てか忠勝のヤツはラブ米してるな。

漫画でそんなのも見たことあるからな！

100%なイチゴだぜ！！

それに面倒見もいいヤツだ。

夏休みだからって毎朝孤児院経由でガキども連れて来て帰ってるん

だからな。

孤児院のガキどもほとんど来てんのに忠勝が一番年上なんてありえねえだろ。

皆まとめて帰ってやらんといかんなんてさらに、だ。

やさしーね、忠勝のヤツは。

父性溢れるってやつだ。

「忠勝おとゝさん」

「帰れジジイ」

ヒデえ！

確かに祖父ちゃんにもガキっぽくないって言われるけどさ。
熱いお茶も熱い風呂も大好きだけどさ。

華の小学五年生捕まえて……落ち込むわ。

「大丈夫ー」

「俺の心は鋼だからな」

慰めてくれるとは……！！
辰子のヤツはイイ子だな。

「よし、撫でてやろっ」

「えへへへー」

眼を細めちゃって。

アレ？糸眼だから最初っからなのか？

「僕も」

ここぞとばかりに便乗してきやがった。

だがしかし！俺のなでなでは安くないんだよ！！

という訳で無視だ。

「ケチケチケチケチ」

聞こえん！聞こえんぞ俺には！！

「ケチンボケチンボケチンボ」

バタバタしてる……やりすぎたか？

「ケチンボチンボチンボ」

「女の子がそんなこと言うんじゃないやありません！」

む、おさまった。

小雪のヤツ頬を膨らませちまって……ご機嫌とらねえとな。

「ほれ」

背中を向けてやる、好きだろ？おんぶ。

「むう」

ブーたれながらも背中に乗ってきた。
ケケケ、安いもんだぜ。

おりよ？いつもより上りすぎじゃねえか？
てかなんで足を俺の首にかけてんだ？肩車？

「てゝんれゝんげ」

ゴキユ！！

GYAAAAA!!!!!!

体操でのほほん（後書き）

ちよつと違いますが本多陀様、
ネタ振りありがとうございます

踊つてのほほん（前書き）

みようちくりん

踊ってのほほん

人が集まるってのはイイもんだ。

知らない人と知り合いになったり、知ってる人の知らない一面を見たり。

関わり、輪を作り、言葉を交わし合う。

犬やら猫やら動物や植物がそんな事をしてるのかどうかはわかんねえ。

けどもしそれが人だけに許された特権なら、それはむしろすげーもんなんじゃないかな？

拳や牙や爪でしか語れねえ言葉……それだってたくさんあると思う。

漫画やアニメでも戦って、わかり合っってのは竜球からの王道ってやつ。

俺自身祖父ちゃんがそんなのしてるのも見たことある。

危なっかしいのに関わるのは俺の人生目標を逸脱する結果を生んでくるかもしれん。

でも男の子としては憧れるところもある。

まあ結局そんなのは嫌なんで関わり合ったりしないけどな！！

だから漫画やアニメで代用するのさ。

いいだろ？ そんなもんもあるって心の中で知ってるだけでもだいぶ変わるだろ？

何が言いたかったってと明日も明後日ものほほんでできる相手を作る

べきだつて話。

『今日の勝利のためなら明日はいらない』、そんな風に言つた男もいる。

カツコイイね、ホント。

でも俺はいらない、むしろ俺は今日はいらない。

たとえ今日辛くても、今日負けても、今日悲しくても……変わらない明日が俺は欲しいよ。

「……ジジ臭いねえホント、アタシよりホントに歳下かい？」

「華の小学五年生に向かつて……俺泣いていいよね？」

「泣くぐらいなら鳴きな」

ヒデエ！

くつくつと笑うお姉さん相手に俺は漫才。

いや〜になつちまうわ、ドSな方なんていりません！チェンジお願いしますー！！

……ドSつてなんだ？

「コウちゃん、お肉焼けたよー」

いやいや辰子よ、まだ生だからそれ。

てか気付いて、滴り落ちてるだる血が！！

「ほれほれ貸せ貸せ」

「あうー」

「いいか、肉つてもんはだな」

辰子の持ってた肉、玉ねぎ、肉、ピーマンの順に刺さった串を再び網の上に。

ジュージューいつてら。

やっぱ肉つてのはこうやって音がねえと肉って感じがしねえよな。

「赤いところをなくしてだな……ほらできたぞ」

「わーい、お肉だー」

「しっかり食べてデカくなれよ」

「あむあむ」

にっこにっこしながらはむ付く辰子に癒されるぜい。
犬っばいよな、タレ耳が欲しいぜ。

「コウキー、焼けた」

立ち替わるようにやってきたな小雪よ。

「いやいやまだ動いてるからな」

「お」

「いいか、踊り食いもいいがこいつはちゃんと焼いとかねえとな」

小雪の持ってきたイナゴ、イナゴ、イナゴ、イナゴの刺さった串を火の上に。

ジュージューいつてら。

やっぱ焼き串つてのはこんな音がねえとダメだよなあ。

「ほれ、焼けたぞ」

「僕はいらない」

「まったく……焼きマシユマロを代わりにやろっ」

「はむはむ」

にへらへらとしてる小雪に癒されるぜい。

辰子と比べりゃ猫っばいな……、猫耳が欲しいとこだぜ。

「……晃気、アンタすごいねえ」

スゴイ？何がだ？

……おお！なるほどなるほど。

人間我慢しちやいかんと思うぜ俺は。

「食べる？」

「いらないよ」

うまいのになーイナゴ。

祖父ちゃんをつくだ煮は絶品だね、ご飯が欲しくならあ。

はあゝと溜息を吐いてるお姉さんは辰子たちの姉たる『板垣亜巳』。
その手のおじさんたちにはたまないぜ!!

……何がだろ？

「ん」

「ヘッ？くれんのか？」

「別に……余ってたただけだよ、冷めちまうともつたいないと思った
だけだ」

美味そうに焼けてっぜ……やっぱいいヤツだなあゝ。

B B Q用の道具なんて大層なもん祖父ちゃんの家にあるわけがない。
古ぼけた、年代物の七輪をいくつか並べてその上に網。

炭は備長炭を使っつてら、知り合いに好い職人がいるんだと、謎な交
友関係だなあ。

その上に所狭しと並んだ肉、肉、肉時々野菜。
何と今日は俺の家の庭で焼き肉？なのだ!!

「この七輪は俺が仕切る!!」

「ウッセーぞリユウ!!この肉はウチが焼いたんだよ!!」

「なんだとコラア！ここは竜兵王国の敷地に決まってるんだろ!!そ
こで出来たもんは全部俺の口に収まんだよ!!」

「んだと!!これは忠にいの為の肉だ!!」

「それが今俺の口に」

「ウラァー!!」

おっつと竜兵くんふっ飛ばされた。

一触即発ってやつ。

お、流石に忠勝が止めに入ってたか。
仲良しだねえ。

「そう言えるアンタは大物だよ」

全く動いてない亜巳さんの言えることなのか？
悩ましげな溜め息がエロいぜ。

エロさくらいは俺にもわかるさ！バカにすんなよ！

しかし……みょうちくりんな雰囲気になっちゃったな。

「という訳で渋谷晃気歌います!!」

「お」

「わー」

さてさて何を歌うかねえ。

「ててる、ててる」

こっ、このリズムは……!?

小雪？……何と期待した眼か！！
これは行くしかねえ！！

「ちちちおっぱい」

「ぼいんぼいん」

「ぼいんぼいん」

ナイス合いの手！
さすがの小雪さん、さすがの辰子さんだ。

「ちちちおっぱい」

「ぼいんぼいん」

「ぼいんぼいん」

ナイス合いの手！
天と竜兵もさすがだわ。

「最近のガキはマセてんねえ」

何を言うか！フォルレはかっきーんだぜ。

「ちちちおっぱい」

くるくる回りながらくるくる動く。

小雪も辰子も、天も竜兵も俺に続くぜ。

「ぼいんぼいくん」

「ぼいんぼいくん」

忠勝囲むぜ、みんなで囲むぜ。

「ちちちおっぱい」

気押された感じの忠勝を囲むぜ。

「ぼいんぼいくん」

「ぼいんぼいくん」

……忠勝よ……知ってんだぜ、たまに口ずさんでんの。
楽になるっさ。

「ちちちおっぱい」

さあー！さあー！さあー！さあー！

「ぼ……ぼいんぼいくん」

来た！

「ぎけるっ」

「ぎやああああ」

「うわー」

「うっひゃー」

「うおっ」

「……っち」

ばたつと倒れ込む俺たち。

「仲良しだねえ」

いいことじゃねえか。

踊つてのほほん（後書き）

昔実際やった遊び

歌つてのほほん（前書き）

雷句誠さんは天才です

歌ってのほほん

人の縁ってのは不思議なもんだ。

出会いや別れ、再開なんてもんはあらゆる場所に満ち溢れている。それは本人自身の意志なんてまるで無関係に、だが。

んでそのパターンってのも様々ある。

俺が小雪と出会った時みたいに河原で呆然と立ち尽くす人間に会うかもしれない。

俺が忠勝に出会った時みたいにたまたまクラスが一緒だったってこともあるかもしれない。

俺が辰子と出会った時みたいに頭の処理が追いつかない状況かもしれない。

俺が天と竜兵に出会った時みたいに知り合いに連れて来られて会うのかもしれない。

俺が亜巳さんに出会った時みたいに家に帰ったら何故かいることもあるかもしれない。

出会い自体はどんな人間にも平等なんじゃねえのかと俺は思う。

ただそこからどう発展させるか、もしくは放置するか。

その辺が一人ずつ違ってるんじゃないだろうか？

前も言ったと思うけど、誰しも自分の思う妙な奴とはつるんだりしない。

たとえばそれがクラスの人気者でも、たとえばそれがクラス一のカワイ子ちゃんでも。

馬が合わなかったらどうも話も合わない。
そうなりや一緒にいることが苦痛になるってわけだ。

大人になっちまったらたとえそんな奴らでも一緒に居なきゃいけない
くなったりする。

だからこそ、ガキの内に、大人になっても、友達探索が重要にな
ってくるんだろうね。

「コウキー、僕ねマシユマロ買っよう」

「私はメロンソーダーにするー」

二人手を繋いでら、仲良しになったもんだねえ。

くるくる回りながらにへらへら、にぱーっと笑ってるのを見てると癒
されるぜい。

「よっしゃ、ぜってー優勝すんぞ！」

「お〜」

「はい」

気の抜けたような掛け声、ホント大丈夫か？

てな訳で俺らがいるのは仮設的に作られたステージの裏。
金柳街でのカラオケ大会の会場だ。

何とそこで優勝すつと商品券が貰えんだ！！
スゲくね！？商店街の全部でつかえんだぞ！！

金柳街つてのは駅前商店街の事。

ここには美味しい和菓子やがあるんだよ！
その羊羹は美味いんだってホント。

俺と同じ年の女の子も確かいたよな？

しかし商品券つてのはなんだ？

羊羹の絵が描いてんのかな？

優勝したら俺は断然羊羹だ。

いつつもは虫歯になるからってちょっとしか祖父ちゃん食わせてくれんからな。

一本丸々食ってやんよ！！

「むしばむしば」

ああああ！小雪！言わないでええええ！！

ドリルがああああ！！うiiiiいんっていつてる！！

「大丈夫ー？」

……おおともさ、辰子は優しーねー……誰かと違って。
いつかきつと歯医者には撲滅してやるんだ。

それはともかくなでてやろう。

「えへへへー」

眼を細めちゃって。

アレ？糸眼だから最初っからなのか？

「僕も」

ここぞとばかりに便乗してきやがった。

だがしかし！俺のなでなでは安くないんだよ！！

という訳で無視だ。

……アレ？なんかでじゃびゅ。

「む」

唸りながら小雪は俺の肩に手をかけて……ハッ！！

「よっしよしよし」

「んふう」

あ、危ねえ……あの日の悪夢が……。

何と天使な笑顔か！

悪魔な一面を兼ね備えるとは小雪……恐ろしい子！！

「では次のエントリーは今大会最年少グループのひとつ……『らぶりーめろん』だアアア！！」

「呼ばれた」

「突撃」

まてまてまて!!

まだ出る場面じゃないから……って行っちゃったああああ!!

「おお」

「こんにちは」

場内がざわめいていらっしやる……。

俺も行くのか……いや、ここは逃げよう。

うむ、戦略的撤退だろこれは。

H A H A H A、見捨てるぜ俺は。

「コウキー、早く」

「コウちゃんも」

しかし回り込まれた!!

烈のおっさんに鍛えられた小雪の足腰はハンパねえ!

前に水面を歩こうとしてたの見たぞ俺は!!

失敗してたはいえちよつと進んでた気がするんですけどおおおお!

つて引つ張り出された!?

しらゝとした視線が痛い……。

「アハハハハハハ!!」

「ハッハハハハハ!!」

「……ツク……クク……」

そこ！笑ってんじゃねえぞ！！

顔覚えられてなきゃいいな、明日から有名人かもな。

……グスン。

「そこ！音楽ぷりぷず」

「……では音楽スタート！」

流れるゝ音楽が、アップテンポなのさ。

「ぶるるるあああつ！」

テテンテンテン、テテンテンテン

「ぶるるるあああつ！ ヴェリーめろん」

「ベリーめろん」

「ぶるるるあああつ！ ヴェリーめろん」

「ベリーめろん」

俺は歌うぜ！頑張るぜい！！

「うえ……ぐすぐす……」

「30点だったね」

「優勝できるかなー？」

そそくさと撤退して今は自販機の前。
俺の心はブレイクンだよ……。

「コウ！おもしろかったぜ！！」

「……っぶ……ハッハハハハ！！」

やめてー！傷口に塩はやめてー！！

「テメエはさっさと汚ねえ顔でも洗ってろ」

タオル……すまねえ、すまねえ。

……ふう、どやら終わったみたいだな。

優勝は……『風間ふぁみりー』？聞いたことがねえや。

「優勝者の顔でも見に行こうぜ」

「マシユマロ貰おう」

天の言葉に続くか皆よ。

さあて、俺も行きますかいっておりよ？

「ガハハ、下手な歌は足にくんのか？」

……恥ずかし！！

しかし『風間ふぁみりー』か……何か聞いた気もってありや？

「晃気、お前大丈夫か？」

「お、おう」

忠勝の差し伸べられた手をとって、無限の彼方にさあ行かん！

「コウキー？」

立てない……だと！？

いやいや、おかしいおかしい。

腹に気合を入れてよつと、……ほら立てた。
じゃあ気を取り直していくか。

「あー！タツちゃんだー！！」

ふつと目を向けた先には茶色いポニーの女の子。
しかし頭掻いてるってこたぁ知り合いか？

しかしどっかで見たことあるような……奴らが……あ！

「む、お前どっかであつたことないか？」

この前の怖い子だアアア！！

歌つてのほほん（後書き）

カオスになった……

あとワン子の忠勝の呼び方ってこれでよかったでしたっけ？
逆は川神でしたっけ？アレ？一子でイイのか？

お菓子でのほん（前書き）

なんか変

お菓子でのぼん

ピンチってのもまた唐突に襲ってくる。

こっちの都合も関係なしに、空気の読めない奴。

まあ俺がもとと祖父ちゃんから柔術習い始めたのはそのピンチの空気を知るためなわけで。

みんながわかつちまったら祖父ちゃん怒っちまうわ。

でだ、大事ななのはその状況にどんな行動をとるかってこと。

一つ間違った選択肢を打ち出しちまうと取り返しのつかない状況にも陥っちまう。

その大きさもいろいろだ。

忘れ物くらいの軽いやつから事故や事件に巻き込まれるなんて重いやつ。

どんなもんかはわかんねえけど、どんなもんでも対応はせんといかん。

どんな形かは置いといて、だ。

そこでキチツと決めれる奴がカツコイインじゃねえかな。

「いえいえ気のせいでは……？」

ヤッベー！！

なんでいんの！なんでいんの！

大事な事だから二回言ったよ俺は！！

アレか？昨日食べた豆腐が腐ってたからか！？

わがままな天以外はちゃんと食った豆腐が悪かったのか!?

それとも朝のゆで卵か?

半熟じゃなくて固茹でカツコつけて食ったからか!?

『はーどぼいるど』って言うんだろ?

かつきーじゃんか!

そっついやあこの前見た西部劇もかつきかつたぜ。

BAN! ってテッポー撃って帽子に手を当てて笑うんだ。

フツ……って感じで。

んゝ渋いぜ。

「むしかー、むしなのかー」

うお! 顔覗き込んできた!?

やめて! そんな面白い顔してないから!

「コウ、知り合いか?」

「俺は見たことねえぞ」

H A H A H A ! 天と竜兵はご冗談が得意なようで……。

こんな危なっかしいのと俺が知り合いなわけないでしょう。

てかなんでこの方は俺知らないって言うてんのに突っかかってくるわけ!?

俺としては意味不明ですよ!!

「気のせいじゃねえのか? それよりなんか買いに行こう!」

「俺様さんせー、腹いっぱいになりたいせ」

おお！美味しい感じに話が逸れた！！

このまま逃げよう、是非とも、早くに、迅速に。

「いいな、僕もマシユマロ食べたいな」

「私はメロンソーダがイイよー」

おおい！そこ！話を広げないで！！

後ここ褒められるとこじゃないから！

『わたしすごいでしょ』みたいな目で見て来ないで！

「あのね！あのね！タツちゃんは私の知り合いなの！

だから一緒におやつとか食べたいよ！！」

「……別にそんな気、使わなくていいぜ一子」

……忠勝、お前ってやつは！！

お前だけだぜ、俺の気持ちを汲んでくれんのは。

「ワン子の知り合い？ってことは孤児院の人だったりするわけ？」

「フッフ、お前も大変なんだな」

「……大変」

うあ！頭の良さげなヤツ嫌な感じ。

なんかニヒルってか見下してる感がバリバリだな。

あ、ちよつと忠勝いらついてる？
カルシウム不足か？

「煮干し食うか」

「晩飯の準備にでも使つてろ」

そだな、今日の晩御飯は……フライでも作るか。
トンカツとチキンカツでいくかねえ。
となりゃあ帰りがけにスーパーにでも行かんと。

「うゝん……ワン子がそこまで言うならいいぜ！一緒に遊ぼう！」

バンダナくゝん。

アンタはいいヤツ、でももうちよつと空気を読もうね。

という訳で『飴玉の小笠原』に來た訳だけど……。

「うんめー、羊羹うんめー」

「ずるいぞ！俺にもくれー」

「ケケケケ……だが断る！！」

俺の小遣いで買った羊羹は安くないんじゃ！！
翔一なんかにやるもんか！！

「いいもん、俺も買うからな」

一本……だと……！！

俺なんて二切れだったのに！！

「せこいぞー！」

「へっへん、くれなかった晃気が悪いんだぜ」

何という……これが資本主義経済……。

歴史でこの前習ったぜ……意味はわかんねえけど。

「あ、もうそろそろ帰んねえとな」

「そだなー、じゃあまた遊ぼうぜい」

カラスも鳴いてるしなあ。

夕日が目にまぶしいぜ。

「ばいばい」

うんうん、手を振って見送りなんてイイ感じだねえ小雪。

まるでそう……友達みたいじゃねえか、一緒におやつ食べるなんてさ。

やっぱ葛餅もうまかったな。

……アレ？

お菓子でのほん（後書き）

金柳街の商品券って仲見世通りでも使えますよね、きつと？

五年時なんで京は加入済みとしています。

剛気の蝉でのぼん（前書き）

今回は渋川老視点

剛気の蟬でのぼん

「洪川さん、今こいつが出回ってるもんです」

「はあ……こりゃご丁寧に」

深々と頭をさげる剛気に警視正の『園田盛男』は同じように頭を下げる。

警視庁、ここにいる彼らは机の上にある白い粉を手につっていた。

「麻薬……ですかの」

「ええ、それも合法の」

『ユートピア』と呼ばれる薬がある。

主に重度の精神病患者のために処方される正真正銘の合法的な薬。

しかしこれ、薬となる表の顔以外にもう一つ、裏の顔を持っていた。健常者が摂取すれば脳に刺激を与え、所謂ハイな気分へとしてしまうのだ。

その量が過剰となれば口から泡を吹き、失禁し、理性を保てなくなる。

つまり脳へと被害を与えるのだ。

「……麻薬あさりの登竜門ですのう」

「その通り、合法ゆえにいくらでも販売が可能、インターネットでも多数のサイトが設置されています」

「これ、ワシに何か関係でも」

くいと首をかしげる剛氣に氣不味そうな園田。

厳つい感じの顔を申し訳なさに染めて、頭を下げた。

「一応のご確認と、その……できたら捜査に協力していただけたらと」

「なんでワシ？」

「お孫さんたちも居られます川神が発端とも聞きますので……その……」

「園田さんはこの老骨に鞭打ち犯人を捕まえろっちゅうことですか
い？」

「いはいえいえそのようなことまでは！」

「ハア……ちょっとだけ、頭に残しときます」

ぺこぺこと頭を下げる園田を背に剛氣は部屋を出て己の家へと向かった。

姦しく蝉の鳴く、八月の出来事だった。

「なあにしとんでイ、お前は」

風鈴の音が心地よい純和風な家の中。

多馬川より少し、古い家々が軒を連ねるとある一角。

『洪川』と銘打たれた表札の家の中、一人の男の子のが畳の上を転がっていた。

いや、そのあとを続くように二人の女の子が付いて回っていた……
転がりながら。

「ああああゝ俺のバカああああゝ」

「わあいゝわあいゝ」

「えへへー、ゴロゴロゴロー」

いつもながらに仲のよろしい孫たち。

小雪は剛気の養女のため戸籍上は娘で、辰子は晃気たちの友達であるがまあ関係ない。

アブねえもんとは程遠いねえ、とジジ馬鹿からニヤけてしまう。

「はぶう！」

「おお、いたそ」

「ん……zzz」

柱にぶつかり止まった晃気に連なった小雪と辰子。
頭を押さえうずくまった一番前に近づきしゃがみこむ。

「何やってんだ」

「ああ祖父ちゃん！聞いてくれ！また前言ってた変なのに会ったんだよー！」

身振り手振り、事の重大さを示そうとする孫。

何でも前に会った怖い女の子のグループと一緒に遊んでしまったそうな。

「それでな、翔一ってやつが面白い奴で」

「友達増えたんじゃろ？いいことだの」

「……ハッ！違う違うってさ！怖い子も一緒だったんだぞー！」

「話したんかい？」

「いや……しゃべってないけど……」

「だったらその子の人となりもわからんじゃろっが」

「……うむう……でもこう、さ」

何でもこう本能的にというか、第六感的にというか。

まだまだガキのこいつが夢見るジジ臭いこと。

『まったりとした人生』のためには関わりたくない気がするんだと。

そっぴいえば、と剛気は考える。

自分自身が熱心に薦めていた柔術、これを習うきっかけも危ないことに近づきたくないからといっていた。

『真の護身』を身に付けたいとぬかして鍛錬を始めた。

何を生意気な、とも思っていたが今ではねちっこい自分の鍛錬にもこなしている。

それを見るとあの時言った言葉は嘘でもなんでもなく本当なのだろう、本気なのだろうと思う。

武のひとつの境地を知った人間がその境地を目指す。

即ち『君子危うきに近付かず』が最も良い生き方と思った人間がそれを実践するために柔を、護身を極める。

武に触れたくない人間が武を極めようとする。

何とも滑稽な話だ。

だがそれは剛気にとっては、柔を扱う一人の武人には嬉しかった。達人と謳われる自分自身が何十年もかけて辿り着いた一つの考え。それを自分の孫は齡十足らずの時に持っていたのだから。

自分を越える柔の高みに、この者は辿り着けるだけの才気を持っていたのだから。

天才なる言葉を使うことを彼自身好かない。

そんな言葉で彼らの努力を片付けてしまいたくないからだ。

しかしそれでも剛氣がそれに当てはまると思う人物もいる。

即ち『愚地独歩』、『烈海王』、『花山薫』、『愚地克己』、『マホメド・アライジャー』もそうだろうか。

そしてそれすら超えるバケモノたる『範馬刃牙』、『ジャック・ハンマー』、そして『範馬勇次郎』。

『ビスケット・オリバ』は微妙なところだ。

「あ、ちようちよだ〜」

「ん〜、コウちゃんにイイにおい！……ZZZ」

自分の目の前にも天才に当てはまる人物がいた。

異様なまでの足の器用さを持った孫と天性の耐久力と力を持った孫。無邪氣に無垢に笑う二人だが、その才氣は凄まじいものがある。

「でも俺はできるだけ会わないようにするぞ！！」

そしてもう一人の孫は耐久力があるわけでもなく、力があるわけでもなく、器用なわけでもない。

だが殊更『動体視力』と『反射神経』と『洞察力』に於いてはバケモノレベルだ。

その力は柔の力を最大限に発揮させてゆく可能性を秘めている。

対峙した相手の表面を見るのではなく重心移動、呼吸から次の動きを『洞察』する。

タイミングを読み、放たれた一撃を『捉え』、『捕え』て投げ、極

め、絞める。

これで『理合』を、『技』を握る事が出来れば『柔の化身』となる、そんな可能性を秘めた存在。思想も含めて、だ。

「晃気、お前『格闘士』になるかの？」

「『気』とか得体のしれないの使うのよりかつきーけどやだ」

「カッカッカッ！！そうじゃの」

即答する孫がうれしかった。

男の子してる孫がうれしかった。

枉げられぬ、男らしく信念を持った孫が、剛気はうれしかった。

『格闘士』として戦ってみたい、そんな考えも剛気にはある。だがそれ以上に、剛気は孫の成長がうれしかったのだ。

「じゃあ会わんためにも稽古せんとぅ」

「……わあってるよ」

「あ、じゃあ僕もやる」

「私も一緒にやっていいかなー」

相変わらず蝉はうるさく鳴いている。

まったりとした平穏で平和な八月のことだった。

剛気の蝉でのほほん（後書き）

なんか支離滅裂な気が……

刃牙シリーズの才気云々については完全に自分主観です

これはおかしいだろうってところがあればご指摘お願いします。

縁日でのほほん（前書き）

微妙だ……

縁日でのほほん

知ってほしいことと知られたくないこと。
見てほしいことと見てほしくないこと。

人間ってのはつらいことを辛いつて言える生き物だ。
んで人間ってのはつらいことを辛いつて言えない生き物だ。

祖父ちゃんが言うに人には二つの気持ちが出来るんだとき。

本音と建前、ホントとウソ。

これは生きていく中で必要なもんらしい。
けど頼りすぎるとどっちがホントでどっちがウソかわからなくなるんだとき。

だからこそ一つ枉げられないもの、譲れないものを持てばいい。
それは感情でも、人でも、物でも、場所でもなんでも関係ないんだ
って。

ただそれがあれば辛くつたって、苦しくつたって生きていける、人
間はそんな生き物らしい。

ま、そんなめんどっちいもん背負って着込んでなくて、楽に生きる
のが一番だと思うがね。

「コウキー、わたがしわたがし」

「お、うまいか？」

「ん、マシユマロとバトルで100対0だよ」

「どっちが勝った」

「マシユマロ」

「身も蓋もねえや」

顔をうずめるくらいのそれをまふまふ食ってる小雪。
ちぎって食べてみるがもふもふ感がたまらんね。

「ほれ、たこ焼きだ」

「お、マヨネーズたっぷり！さすが忠勝俺の好みを知ってるう」

「しらねえよテメエの好みなんぞ、ただ俺がマヨネーズが多いのが
良かっただけだ」

濃い味のソースにまろやかなマヨがアクセント。
なんでウチで作ったもんよりたぶん不味いのになんかこんなに美味しいのか
ねえ。

やっぱ縁日には魔力があるぜい。

てなわけで俺らが居んのはいつも遊んでる河原。
川神市のおっちゃんたちが屋台出して祭りをやってるんだぜ。

まあ屋台メインだけど一応は祭りだもんな。

へ？原作にはなかったって？

H A H A H A、何言ってんのか全く分かんないな。

きつとアレじゃね？

街がおつきくなっていったから淘汰された祭りとか、そういう系じゃね？

さて次なる屋台へ……って何してんのおぜうさん。

「みてみてコウキー、紙芝居」

「つくったのか？しかもなぜ今！？」

確かにそういやあそこそやってたけどさ。

「榊原小雪第一作目、タイトルは『おおかみ家族』」

無視ですか、はいそうですか。

忠勝も止めようと努力をつて無駄か、お前あきらめてるもんな。

「あるところにおおかみさんの家族がいました」

始めちまったよ、このやろー。

「一番上のおおかみさんは下のおおかみさんのおなかをいっぱいにするために、たくさん獲物を取りました」

「まあおおかみだからな」

肉食獣はやっぱロマンがあるよな。
狼とかなんか響きがいいぜ。

「いっぱい倒して、いっぱい殺して、おおかみさん家族はおなかいっぱいになろうとします。」

でもおおかみさんが獲るものだけでは家族みんなはおなかいっぱいになれませんでした」

「食い盛りがいるんだろうねえ」

天みたいだな。

あいつ食いもんは忠勝以外に絶対よこさんからな。

「そこでおおかみさんはいろんなところに行ってみました。」

するとおおかみさんは獲物がいっぱいいる場所を見つけることが出来ました」

「いいこつたいいいこつた、これで狼も幸せになるわけだな」

しかし耳がイイよな。

小雪は犬でいったらちっこいとんがり耳だな。

んで辰子はたれ耳だろ、天はふせぎみのとんがり耳、亜巳さんは鋭いとんがり耳かねえ。

……アレ？

とんがり耳ばっかだ。

「でもそこは巨獣赤カブトの住処だったのです。」

あわれおおかみさんは食べられ、家族もみんな食べられてしまいました……おしまい」

「はいアウトおおおお！そんな夢も希望もない紙芝居いはだめですよー！」

小雪、お前はなんでそんな子に。

「えへへ」

笑うな笑うな、褒めてないからね。
ほら、忠勝の旦那だって微妙な顔してるだろ？

あゝあ、なんか食って気分を紛らわせんと。

「むー」

これは妙な感じだ……。

せつかくいい気分楽しんでたつてのに。
小雪によって壊された気もするけど。

俺のなんかに引つかかるような……第六感ってやつか？

嫌な予感がする、な。

「あ、あの時の人たちだ」

って視覚に入ってたわけね、わかります。

……いるよ魔王が。

黒髪の、整った顔の、ちょっとキツめの、気の強そうな魔王が。

見てるだけで胸が高鳴るわ。

これが恐怖、これが恐れ。

「……バカなッ！この晃気が、この晃気が恐れているというのか！？」

「どうでもいいけどとっとと行くぞ」

「もう、忠勝くんったら私の手をそんなに強いん！！」

れ、レバーが……俺のレバーが。

ヘルプはもうちょいソフトに頼むぞ……。

「アミミンだ」

「それはやめろって言ってんだろ、小雪」

方向転換してみりゃ亜巳さん一人。
牛串片手に……ワイルドだぜ。

「下三人はどこに居んだ？」

「天が我慢しきれなくなったみたいでね、引っ張って行っちゃったよ」

むう……迷子か、いかな。

にしてもどうすつかねえ。

「てなわけで晃気探索隊参上！」

「さんじょ」

「……ふう、二手に分かれりゃいいだろ」

ため息混じりの忠勝さん。

さすがみんなのお父さんは一味違うぜ。

「僕タダカツと行くよ」

へっ？小雪が俺のもとを離れた……だと……。

「コウキー、頑張ってね」

子離れしていく娘を見ているようだな。

……これが若さか。

マジで忠勝と一緒に行ってら。

あいつも不思議そうな顔してるし。

流石の小雪さん、俺の予想をはるかに裏切って見せるぜい……グス

ン。

「とりあえず行くとするかい？」

「うーっす」

ハア、なんか変な気分だわ。

てくてく歩くけどなんかやっぱ変な気分だわ。

「珍しいね、あの子があんたから離れるなんてさ」

「たまにはあるんじゃないかね？辰子と一緒にだったら結構だぞ」

辰子といっても一緒に居ることが多いけどな！！

嫉妬じゃないぞ！忠勝に嫉妬なんてしてないぞ！！

「……それよりいつも悪いね、ウチのバカどもが」

露骨に話を逸らしてきおった。

でもその気配りは実にグッドですぜ姐さん。

「気にしちやいかんですぜ姐さん」

「誰がだい、誰が」

「俺は友達と遊んでるだけで、たまたま一緒にご飯食う機会が多いだけですぜ姐さん」

呆れたように溜息か。

ま、でも亜巳さんは笑ってるわけだし気にしちゃいかんか。

「それに亜巳さんも友達だろ？好きで一緒に居る訳だしさ」

「……口説くには十年早いよ、せめてもうちょっと渋くなって出直してきな」

「？」

「わからず言ってたのかい……らしいよ、あんたは」

意味がわからん。

とりあえず姉的に考えて必要だろ、どっか行く時だつてさ。

「ってなわけで亜巳さんも俺んちでぐっすり寝ようぜ」

「あたしはいろいろ忙しいんだよ」

そいやあ板垣家は亜巳さんが稼ぎ頭だったわけ？
大変なわけだなあ。

じゃあ今日はどうしたなんてツツコミはお断りだぜ。

「だったら今日は俺がおごるぜい」

「あんたね、ガキのくせに何言ってるんだい」

「気にしちゃいかん、しっかり奢られる！！」

かつきー男は女にお金を出させねえんだよな。

酒呑みに行っても『あちらのお客様から代金はすでに』って店員さんに言わせれるようにならんな。

てかてか俺は行くぜ、チヨコバナナだ。

亜巳さんは驚いてるが気にしねえ。

一本250円か……軍資金は……300円。

金が、俺の金が……。

だがしかし男の子はちっばけなプライドを守るのさ。

「おっちゃん、これ一本くれ」

「はいよ」

「でな、あっちの姐さん連れてくるから俺のおごりにしてやってくれ!!」

「……クソガキのくせにませてんなあ、よっしゃ!おっちゃんに任せときな!!」

しっかり仕込みは出来た。

てな訳で亜巳さん呼ぶぜ、呼ぶぜ亜巳さん。

うんうん、屋台の方に行つて……って二本持つて帰ってきた?なんでだ?

「心意気だつてよ、まああんたも食つときな」

グツと親指を立てたおっちゃん。

……ヤベエ、アンタ……ちょーかつきーぜ。

二人で食ったチョコバナナはチョコとバナナの味がした。

「まんまだねえ」

そりゃそうだろ。

ま、亜巳さんうれしそうだしいつか。

結局すぐ後小雪らに会ったけど不満そうな顔だったぜ。

なんでもお金が無くってなんも出来なかったんだってさ。

ケケケ、イイ気味。

縁日でのほほん（後書き）

やっぱ微妙

小雪の花火でのほほん（前書き）

今回小雪視点、頭の中が常春の彼女をお楽しみあれ

小雪の花火でのぼん

うー、なんとなくコウキがアミミンと一緒に居たそうだったからタダカツと来たけど……。

「つまんないぞ」

「知らねえよ、だったら晁気と一緒に行けばよかっただろうが」

「つまんないつまんないつまんないつまんないつまんない」

「うるせえ……」

むう、綿菓子も無くなっちゃったし、マシユマロは……あ！

「マシユマロもコウキが持ってる」

食べすぎだつて言われたんだ。そんなことないもん。

「あー、トウモロコシ食うか？」

「いらない」

「焼き鳥食うか？」

「いらない」

「……かき氷にするか？」

「いらな〜い」

タダカツが食べたいのかな？
もう、食いしん坊だなあ。

よし！小雪お姉ちゃんが買ってあげましょう！！

「ちょっと待っててね〜」

「おい！？」

う〜う〜う〜う〜。

「おじさん！きんぎょさんから揚げにして！」

「えっと、そいつは無理かなあ……」

けちんぼだ！

「じゃあ僕が作るからきんぎょさんちようだい」

「お金出してくれたら掬えるからね」

おじさん変な顔してる〜。

風邪かな？おなか痛いのかな？顔が悪いのかな？

「はい、じゃあ小雪すぺしゃる〜」

僕の大事なお金だぞ。

お祖父ちゃんお小遣いに千円くれたんだ。

「……ウチは300円だからね、50円じゃ無理だね」

「え」

最近の物価は高いぞ！

でもお祭りのとき全部コウキがお金出してくれてるからわかんないけど。

「ったく、俺が立て替えといてやるよ」

「頑張れタダカツ」

じゃあ僕はタツちゃん探しに行かないと。

「おい！やるんじゃないのか？」

「やらないよ、早く三人見つけないと」

うん、見つけたら褒めてくれるかな。

「　　ツウウウー！」

わっ！タダカツ怒ってる。

「タダカツ、何かあったの？」

「いや……お前はそういうやつだったな」

「？」

「ハア、ブレーキ役にきっちりなってるんだなあいつは」

「車乗ったの？僕はバスばっかだよ」

「兄貴やってるってことだよ……いや、なんでもねえよ小雪、とつとで見つけるぞ」

「うえーい」

みんなでみんなでお祭りだ〜。
集めてこねてごっつんこ〜。

焼きそば焼き鳥たこ焼きお好み焼き〜。
焼き焼き焼き〜。

「くるくるくるる〜」

「廻んな、邪魔になってるだろうが」

両手を広げてブーンブン。
うい〜ん。

あ……、当たっちゃった！
頭押さえてるけど痛そうだな〜。

「テメエいきなりなにやってくれてんだ!!」

「あ、天ちゃんだ〜」

「ってユキかよ！……じゃねえ！ウチがバカになったらどうすんだ！？」

あう！いたい。

ベチって叩かれた。

烈のおじさんの方が痛いけどね！

こんどはまーぼーどーふ作ってもらおう。

もう僕脚でレンゲ使えるよ！

お箸も刺すだけだったらできるもん。

「ユキチーだー」

「タツちゃんだ」

タツちゃんもいたよ。

僕の大事なお友達さ！あげないぞ。

「いえい」

「いえーい」

「らんらんる」

「らんらんらんー」

「らんらんらんらんる」

「らんらんらんらんらんらんるー」

「タツ姉も小雪もそろそろやめろ、ウザいぞ」

リュウヘイに怒られた。

「リュウヘイのくせに」

「なんだ！悪いかテメエ！」

「わい」

ほっぺむにむにされた。

僕の顔も変になっちゃうよ。

「ところで何やってんだ？何も買ってねえみたいだし」

「ああ、それなんだが天の阿呆が……」

「うるせえ！第一テメエらが金持ってねえのが悪いんだ！」

「アミ姉がくれる前にどっか行っちゃまったんだろ！」

「何で金持ってついて来ねえんだよ！？」

「無茶苦茶だぞ天！！」

わあ、喧嘩だ。

やれやれ、喧嘩は男の華なんだ。

「見て見てユキチー、お面だぞー」

「わあ！いいないな、僕も欲しい」

いいな、ハジケリストのお面だ。
オレンジ色はかっこいいぞ。

「タケノコソード！」

「なんの、魔剣大根ブレード！」

ガリウスの剣は伊達じゃない！

僕もコウキに買ってもらおう。

「どうすんだ、俺のじゃあ全員分は買えねえぞ」

「使えねえな忠勝」

「タダ兄悪くいつてんじゃねえ！殺すぞコラア！？」

喧嘩はだめだよ。

コウキのいつてる『まったりとした人生』には当てはまんないもん。

でも見てるのはイっていつてたかな？

はあ、コウキどこかな。

やっぱりコウキと一緒に行けばよかったかな。

「コウちゃんはー？」

「アミミンと一緒にだよ」

「アミ姉どこかなー？」

タツちゃんもコウキに会いたそうだよ。
どこいるのかなあ。

「うお！花火！スゲーー！！」

「でかくてなかなか綺麗じゃねえか」

「ハッハハハ、気分が高まってくるぜ！！」

わゝ、キレイ。

……でも何かキレイじゃないな。

「コウちゃんと見たいよー」

うん、僕もコウキと一緒に見たいよ。

コウキー、何かさみしくなってきたよう。

コウキー。

「うは！花火！キタコレ！」

「カメラでも持ってきてくりゃあよかったかねえ」

あ、あの声……コウキだ！

お空の花火、アミミンと見てる。

「コウキ―」

「お、小雪じゃん？どしたよ？」

タツちゃんと突撃だあ。

バナナもぐもぐ頭なでてくれたよ。
えへへ、コウキ。

「僕ね、マシユマ口食べたい！」

「お前いつつもそれな」

いいい！

小雪の花火でのほほん（後書き）

なんかカオスだ……

いじめでのほん（前書き）

やっぱなんか変ですねえ

いじめでのほん

見ないふりつてのはとつての簡単なことだ。

怖いこと、嫌なこと、見なけりや、見ても関わらなけりやあ、人生楽チンに過ごしていける。

しっかり見据えるつてのは難しいことだ。

目の前にある問題に正面から、もしくは側面から向かっていかなきゃならんのだから。

でもそれはとつても大変なこと。

起こしたくない問題も起こさないかんし、関わりたくないもんにも関わらなきゃいかん。

気を揉んで、頭をひねって、嫌になってくるわホント。

でも、それでも立ち向かわなきゃいかん時つてのもある。そこで、それでも逃げるってんならもう知らん。

けどさ、立ち向かった方がかっつきーだろ？男の子として今回立ち向かったの俺じゃねえけどさ。

夏休みも終わって学校が始まったぜい。

ま、相も変わらずいじめられてますが何か？

嫌だねえホント。

何が嫌だっ て教師が嫌だ。

イジメ自体はもう慣れたから気にならんけどもうあのアホたれはむかつくね。

だつてさ、なんて言つたと思うよ？

「私たちのクラスにイジメなんてないと思いますが、もし思い当たる節があつたら配つたワッペンを付けてください。

それが私たちにイジメを知らせる救助サインとなりますから」

だつてさwwwwwww！

……wwwwwつてどんな意味があるんだ？

まあともかくそんなもんで無くなると思つてんだつたら子供舐めんなつて話だ。

俺のワッペンはもうトイレに流されちまつたさ！！

ぜつてー将来教師だけにはなりたくないね。

中堅企業のサラリーマンか主夫が俺の理想だな。

大手はえりーとつてやつなんだろ？

俺の頭、そこまで良くないしなあ。

何より面倒だな。

今ある技術を磨いてつける職がイイね。

「さあて、今日もサンドバッグで遊びますよお！」

「ケージくんワルカツコイイよ！！」

「生意気なヤツ殴るの気分いいYO!」

これはウザいゆとり。

つけ、うつとうしいのはたまらんな。

まあ全然痛くないんですけどね!!

祖父ちゃんやら烈のおっちゃん、刃牙にいちゃんに比べりゃハナクソですから。

「今日は一層派手に……ギャラクティカルパンチ!!」

「すすすすすごいよケージくん!」

「流石並みいる不良を一撃で倒したパンチだYO!」

「はっはあん、吹っ飛んでるべ」

俺が自分から飛んだんですよ。

あゝああ、蚊が止まったみてえなパンチでなんで不良をやれるんだつての。

かっこわりい。

でもまあ甘んじて受けてる俺も変わらんのかな?

小雪やらに降りかかって欲しくないからな、こんなもんは。

忠勝には嫌な役目引き受けさせてるねえ。

放課後の、このくつだらな遊びが終わるまで時間稼げってこと言っただもん。

「ひゃっはー、行けザンドロ『ガッシャアアアン!』あ、あああ

「えへへへ」

はい？小雪さんですか？

ええ、キレてますねこれは。

長年一緒にいたから分かりますよ。

基本誰に対しても接することが出来る小雪嬢。

でもさ、一次接触は避けるんだ。

嫌なんだと、何となくだが。

なのに今はべたべた触ってら。

美少女の顔が至近距離で、ＹＯとか言ってたやつ真っ赤に顔を染めてますＹＯ。

「お前が諦める晃気、遅かれ早かれこうなってたさ」

「イジメ、ヨクナイ、ボウリヨク、カッコワルイ」

「無理だろ、この状況だったら」

忠勝うううう！

お前わかってんだろ！俺の言ってる意味が！

知らせなかった理由の一つは関わらせたくなかったから。

もう一つは……こいつらが真剣になったら相手がやばいんですよ！！

烈のおっちゃん直伝なんだぞ！

なんでか知らんけど最近夏休みってか知り合ってから辰子も加わっちまったし！！

「な、な、な、ここは俺に免じて帰ろうや」

HAHAHA、これで上手くいったらいいなあ。

「……うううう……あああああああああああああ
あ……！」

無理でした。

専門職とか、喫茶店のマスターとかいいかもなあ。

デカクなくて、常連が来るくらいに小さなヤツ。

コーヒー飲めるんだぜ俺って……！！

……現実逃避はやめるか。

一足の下にリーダーダ格のケージくんの懷に飛び込んだ辰子。

辰子が烈のおっちゃんから習ってんのは中国四大拳法の一つ、『形意拳』。

その動きは実に単純明快、覚えようと思ったたら一日で出来るんだと。

けどその威力は絶大。

もちろん一日で覚えて……なんて虫のいい話じゃねえんだけどな。同じ形を何度も何度も、幾度となく繰り返し返す。

積み上げた練習量はその者の力を比例し押し上げていく。

そんな拳法だつてさ。

で、辰子が烈のおっちゃんから習ってんのは多分最も有名な拳打、『崩拳』。

何でもそれだけをやり続けて、誰よりも強かった人がいるんだとさ。

なにせよ、辰子はそれを放った。

腹にめり込んだ拳はリーダー格の体を浮かせ、滑るように床を転がして行ったんだ。

そんな辰子はすつきりしたような顔で俺の傍にすり寄ってきた。ぽんぽんと頭でも撫でとくか。

……辰子を怒らせんようにせんな。

「うつえゝい」

一方気の抜けたような掛け声で放たれた小雪の脚。

ゆつくりと、避けられる程度の速度のそれを案の定YOKくんはしゃがんでかわした。

「ちえいやゝ」

けどそれは間違いなんだねえ、これが。

YOKくんの頭上あたりでそれは急に方向を変えた。

薙ぐ動きが打ち下ろす動きに。

踏み潰すように小雪の脚はYOKくんの頭の上に乗る、髪を脚の指で掴んで叩きつけた。

躊躇いがねえ……小雪、おそろしい子!!

うれしくないファーストキスと床と交わしたYOKくん。

俺は好きな子としたいなあゝ。

「じゃあ帰るぜ」

ってもう一人も床に沈んでる!

静かにこなすとは……仕事人ですな、忠勝!!

「帰ってマシユマ口食べよ」

「……私は疲れたから寝るよー……zzz」

ありや、俺に寄りかかって寝ちまった。

床でもがいてるイジメっ子たち。

明日から俺どうなっちまうの？

人生目標から絶対外れちまつてるよ！

うれしくねえ……でもうれしいかも。

よくわかんねえ、妙な気分だわ。

まあでも、だ。

「zzz」

助けてくれて、俺のために怒ってくれたのはうれしかったかね？
どちらにせよイジメられてた時点で、ちよつとどころかかなり逸れてたかなー！！

「喧嘩か！？……って終わってるじゃねえか！なんで俺を呼ばねえんだー！！」

「うお！やっぱりタツ姉スゲーぜ！」

「僕も頑張ったんだよ」

飛び込んできた竜兵に天。

いやはや遅いからね、はしゃいじやってかくわりーからね。

「晃気！次にこんなことあったら真っ先に俺を呼べよ！」

「ウチも！人間殴れるなんてサイコーだぜ！」

なんといい清々しい暴力宣言！！

悩んでた俺がマジ馬鹿らしいねえ。

「……よろしく頼むぜイ！」

だからここは笑っとくか。

「ケージくん……痛いよ……」

「あんのやろお……ぜってーに泣かせてやる……」

「でもどうすんだＹＯ、あいつらめっちゃ強いＹＯ」

「もっとクレバーになるべ、なんか変な名前のやつがいただろ？」

いじめでのほん（後書き）

これはウザいフラグ

忠勝の雲でのほほん（前書き）

やっぱり変な気がします

忠勝の雲でのぼん

「おい、テメエら何やってんだ」

学校が始まってひと月くらいか。

休日の今日、俺はいつもと変わらず晃気の家に向かっていた。

いつもと変わらず……か……。

思えば妙な感じだと思う。

俺はあんま群れるってのは好きじゃねえ。

なのに俺はなぜかわかんねえけどあいつらとつるんでいる。

学校に行きやあ一緒にだべって、終われば一緒に帰る、休日は用事でもなかったらあいつの家か孤児院で遊ぶ。

思ってること、やってること、この二つが完全に矛盾している。

何が原因だ、何が始まりだなんて考えたこともある。

んなもん考えなくなたって思いついたけどな。

『俺と一緒に遊ぼうぜイ！』

そうやって、周囲を拒絶し続けた俺に話しかけて来たアイツ。

『孤児』つつうレットル、それをいつだったか俺は酷く気にしてた時があった。

周りで笑ってる奴等は親がいて、俺にはいない。

多分嫉妬だったんだろうな。

孤児院以外のすべての人間が、俺の事を見下してる。

そんな風に考えてたこと時期があったんだ。

若かったんだろうな、……まだ小学生だけだよ。

……笑つとけ、今は。

とにかくだ、俺は俺の周りに殻を作っていた。
世間と、周囲と、俺を隔てる厚く硬い殻を。

『ウゼエ、消えろ』

『……その言い方……ひどくなあ？』

『死ね』

『じぱあっ！！』

晃気みたいに俺の近付いてくるやつはいた。

運動は……結構得意だからな。

そんなもんだろ、遊びたいやつを見つける理由なんてよ。

けど俺は尽くそれを拒否した。

同情で、憐れみで手を差し伸べて来てやがる、そんな気分が俺の心を満たしていたからな。

俺を引き取りに来てた大人どもは、どこかそんな感情が見え隠れしていた。

そのせいなんて言わねえ。

単純に捻てんだよ、俺はさ。

今でもまだ素直じゃねえ。

率直に礼も言えねえ。

何か手伝う時も、憎まれ口を叩かねえと動くことすらできねえ。
そんな性分だよ、まったくさ。

『みなもとくゝん、あそびましょ』

『失せろ、他の奴にしろ』

『いいじゃんいいじゃん、遊ぼうぜい』

『帰れ、二度とその面見せるな』

『だが断る!』

正直ウザいくらいに晃気の奴はすり寄ってきた。

何が目的か、その時の俺には分からなかった。

後で聞けばくだらねえ、ホントくだらねえ理由だったが。

俺はやっぱり性根が曲がってる。

あいつの周りには、今じゃ信じらんねえけど友達はたくさんいた。
突拍子のない出来事をしでかすあいつが面白かったんだろうな。

小雪も、辰子もそうだがアイツも半端ないくらいに自由人だ。

今じゃあ手綱握るために、兄貴するために、ちっと根っこが張り始めただけだな。

もともと自分で何かをしでかすというより、何かをしでかすところにみんなを連れてくのが好きだったというか。

あっちにフラフラ、こっちにフラフラ。

晃気はいつも言ってるように当事者にはなりたがらねえ。

ひたすらに傍観者として、おもしろいもんを見ていたいんだとさ。

無断で小学校を休んだ時、隣の県でお茶摘みを見学に行ってたつていうんだから阿呆としか言いようがねえ。

一人でなければなしの金で電車に乗って、結局帰ってこれずに祖父ちゃんに怒られたって言ってたか。
掴みどころがねえやつだ。

『あつそうぼうぜイ』

『周りにいるヤツと遊べばいいだろ』

『小雪以外は居なくなっちまったぜ』

『ハッ、みつともねえな』

そんな晃気を、俺は軽薄な野郎だと思ってた。
へらへらしてる、調子のいいヤツだと。

あの時、小雪がいじめられるようになった時、決して離れねえアイツを見るまでは。

小雪とひどく仲が良かったわけじゃねえ。

たまに一緒に遊ぶ、その程度の関係だったはずだ。

小雪の母親が、頭の逝かれた奴だとわかって、それがクラスに知れ渡って。

次の日から、小雪はこれまでの小雪として生活が出来なくなっていやがった。

妙なこと、思い返せばいろいろあった。

給食が好きでお代わりをしまくってんのに小雪はいつも痩せていた。
残したパンを貰って帰ってたのもしょっちゅうだ。

小雪は給食以外に、何かを食べる術を知らなかったんだ。

それだけで、俺たちには十分だった。

小雪の友達は一人を除き残らず消え去って行く。

そして残った晃気の友達もまた残らず消え去って行く。

恨んだんじゃねえか？憎んだんじゃねえか？

こんな風に言っちゃあアレだが小雪のせいで、晃気も晃気として生活していけなくなったわけだから。

だがアイツは、決して小雪を投げなかった。

そして変わらぬ態度で接する晃気。

矛先が移るのは、酷く速かった。

『俺の……うわばきがあああー!!』

『……』

『何その目……ハッ！まさか俺と友達になりたいと!!』

『……』

『MUSIC……虫……』

小雪に当たり散らしたくもなかったんじゃねえか？

聞いてみりゃ危なかったなんて言うが……嘘だろうな、多分よ。

アイツは、変なヤツだ。

晃気が変わらぬ態度で小雪に接し続けたのは……なんでだろうな。
こんなもん俺の勝手な考えだ。

間違ってるかも知れねえし、アイツに聞いたら多分違うつて言うだろうがな。

アイツは変わらねえ自分を見せ続けたかったんじゃねえかな。自分を見せて、小雪の気分を紛らわせたかったんじゃねえかな。

小雪と晃気が河原で会って、腹減らせた小雪を家に連れてって。いつの間にか小雪は晃気の家から学校に来るようになって、乗り込んで来た小雪の母親を刑務所にぶち込んで。

喜々として俺にそれを聞かせる晃気に相槌を打つようになって。結局根負けして、『周りにいねえんなら俺がダチになってやるよ』なんてキザッたらしいセリフ吐いて。

河原で遊んで、寝転んで空見上げて。

ぼんやりと、まったりと、のほほんと過ごしていた。

そんな時間が俺は好きで、小雪も好きで、晃気もまた好きなんだよ。

真っ青な空を悠々自適に進む白い塊。

時には俺らの上に留まりやすらぎをくれる。

けどいつの間にか見えるすぐそこ、でも届かないそこにいる。時間の経過で酷く変わり、時間の経過で全く変わらない。

雲があいつに一番似合ってるさ。

誰に対しても、いつの間にか手を伸ばさせちまうアイツに。俺も結局、手を伸ばしちまったんだからな。

『孤児なの？マジで？』

『……知らなかったのか？』

『おうともさ』

『同情じゃ……ねえのか……？』

『何それ？食えんの？』

『じゃあなんで俺ばつかにしつこく……』

『恐竜戦隊iiiiii！』

『……ジュウレンジャーか？』

『持つてんじゃん！古いのにその筆箱！！』

見てると、心地いいんだよ。

なんでかなんてわからんけどな。

『そんだけか』

『そんだけだ』

アイツは俺の恩人だ。

んなこと面と向かって言ったらまたブツクサ言い始めるだろうがよ。

けど俺はアイツのおかげで周りに目を向けれるようになった。

アイツは特に俺に何をしたわけでもねえ。

確かにその手を差し伸べたけど、取らせようなんてしなかった。

誰に対しても……といったら少し違うか。

ただ置いてた、それだけ。

そこで俺は殻の外に手を伸ばせるようになった。

俺は晃気に惚れてる。

男として、変な意味じゃなく、アイツに惚れ込んでる。

惚れ込んだその男は『まったりとした人生』を望んでる。

だったら俺も、それを助けようじゃねえか。

陽だまりのなか浮かぶアイツを、俺はいつまでも見て、追っかけて行きたいからな。

「おい、なに天に手え出してんだ！」

この前の奴らか？

ビクッ震えたような色が見えるな。

「タダ……兄……」

いつもみてえな元気がねえ。

……なんで黒人がいるんだ？

「ボブくん鬼つえーかな！この前みたいにやれると思ったら間違いだべ」

「シュツシュツ、パンチネ！！」

アイツがやったのか？

あきらかに俺らより年上なのによ、何やってんだか。

んなことよりアイツをどうにかしねえといけねえ……なッ!!

俺は走り込み、黒人に向かって拳を掬い上げるように振るう。
が、それは事もなげに止められ、代わりに貰ったのはハンマーのよ
うな衝撃。

天の横に転がされる……かつこ悪すぎるだろ。

「そそそそそいつえんじえるって変な名前何でしょ?」

「チョーかつこわりいYO」

「うつ……ウチの何がいけねえんだアアア!!」

リーダー格に飛びかかり蹴りつけようとする天。
けどそれは黒人の腕によって止められて。

「ギャラクティカ……パアンチ!」

メリケンサックつけた奴の拳によって吹っ飛ばされる。

「クソ……イテエ……」

頬は膨れ上がり、口の中が切れたせいか血があふれる。
女相手に……そこまでやるか!!

「テメエら……俺の妹に何やってんだアアアアアア!!」

絶叫が俺の耳に飛び込んできた。

駆け降りて来たのは竜兵。

血走らせた眼で黒人相手に組みかかった。
飛び込んだ勢いそのままに、押し倒して殴りつけた。
けど上手く言ったのはそこまでだった。

「クレイジーボーイね」

体格の差は凄まじく、すぐに転がされ返して、顔面に一撃。

「フンフンフンフン！」

右、左、右、左、躊躇うことなく繰り返されていく。

「クソっ……たれが!!」

竜兵の上のそいつに、俺はあらん限りの力を込めて飛び蹴りをお見舞いした。

「アウチ！」

不意打ちに身体を転がしたそいつ。
けどこれはすぐに起き上がってきやがるな……。

……考えるより行動だな。
結局俺は、こんな形じゃねえとアイツの望んだもんを護れねエのか
……。

竜兵の意識は、まだあるか。
重いな、結構。

「天、こいつ動きださせねえように見てろ」

「タダ兄は何する気だよ！」

「……カッコつける気だな」

仁王立ちつてやつ。

黒人が俺の前に現れて、ゆとりどもも現れて。ぜってーに動かねエ。

「来いよザコが、俺を潰したいんだろ？気合入れて来な」

「何言つてんだべ、こいつ」

「ややややややつちやおうよ、ケージくん」

「それも楽しいかもYO」

そして俺に向かって飛んでくる暴力。

笑いながら、ゲームを楽しむような感覚で。

「オー、タオレナーイ！」

殴る、殴る、殴る、殴る。

それを俺はひたすら耐える。

痛え、けど痛くねエ。

俺なんかより、ずっと痛い奴がいたんだよ。

俺は手を出せたのに、出さなかったんだ。

四人がかりで只管に続ける。
それに俺は只管に耐える。

「ヤマトダマシイネ」

……感覚がねえや、もう。

黒人が何か言ってるんだろうが……意味がわかんねえや。

あ、でもさ。

「……どういう状況？コレ？」

アイツの声は、なんでか聞こえたんだよな。

あれから数週間がたった。

俺は今親父、『宇佐美巨人』の部屋にあった資料をあさって、とあるビルの中にいた。

「坊主、ここが何処だかわかってんのか？」

「わかってるよ、んなこたあ」

目の前にいる黒いスーツの男が俺に問いかける。

けど生返事しか返せねえほどに、俺は目の前に男に意識を奪われていた。

「……本気か？」

「ああ、俺をあんたの舎弟にしてくれ」

「小学生をか？」

「ああ、けど忠義はあんたには誓わねえ」

「なッ！？テメエいきなり何言ってやがんだ！！」

いきり立つ周りの男たち。

それをスツと手で制して、目の前の男は俺に言葉を促す様に口を開く。

「ダチか？」

「ああ、俺のぜってー枉げられねえもんだ」

「そうか……名前は？」

「源忠勝」

「……週三にしろ」

「は？」

「俺のどこに来るのが週三にするなら……考えてやってもいい」

疵だらけのスカーフェイス。

それを懐かしむ様に、どこかうれしそうに男は顔を緩めた。

「ハンパなら……俺が潰す」

「気合は……負けねえ」

俺が睨みつけるように言い放つと、男はバカでかい手で俺の頭をなで出した。

「……兄貴とでも呼ぶか？」

「ウツス」

その日、俺はその門を叩いた。
あの時薄ぼんやりした意識の果てで、見た晃気に並び立てるようになるために。

純白のスーツに身を包み、不釣り合いな眼鏡をかけた大男。
この男の信念を、姿勢を学ぶために俺はここに来た。

その男の名、花山薫。

忠勝の雲でのほほん（後書き）

忠勝くんと絡ませる刃牙キャラならこの方でしょう

竜兵の獣でのほん（前書き）

バトルバトル

のほん空氣が崩れていく……

竜兵の獣でのぼん

「天、こいつ動きださせねえように見てろ」

「タダ兄は何する気だよ！」

「……カッコつける気だな」

ボブとか言う黒人に殴られて、俺は河原に転がっていた。
天が殴られてるのを見て、頭に血が上って。

ぶん殴って、ぶっ倒してやろうと思ったのに……このざまだ!!
情けねえ……情けなさすぎるぜ……。
兄貴として、男として。

俺は小学校で晃気とは違う意味で浮いた存在だった。
どういつもこいつも、目のあったむかつく野郎を殴り続けて来たこれまで。

血に飢えた獣のような精神。

肉体と肉体がぶつかり合うのが、血と骨と暴力の共演。
何よりも俺にとっての娯楽だった。

健全にスポーツなんざやってる奴らを見下してた。
友達なんてくだらない、友情なんてまやかしかだと思ってた。

けど、俺はむかついてた。

誰でもなく俺自身に、途方もない苛立ちを募らせていたんだ。

環境を変えようともせず、ただ苛立ちをぶつける。

孤独が好きだなんて思っときながら、本当は孤独しか俺が選ばなかっただけだ。

俺はただのガキだった。

タツ姉に連れられて晃気に始めて会った時も、最初は嫌だった。なんで俺がこんなこと。

そう言いつつ俺は他人との接し方がわからなかったただけだ。

『辰子の弟？似てねエの』

『ああ！何か悪いか！！』

『性格が悪い！』

『誰がだコラア！？』

同年代に比べて、俺は強い力を持って生まれた。

人に比べて、俺は強い我を持って生まれた。

だから人の気持ちを考えたことが無かった、考える必要もないと思っただけだ。

適当に俺がいて、適当に楽しんだらイイと思っただけだ。

俺は俺の思っがままに生きていくんだと思っただけだ。

「……………どういう状況？コレ？」

そうだ、今この時まで。

重い頭を上げてみりゃあ……アレは晃気か？
なんであいつがこんなところに。

って俺も忠勝も天もこいつの家に行くつもりだったからか。
飯食わせてくれるからな、イイ溜まり場だ。

「誰かと思えばサンドバッグじゃねえか」

「こここここここいつもやっちゃおうよ、ケージくん」

「殴り慣れた感触、最高ＹＯ」

ニヤニヤしながら近づいていくゆとり三人。
かりかりと頭をかく晃気の様子は見えねえ。
どうせビビっちまってんだろ。

情けねえ、俺と一緒に。

その中でもＹＯとか言ってるやつが近づいて晃気の肩に触れ……た？

「デメエら……何やつとんじゃコルア！！」

すり替わるように頭のあった位置には脚があり、脚のあった位置に

は頭がある。

ズゴつつう痛々しげな鈍い音。

地面に突き刺さるようにそいつは逆立ちしていて、グラリとその身体を地面に横たえた。

口から……泡吹いてやがる。

晃気が……やったのか。

あの羊みてえにしか見えなかったアイツが！

「なーにやってんだべブウツー！」

呆けたように立ち尽くしていたところから、掴みかかって行ったり
ーダー格。

それを顎に向けてのアップパーカットでかち上げ、そのまま地面に叩きつけやがった。

「何様だデメエは！！」

どもつてた奴に今度は自分から近づく。

手を、いや正確には指を握り、背負い投げた。

「おれ……折れたアアアいたいイイイイ！！」

「この俺の……俺の友達を弄ったのか　　ッ！！」

地面を転がるそいつに晃気は優しく手を差し伸べた。

立ちあがったそいつは痛みも忘れて呆けていやがるんだが……。

につこりと、弓張り月のように口元を曲げる。

晃気は躊躇いなく折った指に再び手をかけて、同じようにもう一度

地面に叩きつけた。

「H A H A H A……もう一回聴くゼイ？何様だア……テメエは……？なア？」

泣き叫ぶそいつを踏みつけ、晃気は……笑ってやがった。

冷酷に、冷徹に、愉悦を含んだような表情で。

俺は初めて、他人を怖いと思えた。

羊の皮を被ってたのは狼なんかじゃねえ。

そんな生易しいもんじゃ。

バケモンだ。

出て来たのは……バケモンだよ。

どこか、俺の感情のどこか。

どこかで俺は晃気たちをアミ姉なんかと同じように大切だと思ってた。

どこかで俺は晃気たちをアミ姉なんかとは違うと思ってた。

友達だと思つて、友達なんかいねえと否定していた。

だがそんな感情は……どうでもいい。

今まで思ったすべてが、築きあげてきたすべてが、どうでもいいんだ。

「ダレダ！オマエハ！！」

突き出されたパンチ。

恐らくだが、何か格闘技を習ってるんだろうよ。

俺じゃあ避けることなんて以ての外だった、俺じゃあな。

「舐めんじゃねエ！テメエ何ぞとは積み上げて来たモンが違うんだよ！！！」

アイツには関係なかった。

右に動くことでボブの拳を交わした晃気は捻り上げるようにもう一方の手を掴む。

そしてそのまま本来の稼働域とは正反対に引き上げ、ブチリと嫌な音を立てた。

肩が外れたのか？

そして続けざまに追撃をかける。

ブラン垂れ下がった腕が下に来るように、アイツは足払いをかけた。そして浮きあがったそいつに抵抗のない空中で加速をかけ、地面という名の凶器に叩きこんだ。

もちろん肩が直撃するように、だ。

そしてさらに転がったボブの頭に手を置き、少しだけ浮いた状態のそれを地面に再び叩きつける。

防御の暇なく行われたそれは、ヤツの頭を裂き血を溢れさせた。

重要なのはただ今、この状況。

躊躇なくボブってやつに喉に踵を振り下ろす、晃気という存在。

俺が及び付かなかった暴力を、上回るほどの超暴力で叩き潰した晃

気。

カッコ……よすぎるだろ。

「……惚れた」

「は？……リュウ？」

隣であんぐり口を開けた天なんざ知らねえ。

冷めたような瞳ですべてを見下す晃気に。

ビクツと震え、顔色をだんだん蒼に変えていくお前が。

「晃気……お前は俺の一番星だ……」

好きだ。

「双拳密如雨、脆快一挂鞭」

「は？」

「双拳の密なること雨の如し、脆快なること一挂鞭の如し……だ」

目の前の中国人、烈海王とか言ったか？大した名前だ。

そいつに俺はあれから数週間たった今日、弟子入りする。

さんざん嫌だ嫌だ言つときながら小雪とタツ姉が言ったら態度変えやがった。

褒められて、顔を赤くしてんだから。

なんなんだ？こいつは？

「一つ……聞かせてもらえるか？」

私はこれからキサマに翻子拳を教えることとなったが……なぜ拳を握る」

「俺の一番星のためだ」

呆然としてやがるな……。

だったら教えてやるか、アイツの魅力を。

「晃気ってヤツはな……」

って訳だ。

時間飛んだ？気のせいだろ。

あ？なんでゲッソリしてんだ？

「……故人のためだな」

「おう、俺はアイツにアイツでいてほしい」

少々感心した表情に入れ変えて来たか。

ようやく晃気の魅力がわかったってことか？遅すぎるだろ。

「バケモノを屈服させるため修羅の道を進む……良い精神だ」

「俺はアイツに首つたけ、だったら俺も一本でいくぜ」

「おもしろい……だが中国拳法は甘くないぞ!!」

いいさ、どんな道だろうと。

好きなヤツのためなら頑張れる、人間ってそんなもんだろ？

竜兵の獣でのぼん（後書き）

ブチギレ晃気くん、一番星はどこ？の二本立てでした

お茶でのほほん（前書き）

今回はのほほん

お茶でのぼん

人間の行動には責任が伴う。

たとえそれがどんな人間であろうとも、それは付いて回ってくるものらしい。

良いことをしたらそれには感謝が、悪いことをしたらそれには罰が。けど大事なのはそれじゃないと俺は思うんだよ。

大事なのはそこからの行動。

その後どう動くか、これがきつと重要だろ。

だってやつちまったもんは仕方ねえだろ？

「コウキー、暗いぞ」

「ほつといてえ」

ああ、……ハア。

なんで俺はあんなことやつちまったんだろっねえ。

殴って、投げて、血を見て……。

何と言うハッスル！！

強烈な自己嫌悪ですぜ……。

俺の人生目標から逸脱してら。

……望んでねえ……。

そつだよ！俺はこんなの望んでなかったんだよ！！

これはきつと……そつだ！！

「夢だな」

「僕も夢見たよ」

ほほう、そいつは初耳。

小雪が見たのはどんな夢だ？

「コウキが鬼みたいになつたゆめ」

「H A H A H A、そんなことあるわけないじゃないか」

笑えないジョークだぜ。

そつそつ、二人が同じ夢をみるなんてさあ。

「じ」

「なつ、何だよコノヤロー」

俺の顔の前でニコニコ笑っちゃってさ。

「ジ」

「まさか俺が嘘でも言ったと！？」

「Gイ」

そんな……バレた……だと……ッ!!

「にへ」

ありえない……そんなこと……。

あつてたまる訳が……。

嘘だ……夢だろ……、そう夢に決まってるんだ……。

「ところがどっこいこれが夢じゃないッ!」

「嘘だッ!!」

「ウソじゃないよ」

……ですよね。

ハア。

解つてたんだよチキシヨウめ。

俺がゆとりどもを病院に叩き込んだなんてこたあ。

葵紋病院だっけ?

何となく行きたくないところだったのにねえ。

風邪なんか俺には無縁だぜ。

そこ! バカとか言うな!!

『がんばりましょう』ばっかだけど算数と理科は『よくがんばりました』だったかな!!

「にひい」

隣の小雪は100点のテストしか持って帰りませんが何か？

にしても……いかな、ホント。

殴られて顔腫らしてた忠勝見たとたん、頭ん中真っ赤になっちまったもんなあ。

覚えてら、俺の手が。

かち上げた顎を、へし折った指を、外した肩を、叩きつけた肩を、頭を。

正直なところ気分爽快だったけどよ……やっぱいかなわな。

アレは俺がやりたかったもんじゃねえ。

俺は人を壊すために柔術やってるわけでねえしな。

「コウキー、僕がお茶入れてあげる」

「お、ありがとな」

ペットボトルの中に入った冷えた緑茶。

うんしょんしょとそれを持ち上げてコップに注ぎこんでいく小雪。

「こぼれたぞ」

「ヘイヘイ、雑巾持ってこい」

「ん、めんどくさいから僕が飲む」

「はいアウト！女の子がそんなことしちゃいけません！」

油断も隙もありやしねえ。

ちゃんと掃除してるとはいえ床にこぼれたお茶を飲んじゃいかんだろ。

「ぺろぺろ」

「はいど〜ん」

「みゃう」

コップで軽く頭を小突いてやるが……まさかマジで舌を出すとは……。

俺の出来ないことを平気でやってのけるう！
でもそこに痺れも憧れもしねえけどな！！

恨みがましそうな視線で見ちゃって、この子は。

「ほれほれ、膝枕してやろう」

「わ〜い」

「ちょ！まて！飛び込んでくんりぶウツ！ー！」

ズン！と重い衝撃が俺の腹に……。容赦ねえな。

小雪は我関せず俺の膝上コロコロ。
勢い付けて回ってるけどさ、それ痛くね？

「いひゃい〜」

ケケケ、ほれ見る。
イイ気味だぜ。

クピツとお茶を流し込んでみりゃ……やっぱイイね。
緑茶は至高の飲み物だろ、JK。

……JKってなんだ？

ぼてつと頭の動きをやめた小雪。
日はまだ照ってるけどさ、風が気持ちいぜイ。

こんな風にさ、のほんと俺は過ごしたいんだよな。
どうもキレちまうと見境付かない性格みてえだから直さねばいかん
ぜ。

ホントの目標を思い出さんと。

「コウキー」

どしたよ小雪？なでても欲しいか？

「僕はね、どんなコウキでもコウキだと思うよ」

「小雪？」

「僕はコウキがどんなになっても僕はコウキが好きだよ？」

「……そっか……、照れるじゃねえか！！」

「照れる照れる」

こいつってヤツはよう……ワッシャワシャにしゝてやんぜ！

「てやく負けるか、きょういのあしわざ」

「耳！引つ張んな！！」

なんという脚先の器用さ！？

烈のおっちゃん……流石だぜイ！

「耳くそホジホジ」

「おお、なんという……！」

流石だ……ぜイ……。

「晃気！遊びに来たぜ！そして好きだ！！」

「へ？まあ俺もお前は嫌いじゃないけど……」

「お……」

竜兵？どうした、固まっちゃってさ？

「うおオオオオオオオオオオオオ！！！！」

叫んでどこか行っちゃった……大丈夫か？アイツ？

「コウ兄！遊びに来てやったぜ！！」

「呼び方変わってね？」

「気にしてんじゃねえぞ！禿げるぜ？」

それは嫌だ！

にしても天が来たってことは、だ。

「ユキチーいいなー、私もやるー」

「ちょ！まて！飛び込んでくんぶウツ！..」

ズン！と重い衝撃が俺の腹に.....。

容赦ねえな..... ってなんかでじゃびゅ。

「僕はこっちだよ」

「じゃあ私はこっちー..... z z z」

早い..... 流石の辰子さんだ。

世界居眠り選手権なら三位以内には入れるだろ。

「..... 相も変わらず仲良しだな」

「まあ大事な家族と友達だしさ」

「そうか.....」

「でも忠勝の方がもっと好きです！」

うお！こいつも固まった！？

「まさか..... 照れてんのけ？」

ありゃ？今度は俺の方によって来た。

肩に手をかけて、大きく拳を節ろに振りかぶって……！？

「待て！話せばわか……」

……ア————ッ——！！

お茶でのほほん（後書き）

もう少いで小学生編も終了

亜巳の説教でのほほん（前書き）

今回は姐さん視点

亜巳の説教でのぼん

「ハッ、チヨロいもんだ」

手の中に収まった一枚の札。

こいつがあれば私たちもしっかり食っていけるねえ。

ホント諭吉さん様々ってやつだよ。

「こんな姿見たら……でも……なんて言うのかねえ」

ハアと溜め息が重く感じるよ。

別に身体を売って稼いでるわけじゃないけど、売ってるもんがこれじゃあねえ。

「『ユートピア』……馬鹿らしい名前だよ、ホント」

なにが樂園だい。

これに手を出したら地獄に真つ逆さまだってのに。

差し詰めそうなれば私はそこへの水先案内人ってどこかい？

「笑えない冗談だね」

懐の白い粉を分けた袋。

それを軽く弄りながら、私が思い浮かべるのは大切な弟妹たち。

汚れ役は私だけで十分だよ。

これ以上晃気に、渋川老に迷惑なんてかけられない。

中学生の私がいくら働いても給金なんて雀の涙程度しかないさ。

結局そのせいで給食以外のまともな飯も食わせてやれなかった。

もしあのまま晃気たちに会わなかったら、そのまま夏休みを迎えてたら。

そう思うとゾツとするねえ。

一年前はまだ、アイツラは家にいた。

けど唐突に、行き先も告げず、金も何もかも持って、アイツラは消えちまいやがった。

私を、辰を、竜を、天を残して。

今の今まで帰って気もせず、連絡もせず。

「親……ハッ！なんてくだらない！！……笑っちゃうねえ」

私のくつくつとした笑い声が闇夜に響く。

もし帰ってきたら……ホントにどうしてやろうか？

殴るのは当たり前として、だ。

「殺すか？いつそ」

『ケツ、くだらねえの！……俺の親父なんてさあ……やっぱいいや』

「やっぱいいか」

そうだねえ、どうでもいいさね。

アイツラが生きていようと野垂れ死んでいようと、結局のところ私らには関係ないんだ。

大事なのは今、これから私らがどうやって生きていくかってことだ

からね。

いつまでもスネ齧ってる訳にもいかないし……。

「寧ろ私が晁気とでも一緒になるかい？」

自分で言ってみて、そこまで嫌じゃない自分に気づく。
ちよつと驚いて……ないね。

そりゃそうか。

大事な弟妹助けてくれて、私より年下なのに私にまで気を使ってくれちゃって。

祭りのときはカッコつけちゃって。

私があつた中では一番の男っぷりだもんねえ。

本気で考えてみようか？

そう思つても見るけど辰を思うとちよつと気が引けるかね？

まあアレも小雪も、まだまだお子ちゃま。

恋心なんてもんには気付いてないだろうからねえ。

私の身体で引き留めておくか。

それで辰もあと数年経ったら加えてやって。

小雪もまあ妹みたいなもんだし。

そんな妙で、常識からは逸脱していて。

けれど自分が思う幸せに最も近いような気がして、どうもニヤけてしまう。

惚れてる訳ではないと思うが……やっぱり晁気の近くは気分がイイ。
飾らなくてもイイような、そんな気分になんてさせてくれる。

というより晁気の前で飾っちゃうのが途方もなく馬鹿らしく思える

だけかね？

「フフツ」

まったく……人誑しだねえ、アイツは。

おや？また新しいカモが来たみたいだね。

やってることは決して褒められることじゃない。

晃気や、あの子らには絶対的に知らせたくないようなことだ。

どっからこんなもん集めてきてんのかも知らないし、見つければトカゲの尻尾切り。

取引相手の顔も知らず、指定されたロッカーにブツを回収しに行く。そして売り上げの半分を譲渡する。

私はブタ箱で、ヤツら甘い蜜だけ取って行くんだろうねえ。

……まあ仕方ないさ。

人生なんてままならないもんだからね。

その中で足掻いて、もがいて、どうにか生きていかないといけないんだから。

私は構わない。

泥水を啜って、ヘドロの中でだって生活してやるよ。
だからせめてあの子らだけには……。

「…………行くか」

やめた。

断罪なんて、贖罪なんて、そんなもん私には無理だ。
どんな綺麗事を言ったって私がやってるのは外道の所業なんだからね。

「そこのお二人さん、イイもんがあるんだけど如何だい？」

「……イイ度胸だな……」

「おやまあ……亜巳さんはこんな時間に何をしてるんですかいの？」

でもね神様、アンタはどれだけ私のことが嫌いなんだい？
目の前にいるのがあの花山薫と、渋川老なんてさ。

身体が宙を浮き、そして地面に引き落ちてゆく。
鋭い痛みが背中を走る。

けどそれもすぐ消えて、だからすぐにその続きがやってくる。

きつと投げてる渋川老の技量がすごいんだろうねえ。

自分の意志とは関係なしに移りゆく景色に身を任せて私はそんなことを思ってたよ。

「亜巳さんや、なんであんなことをしとったんですかの？」

「……別に大した関係はないだろう？」

「おや、そいつはありまっせ」

飄々と笑いながら渋谷老は言葉を続ける。

「ワシは別に麻薬売ったんが悪いとは思わん、食べさせるために仕方なかったんじゃろう？」

「だったら別にいいだろ」

再び襲い来る背中への痛み。

倒れ込んだ私を引き上げて、渋谷老はニンマリと笑ってみせた。

「問題なのはそこじゃありません……なあんでワシに、晃気に相談せんかったんかいの？」

「んなもん出来るわけないだろ！」

アイツラに、アンタにそんなこと言えるわけがない。わかりきってるじゃないか、そんなことは。

「けど亜巳さんが危ない言っただけなのは晃気でっせ」

「へ？」

「偶然ポロツと『ユートピア』の事零してもうたら……の」

何がたまたま、何が偶然だい。

どうせワザとだろう。

わかってるんだよ、そんなことは。

「それならどうせ私に目星だって付いてたんだろ！ 晃氣にまで言わなくてよかったじゃないか！？」

なんでそんな……私を惨めにさせるんだい？

「……そうか……心の中じゃあ私たちの事をバカにしてたんだろう！
」

ダメだ……言葉が止まらない。

ギリギリで保っていた私の心。

自分は欲望が強い方だと思う、人を見下すのは好きだと思う。

でも別に汚れたくって汚れていつてるんじゃない。

出来るものなら綺麗なままでいたい。

万人を幸せになんざ思わない。

私は私の周りが幸せならば他はどうだっていい、胸を張ってそう言える人種だ。

「可哀想なあの子らを！……私をオ……助けて優越感に浸ってたんだろっ！！」

けどさ誰も私は私が幸せになりたくないなんて思わない。
ただ姉だから、ただ年上だから、ただ自分なら働くことが出来るから。

そんな理由で私はここにいるんだ。

私だってただの中学生だ。

こんなことしたくなくって、私だって普通に生きていきたい。

学校に行って、友達作って、部活に入って、休日は街に繰り出して。

同年代が当たり前にやってることを、私はやってみたいんだ。

なのに私は全く違う。

学校だってここ一年はまともに行ってない。

綺麗だった指先はスーパの水仕事のせいで今ではパツクリ割れている。

夜は只管に内職。

まともに眠ることも出来なくって、肌はガサガサ、隈も出てくる。
特売で買った化粧で誤魔化さなけりゃあ酷い顔だ。

「同情なんて……私は欲しくないんだよ!!!」

でも人一倍プライドが高かった。

『友達だから』と鼻気に言われた免罪符。

それが無ければ人に頼るなんて、そんなおこがましいことは出来なかったんだ。

金を稼いで対等につて、心のどっかで思ってた。
だからあんなもんにまで手を出した。

間違った選択なんて、そんなもん気付いてたさ。

「ベケヤロウ、んなわけないじゃろうがイ」

ギユツと私は渋川老の胸に収まっていた。

加齢臭というか汗というか、年寄り独特の匂いが鼻を突く。けれどそんなことよりも、ただ目の前の人はあたたかかった。

「弟が姉を、ジジイが孫を、心配して助けてやりとウなるのは当たり前のことじゃろう？」

軽く髪の毛を梳きながら、優しく問いかけてくる渋川老。いつもツツパルしかできなかった、そうせざるを得なかった私。ギリギリで保っていた緊張の糸。

それは久々に感じた他人の体温で、脆くも崩れ去っちまったさ。

「うあ…… ああああ……」

「道場到着！薫にいちゃん、降ろして…… ってオイ！」

…… 晃気の…… 声か…… ？

「あああああ！亜巳さん亜巳さんのくせに泣いてるう」

「泣いてない！私トイレ行ってくる！…… じゃないよ！」

くつと見てみりや…… あり？

なんで肩車してもらってんだい？あの花山薫に？

「……御指名じゃないのか？」

「照れるぜイ」

ヒョイツと私の前にやってきた晃気。

「亜巳さん……」

グツと真剣な顔。

思わず気押されちまいそうだねえ。

「ヘルペス！」

「は？」

「だからヘルペス・ミーだぜ！」

ヘルペス？……ヘルプの間違いか？

「最近竜兵のヤツがなんでかわからんけどべったりくっつきたがるんだよ！ー！」

……あゝ、ありゃマジだったのか？

「だから亜巳さんからガツンと！！！」

「そうだねえ」

笑えてるよ、私、今さ。

なんでだろうね、少し前まではシリアスな雰囲気だったのに。

「薫にいちゃんもなんか言っちゃってやってくれよ！」

「衆道はウチにもいる」

「え？」

「人の趣味をとにかく言うな」

「まさかの返しに俺は驚愕を隠しきれませんよ……って笑ってんじやん！？」

「やっぱり……アホらしいんだね、こいつの前じゃあ。
気取るなんてこと自体おこがましいってヤツだ。」

「なあ晃気……？」

「おお！言ってくれる気になったの！？」

「アンタ私がお祖母ちゃんになったらどう思う？」

「……」

「……」

「……え？」

だから私も私らしく、正直に生きようかいねえ。
だってこいつが居たらそんな生き方が出来るんだからね。

亜巳の説教でのぼほん（後書き）

次回小学生編最終回

卒業でのほほん（前書き）

なんか微妙な引きだ……

卒業でのほほん

始まりがあれば終わりはあるそうなの。

それはどんな物事でも……なんては言わんけどさ。

日本の学校が4月に始まって3月に終わるみたいに。
ゴウ・シュートで撃ち出したベイゴマもどきが回転をやめてしまう
様に。

どっかでなんかの区切りがある、そんなもんらしいわ。
んで今日もまたそんな日。
ホントいろいろあったねイ。

「今日は待ちに待った卒業式」

「これまでの出来事を思い出すと、胸がいつぱいです」

「「胸がいつぱいです」」

……だつておwww!!
なんか気分いいなあ。

にしてもアホらし！

壇上に卒業生並べて何この晒し者？
やっぱ教師はアホなのか？

「楽しかった」

「「修学旅行」」

確かに楽しかったわな。

京都なんて定番、俺としては微妙なところだったが……。

清水寺なんてもうすげー高かったし、大黒天のストラップは買ったぜ。

六年はみんな一緒のクラスだったかな。

ホントよかったよかった。

自由行動とかの班も一緒にしたし、やりたい放題だったぜイ！
やっぱり金閣より銀閣だよな。

あの渋さがたまらんね。

土産も漬物はいいね。

俺もキュウリとかナスとかの浅漬けしかせんからなあ……。

柴漬けとか千枚漬けとか頑張ってみっかな？

作り方のコツとか聞いて帰ったし。

そこ、ジジ臭いとか言うなや。

自覚してらあチキシヨウめ。

「晃気……楽しかったよな！」

後ろの段から小声ながらになんでこんなに強い声？

聞かせて竜兵。

それはね、朝起きたら目の前にコイツの顔があったからだよ。
修学旅行だから油断してたのか？あの時の俺は！？

一晚同衾しとつたなんて……吐き気を催すぜ。

「じっくり見つめんな……テレる」

ここが体育館じゃなくて、卒業式の最中じゃなかったら殴ってやる
つてのによ……！

む！強い視線！

この晃気を怯ませるとは……出来るッ！

まあ天でしたが何か？

そうなんだよな。

アイツ一つ下の学年だからもう一年通わなきゃいけねんだよなあ
……一人で。

「天のヤツ大丈夫か？」

「大丈夫だろ」

心配性なんだからなあ忠勝は。

流石みんなのお父さんってやつだな。

「やつさしい」

「そんなんじゃないやねえ、ただ泣き付かれたらウゼエだけだ」

相変わらず素直じゃねえの。

存外にさみしがりやな天は置いといてだ。

アイツもどうせ一年後には同じ中学なわけだろ？

それにアイツ、俺んち住んでんじゃねえか！

そうなんだよ！！

亜巳さんがなんでかわからんけど泣いて以来……。

にしてもあん時はビビったね。

空か槍が降ってきたかな！

……嘘ですが？何か？

住んでんのはちなみに嘘じゃねえな。

賃貸の安っぱい、立地の悪いところに暮らすよかいいかと思ったんだがね。

……竜兵がな……。

まあそれ以外は快適だぜ。

家事全部俺がやらなくてよくなったしな。

飯の準備も手伝ってくれるヤツも出て来たし。

「zzzz」

寝てるよ……。

流石の辰子さんってヤツでイ。

でも台所の番人は譲らねえ。

あそこは主夫の戦場だ！臆病者と素人は帰れ！！

向こうでパイプ椅子に座ってる亜巳さんは中学卒業して警察学校に入ったし。

やっぱ更生したら警察ってのが不良漫画の王道だよな。

最近は料理にも手を出し始めちまったよ。
マジで祖母ちゃんにでも成る気なのかねえ？

確かにベツタリだつてヤツだかな！

でも祖父ちゃんに相手されてねえけどな！！

料理とかにも着手し始めたしさ、ちょっと奥さんどうしましょ？

……ま、いつか。

所詮他人事だしさ、それに見てて楽しい。

傍観者の立場つてのが一番楽で楽しいのさ。

俺は俺で人生目標、護れてんのかな？

『まったりとした人生』のためにのほほんと過ごせてんのかな？

「オイ、そろそろだぞ」

ビシビシ叩いて知らせてくれるとは……やっぱ忠勝いいヤツ。
小雪と辰子に続けるセリフだからな。

さてさて喉はオツケイ。

適当に気合入れとかんとな。

「青雲、それは君が見たひかり」

「僕が見たきぼう」

「青雲、それはふれあいの心、幸せの青い雲」

「青雲」

……アレ？

「ふはははは！我が友、晃気よ！なかなかいい見せものであるぞ！！」

へいへいありがと。

でも式の最中だかな、静かにしてくれるとうれしいなあ。
もうgdgdな感じになっちまったけどさ！！

明日から有名人かあ。

卒業するから関係ないんですけどね！

にしてもやってくれるぜ小雪さん！

流石、流石の小雪さん。

悪ノリした俺も辰子も、つられたみんなも同罪だけだな！！

アレ以降はイジメも無くなったし悠々自適に過ごせた。

学校は楽しいところで、でも怖いところでもあったさ。
けど結果的に見てみりや……楽しかったぜ。

最後でやらかしちまったけど。

新しい見てて面白いヤツも出来たからよしとするべきか？

は？どうやって知り合ったかって？

そいつはまた今度、中学生編の話でよろしくつてところだろ。

……てかこのままのペースだったら何時原作入りだ？
ん？どこの電波が……？

さてと、だ。

固っ苦しい式も終わったことだし、帰るかえ。

「コウキー、紅白まんじゅ」

目元に持ってくたあ……まあ俺もやってるけど……！

引き出物としてはやっぱ定番ですな。

「うっし、帰ったら暑い緑茶でも入れっか？」

「お」

うん、実にまったり。

実に目標に一直線な、好青年ではないか。

なににせよだ、こんな時間を大切にせんな。

だって望んだもんが今俺の目の前にあるんだからよ。

卒業でのほほん（後書き）

ひとまず区切りを一つ

なんか説明文ぽくなっちゃった……

通学でのほほん（前書き）

やっ中学生

この駄文に目を通してくださっている皆様、本当にありがとうございます

通学でのぼん

青い空、白い雲。

見てくれよこの澄み渡った快晴をさ。

「お日様浴びれて良かったよー」

「ここんとこ雨ばつかだったからな」

「zzzz」

久しぶりに日向ぼっこが出来るってもんだ。
気分も弾むぜイ。

とりあえず辰子は引きずって。

てか手を持ってりや付いて歩くから楽チンだわな。
いつその事リードでも買うかねえ。

中学生になって一か二ヶ月くらいか？

連日の雨で気分が落ち込んでたからなあ。

雨の音は好きだけどやっぱ晴れてんのが一番だわ。

「俺は雨は嫌いじゃねえぞ」

「ウチも！なんか気分が落ち着くもんなー！」

「天が？ハッ！悪い冗談だろ」

「どつという意味だコラア！？」

忠勝の意見に左右されまくりだろ、天よ。
昨日は晴れが最高とか言ってたさ。

しかし兄妹ケンカとは相変わらず仲イイねえ。
微笑ましくなっちゃうわ。

手提げカバンの中に一人だけ真っ赤……でもねえボロツちいランドセル。

一人小学校つてのは少し辛いところがあるかもなあ。
天のヤツ勉強嫌いだし。

まあ学校には学校で友達いるみたいだったからいいか。

「チヨウチヨ飛んでる〜」

「はいはい、取り行けばいいだろ」

「コウキー、ふぁいとだ〜」

「降りろ、そして歩け」

背中に乗ってるくせに何を言うかこの少女はさあ。

周囲の目線が痛いんだよ！
注目株だよおじさんは！！
もう慣れちまつたけどね！！！！

ハア、小雪のヤツは相も変らぬ自由っぷりで。
見習いたいもんだねえ。

だが中学生になった俺は大人になったんだよ！

もう長ズボンがカッコ悪いなんて思わないぜ！！
学ランと合わせれば無敵だろ。

でっかい刺繍でも入れてみつかねえ……内側に。

「俺はさ、鬼がカッコいいと思うんだわ」

「獅子だろ、断然によ」

「わかってねえな！男なら竜だろ」

やっぱそんなのは男のロマンだよなあ。

背中にでっかい鬼が描かれたＴシャツは俺の一張羅だぜ。

「僕は猫がイイな」

「私は犬が可愛いと思うよー」

「ウチは……どっちも好きだぜ！！」

ケケケ、やっぱ女は違うぜ。

断然カッコよさは強さだろうさ！

「わかってねえなあ」

「男と女は違うからな」

身体つきも違って来たからな。

最近是小雪と辰子の成長っぷりにDOKI DOKIだぜ。
ま、興味ないけどさ。

「コウキー、マシユマロ食べたいぞ」

「ふええー気持ちイイ風だよー……zzz」

だって小雪と辰子だし。

変わらないねえ、こいつらも。
子供だもんなあ。

その点俺は大人なのだ！
それに俺は巨乳が好きなのさ！！
初めて拾った感動は忘れないぜ。

「胸はデカイ方がイイだろ」

「……スレンダーだ」

「違う！厚い胸板だ！！」

妙な意見が混じってるって？
H A H A H A、気のせいだろ。
ナイナイナイそれはないぜ。

だからその子、期待した眼でこっちを見んな。
投げるよ？俺は？全力で？

にしても通学路ものほんと過ごせてるねえ。
まさかあんな事が起きるとは……まあ思ってたけどさ。

今じゃあイイ思い出なのさ。

あっちの爺ちゃんもイイ人だったし。

『真の護身』に近付けてんのかねえ。

祖父ちゃんはさ、危ない目も見とかんといかんって言うてるけどよ。
俺は嫌だね、絶対に。

だって小雪やらを危ないところに近付かせんために柔術習い始めたんだぜイ。

俺自身殴ったり殴られたりな関係はいらんぜよ。

漫画の中で十分だわ。

俺はあんなに強くカッコよくなれそうにもないしねえ。

「小市民サイコー」

「きねしす」

ねじ曲がっちゃうぜ！

小学生ん時のいじめのヤツは失敗だったしさ。

悲劇の主人公的でちょっとだけどカッコ良かったのに……。

結果的になんか武術習い始めちまったヤツら増えたし、忠勝も薫に
いちゃんとこ行ってんだろ？

アレ以来まあ一層仲良くなれたし結果オーライかねえ？

個人のやってることにゃあ口出ししてもしょうがねえもんなあ。

束縛してガツガチに一緒にいたいと思えんし。

ふわふわほんわりのほほんと、こいつらと『まったりとした人生』

を歩んでいきたいもんだわ。

「経験は知識の幾倍も稀少……か」

危ないものに近付きたくなけりやあまず危ないもんを知るべき。

祖父ちゃんの言ってることはわかるんだけどなあ。

あの怖い子と戦え！とか言われたらどうしましょ？

でもこの時僕は知らなかった、もつと危ないものと会うとは……っ
ていったらフラグかね？

フラグは旗だろ？知ってんぜイ！！

「人生つて……ままならんもんなんだなあ」

「中学生のセリフじゃねえぞ」

「ツツコミさんくす」

ありゃ？呆れてるや。

祖父ちゃんもきつと無茶なんてしねえよな？
一応警察勤務だしよ。

それなりにやってみるのがイイんだろうねえ。

「マシユマロ食べる？」

何時の間に持ってたんだこの子は！？
流石の小雪さんってやつか。

……ハア、乗り掛かった船だもんねえ。

やるって言ってやってることくらい頑張ってみますかいね。

大人になるってめんどいんだねえ。

「ふははははは！おはようだ！我が友、晃気！そして庶民たちよ！……」

「誰が庶民だデメエ！！」

「行き詰った俺の滾りを……沈める相手になるか？」

一触発ってやつでイ。

ケンカするほど仲がイイって言うしさ、うん、ほつと。」

「逃がすか、そしてやめろって言うてんのがわかんねえのか、九鬼よう」

「ならばこの九・鬼・英・雄を！認めさせて見せよ！！」

「……うるせえぞいちいち」

「さすれば名前で呼んでやるわ庶民どもが！！」

首振って相手にもしてねえ。

忠勝のヤツ……イイ性格してるぜ！！

英雄は英雄で高笑い続けてるしよ。

何にせよ、だ。

これが俺の通学風景。

中学生はいろいろ大変なもんだねイ。

「ういゝ、おはよ」

「おはようだ！元気が無いぞ！晃気！！金にでも困っているのか？」

「お前のせいだろ」

「ヒーローである我は今日も絶好調だぞ！！」

「聞けよコノヤロー」

通学でのほほん（後書き）

こじつけ臭が……

風船でのぼほん（前書き）

意外な特技

風船でのぼん

目の前に居んのは小雪に辰子、それと天。
期待に満ちたつつうなんて言うかさ。
キラついた眼でこつちを見てる訳よ!!

「コウキー、早く〜」

「ワクワクだー」

「作ったら最初にウチにくれよ!!」

その辺は勝手にやって欲しいねえ。

アレじゃん？

失敗したのと成功したのとか出来たら俺はどうすりゃいいかわかんないからね!?

「膨らませて〜」

「ねじってー」

「結ぶぜ!」

ケケケ、何か出来る気がしてきたぜイ。

「……俺もやるのか?」

当たり前だろうが。

忠勝には期待してんだかな。
俺が失敗したら吹っ飛ばしてくれよオ。

「……はっははは……はは……」

「何か不気味だけどさ、竜兵もやってんじゃん」

黙々と只管にねじってやがるからなあ。

時折洩れる声の矛先は知りたくないねえ。

「ふはははははは！！なればこれよりバルーンアート九鬼杯を開始するぞ！！！！」

十数畳の畳の間。

ポツンといつもはど真ん中に机があるだけなんだがねえ……。

今は風船の海に沈んでるよ。

……どうしてこうなった？どうしてこうなった？

大事なことから二回言っただ俺は！！

「出来たぞ！」

「ほう？庶民D、早いではないか」

「当たり前だ！俺の気持ちはいつでも滾っているんだよ！！」

何で滾ってるんだろっね？

俺の方をちらちら見てるって？

HAHAHA、気のせいだろ、気のせいだよな、気のせいにしと
うや。

「晃気！お前に捧げるぞ！！」

「ほいさ！」

こっちに向かってくる竜平の肩をとって。
引き寄せつつにグルンと足払いで半回転。
顎を畳に叩きつけるぜイ。

「どうだ？ドロドロだろうガイ」

「……おふう」

手に持った黄色と茶色の風船は……割つといたろ。

「バナナだ」

「ソーセージもあるよー」

「形は良い……が単純すぎる！28点だ！！」

「すごく……大きいです……」。

「は？何を連想したかつて？」

「さあ？中学生の俺にはさっぱりだぜ！！……グスン。」

「相変わらずコウ兄はスゲエぜ！！」

「えっへん」

「おっほん」

「なんでテメエらが威張るんだよ」

「照れるぜ」

「悪ノリすんな」

ビシッと一発……何か威力上がってね？
喧嘩慣れしだしてんのかねえ、忠勝のヤツさ？

にしても投げ飛ばすつても大分ラクになってきたもんだ。

祖父ちゃん相手じゃまったくだけどな！！
悔しくなんかないやい。

祖父ちゃんが言うに柔術つてのは理合、技術で投げるんだとさ。
相手の重心を崩して、力の方向性をコントロールして、そこに力を加える。

柔術つてのは物理とか数値的なものと生物とか人体の構造的なもの。
筋肉の動きと筋や骨の役割。
それとさつき言ってたこと。

この二つをしつかり熟知しておけてさ。
意外に科学的なんだねえ。

「……………あ……………おおおん……………」

今竜兵を崩したのもそれを使ったってことだわ。

顎に衝撃を加えて、脳を揺らして脳震盪を起こす。

ずっつと昔っからそうやって人を壊して来たんでろうねィ。

なんかわかんねえけどさ、最近は物理の力学ばっかやらされてんだよ！

高校生の問題解ける俺ってスゲくね？

他の教科はいつつ三十点以下ばっかなんですけどね！！

まあ危険に会いたくないって言うときながら柔術やってる時点で少しおかしいけどさ。

『真の護身』つつつ柔の頂に登れりやそれ以上の危険は冒さなくなる訳だもんな。

「人間どつかで苦労しなきゃいかんってことかね」

「風船に囲まれて気でも狂ったか？」

「酷くね？親友への言葉じゃねえだろ？」

「……そんなんじゃないよ」

んなこと言ってんなら顔を逸らすなよ！

意地っ張りだねえ、忠勝のヤツさ。

なんとなくそんな風に接してくれるヤツが居るって嬉しいよね！

「赤くなってる」

でもさ、小雪。

そついうのは言っちゃあダメなんだぜ。

「イイか、お兄さんとの約束だ」

「僕の方が誕生日はやいもん」

「私も晃ちゃんよりお姉さんなんだよー」

「クソッ！なんて時代だ！！」

小雪が7月1日で辰子が8月27日だろう？
んで俺が9月9日……。

「コウキー、それより早く作って」

「私も楽しみだよー……zzz」

ほらさ？どう見たってさ、俺がお兄さんだろ。

「……ほらよ、出来たぞ」

「スゲエー！花ができてる！！」

「ほう庶民A、なかなかにやるではないか！」

「誰が庶民だ」

白い花卉に黄色い花粉的なとこ、それに緑の茎か……。
三つ使って作るとはなかなかにやるでない。

にしてもなんでこうなんつたんだっけか？

そう！学校になんか持って来たおっちゃんがいたんだよな。

んで天にその話を飯時にしたらやりたい！とか言い出したんだわ。

天か？

膨らましては見たけどさ、そつからまったく上手くいかなかったからすぐ投げましたが何か？

忠勝の作った花片手に竜兵の腹の上でテレビ見てますけど？
でっかい地震があつたんだってよ。

8年前と同規模の被害が……って俺何歳だ？

そんで英雄に話したら段ボールいっぱい風船持って来たんだよなあ。

金持ちはやる事が違うね。

話は変わるけどさ、英雄で九鬼グループっていうスゲーとこの息子なのに……。

なんで俺が行ってる庶民的中学に来てるんでしょうね？

「晃気よ！貴様はどのようなものを作ったのだ！？」

「やるとこやるとこ、急かすな急かすな」

小雪らを待たせすぎるのも悪いわなあ。

風船片手にここをパパッとねじって、ここをククッとひねって、クリツとしめて……。

何かいっつもとあんまやってること変わらんなあ。

「はいさ、犬出来上がり」

「きゃっほう」

「私のが無いぞー」

「スゲエな、ものの数十秒かよ」

「ふはははははは！さすが我が友であるぞー！！」

寝技とか関節技とか、投げるだけが柔術じゃねえわけだな。

祖父ちゃんから貰った何かボロツちい本。

アレをしつかり読んどかねえとねえ。

人体の構造は叩きこまんと。

「うさぎ、うさぎ、そしてうさぎ」

「ニンジン食べたいー」

「今日はカレーにすつか？」

「おー」

確か鶏肉があつて、ニンジンがあつて……ナスビは畑にあつたかね？
野菜多めのチキンカレーにするか。

「王冠に剣かんせー」

「これこそ我に相応しい！」

「ベルトもいるか？」

「おお……正にヒーローではないか！？」

やっぱベルトで変身がかつきーよな。
こう大きく手を廻していつてさ。

「技の小雪」

「力の辰子」

映画版なんて認めねえよ！

へ？2005年の春な今はまだ公開してねえって？
男なら気にしちゃいかんぜよ。
サイクロンシステムサイコーだぜ。

「やあボクネズミ、一緒に遊ぼうよ」

「千葉にあるのにな」

「俺に聞かれてもなあ」

「あと声キモイぞ」

泣いていいよね？

「ウチのは！ウチの！？」

お前はちゃんと忠勝から貰ってんだろが。
まあ作ってるんですけどね！

「ほれ、じゃあクマだ」

「スゲーー！はちみつ食うかな？」

「べとべとになるから塗るなよ？」

「……おう！」

「何今の間？怖い」

にしても意外な才能開花だな。

いつもやってることはさ、暴力的ばっかだと思ってたけど。
使い方次第ってことかね。

危ないところに行くってことも嫌だけどさ。

祖父ちゃんに本格的に頼んでみますかいねえ。

「朝か！」

「ああああ！なにウチのクマ割ってんだテメエは！！」

見るも無残なゴムになっちまうか。

俺の苦勞が……。

竜兵さ、起きぬけにそれはないだろ。

「テメエのも割ってやるよ！」

「あゝ、僕の犬が」

「ウサギさんはこっちに行こうね」

小雪はしっかりとばっちり受けてら。

しかし逃げるとは辰子のヤツ、意外にしたたかな。

「天使よ！この場を乱す無礼千万！このヒーローが成敗してくれる
！！」

「だからその名前で呼ぶなっつってんだろが！」

「ふははははは！甘いわ！！」

「うお！蠅たたきは汚ねえだろうがッ！」

しつかり喰らってんな、竜兵。

とりあえず風呂行け。

「…………お前も来るがあッ！？」

「あやー、気絶しちゃったよー」

叩きこんだ拳くらいは隠そうな。

あと褒めてないからえへーとか言っな。

「おい九鬼！」

「何だ庶民A？これはやらんぞ！」

「ちげーよ、とりあえず晃気の近く逃げとけ」

「逃げる？ふははははは！我に後退などありえぬのだ！！」

「……そうか、じゃあ勝手にしろ」

御愁傷様です、九鬼君ってやつか？

天の声が聞こえなくなったところで気付けよ。

「ん？どうした庶民B」

こゆきが現れた。

こゆきは無造作にひでおの腕に手をかけ身体を登っていく。

こゆきの攻撃。

「て〜んれ〜んげ〜」

グキッ！

「G Y A A A A A A A A A A A A A A A A ! !」

「こんにちはだな、兄弟」

風船でのぼほん（後書き）

小雪ちゃんは渋谷家の高い位置に君臨

部活でのほほん（前書き）

なんか変な感じです

部活でのほほん

俺が通ってんのは川神市第三中学校ってヤツだ。
川神市にはいくつか中学校があるんだとき。

にしてもあの子と一緒にじゃなくってよかったぜイ。

珍しいのか普通なのかはわかんねえけどさ、行くところを自分らで選べるんだよな。

翔一のヤツは誘って来たけどきっぱり断ってやったぜ。

なあんで俺がああ強げな女の子と一緒にのそこに行かんといけんのだつての。

川神百代だっけ？名前は知ってたぜイ。

そいつの行ってるのは川神市第一中学校。

そこから結構離れたところに通ってる訳だし、滅多なことがねえ限り会わんだろ。

怪しげな病院の息子も違うとこだしさ。

だってさあ、なんかこうビンビンくるんだもん。

近寄りたくねえオーラのってやつか？

アレだ、具体的に言うところ……でっかい犬のいる家的な。

俺は犬嫌いじゃねえし小雪も犬嫌いじゃねえけど……ありや？
仲イイ奴等は犬嫌いなヤツらいねえや。

まあ何となくわかるだろ？

「ふいふ茶がウメエゼ……」

やっぱ緑茶が一番だよな。

和菓子にも一番合うと思うんだよ俺は。

にしても俺の目の前にあんの羊羹。

そう！羊羹だ！！

まさかこいつが一日一切れか二切れ食えるようになるとは……ア
イツを取り込んでよかったもんだ。

「ありがとう羊羹大臣」

「誰が羊羹大臣よ」

ひらひら手を振って輪の中に。

いやあ、千花には世話になってんからねえ。

お得意さんだしいいじゃんか。

そうそうよ。

俺もさ、閉鎖的なグループじゃねえわけよ。

友達が増えてるしイイことだろ？

小学校のイジメと竜兵の件で上っ面ばっかの付き合いが多いんです
けどね！！

学校じゃあ適当に話すけどそれ以外は無視みたいな！！

いいけどよ……。

しかし竜兵だよ竜兵。

アイツの性癖のせいで俺が何度泣きを見たことか……。

ここの三人にも何度誤解を解いたことか……。

「どうした？恋煩いか？俺の胸にとびくブツ！！」

「煩わしい」

「……ありがとう」

「気にすんな、俺がウザかったただけだ」

顎先に拳を叩きこんで竜兵沈めてくれた忠勝。
多くを語らないとこがかつきーぜ。

まあ普通のヤツじゃこいつを止めれんしなあ。

流石にコイツか小雪か辰子か天か亜巳さんか祖父ちゃんか烈さんが
薫にいちちゃんか……って多い！

めちやくちゃ沢山いるんだねィ。

……竜兵だしな。

「……晃気……好きだ……ぜえ」

「ほりゃあー！」

踵で顎をも一度ドン！

ガムテープでぐるぐるにしてやるつか、こいつは。

「ぐるぐる、ぐるぐる」

「ふわわわ！ダメなんですよ榊原さん！！」

「いいんだよ、だってリュウヘイだも〜ん」

「それでもダメなんです！お姉さんが許しませんよ！！」

布製なんて勿体ねえことを。

紙で充分だろ、小雪よ。

委員長も結構細かいところあるからなあ。

「僕の方がコウキよりお姉さんだよ」

「ふっふん、私は4月10日生まれなんですよ！私の方がきつとお姉さんです！！」

「おお」

そこ、感心するところじゃねえから。

誕生日でそんなもんは決まらねえから。

おばさん中学生だって実は一月生まれだぜ？

……ん？誰か来たようだ？

「ヤッフウウウ！遊びに来たぜ！！」

「校門のところで会ってね、ちょっとだけ荷物持ってもらったよ」

おお！これまた大量のお菓子！

まあクマちゃんに任せりゃ間違いはまず無いかな。

率先してというか、まあ今日の当番だったただけだけだな！！

「天ちゃん来たんだー」

「当たり前え！ここは居心地イイもんよ！！」

ランドセルを畳の上に放り込んで寝そべった辰子の上にダイブ。
そのままごろごろと転がって手に持ったのはゲーム機。

「ウツシャア！大乱やろうぜ！ウチ1Pな！！」

「私はパルス、それよりクマちゃん何買ってきたの？」

「駅前のケーキ屋さんでシュークリーム、バニラビーンズが素敵だよね」

「ふわわわわ！私だけこんな贅沢していいんでしょうか？」

と言いつつ食ってんじゃねえの。

まだまだ俺に言わせりゃガキだえ、委員長。

「僕もやるゝ、チョコビヒゲ兄貴は強いんだゝ」

「私は見てるよー……zzzz」

「速い狐は無敵だろ、俺は4Pでいいぜ」

しつかり口にシュークリーム啜えてんな。

しかし流石クマちゃん、情報が確実だぜイ。

にしても千花のヤツがウチは大丈夫かなあだつてさ！
安心しとけ、潰れたら俺が在庫全部貰ってやんよ！！

「なッ！」

「何かなッよ、それより待ってるみたいだけど？」

しっかりと俺のそこは空いてる訳ね。

小雪と忠勝の間に潜り込んで、ってオイオイ。

天、俺の前じゃ見えんでねえか。

「ウチはもちろん超能力少年！上B無敵すぎだろ！！」

「うは！一人超強キャラかよ！！」

「コウ兄はピンク風船か……ブツ飛ばしてやんぜ！！」

「ふえっふえっふえ、やってみろイ」

ステージは飛行船の上か……。

アイテムは無しの3機はいつもと変わんねえルールだな。

ギャラリーもこっちに視線が移ってきたし、さて始めつか。

「ファイヤーファイヤーファイヤー！ハメ殺しだぜ！！」

「でっかくなっちゃった」

「初撃入りやあこつちのもんだろ」

俺たちや六十四世代。

ハ？ゲームやってるお前ら何だって？
愚問ってヤツだろ。

もちろん茶道部だぜイ。

「普通こんな事しねえけどな」

細かい事気にしちゃいかんぜ。

楽しんで活動する事が大事だよな。

「天のキャラは卑怯すぎるだろ」

「ん〜でも張り合ってる晃気君はスゴイんじゃない？」

二機は減らせたんだけどねえ。

吹っ飛び易すぎだろうよ、好きで使ってるけどさ。

今俺らが居るのは校舎の三階、端っこの方に会った和室。

埃被ってた、昔にとくに漬れた茶道部を復活させたってわけよ。

しかし快適だぜイ。

電気は通ってるし、滅多に人はこないとこだし、鍵も勝手に付け替えちまったし。

水道つつつか簡易キッチンみてえなものもあるし、ガスまで通ってる。その上畳！言うことねえ快適空間だろ。

まあ毎日俺の家で遊ぶつてのもつまんねえもんな。

テレビは棄てて会ったの拾って来たし、ゲームも備え付けた。秘密基地的でカッコイイだろ。

そんなわけで放課後はこうやってだべってる訳だ。
毎日じゃねえよ。

英雄を待つためにこんなことしてたわけだけども、いつの間にか三

人ばかり増えちまったわけよ。

「あ、そっぴゃ知ってる？二組の福盛君だっけ、好きな子いるらしいよ」

女つてのはなんで恋バナが好きなのかねえ。

人一倍顔を輝かせてんのが『小笠原千花』だな。

なんたつてあの『飴の小笠原』の御令嬢なんだぜ！！

いや、あつこにはガキの時から世話になつたもんだぜい。

羊羹以外の和菓子も最高だしさ、それに合うためのお茶、葉も取り揃えてるんだよ。

俺ら自身はさ小学生の時から知り合いなわけだけど小学校は違つた訳だわ。

んでいざ中学生になってみりゃあ同じクラスだつたつてことだ。世間は狭いねえ。

「サッカー部の人ですよ？同じ委員長さんなんですよ！」

ちっちゃい身体を大きく見せるのは『甘粕真与』。

千花の親友さんなんだつてさ。

俺にとつての親友つて誰なんだろうねえ？

忠勝と竜兵も……かね？

英雄は……まだ会つて一年くらいだからなあ。

ま、そんなもんは時間で決まるもんでもねえのかね。

ちよいギャルチックな千花とどっちかって言うと真面目な委員長とじゃあ凹凸に見えるけどさ。

人と人との関係なんて自分らで決めるもんだもんねえ。
俺らがツツコむとこじゃねえさ。

掻い摘んで言うつとよ……まあ千花は意外に優しいってことだわな。
小学生のころから仲良しって聞くけど。

その後委員長の性格に千花が惚れたのかねえ。

まあ何にせよ壁なく話せる友達がいるってのは大事なことなんじゃ
ね？

「洪川君、こんど風間君が深川に行こうって言ってたよ」

「あつさり系の炊き込みご飯か？」

「違うよ、こてこての漁師飯出すとこ見つけたんだ」

にこにこしながら食べ物の話をすんのが『熊飼満』。

温和なヤツでさ、食い物のことならこいつに聞けって胸を張って言
える相手だねえ。

小学生のときに翔一に会って、アイツとはたまに遊ぶようになった
んだよなあ。

何てか見てておもしろえかな。

英雄とは違った面白さがあるわな。

そこで遊んだときにクマちゃんに会ったんだよな。

で、たまに一緒に食べ歩きするような仲になったんだよ。

翔一にヤツ、いつもはアイツも風間ファミリーとかいうヤツらと
遊んでるけどさ。

妙に気が合っちゃって。

しかしあつこの連中ももう少し外に目を向けりやあいいのにさ。
もつと世界は広いんだからいろんなもん見るべきだろ。

当事者にやあならなくなつて、傍観者としてみるつてのは楽しいもんだぜイ？

まあ岳人と川神とモロとはたまに会つたら喋るけどさ。
どうも残りは苦手だねえ。

川神百代は言わずもがな、会つたら全力で俺は逃げるよ。
直江大和は嫌いじゃねえけど……探られてる感が嫌なんだよなあ。
これって嫌いってことなのかね？

『軍師』つて立場らしいけど、それなら必要なのかもしれんが。
友達つてもんをもし作るならさ、掛け値なしがイイと思うんだよ。
だからそこまでして一緒にいたいとは思えんな。

椎名京つてヤツは……なんて言うか見たくないな。

「コウキー、今日のご飯は何にするの〜」

「そだな……鰯の酢漬けとかでいいんじゃない？昨日準備しといたし」

「タマネギ楽しみ〜」

「そこは鰯を食えよ」

ひゃふう〜とか言いながら転がってる小雪を見るとさ。

前も言つたかもしれないけど依存ってことは、俺はイイとは思えねえ。

いやアレだよ？俺とかが居なくなっても悲しむなってことじゃねえよ？

そりゃ俺だつて知ってる人が居なくなったら悲しい。

でも人間てのはそこから立ち直ってどっかに行かなきゃいけないもんなんだろう？

祖父ちゃんが言ってたことだけだよ。

でも頑なまでに今の状況を護ろうなんて思っちゃいけないだよ。だって地球は回ってるんだぜ？

俺らの日常だつて刻一刻と変わってるはずだろ？

だからこそ俺はその中でのほんと過ごして行けるようにしていきたい。

媚びるわけでもなく、ほんわかとした関係を続けていきたい。

殺伐とした気を張り巡らせた関係じゃなくって、好きでその場にいられるように。

干渉して干渉されて、放置されて放置して。

けどやっぱいつの間にか集まって過ごしている。

今日より明日。

少しずつ変わって、でも根幹は変わらないようなのが俺は望みだね。

『まったりとした人生』ってそんなもんじゃねえのかな？

ヤベッ！俺って大人じゃね？

「あ、私そろそろ帰るから」

「私もです、じゃあ皆さんまた明日」

「僕も帰る事にするよ、渋谷君にはしっかり伝えたからね」

およ？そいやあもうそんな時間か。

日は長くなつてつからまだそこまで暗くねえけど、もう六時が近くなつてんもんな。

俺らも行きますかイ。

そんなこんなで運動場。

場面が飛んだ？気のせいだろ。

「ふはははははは！出迎え御苦労！！」

「今日はどうすんの？」

「晃気の家で食事をしたらそのまま本邸だ、三日四日は学校に来れんかもしれない」

「はあ、未来の総帥様は大変なわけだ」

汗だく土まびれの野球着に身を包んでスポーツバック片手の英雄。
正直汗臭い、そして汗臭いな。
仕方ねえんだろうけどよ。

「ヒデオー、練習疲れた〜？」

「当たり前というやつだ、小雪殿！しかし我は必ずや野球選手になつて見せる！！」

「もしなつたらチケットはタダでくれよ！」

「夢があるのはいいことだよー」

九鬼グループの方もあつてのに、頑張るねえ。

だからこそ応援したくなるつてのもあるけど、さ。

忠勝も竜兵もあんな英雄の事好きじゃねえみたいだけど。

一緒にいることは結局多い訳だから本気で嫌いなわけじゃねえんだろうね。

元々コイツは投手だった訳だけど、まあいろいろあつてピッチャーとしては使い物にならんくなつたんだよな。

テロに巻き込まれたんだと。

その場にたまたま俺もいて……俺の平凡な日常が崩れてるのは気のせいかな？

気のせいじゃない？知ってるよ。

でもね、認めたくない過去つてあるじゃん。

なんで爆弾テロに巻き込まれたんだろうねえ。

……ハア。

過去はさ、振り替えたって仕方ねえんだよな。
今をきつと見据えていくしかねえさ。

俺ってイイこと言っただよな？

そんでだ、でも野球はやめなかった。

投手じゃなくて野手として、それまでの栄光はかなぐり捨てて。泥まびれになって白球を追いかけてるってわけよ。

「ふははははは！どうした晃気！！」

「いや、サイン一号は俺にくれるんだよなって思ってたさ」

「無論というやつだ！我は約束を違えるようなちっばけな男と思うな！！」

かっきーぜ、英雄。

そついやそれが俺と英雄の出会いなんだよな。
向こうの爺ちゃんは元気でやってつかねえ。

「た」

「だ」

「い」

「まっってか」

「相変わらず仲イイな」

そんなこんなで家に到着。

仲イイって？お前も入ってんじゃん、忠勝。

今日は木曜だからウチで飯食って薫にいちゃんとこだな。
舎弟も大変だねえ。

「晃気イ、客が来とるで」

祖父ちゃん？客？俺に？

まったく心当たりがねえや。

んで居間の扉を開けてみりや座布団に座ったしおしおの爺さん。

「ホッホッホッ、久しイのウ……弟子っこ」

「ハ？……なんで爺ちゃんいんの？」

へ？おかしくね？

だってさ、中国拳法そのものとか言われてる訳だろ。

その『郭海皇』がさ、なんで祖父ちゃんと普通に茶を啜ってんの？

「弟子に……孫に会いに来ちゃった」

何それ？怖い。

部活でのほほん（後書き）

いろいろな人が増えたけど一人一人しっかりメインの話を立てて補完していくつもりです

出会いでのはほん（前書き）

戦闘描写は難しい……

出会いでのはほん

『郭海皇』つつう人物がいる。

齡もう150近かったか、越えてたか。

その辺はいまいちよく覚えてねえけどすげー年寄りだったのは確か。
んでキャリア100年以上の超格闘士ってヤツなわけだ。

そんな中国武術界の頂点に立つ郭海皇、もとい爺ちゃん。

どうやって俺が知り合ったかってと……まあ祖父ちゃんの目論見なわけだ。

ちよつくら昔の話だけどさ、アレは俺が小学五年生の秋のことだったつけ。

唐突に祖父ちゃんは俺に言ったんだわ。

「晃気……オメエ中国行ってこい」

「……ついにボケたか？」

「誰がじゃイ、この渋谷まだまだ若いわ」

ケタケタ笑ってる姿を見りゃあ……あと五十年は生きそうだねえ。

にしても何故に中国？

海外旅行なんて言ったこともねえよ、俺は。

中国語は知ってっけどな！！

二ーハオ、シエイシエイ。

これでピンチの八割は乗り切れるだろ。
そいやあどういう意味なんだっけ？

「柔の理合を体験し掴んできときイ、ワシとは違った……の」

「いや、意味がわかんねえから」

そう思ってた時期が俺にもありました。

「フム、では私はこれで帰ることとするが……くれぐれも粗相のないようにな」

アレ？おかしくね？

なんで俺は今ようわからん道場にいるんでしょう？

なんで俺は今小学校を休んで中国に来てるんでしょう？

なんで俺は今ここまで連れて来てくれた烈のおっちゃんが帰ろうとしてるのを見つめてるのでしょうか？

なんで俺は今中国人の方々にみょうくりんな目線を向けられているんでしょう？

なんで俺は今……。

「ホウ……貴様が烈のゆうとつた」

しおしおの車いすに乗った爺さんに目を付けられているんでしょう？

どうしてこうなった？どうしてこうなった？

ってな感じにいろいろ考えることはあるけどさ、俺のやることはただ一つだと思っんだ。

それは何かつて？

ＨＡＨＡＨＡ、そんなもん決まってるじゃねえか。

無論……逃げる！！

「……ホッホッホッ」

何か笑い声やら怒鳴り声が聞こえるけどんなもん知るか！！
どうせ中国語なんてわかんねえんだよ！

んなことよりアレはヤバイ！あの爺さんはヤバイ！

何てつたらいいかわかんねえけど言うなれば祖父ちゃん。
薫にいちやんとか烈のおっちゃん、独歩のおっちゃんと同じ匂いがある。

強烈で激烈な格闘士の香りが……。

ぜってーに、俺が望んでるもんじゃねえはずだろ。
俺の望みはさ、『まったりとした人生』なわけよ。
そのために柔術だって習ってるわけよ。

幸か不幸かそのせいか、ビンビンに伝わってくるんだわ。
あの爺さんの周りに断崖絶壁が見えた気がしたよ、俺は！！

アレ？これって『真の護身』に近付けてんじゃね？

「等着！」

何言ってるのか全くわかんねー！

まあいいことじゃねえってのはわかるんですけどね！！
鋭い視線を感じるよ！！

そんなもん考えてる暇はねえ！
とにかく逃げねえと……。

体力には結構自身あるゼイ？

伊達に受け身練習とか言って祖父ちゃんに一、二時間耐久で投げられてねえよ！！

……何かしよっぱい水が流れてるぜ……。

「不通？？里！！」

ですよねえ、簡単に通してくれるわけないですよねえ。
門の前には男が二人、筋骨隆々なんてやってらんねえや。

後ろでも男が少しばかり追っかけてきてるしさ、足も止めちまったし。

子供と大人じゃ筋肉量が違うかんねえ、歩幅も全然だしさ。
柔術やってんのに俺ってば筋肉ほとんどねえし！！

……アレ？普通なのか？

祖父ちゃんひよろいもんなあ。

でもさ、やっぱちよいマツチヨとか憧れんじゃん？

「孩子！！」

突いて来たアアアア！

しかしなんで子供相手につて言っとる場合じゃねえな。
焦っちゃいかんのだから。

祖父ちゃんが言うに柔術かは焦っちゃいかんのだと。

どんなことがあっても怯まぬ胆力持つてねえといかん……ってなんて難しい。

自分から突っ込んで、当て身して掴んで投げるんだったらそうでもねえらしいけどさ。

そんなもん俺はまっぴらごめんだぜイ。

自分から喧嘩吹っ掛けるんなら柔術なんて習わんしなあ。

んなことより今は目の前のおっさん？

ハゲてるしいまいち年齢がわかんねえな……剃ってんのか？

まずは相手の軌道を見る……右拳で腹狙いかね。

てかこれって崩拳だよな？

やっぱ凡庸性が高いんかねえ。

ともかく門を越えにやあ話にならん訳だし、迎撃すべきなんだろうね。

俺の理想が遠ざかってるぜイ。

右足を斜め後ろに下げて軌道の先をずらす。

今着てるのは愛用したボロボロの道着。

だから足元は隠れてるはずだし、少しは相手の判断を鈍らせれるか？

右手を手首に添えて、左手を肘関節に添える。

そのまま相手が進もうとしている方向に合わせて左足を滑らせて、腰を回転。

右手を引いて左手を押し出して、腰と肩と腕の動きを連動させて…

…。

「那ッ！」

投げる……と。

うはー飛んだな。

石畳の上滑ってるけど大丈夫か？

肘も逆方向に曲がりかけてたし……。

俺は言っているのか悪いのかようわかんねえけど力はない。

辰子と竜兵に力仕事は任せてっからな！！

……何か情けねえよ……。

投げるつても考え無しじゃあいかなのだとさ。

相手の力を使って投げるのは無論なとこだけど、その時掴む場所が大事なんだって。

掴み、捉え、投げる。

祖父ちゃんみたいに凄まじく速くこの動作を行えるんなら相手を逃すことなんてありえねえ。

まあけどさ、俺はそんなじゃねえわけだ。

力の方向を見て掴んだとしても、無理やり振り払われちまつたら意味がねえ。

だから掴む位置が大事、力をかける方向が大事、投げる方向が大事。

人の身体には全てにおいて可動域つてのがある。

曲がらない方向や動かせねえ位置つてのが必ず付いてるらしいわ。

だからそこを目掛ける。

無理に動かせば身体が悲鳴を上げ、だからこそ無理やり振り払うことは出来ない。

そんな位置を掴むんだと。

そう考えると柔術ってエゲつねえなあ。

「?!」

うお！今度は掴んで来た！

俺の腕をガツチリと！てか痛い！！

ガキ相手に加える力じゃねえだろ！！

祖父ちゃんだったらここで掴んだ相手をそのまんまブン投げるんだろうけど……。

俺がんなこと出来るわけねえじゃん！！

相手の力を完全にコントロールする『合気』なんて技術、俺が使えるわけねえだろ！！

しかしヤバイ！

無い物ねだりしたって仕方ねえけどとにかくこの場から逃げんと！！

あの爺さんはきつと……俺を捕まえて若返りのための薬にするんだよ！！

……乗ってくれるヤツがいねえって寂しいんだねえ……。

小雪やはら元気にしてるかねえ。

アイツ俺がいねえとまだ駄目なとことかあるしなあ……。
よろしくないよなあ。

そうそう、とりあえずこの場だよ。

『合気』が無理なら他を使えばいいわけだろ。

といつてもさ、手首やらを極めるつつたつてガッチリ掴まれてる今は無理。

祖父ちゃんみたいな技術はいくら探してもやつぱねえ。

……となれば……こうとか？

掴んでるのは左手、なればそれを掴んでつ相手の左肘を狙う。
蹴りあげる対象はフアニーボーン、ピリツとなるアレだ。

「悟ッ！」

つま先でそこを狙って一瞬でイイ、相手の握る力を緩めさせる。

緩んだ……よな……！

となれば小指を掴んで上げた足を相手の側面に落とし、自分の身体を廻してそのまま小指投げ！

本部のおっちゃん直伝だぜイ……！！

まだ手を伸ばした状態だったから何とかうまくいったかね？

「戲雅ッ……！！」

相手の指が折れただけか……けどチャンス……！！

自重が乱れてるし、手も完璧に外れた。

だったら傾く方向に合わせて足払いだろ……！！

自分の力に予期せぬ相手の力が加わるわけだから、しかも進もうとしてた方向に。

おぼつかない足に合わせて倒れつつあるってこった。

顎に手を添えて、下に力を加えて……石畳めがけて叩きつける！
後頭部だけどきつと痛いぜイ。

「どすこゝい！！」

「虞咂ッ！！」

モロに入っただか？

ならダメ押しの踵！！

顎を目掛けても一度つてとこだろ！！

「ほりゃッ！！」

白目……剥いてんな。

まあガキつつつても30キロくらいはある俺の体重が乗っかって
るわけだからな。

ともかくこれで前には誰もいない。

つまり俺は自由だ！！

さてさて逃げよ。

でもせっかく中国来たんだから何か美味しいもんでも……。

「やるのウ」

は？爺さん？何時の間に！？

「なんで俺の前いんの！？」

「じゃがまだ青い……面白いの連れて来たが、の」

知らね！とにかく逃げんと……！？

「逃がさんぞイ」

ちよっ！帯！俺の息子が白日に！！

「ほいつ」

「あふうん！」

出会いでのはほん（後書き）

ネット上の翻訳サービスで変換してエセ中国語があります

一応上から「待て」、「ここは通さん」、「ガキが」、「貴様」のつもりですが……

違うよ〜と思われる方がいらっしやったらご指摘いただけるとありがたいです

他にも相手の叫び声を漢字で書いてみました

脱力でのほほん（前書き）

短めです

脱力でのほほん

「ホリヤ」

「みうッ！」

「ホエイ」

「てぶるッ！！」

「フィッ」

「ぎゃぷッ！！！！」

痛い……なんでこないな事態に……。

おかしいよね？だって俺普通に学校に行ってるはずだろ？
なのになぁんで俺はいま目の前の爺さんにボコボコにされてんでし
ようね？

「やる気が無いんなら帰ってもエエで」

「へ？マジで？じゃあ俺帰るわ」

「ホッホッホッ、じゃあの」

アレ？マジで帰っていいの、コレって？

……なんかそう言われるとさあ、帰る気って失せるよなあ。

我儘なのかねえ、俺って。

「……………どうすりゃイイの」

「思いつきり、自分の得意なのやってみりゃあエエ」

得意なの、か。

昨日だったか烈のおっちゃんに連れられて来たここ。

みつともない状態で気絶して起きたら飯食って、今爺さんと対峙してんだもんなあ。

ホントようわからん状況ってヤツだわ。

でも帰れねえんだよな。

帰るつつつても飛行機とか自分一人じゃ乗れねエし。

烈のおっちゃんも二週間くらいいたら来るつつつてたらしいし。

まあ我慢だ、飯は美味しいな。

とにかく対応しねえと。

じゃあさこうやって爺さんの前に近付いて。

一気に足払……………いッ!?

って勢いそのまま廻ってる?

てかこの爺さん払った時の感覚がねえぞ!

なんつつか羽かのれんか、その辺に触れた時見てえに。

掴もうとしても触れた先から向こうに離れてってる。

シャボン玉か?

祖父ちゃんとは違った、得体の知れなさってヤツだね。

祖父ちゃんの場合はこう向けた力が増えて帰ってくる感じ。

確か俺がいつか辿り着けて言われた『合気』ってヤツだわ。

爺さんは帰ってくるわけじゃあねえけど、祖父ちゃんより更に柔らかい。

不思議な感覚ってヤツだな。

「又シ……齡十を越えぬうちに真の護身の思想、その一つの境地に辿り着いたそうじゃの」

へ？何の話？

んゝ、アレか？危ないとこに行きたくないってヤツ。
コレってそうなのかねえ。

「何のためにそのようなものに至ろうとする？」

何のためって……そりゃあ……。

「危ない目に会いたくなくって、危ない目に会わせたくないヤツがいるから……かなあ」

だよなあ。

柔術習い始めたのだってこの理由からだし、間違っちゃいねえよ。

でもだつたらなんでこんな状況なんでしょうね？

祖父ちゃんの言ってた『真の護身』を開眼してりゃあこんな目にもあわんはずだろ。

『危機に気づくまでも無く危機に辿り着けない』訳だし。

まあおこがましいか。

祖父ちゃんが何十年も経つてようやくつてもんだしなあ。

「フムウ……青いの、まだまだ」

ホッホッホッって笑ってら。

なんかオカシイこと言っただんかねえ、俺？

「いやはや世というものは面白い……が、今はどうでもエエか」

クイクイツと俺を手招きして。

「押しとくれ」

……車いす？俺が……だよなあ。

昨日はいつぱいいた人らもいつの間にならなくなつとるし。

初めての経験ってヤツだわ。

「護身の要諦って何じゃと思う？」

「『脱力』だろ、知ってんぜイ！」

祖父ちゃんいわく、戦闘つつう危なっかしいやり取りの中にこそそれが大事なんだと。

普通はさ、殴られそうになったら筋肉とか絞めるべきだろ。

固めた方が緩んでるときよりダメージは少ないってのは俺でもわかるし。

でもそれじゃあダメなんだとさ。

俺もかつきーと思う剣豪『宮本武蔵』の自画像飾ってる美術館に行つて教えてもらったわ。

ホントだるゝんって感じに脱力してたもん。

太い巨大な木が突風に倒される。

でも柔らかい草木は突風に影響されない。

うっかりこけて骨折しちまう大人。

高いところから落っこちても怪我ひとつない赤子。

自然から学んだ知恵ってヤツ。

『緊急時にこそ脱力を』。

これが大事だって口酸っぱく祖父ちゃん言ってたもんなあ。

「お前はそれが出来ておらん」

しゃーないじゃん。

だって怖いもん。

来るのを避けて掴む、これは出来るようになったさ。

けど当たったのを流したり返したりするのは無理だわ。

どーも来たら目を瞑っちまうもんなあ。

訓練によってそれを克服しろって言うけどさ。

逃げるために柔術習ってんのにそれって必要なのかいねえ。

「とにかくそれを身につけイ」

おりよ？立っちまっでどうすんかいね？

「ワシはこれからお主を殴る」

「はい？」

「避けることなく顔で受けイ」

いやいや意味が分かんないですよ。
何言ってるの？ねえ何言ってるの？

「徐々に速くしてくからの」

「痛いのは嫌いですの」

「フム……避けたらこうじゃ」

爺さんはゆっくり拳を地面に向かわせてるな。
いかん、いかんぞ。

怪我でもしたらどうすん……でイ……！？

「ホッホッホッ」

「マジで……？」

アリエネエ。

だってさ、コンって当たったんだぜ。

なのになぁんでクレーターが出来てるの？

……やはり妖怪……か。

成程、妖怪ジジイの供物にされたわけね、俺は。

「さあて……いくぞイ」

脱力でのほほん（後書き）

次はおそらく他者視点

郭海皇の孫でのほほん（前書き）

かなり変に仕上がってしまいました

郭海皇の孫でのぼん

烈から頭を下げられた時は……少しばかり度肝を抜かれたがの。
『日本の高名な柔術家の孫に指南をしてやって欲しい』。
まったくエエ身分じゃ。

そう言やあ克己に教授した時もあやつが頼んできとった。
ホッホッホッ、優しいんじやの。
顔を赤くしとったのはどうかと思うが。

『洪川剛気』、その名前はワシとて聞いた事はある。

日本の伝統武術、『柔』を極めた男。

『真の護身』、その一つに辿り着いた男。
一度とて目にし、出来るなら手合わせでもしてみたいとも思う。

日本といえば奴も居る。

アレの道は正しかったともいえる。
だが正しくなかったともいえる。

この舞台に二度と立つことの出来なくなった。
いや、立つということは自身の誇りが許さんだろう。

まあエエ。

今は目の前の小僧っ子じゃ。

「ホリヤ」

「痛てえッ！」

「当たり前当たり前、痛うしとるもん？」

「もん？とか可愛くねえから！？」

最近のはいせんすがわからんとは遅れとるの。

吹き飛ばされ、転げ、立ちあがる。

目の前、およそワシの拳が、脚が届くような位置に晃気にやって来た。

ここが何度も何度も繰り返して来たワシと晃気の唯一の訓練の間合
い。

少々涙眼か……。

フムウ、『爺ちゃん嫌い』とか言うのは勘弁してもたいの
そんなことしたら……思いっきり殴っちゃうかも。

「ヒウッ！寒気がッ！！」

いかんいかん、危ない目で見てもうたかも。

……今は置いとくのが正解かの？

「いくで」

「これが終わったら、日本に帰って楽しい夏を過ごすんだ」

しなる鞭のように脚先が晃気の左米神を狙う。

五月の頃の、晃気では吹き飛び悶絶していたような蹴り。

「取ったア!!」

それをワシが脚を出すよりも早く、右手を振り上げ足首をつかみ取る。

取った足首を捻上げるように、晃気は左手を添え、ワシの身体を地面に叩きつけようと振り下ろす。

やはり……この者は面白い!!

真綿が水を吸い取るように。

そう言うのと表現が少々過剰かも知れん。

じゃが普通の者が技を習得するよりもはるかに速く、晃気は技を己のものとする。

天性の動体視力が攻撃の軌跡を予測する。

まだまだ不足とはいえ凄まじい反射神経がその先に手を持ち運ぶ。驚愕の動体視力が正しく関節や筋を見極める。

欲しいのオ。

なんでこの者が本物の孫じゃないんじやろ?

子供のころからワシが技術を叩きこみ……ム?
そうなればワシも追い抜かれるかの?

まあ圧倒的に経験則が足りんし、あと数十年は大丈夫か。
それが10年から50年かなんてわからんが。
その時まで生きておりたいのオ。

ワシの子供は……ワシの子供とは思えんし。

幾ら『範馬』の血族とはいえ瞬きの間に倒されるとは……。

匹敵するとは言えんが驚愕。

毎日のように鍛錬を付けとるわけではなく、長期の休みのたびにやってきて鍛錬を受ける。

すべて合わせても……幾らぐらいじゃろ？

ここで何か掴んで日本の渋川剛気の下で開眼させる。

日本で何か掴んでこのワシの下で開眼させる。

是非とも日本の渋川剛気を訪ねてみたいもんだの。

「ホイッ」

さてはて晃気じゃがやっぱりまだ……だの。

宙に浮いたワシは掴み取った手首に向かって掴まれていない脚の踵を叩き落とす。

……痛めのの。

「イデエー!!」

いかんのう、晃気。

そのような痛みで外しては。

力の無いお主が無理に掴みに行くのは愚の骨頂。

下に振り下ろした脚を地面に添え、掴まれていた脚を晃気の肩へと振り下ろす。

「どぶうッ!!」

顔面からか。

痛そうなの……実に。

「ほれ、続きをせんと」

「わーってるよチキシヨウめ」

嫌だの痛いだの、愚痴をこぼしながらも晃気は必ず立ち上がる。

自分の友人を危険に会わせたくない。

実に青臭い考え。

だが小僧にはそれがちょうどよいのかも知れん。

いずれ己の心を知り、己を制し、己を御する。

そのような男になれたなら……。

柔を真の意味で極めることも出来るかも知れんの。

「ほい」

「負けるかぁ！」

右の打拳を斜め前に踏み込むことによってかわすが、甘い。

実と虚の見極めはきちんとせんと。

「ほまぁッ!？」

それは餌。

本命は左の打拳。

気付いては……いたようか。
腕でしっかり受けておるし。
先を読む洞察力はやはり凄まじい。

じゃが……まだ脱力は出来切っておらんか。
なけなしの筋肉を固めたくらいでワシの一撃を受けれるわけ無かる
う。

逆に被害は増えるだけだしの。

緊急時にこそ脱力を。

叩きこんだはずなんだがの。

「それではいかんぞ、晃気よ」

「知ってるよ……でもやっぱ怖いもんがあるんだもんさ」

本能を克服するためにこそ訓練というものは行われていく。
それは並大抵では成せぬこと。
わかつてはおるが……どうも期待してしまう。

爺バカかの、血も繋がっていないこの者相手に。

「ホッホッホッ」

じゃがそれもまた一興。

コレいけると若者の可能性を感じさせる。

彼の悪鬼と戦ったときに芽生えた欲望。

『地上最強の生物』という称号。

ワシにはもう到底辿り着けぬであろう境地。

晃気を鍛え込み続ければもしかやという下らぬ考えすら浮かぶ。

……やはりじゃが爺バカか。

コレはそんなこと微塵も望んでおらぬからの。

並みの人間や並みの天才とまで称されるような者よりも才能を持つておる。

最近では洞察力が鍛え上げられた成果が、重心配分まで見抜きかける。

未恐ろしい才。

『柔の申し子』とでも言えるほどの才。

それをこの者はかなぐり捨てれる。

じゃからこそ面白い。

柔術をやめれば晃気の望む『まったりとした人生』が歩める。

そう言われたら躊躇いなどそこには持たぬであろうの。

じゃからこそ晃気に『真の護身』を身に付けさせたいと思うのであるの。

ワシも、恐らく日本の渋川剛気も。

「ほれ、続きをいくとするよ」

「ケケケ、地面に叩きつけてやんよ」

何時になく気合が入っておる。

やはり男という訳かの。

「騙されん！取ったア！！」

左脚での上段蹴り。

それを虚として見抜きしつかりと実であつた右での打拳を見極めた。斜め右前に踏み込み、手首を掴み……ホウ。

先の失敗は生きておるようか、左手で掴んだ右手をしつかり防御しておる。

背を向けワシの腹にその背を密着させる。

そして振りむいた勢い、ワシの打拳の勢いを殺さぬように背負い投げる。

しかも飛ばさぬようにガツチリと手首を極めて。叩きつける気かの。

ニンマリと笑っておるが……天狗の鼻はへし折らんと。

そう言うことでワシはふわりと地面に立ってやった。

何のことはない、投げ技に対して『消力』を使っただけ。そうして足の裏から柔らかに着地しただけだのオ。

「インチキだッ！」

じゃが晃気よ。

ワシに技を使わせた、コレは誇つてエエ。代わりにワシの一撃をくれてやる。

掴まれた手を逆に掴み返し、捻り上げる。

勿論曲がらぬ方向へと。

するとどうなる？単純明快、痛みで手を離す。

そこへ緩やかに、脚を持ってゆく。

「あ、俺しんぶるあああッ！！！」

『消力』とは、詰まるところのリラックス。どのような分野においても瞬発力を必要とされる場合、必ず指摘されるのは弛緩。

投球、打撃、投擲、打突。

いずれも強調されるのはインパクト。そしてその瞬間までのリラックス。

弛緩と緊張の振り幅こそが打力の要。

ワシが生まれ落ちて百と数十年。

武によって練磨すること実に五万日。掌に握った一つの理合じゃ。

が、本気には程遠いとはいえ骨折も無しに気を失っただけとは。ヒビくらいは入るはずだったんだがのオ。

諦めもまた脱力の一つ。

一つ、高みに近付いたの。

無自覚だろうがなんだろうが、それは事実。

まったく……実に惜しいの。

はてさて、ではどうするか？

水でもかけて起こして、風呂で背中でも流させるかの。

「海皇様」

何じゃい、ワシと晃気の楽しみの時間を削るとは。

ム？書簡？

ホウ招待状か、断つて……エエこと考えた。
さうて、じゃあ準備せんと。

「よ……羊羹食わせろ……」

どうなるかの？

という訳で二日後じゃ。

時間が飛んだ？気のせいだの。

……疑るかア！！！！

ともかくここは世界の本当の金持ちばかり集めたところ。
どこかって？それを言っちゃあ意味無いじゃろ？

闘技場、擂台の上におるのは二人の若者。

一人は拳動不審に周りを見ながら台の上を転がる袴姿の少年。
まあ晃気は起きたら舞台の上だったわけだからの。
飯は食わせて、他の者の見物を見せて。

しかしここまで格が下がってるとは……。
武術省は何をしとんだの。

海王の下の洋王すらここまでレベルが低いとは……。
考えられぬ。

ともかくまあ、今は目の前の試合じゃの。

晃気の対戦相手は……あのサムワンだからの。

さてはて、どうなるもんか。

楽しみだのオ、晃気や。

郭海皇の孫でのぼん（後書き）

こんなもん海皇様じゃねえ！という方は酷評としどしお願いします

かなりの爺バカに仕上がってしまった……

英雄の擂台でのほほん（前書き）

会話と地の文が入り混じってる所がありますのでご注意を

英雄の擂台でのぼん

我と晃気の出会いだと？

ふははははははは！！そうか庶民ども、知りたいか！！

普通ならば貴様らのような者に教えるまでも無い事だ。
だが教えてやろう。

なぜなら我は王だからな！！

王たるもの偶には庶民にも手を差し伸べねばな。

ふははははははは！！まったくもって我は王の器よ！！

ふははははははは！！

そうだな、あれはまだ我が幼かった頃。

一年ほど前、中国のとある場所で行われた世界の
上流階級が出席するパーティでのことだ。

世界に誇る『九鬼財閥』。

その末席を汚す我だからこそ出席できるような場所。

つまりだ、世界の政財界の大物の者が集まっている
と言えるば分かりやすいか。

要はパイプ作りや顔見せのために連れて来られた訳だが。

人の顔色ばかりうかがうこのような場。

我が王として生まれたからには乗り越えねばならぬ場面。
とはいえまだ我は12歳、世間で言えば小学生だ。

通う小学校で組んだ野球チームでのことばかりを考えてしまう。
我はチームのエースだ、唯一絶対の守護神だ。
そちらのほうが楽しいと思ってしまうのは仕方ないだろう？

我儘は言えぬ立場にあるのかもしれない。

だが我はこの腕一つで世界の打者どもをいずれ擦じ伏せていきたい。
我は『プロ野球選手』になりたいのだ。

まあそんな我がこのような場にいて楽しい訳が無い。

九鬼の名を持つ者も我だけではない。

とりあえずの顔見せ、一定の義務は果たしたのだ。

となれば後はこれが終えるまでどう過ごすかということだ。

我と同じような齢の子供と話すか。

そう思い王たる我が歩み寄ってやるが……いかな。

詰まん。

敷かれたレールの上を走るような面白みのないガキばかり。

こちらの顔色を窺う……まるで体躯だけ小さくなった大人どものようだ。

アレらと話そうが得るものなど何もない。

そう言えば何でも余興として擂台も設けられているらしいな。

このような場があるのであれば姉上が来れば良かったというに。

まあ我の暇を潰すものとなればよいか。

「キエアアアアッ！！」

「ホアアアアッ！！」

ほう、肉と肉とのぶつかり合いは中々に私の胸を熱くさせるではないか。

このような見世物を間近で見るのは初めてだが。

庶民ども、王たる我が褒めてやるぞ！

ふはははははは！！

ム、だがどうもどちらも手を抜いて見える。

いや手を抜くというか……力量が低いのか？

刹那の瞬間の、ピリピリとした感覚が感じられんな。

姉上のような方を我が見ているからか？

いや、姉上はどうも違うか。

明らかに人として異常な臂力が、脚力が、跳躍力が姉上からは感じられるからな。

『氣』だったか？

それが無いからこの者らはこのようにどうも張りが無いのか？

「小僧は何を悩んだんかのオ？」

「ム、何者だ貴様！王たる私の前に突如と現れるとは！！」

シオシオの老体か。

無礼であるが年寄りには優しく接さねばいかん。

そのような事はだが氣にも留めぬ私の器は広いということか。

ふはははははは！！流石王たる我である！！！！

「動じんとは……中々どうして」

「何か用か？今の我は何でも聞いてやるぞ」

「……ホッホッホッ、じゃああそこで沈んだる馬鹿のところに行つてくれんか？」

「ふはははははは！よかろう、しかと承った」

ム、老体の言っていたのはあの小僧か。
我と同じくらいの年頃だな。

それにしても黒く沈んだオーラで溢れておる。
幸先ある若者がこの様とは……実に遺憾だ。
我など輝かしい夢があるというのに。

これが我と庶民の違いということか？
ふははははははは！！

「庶民、どうした？今の我なら悩みを聞いてやらんことも無いぞ？」

「誰が庶民じゃ誰が」

「貴様以外居らんだろうが」

「H A H A H A、何この子？」

王たる我が悩みを聞いてやっているというのに無視とはイイ度胸であるぞ。

が、それは褒められた行為ではない！

少々灸でも据えてやる……か？
気でも狂ったか、この庶民は。

「なんで俺が擂台に上がらにゃいかんだ？どうしてこうなった？
どうしてこうなった？」

ゴロゴロと転がり始めるとは……情けなし。

この者も闘士の一人であつたというか。
にもかかわらずいざ戦いの場に連れて来られたら出たくないと申す
のか。

実に惨めで、矮小で、ふざけた俗物か。

「庶民、齒を食い縛れ」

「は？こんどんぶるッ！！」

人を殴るという経験は武術の鍛錬以外では初めてであるな。
だが庶民よ、誇って良いぞ。

この王たる我に拳を与えられたのだからな！

ふははははははは！！

「最近こんなのばっか……俺の望んだ日常はどこへ……」

望んだ日常だと？

庶民、事情を話すことを許す。

「……YOU何様だYO」

「ふざけとらんどつとと話せ」

（晃気、事情説明中）

ム、成程。

要は貴様は友を危険から遠ざけるために柔術を習い始めたというところか。

「甘えるなッ！！」

「まさかの二発目！？」

「その結果貴様は友とやらを傷つけておろうが！！」

庶民はやはり庶民か。

下らぬ考えで悩みおつて。

戦いたくない？こんなの望んでない？

それを引き起こしているのはすべて貴様であろうが。

何が『真の護身』を極めるために柔術をやっているだ。

何様のつもりだ！

武術なるもの突き詰めれば如何に効率良く人を壊すために発展してきた技術ではないか。

護身など程の良いことを言ってもそこは変わらん！

真の意味での護身に辿り着こうと、庶民！！真に貴様が思ふのならそれを理解し、実践せよ！！

人を折り、人を絞め、人を投げ、人を転がし、人を極める！！
ありとあらゆる貴様の教わったことを実践の形で行ってみせよ！！
貴様の尊敬するといった二人の祖父も、それをやったからこそ辿り
着けた境地であろうが！！

真に貴様が思うのなら腐った顔をその者たちの前で見せるな！！

己を高めよ！己を高めよ！！己を高めよ！！

たとえどのような危機が訪れたとしてもその者たちを傷つけること
なく救いだせるような男たれ！！

「……お前すげーな」

「ふはははははは！！！！当り前であろう、我は王であるぞ！！」

ム、中々に良い眼をするようになったではないか。

庶民にしては見所があるぞ。

「んじゃまあちょっと行ってくるわ」

「ふはははははは！！！！せいぜい楽しみにしておるわ」

さて、行っただか。

程無くして庶民は擂台に姿を現した。

時間が飛んだ？

ふはははははは！！！！気のせいだ！

袴姿の庶民と相對するのはタイ人だというサムワン海王。

……待て、海王だと！？

中国の武術省が真の達人にしか与えぬ称号であるぞ！

そのような人物と庶民は戦うというのか！？

擂台の上でもまだ何か言っているようだが……ヤツは何者だ！？

ム、銅鑼の音が鳴り響いたか。

試合開始の合図であるぞ。

両者動かぬか。

だが先までの試合などとは比べ物にならないほどの濃密な感覚が我を襲う。

「まやかしだ」

ム、サムワンとやらが口を開いたか。

それに対して庶民は無視か……。

「『気』、『呼吸力』、『発勁』、すべてがまやかしだッ」

何か嫌な思い出でもあるのか？

そう言えば聞いたことがある。

百年に一度の大擂台、そこで屈辱的な負け方をした海王たちが幾名もいると。

もしやその一人か？

「武術といえど所詮運動能力を競い、いかに合理的に肉体を使うかの世界」

まあどちらにせよあの者のプライドは傷つけられているであろうな。我と同じくらいの年の者を戦わされるのだから。

姉上が対外試合を行う時も、相手になった大人はだいたいあんな眼をしていた。

そしてその力の一端を見て、認識を変えようとした時にはすでに地に伏せていたな。

さて庶民よ、貴様はどうか？

仮にも海王の称号を持つ者と戦わされる。

その実力はハツタリか、それとも本物か、実に楽しみだ。

貴様は羊か、それを食らう狼か。

見せて見せよ、我に。

「そうだ……そこに魔法など……以前の様な事など……存在しないのだッ！……！」

我の目では到底及び付かないような速度。

視界に捉える事の出来ぬ速さで放たれた右脚での蹴りは庶民の頭のあったところを薙ぎ払った。

潰れたか……？

そうは思ったが打撃音というものが響いてこなかった。どうということだ？

「カツコつけすぎた……か？」

庶民は立っていた。

先ほど居たはずの場所に。

イヤイヤそれはおかしい。

海王ともあるう者が対象までの目測を誤ると思えん。
避けたのか……不完全だが。

鼻先に赤い線が引かれ、そこから止め処無い血が溢れている。
目測を誤ったのは庶民の方が。

しかし対峙しただけで射程をある程度把握したということか？
そして動くタイミングが分かっていたということか？

見れば土の擂台、その上に日本の線が庶民の足から引きずるように
引かれている。

一体どのように……。

「ならばより速くだッッ」

踏み込むようにして放たれた右肘。

そう言えば海王はムエタイ使いと言っていたか？
ム？それならば庶民の名もわかるのでは無いか？
……ふはははははははは！！忘れてしまったわ！！

今度こそバッチイン！！と酷い破裂音が我の耳に飛び込んで来たわ。
そしてゴロゴロと土の上を転がされる庶民。

手の平かどこかで受けたのであろう。
まともに肘などを食らっておったらもう立つことすらままならぬで
あろうからな。

「より迅くッッ」

凄まじい速度で詰め寄ったサムワンは転がる庶民を蹴り上げる。それを背中を向けて受けた庶民。

そう言えば背の耐久力は正面の七倍近くあると聞いたことがあるな。体躯の違う、力の違う庶民が受けざるを得ない状況ならば最善の選択肢だったのかも知れん。

再び転がる庶民。

が、今度は態勢を立て直し立ちあがっており、まっすぐ立っているとは言い難いが。

「より疾くッッ！？」

「ちょうしこいてンじゃねエ！クソったれがアッ！！！」

何が起こった。

サムワンが庶民に触れたと思った。

再び振り翳された右脚は庶民の頭を打ち砕いたと思った。

しかし今はどうだ？

庶民がサムワンを投げ飛ばしているではないか！

辛うじて私の目に確認できたのは庶民が反時計回りに廻っていたことだけ。

その後、何が起こったのかは知らん。

だが今確実に庶民はサムワンを擂台に叩きつけおった。

「ちつと……休ませてもらうぜイ」

そう言うと庶民は握っていたサムワンの脚、正確には足首か？それを離し擂台の上に腰を落ち着けた。

あゝああ、といった実に気の抜けた声を上げつつ鼻の頭から溢れていた血を拭きとる。

一方サムワンもまた大の字に寝転がったままピクリとも動かぬ。

ム、双方何か話ておるな。

だがここからでは聞きとれん。

……一体何を？

「遺恨は無しだ、下らぬことはもう考えん」

「俺絶対こうゆーのキャラじゃねえよな？」

ようやく聞き取れるほどの声。

それを聞いた時サムワンと庶民は再び立ち上がり、向かい合っていた。

対峙し、再び動かぬ二人。

だがその空気は先とは違い、どこかにやわらかさというものが含まれているように感じる。

「より短時間に……だ」

僅かではある、が庶民が身体を屈めた瞬間、サムワンは地を這うような蹴りを繰り出した。

ムエタイは『立ち技最強』とまで呼ばれることがある。

その称号に最も貢献した技こそ今サムワンが放ったローキックだ。我とはいえど男、先も言ったが武術もある程度はたしなむ。それぐらいは知っておる。

が、それは空を切る。

先と同じように後ろに下がったか？

そう思っていたが違った。

先とは違う、今は違う。

滑り込むように身を屈めた庶民はサムワンの軸足へと滑り込んでおった！

蹴り込むことによって僅かながらに前へと体重をかけていたサムワン。

そこを崩すように滑り込んだ庶民は跳ね上がるように顎を掌でかち上げた。

グラつくサムワン。

そのまま倒れかかるヤツの顔面を掴み取ろうとする庶民。

が、やはり海王は海王であった。

庶民の快進撃はそこまで。

持ち直したサムワンは振り下ろすように肩口に肘。

追撃を頭を痛みで思わず浮き上がった庶民の顔面へと叩きこんだ。

結局そこまで。

庶民にまだ意識はあるようだが倒れ込み立ち上がれぬようだ。

思っていた以上に庶民は凄まじかった。

羊などではなく、間違いなく狼だった。

そして我はここですべてが終わりだと思っていた。
銅鑼の音がもう一度鳴らされ、正式に試合が終わればねぎらいの言葉をくれてやるう。

そんな甘ったるい考えを抱いていた。

次に我の耳に飛び込んで来たもの。
それは弾けるような炸裂音、銃声であった。

英雄の擂台でのほほん（後書き）

英雄くんってこんなでいいんでしょうか？

次回こそはほのぼの

視点は飛んで日本の彼女に移ります

男の子でのほほん（前書き）

難しい……今回はかなりの難産でした

男の子でのほほん

運動会か！？

ヤベエや、スタートが遅れちまった……ってんな事もねエよな。

こんなところで誰が運動会なんかするの？ねえ誰がするの？
と考えれば違うな……。

爆竹か！？

いやーあれはおもしろいよなあ。

忠勝と竜兵とさんざんやったもんだぜイ。

河原でマツチとアレいくつか持つて駆けまわるのは楽しいもんよ。

……耳近くで爆発したときはかなりきついけどな！！

あのパパパアンツ！って音がまたイイんだよな。

そいやあ花火、まだ今年に入ってやってやって無いや。

普通のヤツに線香花火、ねずみ花火にロケット花火。

でもねずみ花火やるたびに追いかけられんのはなんでだろうね？

点火したやつには代わりにロケット花火叩きこんでやるけどな！！

「少年……逃げろ」

え？この方いきなり何言ってるの？

イヤイヤイヤ、サムワンさんよ。

あんさんの肘と頭をくらったわけよ、俺は。

動けるわけねえじゃん！

「早くしろ！どうなっても知らんぞオオオオ！！」

WAO！なんとゆー王子！

だからね、誰かが遊んでるだけだろ。
なのにそんなに焦っちゃってさ。

落ち着いてる俺マジ大人！

「???!!」

ってサバゲーやってんのか？

鉄砲とかすげーなあ。

……なるほどアレか、爺ちゃんのいつもの遊びかなんかか。
十人組手だの二十人組手だの三十人組手だのよかぜってー楽しそう
だろ！

……グスン、悲しくなんて無いもん。
きつと俺の為を思ってたやってくれてんだもん。
やる時はいつつもはちきれんばかりの笑顔だけだな！！

となりやあ先手必勝！
寝てるわけにやあいかなだろ！

「地獄で閻魔に会ったらよろしく伝えてくんな」

……決まった……。
完璧に決まっちゃったぜイ。

中指立てるのも忘れんさ。
今俺って輝いてるんじゃない？

「庶民、何をしている！伏せろオオオオ！！」

ケケケ、遊びだつてのにビビっちまってさ。

さんざん説教垂れてたんだからよ、もつとどでーんと構えて欲しいもんだねえ。

サムワン海王もさ、そない無絶望的な顔せんでも。

祖父ちゃんにも、爺ちゃんにも、ちゃんと鉄砲の対処の仕方は習ったもんだよ。

アレだろ確か。

銃口の向きで弾丸の軌跡を予測して、指の筋肉の動きを洞察して、ちよつと身体をずらす。

要は投げる時と一緒にだわな。

「再不？」

そうやりやほれ、この通り。

耳にちつと掠っちまった……けど……！？

「ホンモノオオオオ！！」

聞いてないよ！聞いてないよ俺は！！

マジでマジでマジで！？

耳切れてる！血ィ流れてる！

ピアスの穴でも空いちまったのか！？

空けねエよ俺は！鼻とか耳と舌とかに！！

余計なおせっかいだろ！常識的に考えて！！

「逃げる！！」

「無理！だって怖いもん！！」

だってさ、足震えてちまってんだもん。
命の危機の場なんて、俺は知らんよ。

うあゝアレか、マジで死んじゃうんか？

最終回まで見てないアニメとかまだいっぱいあんのになあ。
最終巻まで持っていないマンガとかまだいっぱいあんのになあ。

小雪と、忠勝と、辰子と、天使と、竜兵と、亜巳さんと、翔一と、
千花と、委員長と、クマちゃんと、まだ遊びてえのになあ。

祖父ちゃんら？イイのアレは。

だって顔を合わせりゃ『強くならんか？』最近言ってくるのにさ。

『まったりとした人生』って目標は……果たせてねえよなあ。

だけどイイ人生だった……なあんて達観できるわきやねエだろ！！

エロい事にも関心持ち始めた年頃だよ？
初めてのアレに感動を覚えた年頃だよ？
童貞って言葉も知っちゃった年頃だよ？

「俺は！美人きよぬーのお姉さんと！するまで！死なん！！」

男なら誰だって一度は覚える夢だろうよ！
嫌だよ嫌だよ！死ぬなんてぜってーに！！

刃牙にいちちゃんのノロケだけ聞いて、薫にいちゃんにやり方だけ聞いて、体験出来ないままなんて！！

動機が不純すぎる？イイじゃねえか！

悪いか？悪いかコノヤロー。

三大欲求の一つなんだろう？

ようわからんけどな！！

ウム、若干落ち着いた。

でもさあ、実際のところ銃口こっち向いてすぐにでも撃たれそうなんだよねえ。

ズラすのは出来るかも知れんけど脇腹とか片口とか貫通しそうなんだよなあ。

でも薫兄ちゃんとか見てるとかつきーもんなあ。

刺青とか、刀傷とか、弾痕とか。

けどさ……痛いんだもんよ！！

痛いのは嫌ですよ俺は！

出来るもんならチーズ蒸しパンになりたい！

痛いか、かつきーか、痛いか、かつきーか、それが問題だ。

アレ？でもさ今の状況も一回考えてみよ。

……当たるしかない……だと……！！？

「やっぱ痛いのは嫌だあああ！」

身体を捻ってみるけどかわしきれん。

当たる、当たる、当たる、当たる……当たっちまうううう。

って当たらなかった！

ヤベエ！スゲエ！俺になんかついてんじゃね！？

コーデイナーター？

俺は第一世代なのか！？

空間認識能力半端ねーんじゃねえか！？

「……少年、礼を言う」

あり？サムワン海王ではあーりませんか。

どしたよ？所詮ナチュラルのあんたが俺に何の用だ？……ってか！！

「格闘士としての誇りを取り戻せた、自分は格闘士として死ねる」

HAHAHA、これまた遺言みたいな。

……アレですね、ふざけてる状況じゃないですな。

庇ってくれたわけだろ、なんでか知らんけど。

肉の壁として、俺に当たるはずの弾丸を受けてくれたんだろ。

「行け少年、キサマにはきつと未来がある」

「イヤイヤイヤ！目の前で死にかけの知り合い見捨てるってのは男の子的にかつきくないじゃんか！」

つて撫でんな！

頭に血が降りかかってるから！！

「お前が生きていること……それが俺の生きた証……、強くなれ少年……『オーガ』よりも」

かつきーこと言ったかて死んだら無意味だろうよ！！

でも背中が語ってるよ……行けつてさ。

このパターンは漫画の中でも何度も出会ってるから……行くべきなんだろうけどさ。

血飛沫上げながら向かってくサムワン海王はさ、ホントマンガかアニメの中から出て来た人物みてえだわ。
かつきーや、パネえっス。

んでそんな海王に守られながら逃げる俺。

俺ってホントに……弱いんだわな。

「庶民！その男の決意を無駄にするな！！」

あゝ、あん時の。

サムワン海王は……戦ってるな、一人で。

観客連中の護衛っぽいのも一緒に戦ってるみたいだけど。
スゲーや、ホント。

乱戦になってるみたいだけどさ、一人だけ一際輝いてるもんよ。
身体中に弾丸受けながらも怯むこと無く向かってくサムワン海王。
脚が、肘が、膝が、向かってくる相手に食い込み筋肉を潰して骨を
砕く。

俺もあんな風になれんのかねエ。

「停！」

ナイフかね、持ってる方がいらっしゃるわ。

俺と、偉そうなガキの前に。

「退け！貴様のような下種が王たる我の道を塞ぐでない！！」

俺の周りつて、結構すげー人らが集まってんだなあ。

足震えてんのに、虚勢張っちゃって。

ホント……みんなかつきーわ。

って腕切られてんじゃねえか！

ズッパリと、肩から肘に向かって太い赤い線が通ってるよ。

まあ挑発すりゃあ向かってくるのは当たり前なんかも知れんけどさ。

……どうしよっかな。

今までの俺だったら逃げてんだろっなあ。

爺ちゃんの傍に行けば多分安全だろうし。

でもなあ……見ちゃったもんなあ。

サムワン海王、かつきかった。

偉そうなガキも、かつきかった。

そんなん見せられちゃあ……退けんだろ、男の子的に。

見栄っ張りで意地っ張りなもんだろ、男ってのは。

「しょ……みん……」

かばう様に、ナイフのおっさんとガキの間に立つ。

かわして、避けてっつてのはダメだわな。

後ろのガキに当たっちまうかも知れん。

やっぱ一生に一回か二回ぐらい、こんな風にかつきくなってみたいもんだろ。

「庶民じゃねエっての、俺は晃気……渋川流柔術、渋川晃気だッ」

突き刺すように繰り出してきてるな。

狙いは……やっぱ首だよな。

脇腹だったらありがたかったんだけどなあ。

タイミングを合わせて向かい来るナイフの柄を掌で押し上げる。

こっちの狙いは小指、力を込めるにや意外に大事なところ。

当てて、緩んで、威力もなんもかんも半分以下になったかね？

さて、この刃先をどこで受けるかだけど……上向きか。

祖父ちゃんとおそろいってのもかつきーかもな。

千切れるような痛みが左目を襲う。
刺さってる……明らかに。

でも間違いなく、出来たちよつとの隙。
力を込めて、押し込む暇なんか与えねエ！！

手首を掴み、絞め、極める。
そのまま躊躇い無く、思いつきり、地面という名の凶器に向かって
振り投げる！！

ダアアアンと打ち付ける音が聞こえる。
カハッと肺にたまった空気を吐き出している。

隙……アリ。

身体を小さく縮めて、思いつき引きのばす。
伸びる筋肉から伝わる力と、自分の体重すべてを踵に集めるように、
相手の顎に叩きこむ。

……へへっ、泡吹いて倒れてら。
なんでイ俺だつて……やりゃあ出来るじゃんか。

男の子でのほほん（後書き）

カッコイイ、サムワンが描きたかった

カッコイイかなあ

お見舞いのほん（前書き）

一月ぶり

これからは週一更新を心がけるつもりです

お見舞いのほほん

あゝ、暇だ。

のんびり寝る事は好きだったはずなんだがねえ……暇だわ。

飯食って、それ以外の時間はベットの上でだるだるゝん。

実に退廃的で素晴らしい生活を送っているぜ。

まさに『まったりとした人生』そのものと言いたいようもないんだが……やっぱなんか違うね。

小雪や辰子や忠勝や、あいつらといないけりややっぱつまんねえや。

だってさ、こちら遊び盛りの小学六年生ですよ!?

そして今は夏休み! あゝ夏休み! ちよいと踊ってみませんか? つて感じの夏休みだぞ!!

なのに俺はベッドの上、そうベッドの上。

……逃げたい、逃げたいね、果てしなくに。

だって怪我したのはしたけどさ、ナイフみたいなので刺されたけどさ、痛くないもん!

目だって包帯巻いてるし余裕のよっちゃんイカだろ。

見舞いはまだ面会謝絶だから誰も来ないしさ、三日くらい隣の病室の英雄ん所忍び込むくらいしかしてないしさ。

紅葉さんはもう面会とかいろいろ大丈夫ですよって言ってんのにあのクソジジイがさ!!

ぬゑにが君はまだ若いからそついうけどね……だ!!

医学界の権威に病院長だか何だか知らんけどその程度が意見してん

じゃねえっての！

葵なんたらって言ったっけ？

川神市で愛されてる病院らしいけど、俺ここに来たくなかったのになあ。

全部爺ちゃんが悪い、うむ、悪い。

とりあえず我が地元である川神市にすぐさま連れて来てくれた訳だし、紅葉さんも呼んでくれたし。

でもさ、俺が怪我したのだって全部爺ちゃんのせいじゃねえか。

そりゃ潰れるかもしれないかって、見えなくなってたかもしれないって目を、中国なんたら歴史でそこまで進行しないように堰き止めてくれたのは感謝してるさ。

視力が落ちたりなんてゆー弊害は後々出るかもしれないけど、とりあえず今の段階で見えなくなるってことはないんだと。

でもよ、やっぱ俺がこうなったのは爺ちゃんのせいだ！

あげに怖い真似、なあんでしちまつたんだろうねえ。

ふっ、これが若さか……。

まあ助けてもらったのは爺ちゃんがいたからこそだし、なんとなく今のままじゃいかんってこともわかってきたしな。

英雄に会えた事、これが人生で俺を大きく変える出来事だったので。

ぱっぱっぱーぱーぱーぱーらららら。

ぷろじえくとえくつくす、彼はこうやって栄光を掴んだ……。

輝いてるぜ…… スポットライトど真ん中だ。
しかしなあ…… 何の栄光掴むんだろ？
俺ですら予想できないとは…… 俺、おそろしい子！？

…… ハア、つまらん。

爺ちゃんは中国帰ってなんかいろいろぶっ壊すみてえだし、紅葉さんは別の病院に行っちゃうし、日々の楽しみってヤツがないね。
動き遊び盛りでずせ、おいちゃんは。
ナースさんとおしゃべりすんのもなあ、なんかなあ。

小雪らはとりあえず後一時間せんと来んし。

今日から面会謝絶も取れるんだよな、でも病院開くの九時からだし、今朝の八時だし。

アニメ今日はおもしろいのないし、とりあえず山ちゃんとおはようし
たくらいかね。

英雄のとこ行けばいいじゃねえかって？

忍び込んで遊ぶ訳ですね、わかります。

…… H A H A H A、行けるもんなら行ってるさ。

いや英雄もね、特に大した支障が出る様な怪我じゃなかったんだと
これで死んだりしてたら、何かなんてか…… ねえ。

でも流石の紅葉さんも全快までもって行けなかったんだわ。

紅葉さんが負けた！ってことはスゲー意外なんだが、まあ相手が時間じゃあな。

人間か敵うもんじゃねえさ。

若干勝ちかけてるっぽい人がいますが何か？

まあとにかく手術も三時間以内くらいだったら余裕だったみたいだけど、結局紅葉さんが着いて手術し始めたのが斬られて五時間たってからだったらな。

なるほど、爺ちゃんとか英雄を襲うのは事前からの確定事項だったわけね。

だからこそちよつと細めの道を通って人目の付かないところに擂台を作った訳だ。

でもさ、普通の医者なら腕一本斬り落とすような事態だったんだってさ。

それがほんの僅かだけ、支障を残す程度に済ませたんだからやっぱ紅葉さんってすごいんだな。

ぶっちゃけると投手なんてことは出来んのだと。

微妙な制球とかするための、ほんの僅かな腕や肘の変化は再現しきれなんだってさ。

なんか将来期待されてたっぽいこと英雄は言ってたけど、まあ嘘だろうよ。

その辺言つとすげー怒るんだよな、わけわかめ。

でもすぐ収まるんだよ、野球が好きなのわけ投手が好きなのわけではないってさ。

考え方を少しだけ変えようとする者がいるのに王たる我が出遅れてどうするー、って。

なんか俺のこと晃気とか名前で呼びだしたし、ほんとわけわかめ。ま、おもしろいヤツだし一緒にいて楽しいし、まったくその辺はイイ

んだが……。

「ふはははははは、晃気よ！朝餉の時間であるぞ！！」

なんでこんな台風みたいな姉がいるんだよ！

聞いてないよ、俺は！

詐欺だ！裁判だ！弁護士を要求する！

弁護士が悪い奴を追いつめるんだよな、知ってっぜ！

「おはよーございまーす」

「うむ、元気があつて良いぞ！」

そいつはどうも。

はつきり言おう、何この娘？

英雄の姉だよね、姉だよね。

溢れだすカリスマチックな何か目の離せない感じとか、我とか、笑い方とか、そっくりなんだけどさ。

なに？英雄の姉はモンスター？

「ふふふつ、元気な一日は食事から始まるからな。

晃気よ、我が九鬼の全権力を用いて取り寄せた最高の食材だ、心して噛み締めよ」

「わーい、僕うれしーな」

「そうか、そうか、それは良かった」

同じニオイがするんだよ！あの黒髪の危ないヤツと！！

何この後ろ髪のチリチリ感。

焼けてんじゃね、燃えてんじゃね、焦げてんじゃね、禿げてんじゃね。

「……晃気よ！どうだ！！我が食べさせてやるぞ！！！」

そう言っただけ俺に向けて箸に挟んだごっつい肉を向けてくる水色髪の少女。

『九鬼揚羽』って名前の英雄の姉らしんだけどさ。

何この状況、何で俺の目の前に伏し目がちにこっちを見つめてくる女の子がいるわけ？

頬染めてるし！しかも可愛いし！年上だし！おっばい意外にでかいし！

何この状況、何この状況。

いや待て、クールになれ。

そうだ、何がいけなかった？

第一この人と会って二日くらいしか経って無い訳だ。

何になんてこの状況？

確か一昨日、英雄の部屋に忍び込んで遊んでたらやって来たんだよね。

んでいきなり俺の顔見たら扉ぶっ壊しながらどっか行っただのさ。

いや意味わからん。

それになんて壁なんか壊せんの！

まあ周りにもいるんですけどね、複数！！

「た……食べないのか？」

これは……どーすんの、俺！？

誰か教えて、ねえ誰か！

「食ってやれ、女に恥かかすんじゃない」

アンタは……俺の中の天使、薫さん！

白い羽と天使の輪っかに傷だらけの厳つい顔がかつきーぜ。

「食っていい、そう思った時期が俺にもありました」

アンタは……俺の中の悪魔、刃牙さん！

黒い蝙蝠の羽に尻尾が妙に似合ってたかつきーぜ。

これは……まあ腹減ってるし、いいだろ。

てな訳でいただきます。

「コウキ、お見舞いに来たよ……」

ゲエ、小雪イ！？

……食っていい、そう思った時期が俺にもありました。

「えへへへ……てんねんげ」

いっせー！

G I E E E E E E E E E E E E E E E

E ! ! ! !

お見舞いのほん（後書き）

というわけで、何とか構想が固まりつつあります
こんな作者ですがお付き合いいただければ、幸いです

あさりでのほほん（前書き）

妙……まさに妙ちくりん

あさりでのほほん

……嫌なもん思い出しちまったなあ。

あん時は小雪が初めて俺に食い物作ってくれたんだよ。

俺らの住んでる渋谷家、まあここには結構な数の住人がいる。

俺と小雪と祖父ちゃんと、あとから居候するようになった辰子と天使と亜巳さんと竜兵。

未成年六人と爺さん一人つつう何ともアンバランスな家族構成だわ。

俺の両親は死んだみたいだし、小雪の親父は知らんがお袋は塀の中だし、板垣家は二人揃っての逃亡。

祖父ちゃんが唯一の収入源なわけだが警察勤めでエリートなわけでもない。

まあ渋谷老って言われて特別扱いらしいけどさ。

で、だ。

家の仕事はいるヤツら、つまり俺らがする訳だな。

飯が俺、掃除が俺、洗濯が俺、ゴミ出しが俺、その他雑用が俺。はい、全部俺ですが何か？

だつてさ、仕方ねえじゃねーか！？

あいつらに任せたら家ん中が崩壊しちまうんだぜ！！

てかなんで掃除してんのにゴミを増やすの！？

飯作ってんのにゴミ増やすの！？

洗濯してんのに汚れが増えんの！？

ゴミ製造機ってヤツだな、やってらんね。

まあそうは言っても手は足りんからな、何とか言って手伝ってもらわんといかんし。

亜巳さんいりやあいんだけどなあ……。

あの人予想外に家庭的なんだよ、いやマジで。

考えてみりやあ辰子らの飯作ったり体操着に名札付けたりとか、あの人以上やる人間いねえもんな。
もし嫁にすんなら亜巳さん一択だな、間違いない。

「一万年と二千年前からあいしてる」

ごきげんだねえ、小雪さんや。

コイツも隣についてて手伝わせるんだったらイイとこいくのにさ。
辰子もそうだわ、一人……ってか天と竜兵がいなけりや上手いくのか。

ってアイツらのせいじゃね!?

アイツらが邪魔するから無駄な手間がかかるんじゃない??

亜巳さんいるときゃあのアホ二人がバカできねエからはかどるんじゃない??

おっふっ……、何と言う驚愕の真実。

目からウロコだぜイ。

ホントは何も出ないけどな!!

「あさがいっぱいパスタがうまい」

「かーけて食べればパスタがうまいー」

パスタ今日作らねえけどな！

小雪も辰子も、一緒にいりゃあちゃんとやってくれるかな。

やっぱ二人も女の子ってことかね？

料理作る時になれば必ずと言っていいほどに手伝ってくれるし。

「手先が器用選手権とか意味わかんねーし！バカなんじゃねえの！？」

「俺だつて繊細な指使いが出くぶるっ！？」

おお、見ろ、鳥肌鳥肌。

バルーンアート選手権とかだったら出たらイイとこいけるかもなあ。

意外な才能ってヤツ？

いや、才能あふれる俺は辛いぜイ。

にしても爺ちゃん、家で喰ってくかと思えば祖父ちゃんとどっか行っちゃうし。

せっかく久々に会えたんだからさ、なあ。

そいやあ小雪らが会うのはほぼ初めてなんだっけ？

中国行く時もだいたい一人だしねえ。

最初はめんどかったんだぜイ。

帰って来た時には小雪は俺の背中から下りなかったし。

コアラじゃねえっての。

辰子は暴れまわってたらしいし、亜巳さんもなんかいらついていたらしいし。

……竜兵は俺のパンツはいてたし。

いや、気のせいかな。

ああ、おお、うむ、気の迷いか記憶違いだよな!?

H A H A H A …… ははは……。

ともかく!今ではある程度慣れっこになったけどさ、帰った時がつらいんだよ!!

だってボロボロ、洗濯ものがこんもりだぜイ!!

祖父ちゃんは自分のしか洗濯とかしないからさ。

今ではもうそんな事も無くなっちゃったけど一週間制服で過ごしたってんだぜ?

信じられるか?

亜巳さん、俺がいないときには……ってか休みのたびには帰ってくるけど、帰って来たたんぶん殴ったって言ってたかなあ。

甘やかしすぎたのかな?

いやいや、んなこと言うけどさ俺以外やれるのいなかったら俺がやるだろ?

最近を手伝ってもらったようになったからか、小雪と辰子がいろいろやってくれるけどさ。

「コウキ―、お酒入れたよ」

「うっし、ならあとちょっとで完成だわな」

今日の献立はあさりの酒蒸しにあさりの味噌汁、あさりの炊き込みご飯に豆腐にあさりの酢味噌和え。

ス―パーで安かったからなあ。

おひとり様一パック100円、こんな時は人数多いとお得でいいわ。

「天ちゃんも竜も運んでよー、ご飯出来たよー」

「待ってました！タツ姉、腹減っちまったぜ！」

「竜も起こしてあげてねー」

「ヘイヘイツと、オラツ！起きろ変態！！」

「晃気……お前の愛が痛いぜ……」

「……何でこんなのがウチの兄貴なんだよなツ！！」

めり込んでんねえ、天の脚。

辰子や竜兵真似て、アイツも烈のおっちゃんに中国拳法習ってるしな。

痛いわ、アレは。

なんだっけ？『八極拳』だっけ？

みんなよーやと思うわ、マジで。

模擬戦しろとか言われなきゃいいんだけどなあ。

明日にも帰るって言ってた爺ちゃん。

こんなこと本人の前じゃあ言えないけどさ、今日一緒に寝でもしたかったんだよなあ。

大変らしいもんさ。

武術省をぶっ壊す、とか言ってる頑張ってるっぽかったもん。

まあ妖怪だから心配はしてないけどね、ホントなんだからね！！

……どうよ、忠勝の真似。
似てる？

「いただきます」

「ウチのあさり！！」

「晃ちゃん、とってあげたよー」

「俺の役目だつてのに！！」

「誰の役目だ、誰の」

うるさいわな、相も変わらず。

まあそれも楽しくていいんだけどさ。

「ガキども、お姉様の御帰還だよ！！」

「ケーキ持ってきてくれるおねえさんだ」

「どの口が言ってるんだい、どの口が!？」

「いひゃい」

まんじゅう、小雪も亜巳さんの前じゃあ形無しだわな。
流石お母さん。

「おばちゃん」

「……世の中に言っていることとイケない事があるんだよ、ねえ……
……晃気?」

何故に!?!?よろこぶところここは!!

「おねーさんとじっくりお話しようか、二人で?」

……うん、やっぱにぎやかでダルいけど、ウチは家族はイイもんだ
ねえ。

あさりでのほほん（後書き）

次回も日常編

千花の飴でのぼん（前書き）

今回は千花視点、口調が……

千花の飴でのぼん

「千花、晃気くん来たから代わりに対応してくれる？」

「わかったー、今行くから」

何でうちの親は毎回私を呼ぶのかしらね？

べつにそんなんじゃないって言えば言うだけ、勝手に盛り上がってるんだから。

もう意味わかんないわよ。

私と晃気くんの付き合い？

そうねえ、かなり長いんじゃない。

榊原さんとか板垣さんとか源くんとか、多分いつも一緒にいる人たちより昔から知り合いだもんね。

いわゆる幼馴染ってヤツ？

んーちよつと違う気もするわね、それだったら。

でも一番近いのはそれなのかなあ。

それにもしそうならもつとイケメンが良かったわよ。

まあ晃気くんもカッコ悪くはないんだけどね。

背はちっちゃいし、もうちよつとクールな方がポイントアップって感じ？

お祖父ちゃんに良く似てるわよ、目付き以外は。

そうねー、鋭い吊り目は父親似なんじゃないの？

死んだって言ってたし、写真も見た事無いからよくわかんないんだけど。

そうそう。

今じゃあお調子者で飄々としてる感じだけどさ、昔はめちゃくちゃ暗かったのよ？

この社交的な私が話しかけたくなくくらいに。

何？間違ってないでしょ？

それで……どこまで話したっけ？

「ういゝす、晃気くんのお買いものですよ」とくら

「あ、いらっしやい。

いつものでイイの？」

「おう、お土産は無しだな。

金欠なんだよ、今月は」

いつものってことは、羊羹一本ね。

にしても好きよね、和菓子。

家が和菓子やだから晃気くんと知り合えたみたいなものだけどさ。

常連さんなの、昔っから。

昔つてのも晃気くんとかより更に昔。

晃気くんのお祖父ちゃんと家のお祖父ちゃんが友達だからその頃から。

戦争とか言われたって、いまいち実感とかわかないけど、そんな時代からの知り合いなんだって。

家は店はちっちゃいけど江戸時代とかから続く和菓子屋だから、田舎に結構な田んぼとか土地とか持ってるの。

おじさんがお世話してるみたいだけどアレって大変よね。

疎開だっけ？危ないところから逃げてくるヤツ。

その受け入れ口みたいなのになってたんだってさ。

まあたまたま晃気くんのお祖父ちゃんのお師匠様。

何のなんて知らないけどその人と、家のひいお祖父ちゃんが上司部下の関係で、だから家に逃げて来たんだっていつも聞かされたわね。その時お祖父ちゃんと友達になったんだって。

戦争終わって平和になって、みんながそれぞれ働き始めて、ちょっと顔にシワが目立ち始めてから再会したんだってさ。
なんかドラマチックなもん感じるけど、男と女とかだったらよかったのにさ。

あ、でもお父さんの初恋の相手は晃気くんのお母さんだって聞いたことあるわね。

中学生だから今の私たちと同じくらいの年頃に、初めて会った。ちよつとこっちはドラマチックなのかな？

「そうだ、お茶でも飲んでく？」

「いやゝありがたいねえ、俺緑茶な」

「相変わらずジジ臭い趣味」

そのおかげで家に買いに来てくれるから、そんな事大きい声じゃ

言えないんだけどさ。

私が最初に会ったのは小学一年生の頃。

両親がほとんど家にいなくってお祖父ちゃんっ子の晃気くんだけど、死んだって言う事実はやっぱりつらかったんだと思うわよ。

こう……ズーンって感じに、ダラーンって感じに重い空気を纏ってたもん。

私は両親二人とも生きてるし、それが当たり前だっと思ってるけど晃気くんはどんな気持ちなんだろう？

榊原さんも源くんも板垣兄弟も、みんなみんな親関係で何か持つてるって聞いたし。

わかるよって言ったって、それが私の口から出たら多分嘘で、だからそんなみんなが集まってるのかな。

傍から見ればそんな事全く感じさせないけどね。

多分真与もクマちゃんも気付いてなくって、昔っから晃気くんのことと見てる私だから気付いたのかな。

晃気くんなんて一月もしてたらまったく別の印象に変わっちゃってたもん。

いっぱい泣いていっぱい文句言って、人の見てないところだったら私なんか体験したことないくらいの感情が身体の中をかけてたんだと思う。

小学校は違ってたけど一緒に遊んだりもしたことある晃気くん、私なんかの前じゃあそんなそぶりも見せなかったっけ？

「ぶはあ……中々腕をあげたんでねえの」

「はいはい、ありがとありがと」

「で、お菓子なんかは何かないんかね、ばあさんや？」

「うっわ、サイテーね。」

こんな美少女見つけてそんな事言う？」

「ははっ、美www少www女www」

「どーん」

お茶かぶって、イイ気味よ。

はあっ！？私が晃気くんのこと好き！？

ナイナイナイ、それは無いわよ。

恋とか愛とか、そんなんじゃないわよ。

……ああーもう！

真与にもこの類でよく聞かれるけど私はそんなじゃないわよ。

好きか嫌いかで言えばそりゃあ好きだけど、そんなんじゃないわよ。

男と女の間には友情は成り立たないってテレビで見た事あるけど、晃気くんとの間にあるのは多分友情。

「じつつあんでした」

「お粗末さま……っていつもより早いわね、何かあるの？」

「何さ、俺に惚れたとか」

「ありえないわね、それだけは。」

付き合っんなら断然イケメンの源くんがイイに決まってるでしょ」

「まあ妄想だけならタダだからな。」

「犯罪者にはならんでくれよ？」

「……アンタみたいな欲求不満とは違うの」

もし友情が成り立たないんなら、晃気くんとの間にある感情。

手にかかる弟か、たまーに、ごくたまーに頼りになる兄かしらね。

あ、そうだ。

「はい、忘れ物」

「……ケケケ、大事に食べさせてもらっぜ」

「勿論、この私のお手製だから無駄にしたら殴るわよ」

ひらひら手を振って、今日は商店街で買い物が。

大変ねー、アイツも。

欠食児童を抱えてるわけだもんねえ。」

あげた飴の残りを口に含んで……うん、さすが私。
実にデリシヤス。

そうでも無かったら……まあもし私が行き遅れたら婿に貰った上げ
ようかな？

ま、ありえないけどね。

千花の飴でのほほん（後書き）

晃気くんの攻略対象ヒロインは全部で六人

コラボ企画『川神聖杯戦争』についての広告（前書き）

参加する自分も楽しみなこの企画、よろしければ目を通してみてくだ
さい

本文は発案者のyoukey様が現在執筆中です

広告はSEIMA様が書いてくださいました

コラボ企画『川神聖杯戦争』についての広告

川神鉄心の気まぐれで行った。

魔術儀式よって呼ばれた平行世界の7人の戦士

『悪いが、俺の相棒のために死んでくれ』

襲いかかるは野獣を身に宿した、闇の王者

『屑がその程度の力で王に挑むとは片腹痛いわ!!』
五行を統べる王の軍勢が敵を殲滅する

『そんな読みやすい攻撃、僕の技のいい餌だよ……』
策略の柔術使い手の青年の技が冴える

『私のマスターに指一本触れさせない!』

戦闘一族の末裔の不屈の護り手が、主の最強の盾となり

『へ？戦争？じゃあ俺巻き込まない方向で、見学してっからさ』
まったりのほほんとは真逆の現状に、格闘士としての血が騒ぎ出す

そして、出会うことのなかった光と闇が今、交差する

『俺は、お前みたいな武術を使う偽善者が嫌いなんだよ!!』
孤独な悪意が牙をむき

『コイツとの絆を護るために、お前を撃ち殺す!!』
銃弾の拳を持つ青年が結んだ絆のために拳を振るう

そして現れる最強の敵
『お前が最後の生き残りか……。さあ私の渴きを満たしてくれええ
え!!!!!!!!!!!!!!』

鎬を削る武の狂宴

その先にはなにが待つのか

運命の『死の遊戯』バトル・ロワイアル 今開演する

『問おう…………お前が俺のマスターか?』

マジこいSS作家7人による、真剣で私に恋しなさい!! コラボ企画

『川神聖杯戦争』(企画原案youkey)

近日公開

参加者募集は既に締め切ったそうです。

コラボ企画『川神聖杯戦争』についての広告（後書き）

応援よろしくお願いします

大食いでのほほん（前書き）

再び日常

大食いでのほほん

「大食いだぜ！」

ハア！？いきなり何言ってるの、この天使ちゃんは？

学校から帰って来たかと思えばいきなりの大食い発言。

確かにお前は良く食うけどさ、食い物への執着半端ねえけどさ。

「時代は大食いだぜ！コウ兄、大食いタレントにウチはなるー！」

「天ちゃんテレビ出るのー？ だったらサイン貰わないとねー」

「テレビ出るの？ だったら僕は無限パンチ」

「晃気……俺はお前とがもつぶるアアアアー！！！」

「……言わせねえよ」

忠勝に殴られた竜兵は置いていて、だ。

大食いタレントなあ。

食っただけで金もらえるってのはかなり魅力的だよな。

大会に出るってのもアレだけど、天のヤツまだ小六だしさ……。

「……ヤベ、俺って天才かもしれないねえ」

「てっんさい！ てっんさい！」

「照れるぜイ、小雪」

そうだよ、ためしゃあイんじゃねえか。

確かこの前翔一とクマちゃんと、飯食いに行ったところでジャンボ餃子とかあったっけ。

完食すれば三千円ってヤツ。

家計も潤うし最高だろ、コレ。

「うつしゃ、今日は外食だぜイ！」

「ウエーイ」

「タダくんも一緒に行こうよー」

「俺もか？ まあ暇だからついてってやるよ」

「ヒデオは呼ぶの？」

「まあな、多い方が楽しいだろ？」

ちょうど部活も終わったころだろ？

仕事とか行かなきゃいけねえんだったら仕方ないけどさ、誘えるなら誘うべきだろ。

「オラッ、リュウ！とっと起きやがれ！！」

竜兵の方は任せといて、財布しっかり持ってかんな。

目指すは川神駅前のラーメン屋！

チャリ乗れ、野郎ども！！

「乗った〜！」

小雪よ、そこは俺の背中の上だ。

まあどうせ二人乗りだろうとは思ってましたけどね！！

「私も乗ったぞー」

「ウチも完ぺきー！！」

自転車買っ金あったのかって？

甘いぜ、砂糖のように甘いぜイ！！

祖父ちゃんが警察から使い物にならんやつ貰って来てくれたのさ！

つまりタダ、いや〜ラッキーってヤツだわ。

犯罪？いいえ、ケフィアです。

まあくれるもん貰ったんだからイイだろ？

ちなみに今日祖父ちゃんはおそこだな。

爺ちゃんの方はもう一週間くらい前に帰ったけど、久々に一緒に寝れて楽しかったぜ、ホント。

……二人いっぺんに付けられた稽古は死にそうになりましたが。

あア……生きてるってイイもんだねえ。

それよりあそこってどこかって？

言わせんなよ、恥ずかしいぜイ。

爺ちゃんも帰つてやることあるつて言つてたけど、そこまでしてやる事がここにあつたんかいね？

俺の稽古、って思えるのは驕りなんかな？
でもそれ以外考えつかんのだよなあ。

ま、
イヤヤ。

どんなんでも俺にとつちやあ変わらんし。

俺って器広いわ、いやマジで。

「真実の愛ってヤツは……理解されにくいもんなんだな」

「安心しとけ、一方通行だから」

「忍ぶ恋もまたイイよな」

お前もう帰れ。

って家が一緒だよ……。

俺が悪いのか、なあ、俺が悪いのか！？

誰か教えてください、それだけが僕の望みです……。

ま、おふざけもこの辺で。

「コウキ号、はっしゅん」

「W
R
Y
Y
Y
Y
Y
Y
Y
Y
Y
Y
Y!
!」

「あつぽう」

はい、久々のきやつほう頂きました！

てな訳でラーメン屋。

ジャンボ餃子様の御降臨だぜイ！

デカアアアアアイツ、説明不要！！
ってマジでけエ……。

イヤどうすんの！

味は前食ったから間違いねえけどさ、どうすんのコレ……！

小雪の顔くらいあるんじゃない！

3kg?5kg?

HAHAHA、重さなんて忘れちゃったぜイ。

てかどうすんの。

全員分頼んじまったぞ……。

俺と立候補しおった小雪と辰子を合わせりゃあ、……と……七人分……。

一つ二千元だから……いちまんよんせんえん。

ぱ……どん？

一週間の食費くらいじゃねえの？

……ヤバくね？

あああああああッッ！何で頼んじまったんだ、俺は……！！

「コウキ」

どしたよ、小雪。

「僕もういらな〜い」

「何言つとんだデメエは!？」

「きゃふう〜」

半分にもなつてねえでないの!？
食べ物粗末にしちゃいけませんってあれほど言ってるでしょうが!!

「でも……お腹いっぱいだも〜ん」

うえ、ダメだこいつ。

「ざわめくころろにあふれるせんりつと〜」

歌いだしちまったよ……。

だめだな、コイツは。

でも……あの子、可愛いよね!

意外に熱いからな、俺は好きですぜイ。

「私もお腹いっぱいだよー……zzz」

寝やがった……じゃあ注文すんなよ!!

「フハハハハハハ、王たる私の進軍を止められると思うな!!」

「負けねえッ！……ウメエ！！でもへらねえ……」

「これが愛の試練……俺は乗り切ってやるぞおッ！！」

「……飯ぐれエ静かに食べねえのか、こいつらは」

向こうは大丈夫かね。

ま、味はイイし、飽きが来なけりや何とかなるだろ。

「飽きたわ」

「早くね、なあ早くね？」

「知らん！餃子ばかり食っておれるか！店主、ラーメンを寄越せ！！」

……何も言えねえ……。

小雪のは五分の一、辰子のが四分の一、英雄が半分くらいか……。残すなよ、特に最後。つたくどうしろって言うの、コイツをさあ。

「ゆあゝべすとゝ、まいべすとゝ」

「生きてるんだから失敗なんてメーじゃないー」

なっ、殴りてえ……。

始めて小雪と辰子を殴りたいと思っちまったよ、俺は。

「僕は榊原小雪。マシユマロ好きの中学1年生」

「私は板垣辰子だよー。お昼寝が大好きー……zzz」

「僕達なんの変哲もない普通の女の子、のはずなのに」

「突然、不思議なー「ズリイぞ、ウチもやる！」あれー天ちゃん、餃子は？」

「もう食えねえ、チャンピオンは止めだぜー！」

「スーパーヒーロー誕生ってわけ」

「ユキ、一人で進みすぎだろー！」

もうイイ……イイももう。

ただ一つ、ここは店だからもちつと黙ってる。

まきゅまきゅ……美味しいと思うんだがねえ。

「俺の……試練……愛が……真実……」

あとちつと残して竜兵は箸が止まりやがった。

まあここまで減ったんだからすげーんでねえの。

残ってるけどねえwwwwwwダセエwwwwwwww!!

ま、イイか。

あ、会計頼みますね。

「結構きついな、これは」

「おりよ、全部食べたのか？」

「まあ……な、しかし相変わらず異常だな、テメエは」

「ボウズ……次はもっとデカクしといてやる」

「あざーっす」

てな訳で一万八千円の臨時収入、ありがてえ限りだぜイ。

へ、餃子の残り？

俺が全部食ったけど何か？

残飯処理はどこだって、母親の役目だろ。
俺、男ですけどね！！

「マシユマロ買いにいこ」

行くわけねえだろ！！！！

大食いでのほほん（後書き）

次の山までもう一回くらい、日常編を挟む予定です

コラボ企画『川神聖杯戦争』出場者紹介（前書き）

自作してみましたコラボ企画参加者紹介

コラボ企画『川神聖杯戦争』出場者紹介

川神市で行われる聖杯戦争……

誰が起こして、どんな目的を持っているか……

そんなものはどうだっていいのだツツ!!

ただこの場に最強が決まるツツ!!

それが全てだ!!

地上最強を目指して何が悪い!!!

人として生まれ男として生まれたからには誰だって一度は地上最強を志すツツ!!

地上最強など一瞬たりとも夢見たことがないッッ!!

そんな男は一人としてこの世に存在しないッッ!!

それが心理だ!!!

ならば見せてみせよッッ!! 魅せてみよッッ!!

生き様を!! 信念を!!

己の身を焦がす果て無き想いの集大成をッッ!!

全選手入場ッッ!!!

狼獣魂その身に宿し、弾丸の拳がやってきたッッ!!

『真剣で私に恋しなさい』最強美少女と銃弾の拳を持つ男』より
【東雲神無】だアッ!!

「俺が背負った絆のために……お前たちを撃ち抜くッ!!」

戦いたいから、己の獣が疼くから、だから全員ブッ潰すッッ!!

『闇に咲く花たち』より【渡辺豪】だ!!!!

「イイねえ、そんな姿見せられたら……我慢なんぞ……できるわけねえだろおおおおッ!!!!」

男の娘な外見に、燃え盛る炎を引っさげて来たツツ！！

真剣で私に恋しなさい！〜暦の五月〜 より【皐月薫】！！！！

「私の罵倒ならご自由に、信念に従った行動に……後悔や反省はありませんから」

「武術？ そんなもんは弱いヤツのやるもんだ！ 本物の闘争を見せてやるッッ！！」

『真剣で私に恋しなさい
とある孤独な天才』より【大神宗介】
だ！！

「どいつもこいつも『ホンモノ』だらけでうれしいねえええええ
ッッ！！」

コイツはホントに場違いじゃないのか！？祖父ちゃんに放り込まれたなんて言い訳は通用しないッ！！

『のほんとと過ごすために』より【渋川晃気】の登場だ！！

「身体が熱い……だと！？祖父ちゃん……育て方間違ッたんじゃないのかア！！」

柔術家？空手家？どれとも違う！俺はあの娘の守護神だッッ！！

『真剣でアイツに恋してる！』より【港三千尋】の登場だッッ！！

「不死川を傷つける？そいつはちょっと……笑えない冗談だなア……！！！！」

数多の刃が空を覆う！遠距離なら無敵か！？でも疲れる行動はか
べんなッッ！！

『真剣で王に恋しなさい！』より【霧夜王貴】がやってきたッッ！！

「『貧弱王』……ククク、その口二度と開けなくしてくれるわッッ
！！」

以上七名により川神せ「ほう、ずいぶんと面白そうなことやってい
るじゃないかア？」……そうだったああッ！！

忘れていたぞこの人を！！忘れちゃいけないこの人がやってきた！！

女が最強で何が悪い！私こそがこの世で一番強いヤッツッ！！

原作『真剣で私に恋しなさい！』よりメインヒロイン【川神百代】の登場だ ツ！！！！

「満たしてくれるか、貴様なら！！私の渴きをッ！！！！」

川神市で行われるバトルロワイヤル！！

パートナーたちとともにこの地を駆け抜け続けるのは一体誰だッ！！

偉大なバカヤロウ八名！！！！

この地上で誰よりもッ！！

誰よりもッ！

最強を飢望んだッッ！！

信念を貫き通したッッ！！！！

川神聖杯戦争！！！！

ここに開幕！！！！

コラボ企画『川神聖杯戦争』出場者紹介（後書き）

刃牙風味ですね

風鈴でのほほん（前書き）

下ネタ警報

じゃっかんですが

風鈴でのぼん

「ふはあ」

「ふむう」

「ふほおー」

まったり過ごせてる……。

夢じゃねえよな？ドッキリでもねえよな？

「ころころ」

「ころー……zzz」

夢じゃねえ……、ドッキリでもねえ……。

現実……これが現実……！！

よっ……ほおい！！

いやー何日、もとい何週間ぶりだ？

こうやって縁側で寝そべってられるってさあ！？

天や竜兵がいるとなるとこうも行かんけどさ、今日はいない……！
ゲーセンに連れてってくれた忠勝様々だな、こりゃ。

「ちりちりん」

「zzz」

風鈴の音がすんばらしいね。
うちに風鈴、これで夏は乗り切るもんだろ？

もう三時くらいだから日も段々落ちてっし、イイ……気分だわ。

午前中、てか昨日から烈のおっちゃん着てたけどさ、昼飯食ったら
帰ったし。

週一くらいで香港から来てくれるんだからマメだよな、あの人もさ。

土日は祖父ちゃんも張り切るもんな。
疲れたぜイ、いやマジで。

「小雪い、麦茶とつてくれえい」

「はいはいほ〜。」

タツ〜、麦茶とつて〜」

「はい、晃くん、麦茶とつて〜」

「……いいよもう、テメエら」

でもこれで終わりなんだよ！
天みたいに騒ぎ倒す訳でもねえし、竜兵みたいに迫ってくる訳でも
ねえ。

俺が麦茶入れさえすれば全部おしまい！！

じゅうぶんだろ、なあ。

べっつにさ、そんなんが嫌な訳で無いのよ？

ただたまにはさ、こうやって過ごしたいわけよ。

ぶっちゃけこいつらない日常なんか考えつかんし。

でも……やっぱいいわあ。

風が気持ちいい、麦茶がうまい、せんべいも美味い。

「ばりばりばりばりばりばりばりばりばりばり」

「あーむ、あむあむ、あーむ、あむあむ」

あり？俺の二枚目は？

だって一袋入れたよ？

この前翔一とクマちゃんに行ったせんべい屋で。

出来が悪いの詰まった袋、安値で買ったけどさ。

いっぱいなんて買えなんだよ？

祖父ちゃんに一袋渡して、さつき烈のおっちゃんに一袋あげて、忠勝にもあげて、英雄にもあげて。

……最後じゃね、コレ？

「コウキ、熱いお茶ちょうだい」

「しゃらつぷ、ちょっと俺いろいろ懐かしんでっから」

最後の一枚……手中。

言ったってしゃあねえし、こいつを味わいますかねっくら。

さてさて、頂きますかい。

「あーむ……おいしかったねー」

「指にまで噛みついてンじゃねエッ!」

「はうわぁー」

トサカに來たぜイ。

肉まんの刑じゃあああぁあつ!!!!

つてやわからか!?

餅みてえ……癖になりそ……。

「むわー、反撃するぞー」

「掴みかかってんじゃねエよ」

座ってる? そいつがどうしたよ。

力の流れの読み方くらいさ、イヤになるほど体に刷り込まれてんの俺は!!

というわけで、仰向けに転がしてやんよ!

そしてマウント!

ひたすら肉まんじゃい!!

「むいー」

嫌がつてんのかどうかよーわからん呻きだな。

ケケケ、まあイイさ。

せんべいの恨みは重いんよ!!

「晃気バーストッ!」

そして離脱!

「僕も、小雪バーストッ!」

……ふう

「音出ちゃった」

はしたないからやめなさい、小雪さんや。

「くーさーいーぞー!!」

悶えてんよ、イイ気味だぜイ。
屁は偉大だ!!

「ひっさーっ、握りっぺー」

クセエ!? 何食ってんのコイツ!? って俺と同じもんだ。
てか鼻曲がる……ヤバくね?

「あはははははははっ」

手広げて笑ってんでねえ!

……いや待て。

何この子蚊帳の外にいんの？

「辰子さんや、ちょっとバカでも捕まえましょか」

「ユキにもやられたもんねー」

「掴まんないよーだ」

「動くなッ！」

小雪よ、確かにテメエの足は速いさ。
体力だつてある。

ま、鬼ごっこしたつて大して変わらんくらいみんなあるけどね！！

でも跳んだり跳ねたりは一番得意だ。
きょーいの脚技もあるしな。

だがしかーし、テメエには動けねえ訳がある。

「マシユマロがどうなつてもイイのか！？」

「いいのかー」

そう、マシユマロ！
アイツの大好物！！

月の小遣いの半分くらいつき込んでっからな、こだわりがわかるぜ
イ。

だがそれは今俺の手の中。
何であんのかつて？

大体こんな時になつと小雪逃げるから、机の下に常備してんの。

「マシユマロに罪はないのに」

「ケケケ、罪人！ 両手を上げて仰向けになれ！」

「おに、きちく、あくま、げどう、へんたい」

「変態は関係ねえし！ 俺じゃねえだろ！」

「でも晃くん、部屋に裸の女の人の写真あつたよ」

「あ、僕も知ってる」。

おっぱいおつきおねえさんからへんなニオイしたんだよ」

なん……だと……！？

HAHAHA。

黄色かったよね、とかページが張り付いてたよね、とか言っ
つし。

ふっ。

……風鈴の、音が……心地イイぜ。

「ど……」

「どっ」

「どちくしょおおおおっ！！！」

何の罰ゲーム！罰ゲーム何のですです、これは！？

……死のうも死のうすぐ死のう河原で死のう。

中学一年生の、夏休み前のイベントがこれってどうよ？

風鈴でのほほん（後書き）

次から若干シリアスかも

バトル盛り込んでいきますよー

出発前のほほん（前書き）

戦闘描写、頑張ってみました

はっきりにって下手っぴです

出発前のほほん

性知識ってさ、大事だと思うんだ。

そりゃ学校でもやるけどさ、天然ちゃんの小雪と辰子はまだまだ子供だからな、わからん事も大量なんだろうよ。

……あの後エロ本持って追いかけてきたしな……。

どうすりゃいいか全くわかんなかったよ俺は！！

まあ思わず顎を力チ上げちまったんですけどね！！

悪いかコラアツ！？

生理の時だつてさ、最初にきたのは辰子ですが。

そんなとき何したと思う、アイツ？

忘れてしまっていてな、あの時のことは……。

血濡れのパンツ持って俺の部屋に突っ込んで来たからな、下半身素っ裸で。

笑えよ、笑えよコノヤロー。

そこまでだとは俺も思ってたさ。

思わず叫んだ俺は微塵も悪かないね、絶対に。

まだ亜巳さんがここに住んでた時だった良かったけどさ。

ぶん殴られてたな、おもつくそ。

それですべて終わった。

はい、そう思ってた時期が俺にもありました。

同じ事やりやがった、小雪のヤローが。

し・か・も・だ！！

学校でな！！！！

信じられっか！？信じられっか！？

大事な事だから二回言ったよ俺は！！

放課後で、茶道部で、運がイイのか悪いのか同じクラスの俺と小雪と千代が早めに着いてたときに。

そりゃあさ、茶道部の目の前にあるよ、トイレ。

滅多に人もこねえよ。

でもさあ……間違ってたんだろ！！

あの時はさ、顔をきゆうすと魔法瓶が直撃したっけ……。

天はさんざん亜巳さんから言われてたし、天然じゃないしそんなことしないとは思っけどよ。

とりあえず三度目は無いかね。

小雪も辰子も胸だつて膨らんできてるけどさ。

そんなもん見せられた相手、女として見れる訳ねえだろうよ。

……そいやあエロ本の悲劇の後も亜巳さん呼んだんだよな。

確かその後一日くらい、顔赤くしてたけど何吹きこんだんだ、あの人は？

ま、愚痴はこの辺で置いといて。
今日は楽しまねえとな。

「せっかく亜巳おねーさまが帰って来たってのに……何だい、これ？

白飯に味噌汁に豆腐に焼き魚におひたしに納豆に生卵に海苔に漬
け物……。

今は夜だよねえ、晃気？」

「アスパラのベーコン巻きもあるでねえか、肉も焼いてるしさ。

それに好きだろ、生卵」

「そんな問題じゃないんだよ。

何で私は朝食のメニューがここに上ってるかってことが聞きたい
んだ」

「あゝとりあえず置いといて一言、無くなるぜイ」

「ハア？何言つて……ってユキ！辰！竜！天！

なに私の分まで食ってんだ！！」

「ガルルルッ、ウチの肉ッ！！」

「お漬物とお漬物を合わせてお漬物」

「ご飯とおみ汁のちょーぜつ合体だー」

「がしゅっ！がしゅっ！ うめるぽっ！！」

「べーけヤロウ、何ワシのモンにまで手えだしてんだ」

食卓は戦場ですぜ？

何やってつかって？

久々に亜巳さん帰って来てみんなで食卓囲んの。
夏休みってヤツだわ、俺らと同じで。

何と二週間も休み貰ったんだとよ！

海、山、祭り、花火。

ん、いろいろ夢が広がりんぐ。

どーせ今年も中国行きだとは思いますが。

小雪らも連れてけるように交渉してみつか？

二週間くらい遊べんのはつまらんからなあ。

「上等だよ……表に出なッ！

誰がアンタらの上に立ってつかってその身に刷り込んでやるよ！
」

「喧嘩だ……ちやるやつ！」

って喧嘩かよ、まあいつものことですけどね。

大体揉めるんだよなあ、亜巳さん帰ってきたらさ。
多分……みんな嬉しんだろうねえ。

空になったプラスチックの皿を円盤みたいに亜巳さん目掛けて投げ
るのは小雪。

口火は小雪か、珍しくもなんとこたあねえな。
珍し、小雪開始はレアものだぜイ。

食器は俺と祖父ちゃん以外プラスチック製がほとんどだな、茶碗と
木のお椀除いて。
割れるたびに買い替えるってのは馬鹿になんねーよ。

「小雪イ……アンタから叩きのめして欲しいのかい……？」

うはッ！舌舐めずりとか楽しそうだわさ。

そいやあ化粧してねえけど肌綺麗だよな、亜巳さんって。
ちよっち、つつつても二年前まではボロボロだったってのに。

警察学校はあなたに規則正しい生活を提供します！

つと懐から取り出した組み立て式の棒、もとい棍を構えてら。
ドイル戦で使ったヤツな。

あ？何の電波だ？

ま、とりあえず置いといて烈のおっちゃんから貰ってたよな……や
っぱあの人イイ人だわ。

棍法まで教えてくれてたし。

飛来した皿はしっかり避けて、机越しの小雪めがけて飛びかかる。
と、その拳動をやめてバックステップで距離を取ったな。

「おりゃッ！天使のような悪魔の蹴りッ！！」

足元を薙ぎ払うように天の蹴りが……ってお前今回は相対する訳ね。

天って意外に飽きっぽかったからなあ。

結局八極拳やめて、一緒に習ってた戳脚一本になったんだっけ？

「イイ度胸だよッ！！」

「効かねえぜボキヤ……って折れたああぶりっあッ！？」

そりやさつきまで飯食ってたプラスチックの箸で受け止めれる訳ねえだろうが、常識的に考えてよ。

頭にそのまま棍が直撃。

いてえぜイ、ありや。

代わりに双剣の使い方習い始めたんだよな。

まあいつも鍛錬に使ってる木刀ならともかく箸は無理だろ。

「晃気、おめえ……夏休みは遊びてえか？」

「へ？そりやあもちろんだけどさ」

米の入った茶碗と味噌汁の入ったお椀持って縁側に移動してた祖父ちゃん。

ん〜、夏は夜が過ごしやすいよね。

お、今度は竜兵が突っ込んだ。

しかし捌く捌く捌く、腕が伸びる前に起点を潰されてんな。

せっかくの拳の雨が意味なしでねえか。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッ！！！」

「甘いんだよ、クソガキがッ！！」

棍を竜兵の足に引っ掛けてグルンと立ち位置変えおった！？

股下通るなんざ曲芸じみた真似をするねえ。

竜兵のヤツ図体はデカイし、筋肉質だから重いんだよな。

イイ支点ってことか。

右親指、右手首、右肘、右上腕部、右頬、右側頭部、おまけの顎。

エゲツねえ……竜兵が振り向いた瞬間、容赦無しで叩きこみおった。

脚技は使わんって言ってたからなあ、妙なところで律義なヤツ。

亜巳さんが屈んでるときに蹴り飛ばせば何とか成ったかもってのにさ。

呻き声すらなしに沈んじまった……憐れ也。

「外国は嫌け？」

「そんなこたねえよ、それだったら中国も行かんって」

「それもそうじゃのう」

とりあえずぶっ倒れた天と竜兵をこっちまで引きずって、と。

どしたんだ？

むう、別になんもしとらんと思うけどさ。

思い当たる節も……無いよな？

「晃気、おめえ東南アジアまで行ってこいや」

「へいはいほー……って東南アジア！？」

中国じゃねえの！？

いつものように中国の爺ちゃんどこ行くもんだとてつきり思ってたんですけど……！

「そんなかわり五日向こうに行くだけでいいからの」

「五日……そいつは魅力的だぜイ」

「安心しとけや、ちゃんと同行者はおるからの」

「観光みてエなもんか？ そいつもまたイイかもなあ」

「じゃろっ？」

そうこう言ってる間に辰子が亜巳さんに相對してら。

……イヤイヤイヤ、ちょっと待てや。

辰子……だと……？

あのキレない限り人畜無害の辰子ちゃんが模擬戦でもねえのに亜巳さんと戦う……だと……！？

おかしくね、なんか？

「私もたまにはやるぞー」

「ハッ、舐められたもんだねエ……私もさアッ!」

あやしくね、なんか?

明らかにあの子、俺の方向いてましたよ?

そしてその隣に小雪が並ぶ、と。

「大胆不敵、電光石火、勝利は小雪のためにある」

……ようわからんけどノリノリだな。

辰子は俗に『三体式』って呼ばれる構えだな。

アイツの習ってる形意拳の基本にして最も重要だと思う構え。

元々昔の重い槍を使うために考案されたんだろ?

散々この形を練習させられてたかなあ、槍まで持たされてた事あったし。

左手を開いて前に突き出し、右手は腰のあたりに軽く添える。

亜巳さん相手に正面を向く訳ではなく、少し右肩を下げて左肩を前に持つてってるな。

んで自分の体重を前に置いてある左足に三割、後ろの右足に七割かけるように軽く膝を曲げる。

……安定してんなあ。

まったく違和感なく構えて、体の軸もほとんどブレちゃいねえ。

これがあの辰子なぎ、思えねえってのが本音だな。

亜巳さんは棍を両手に少し先端を下げて構える。

身体は辰子相手に真横を見せてるって言っても過言じゃねえくらい。

「ま、選択肢はないがの」

祖父ちゃん言葉を皮切りに二人が交わり合った。

前に出ている左大腿目掛けて亜巳さんの棍が迫る。

力じゃ劣ってるってのは解りきってっから若干回転をかけて、貫通力を高めて。

辰子は怯むことなく前へと飛び込む。

コイツ耐久力はあっからなあ。

でもきつとイテェんだろっうなあ。

当たるか、と思った時には辰子の左手はすでに進軍してたね。

亜巳さんの突き出した棍に斜めから振り下ろして、力の方向性を無理矢理変える。

挟り込むように辰子の大腿を掠めた棍は畳に突き刺さる。

そこを見逃さず辰子は連撃。

コイツの習ってる形意拳、今使ってる『五行拳』はその名の通り『五行』を現してんだと。

中国に古くからある『五行説』によると万物を構成するいくつかの物質は互いに関係性を持つてるそう。

木は土に打ち勝ち、土は水に打ち勝ち、水は火に打ち勝ち、火は金に打ち勝ち、金は木に打ち勝つ、という『相剋』っう循環。

それと木は火を生み、火は土を生み、土は金を生み、金は水を生み、水は木を生むという『相性』っう循環。

これまんま取り入れられてんだってさ。

さっき辰子が使ったのは『火』を現す『壁拳』。
つまりそのまま『土』に繋げるよう、捻上げるように辰子は拳を振
るった。

けどそいつは亜巳さんにやあ届かねえ。

棍を畳に突き立てて、弧を描くように近づきながらも辰子の間合い
の外を跳ぶ。

んで一人年上の、長い脚が辰子の顔面に叩きこまれたぜイ。

ってなんか違和感……。

「って何持ってたんだテメエら!？」

右手に天、左手に竜兵って頬を擦り寄せてんじゃねえ!!
何コレ、ねえ何コレ!？

動けねエんだけど! 擦じってやる! かテメエ! ってイタツ! ?
何、足を握って捻って擦じってんの祖父ちゃん! ?
何コレ、ねえマジで何コレ! ?

「ホッホッホ」

笑ってんじゃねえよ! ?

「コウキ」

小雪、イイとこ来た!!

亜巳さんどうしたなんて聞かんツ!

それよりこいつら止めてくんろ！

「ごめんね」

テメエ何を……っ脚！？

ヤベ腕をつて動かん！

っあッッ！？

……蹴ら……れた……顎……か……

出発前でのほほん（後書き）

支離滅裂な気がします、隊長殿ッ！！

船内でのほほん（前書き）

相も変わらず変な感じ

船内でのほん

……頭痛えや。

顎打って脳揺らしたただけじゃなくって殴りやがったな。

何度やられてもあの感覚は好きでない。

なんつーか蟻がいつぱい足元が這いあがってくるみたいなの？
気分イイもんじゃないわ。

しかしここはどこだ？

とりあえず家じゃねえことは間違いないと思うけどさ。

てか揺れてね？

地震か！？……っとそれだったら小雪が騒いでるか。

……あゝ、そか。

ここ家じゃねえんだからアイツはいないわな。

携帯は持ってねえし連絡しようにも出来ん。

妙に落ち着いてるって？

まあいやゝな予感はしてたかな、後ろ髪がチリチリ的な。

それに一応祖父ちゃんと爺ちゃんからの言い付けは守ってるつもりなの。

『武道家たるもの日常から常に臨戦態勢にあるべき』ってな。

HAHAHA、嫌になるぜイ。

どんだん格闘に犯されてるんじゃないの、俺さ。

なゝんか外れちまつてる気もするんだよな、人生目標からよ。

のほほんと過ごすまったりとした人生。
淀んじやいねえと思うんだがねえ。
ままならねえや、ホントままならねえ。

それが人生つか？

こんな考え中一の俺が抱くもんじゃねえぜ。

それよりもだ、ここってどこだろ？

真っ暗でよく見えねえってのが本音だけどさ。
そろそろ目も慣れて来たんじゃない？

「渋川ジュニア、お目ざまです……か？」

ってどこのどいつだよコイツは！？

なぐんてな、言ってみたかっただけですよっと。

爺ちゃんのとこで見かけた事あるな。

中国人の、門の前に立ってたハゲのおっさん。
確か俺が最初に投げた人だ。

「どもです……ってここどこですか！？」

知り合い見つけたからって落ち着いてんじゃないよ、俺！！

今どこよ！何月何日何時何分何秒よ！？地球が何回回った日だよ！？

……落ち着け、俺、落ち着け。

クールだ、COOLになるんだ……。

こんなとこだったら焦ったやつから死んでいくんだ……なッ？

「ここ、海、船、密航してますです」

はいむりー。

不穏な単語が聞こえちゃったよ、おじさんは。

気のせいだよな……気のせいだって言ってくれよジョー……！！

月明かりに照らされて、辺りが見えたんだ。

なんか変な人がいっぱいいるんだ。

暗くて不穏な、でも妙にギラついた目の人たちが年代に関わらずいっぱいいるんだ。

道着か、俺。

ははっ、爺ちゃんとお揃いの袴もしっかりはいてんぜ。

すぐボロツちくなるからな……でも着なれてるんだぜイ？

いやね、確かに俺言ったよ、祖父ちゃんと爺ちゃんの前で。

危ないところも本物も、この目で見るって。

二度とばっかみてえな真似にならんために、俺が俺らしく俺の決めた道を歩くために。

やると決めた事をやるだけだって、ちっこいわんこみたいに誓いましてよ確かに。

比べりゃ安っペーもんかもしれんけどさ。

でもね、限度ってあると思うんだ。

密航とかさ、犯罪じゃん。

わかるだろ、犯罪じゃん？

俺、前科持ち……。

どうなの、ねえどうなの！？

こんな中学生って普通なの！？

千代、教えてくんろ！！！！

「だいじょうぶですら、陸見え、着く、ベッドで寝られます」

そっかーもう着くんだーってんな事聞いてねえよ！！

第一何さ、船ってそんなに早くねえ……よな、うん、じゃねえか！！

「何日寝てたと俺！？」

「飛行機、近くの島行きましたら、船で危ない島行きますら」

「危ない島……だと？」

てか俺の質問と違うし！

アリ？普通船が着ってもつと喜ぶとこ……だよね？

何でこの方たち息殺してんの？

てかそれよりもさ、何持ってるんのあの人ら？

あゝうん、OK OK オウケエイ、ちょっと話そうか。
アレ俺みた事ある。
アレオレサママルカジリ。

HAHAHA、テンパっちまってるな。

いやアレってさ……銃じゃね？

「Fooooooooooooound!!!!」

ウルセエエエエツツ!!

こちらら頭ん中グツチャグチャなんじゃ!!
だーっこれこのアホたれ!!

つてウルセエエエエツツ!!

何コレプロペラ音!?

まぶしツ!? 神様仏様ライト様!?

炸裂音!! 妙に軽いパララッって音は銃声!?
どこココどこココ?

無法地帯ですかコノヤロー!!

「ツツツ!!??」

……なんじゃコリャ……。
待て待て待て……ヤベエ。

ネットリ何かが俺に絡んでくるんですけど!?

……俺さ、こんなんでもちよつと修羅場は潜ってるはずなの、他の中一に比べりゃ。

だって普通テロに会わんだろ？

祖父ちゃんや爺ちゃんや刃牙にいちゃんや薫にいちゃんや烈のおっちゃんや、テレビに出てるチャンピオンと模擬戦とかやらされんはずだろ？

そげな俺が簡単に転がされるバケモノさん相手に、さ。

あ、でもユーリさんは何とかなったんだよな。

俺ってスゲくね？

……何か思い出したら目頭熱くなっちまったよ……。

ってそうじゃねえ！

こんな時現実逃避するとかアフオか俺は！！

でもその誰とも違うのが何かいる気がするんですけど。

誰とも相対した時とも違う……こつ金玉がキュッってなる感じ。

近いのは祖父ちゃんと爺ちゃんと薫にいちゃんと、でも一番近いのはガイアさんか……。

ガイアさん……だと……！？

あの人自衛官だっけ、かなり特殊な。

……マジで？

へ……えつとう……マジで？

「Queeeeeeen Beeeeeeeeeeee

e e!!!」

知らねエエエツ!!

血管切れそうなシャウトしてんじゃねえよ!!

なにさ……女王、バチ、そう女王蜂つてさ!!
ハチでも出たのかコラアツ!?

「ジュニア!下がる!!」

どしたおっさん!?
それと俺は孫だ!!

「……少しはやりそうだが……ガキ連れか?」

あ、ヤベエわこのねえちゃん。
血生臭え……てか付いてるし、服に。

手に持つてる刀、小太刀にも血糊がべつとり。
堂々首から血を噴いてる、俺より少し年上そうな兄ちゃんの服で刀
拭いてるな。

なんだ、この状況?
明らかにヤバそうに、血が出てるよな。
くったり伏せてるし。

なんじゃ……こりゃ?

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ!

『俺は目が覚めたと思ったら、血濡れの刀もったおねーさんがこっちに向かって敵意を振りまいてる』。

な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

てか死んでる……んだよな。

人が、さ。

いやそりゃあさ、知らない人ですよ。

でも俺みたいな平和的日本人の……へ？何か問題でも？

ともかく俺には一生縁の無かったはずなんだが、な。

飛び出すように瞳が出てる、ヒクヒクと倒れた男の人は震えてる。

ガリガリ爪を床の、木製の床に突き立てて、引っ搔いて、生爪が剥けてしまってるってのも気にしねえで。

コヒューコヒューって薄い呼吸音が聞こえる。

まだ……生きてんのかッッ！？

こっち見た、俺の、目を、瞳が、じっと、捉えて、歪んで、離さない、ように。

熱い、胃が喉が熱いッッ！

口ん中が酸っぱい……ゲロ、ゲロが俺の。

吐いちゃ……いけねえ、震えてもいけねえ!!!

ヤバいつて何回言ったかわかんねえけどヤバいぜ今は。

でもだからこんな状況でも、そう今目の前でハゲのおっさんから血が溢れかえつても動ける身体と性根にしてくれて、ありがとって言うべきなのかね？

HAHAHA、感覚が狂ってんのか、この場所が狂ってんのか、目の前のねーちゃんが狂ってんのか。
わっかんねえな、ホント。

こんな状況でも頭ん中に冷静な部分を持つて俺が一番、狂ってんのかもな。

ハハッ、嫌がつて逃げて、結局飛びついて。
適当に理由つけて柔術習って。

暴力が嫌い？もめごとが嫌い？強い人が嫌い？

バカ言っちゃいけねえよ。

暴力が嫌いならそこまで漫画やゲームやヒーローものを好きになんてならんだろ。

もめごとが嫌いならそんなとくに近付いたり、傍観者になりたいなんて思わんだろ。

強い人が嫌いなら祖父ちゃんたちだってそうだろ。

ま、でもとりあえず置いとこ。

今は今、今が大事。

ゲロは飲んどこ。

のほほんまったり過ぐすにはいろんなもん知つとく方がやりやすいよなア、きつと。

うっし、仕切り直し。

せつかく俺よりでかいおっさんが障害物になってんだ。
使わんと、いけねエよなア。

こっちへの警戒はさつきより薄まつてる。
隙を突くつてのは大事なことだろ？

右手も左手も、まだおっさんに突き刺さってる刀にかかつてる。
身長は俺と大して変わらん、こともねえや。
俺ってちつちえーんだな。

抜ける刀、踏み越えてこっちに来るねーちゃん。

狙いは一つ。

身を屈めてゴツイズボンで覆われたねーちゃんの足に迫る。

「あたいに向かってくるとは、イイ度胸だよ」

繰り出してきたのは蹴り。
刀での斬撃じゃなくって、蹴撃。

ラッキイ、だな。

「なツツ!？」

運が良かったのは三つ。

一つは俺をナメてくれたこと。

一つは軸足が固くない、人の上だった事。

一つは蹴ってきてくれたこと。

ブーツに覆われた足を掴む。

蹴る力に合わせて俺自身の身体を回転させるように懷に飛び込む。
タンクトップで覆われた胸に足をかけて、伸ばしきった脚を手で踏み込んでそのまま肘の関節を破壊するツツ!!

アクロバティックな、相当無茶な身体の使い方してんな。
いやゝ模擬戦はデカイ人相手ばっかだったからな、俺も頑張ったんだよ。

それでも身軽で前宙バック宙側宙なんでもござれだぜイ!!

「クソガキツツ!!」

「退避!!」

「アイツはあたいが殺す!! 他の奴らはここを終わらせとけツツ
!!--!!」

ケケケ、崩れ落ちてやんの……ってすぐ立つちまった。

追っかけて来てるよ。

なんか壊した脚が光ってんですけど？

てかなんか懐から……その前にくげよ。

目の前はガラス窓。

男、渋川晃気、気合い一発飛び込んでみまっせ！！

無限の彼方へ……さあ行くぞッッ！！！！

つて顔いてエエエエエエエエエエエエエエエエツツ！！！！？？？

船内でのほほん（後書き）

東南アジア行きは彼一人、他の子らは……どこか別のところですけど
行きますよ

再会でのほほん（前書き）

今回も妙な感じ

再会でのほん

唐突だけどさ、俺っておんぶが得意なんだわ。
場数踏んでるからかね？

小雪が小学生のころはよく乗ってたかなあ。

あ、今もそうか。

週五日、五回の登校のうち一度か二度、多い時は全部俺の背中の上で通学路に行く事もあるからな。

きっかけはなんだっけか？

……そか、あいつが初めて俺んちで暮らすようになった時、俺が祖父ちゃんにおんぶしてもらったんだよな。

羨ましそうに見てたっけ？

でも祖父ちゃんに近付くのは怖そうにしてたんだっただか？

あの頃は小雪のヤツ、若干人間不審になってたもん。

羨ましそうに見てる、でも祖父ちゃんが近づいたら逃げる。
んで苦肉の策として俺がおぶったんだわ。

いやゝ懐かしいねえ。

美しき思い出ってヤツ？

まあここまで好きになるとは俺だっと思ってなかったけどさ。

偶に辰子もねだってくるし。

最近背中当たる柔らかい感触が二人ともあるから役得つつつた
ら役得ですけどね。

欲情？イヤイヤクッションに頭突っ込む感覚。

……ここだけの話、亜巳さんではいろいろしたことあるけどさ。
小雪と辰子と天は無いわな。

話ズレちまったな。

ま、何が言いたいかってつと目の前のおねーさんをどうするかって
とこだよな。

とりあえず服脱がして刀退かして縛ってみましたが。
出るわ出るわ怪しげな刃物。

てかこれ手裏剣じゃね？

OH、ジャパニーズニンジャ。

シュリケーンカタナスシテンプーラ。

しかし……うん、あゝと。

昔は風呂も一緒に入ってたけどさ、この前乱入して来たけどさ。
やっぱ違うねえ、女の人のお身体はさ！！

裸！裸ですよにーさん！！

ケケケ、忠勝に英雄よ、俺は一つ大人になったぜイ。

白い肌、引き締まった腰、スラリとした足。
傷だらけだけどそれもまたグー。

そしておっぱいおっぱいおっぱい。

ムムム、中々にでかくて非常にエロいでございます。

したたる水滴が、呼吸で上下するお胸様が、そして先端突起様が。

芸術品ですぜ、これは。

写真じゃねえ！紙じゃねえ！！映像でもねえんだ！！！

リアル……これこそが現実……。

グウレイトと言ってよいでしょう！！

でもアホの子なのかねえ、この人は。

膝をしつかり壊したとは思ってたんだがね。

走って追っかけて来て俺が海に跳んだ窓から続いてきたからな。

ま、ナイスなド根性だとは思うけど……。

常識が欠けてるよな、ぜってーに。

怪我した状態で、片足使用不能な状態で、海に飛び込むって頭おかしいと思えねえよな。

立ち泳ぎしてたし、口に小太刀くわえて。

マジもんの忍者なのかねえ？

俺も立ち泳ぎなんですけどねッ！！

クロールよか楽でイイわ。

泳ぐと言ったらこれだったからな、小学校のプールん時はビビられた。

慣れって怖いぜイ。

そんな訳で小雪背負って泳ぐ事も良くある訳で。

今回も案の定、沈んだねーちゃん背中によつて岩場まで来た訳ですよ。

へりからライト海に向かって照らされてたからな。

いや〜どこのアメリカ映画！？つて思つちまつたよ！

しかも俺主演俳優的な、みたいな感じでいつちやうてきくなッツ！！

時代先取りしすぎだつて？気にすんな気にすんな。

……あゝハイハイ、ゲッツ！

これでおけ？

しかしさ、やっぱ男のロマンだと思うんだよ。

こうやって来ちまつたもんは仕方ねえ。

せつかくの東南アジア、楽しんだ方がお得だろ？

俺スゲー事やれたんだぜ！

密航とかwwwwwwかつきくね！？

盗んだバイクで走りだしたりさ、校舎の窓ガラス割つてみたりさ。

缶コーヒー片手に星空見上げたりなんかしちゃつてみたりさ。

夜の帳の中だつたら俺は自由に居られる、縛られずにいられるって思つたりさ。

男の世界だよな。

ロマンとはちよつと違うけどさ。

ここに女はいらんぜい。

こんなことするときほたいてい忠勝と竜兵とだけでやってるもんさ。ふふっ、俺も若いつてことか……。

渋くね、俺ってば？

渋川だけに！？……ゴメン。

思えば結構やんちゃやってんだなあ、俺。

自重なんてしねえけどなツツ！！

偶につてのが楽しくってたまらんし！！

……そう考えりゃあ少し楽になれたかね？

ま、またかっぱらったバイクで走るのは帰っての楽しみとして、とりあえず今は目の前ですよ。

思わず助けちまったけどさ、ん？どうしよ？

「とりあえずさ、どうすればいいと思うよ？」

「……起きてたの気付いてんのか、クソが」

「口悪いなあ……丁寧口調だったら逆にキモいけどさ」

「ハッ！ご丁寧に剥いてくれやがって……これからあたいでも犯すのか？」

「いや、好きな子いるからさ、こんな俺でも！！」

「純情少年気取りやがって……気色悪いったらねえぞ、ああ？」

「ヒドイッ！ 十代の少年はガラスのハートなのよっ！」

「……死ぬか、テメエ？」

うはっ、マジで危うい目ですよシャッチョサン。
逃げようとしてるねえ。

でもうん、それ無理。

捕縛術は得意ですぜイ。

関節の稼働域と筋の在り処を考えて、考案されたっていうこいつは
すげーな。

自分の体、本気でぶっ壊そうとしねえ限り逃げれんつつーんだから
よ。

材料はおねーさんの服、だから脱がしたわけ。

べっ、別に裸が見たかったわけじゃないんだからねっ！

「で、その純情少年とやらがあたいに何の用だ？」

おお、そうなんだよ。

すっかり忘れちまってたわなあ、裸に見惚れて。

チガウヨ、ウワキジャナイヨ、ダカラユルシテヨ。

ねえハニーー！！

……まあ彼女じゃないんですけどね！！

「なんつったらいいか……」「コどこ？」

「……ハアツ！？」

まんまるおめめ見開いちゃって。

きゃわいゝ。

え、キモい？

バカなアツ、この臭気がキモいとはあああああ！！

てなわけで今俺は東南アジアのとある通りに来ています。
元通りつつうのが正しいのかね？
ボロボツ口だもんよ。

隣歩いてるおねーさん、なんか有名な傭兵さんらしいけどさ。
この人の話によると、バカデカイ津波があつたんだとさ。
そいやあニュースでやってたっけ？

普通に話し進めんなって？
気にスンナ気にスンナ。
いつもの事だろ？

それよりなんでねーちゃんと一緒にいるかが問題だよな。
まあ簡単に言うとなアレだ、取引？
でっかい家に雇われてるらしいけどさ、懐に入ってたお金でちよつとだけ雇ったわけ。
人のいるとこまで行く、ちよつとだけの間。

おかげで無一文ですよ、おじさんは。

武器全部返して、怪我の簡単な治療して。

まあ歩くくらいは何とか程度までしか行ってないですが。暴利だけどさ、やらんよかましだろ？

「殺されるとか、思わなかったってのかい？」

「いや、似てる人知ってるんでそれはねえかなあと」

「……テメエも大概な人生送ってるってわけだ」

「望んでなんかないんですけどねッッ!!」

おかげで無一文。

大事なことだから二回言うよ？

ハア、一週間だっけ。

どうやって過ごそうかね。

過しければ誰か迎えに来てくれそうだからさ。

「あたいにも仁義つてもんがある。ここは見逃してやるが次会ったら殺してやるから覚えときな」

「ほんでは俺に近寄らない方向でよろしくーっす」

「見たら首飛ばしてやるよ」

何この殺人鬼!?

俺ターゲット?

ロックオン・ストラスか!?

時代が違う?

気にスンナって。

颯爽と去っていくおねーさん。

あ、そいゃあ。

「おねーさんのお名前なんてーの?」

「……『忍足あずみ』だ」

……ん?

あゝナルナル、人の縁つて不思議なもんだねえ。

いやいや実に不思議なもんだ!!

ま、この辺は軽く流して。

中国語はチョビツとだけ話せるから、中国人探そ。

あずみさんのいう限りじゃあ危ないらしいからな。

津波起きて、家失った人が対応の悪い政府に向けて反乱起こしてるらしいし。

混乱に乗じて盗賊とか海賊とか出てるらしいし。

余所者は狙われやすいらしいし。

ってヤバくね、俺？

なんてとこに行かせてんだ祖父ちゃんは！！
このきやわいい晃気くんが死んでもイイってのか！！

日常が！俺の日常が崩れ去っていく！！

昨日の揉め事が嘘みたい！

何コレ、怖い。

そして背筋を通る不気味な感覚がさらに怖い。

あゝ何さ、また揉め事ですかコノヤロー。

来ちまったんだから、ってちっぽけな覚悟決めた俺の心が壊れちまいそう。

やだなー、銃とか俺勝てないしなー。

かといって死ぬのはやっぱ嫌だしなー。

勇気をもって振り向くのが大事。

そ、それが大事。

てなわけで……せやっと言ったら行こう。

できれば視界に移ってる、ボロツちい格好した人がいいなあ。

腹ぺこだったらちよっとは有利になるかも知れんたる？

ぐうぐうってさつき俺の腹もなっただんですけどねツツ！！

そう言っただけ俺の前にまで影を伸ばす、たぶん相当デカイ人の足を掬うために足払い。

ってイタッ！

動かん！！何故に！！

クルツと振り向いて、俺はおでれーたね。

後ろにいた人にもそうだけどき、何より自分自身にビビったね。

ここまで脳が燃えるとは思ってなかった。

マグマのように血潮が熱くなるなんて考えたこともなかった。

擦り減らんばかりに歯を噛み締めるなんて思ってもみなかった。

でも冷え切った頭で目の前の人物の壊し方を何通りも考えつくなんて思ってもみなかった。

勝負つてのは、少なくとも俺が祖父ちゃんたちに教わった勝負は、終わったら手を握りあえるようなものだ。

たとえどんな怪我をしても、誇りと誇りをぶつけ合ったそれをちっぽけな感傷で汚しちやいかん。

そう教わって、少なくとも今の今まで、模擬戦とかやらせてもらってた相手とは、そんな風に過ごしてきた。

そりゃあさ、人間ですから俺だつて。

ム力つくとかいけ好かんとか、そんなんはありますよ。

だからそんなの相手だつたら二度と顔を合わせないように注意するのが俺です。

でもそんなとりあえず今はどうだってイイのさ。

ム力つくから殴りたいんだ、なんてセリフを俺が言えるなんて思ってもみなかったわ。

後ろに飛んで距離をとる。

周りがざわつく。

でもそんなもんは関係ねえ。

「テメエがあん時のガキか」

「ジャック・ハンマアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！！！」

ちっばけな人間？そいつがどうした。

実力差？そいつがどうした。

俺の夢？……そいつがどうした！！

そんなもんはどうだってイイさ。

だがコイツだけは……地面に叩き込んでやらアッ！！

再会でのほほん（後書き）

あずみさんは一先ず退場

再登場は少し後となります

晃気の本質でのほん（前書き）

今回は少しだけ違う感じで

晃気の本質でのほほん

俺が本気で『強くなりたい』、そう思ったのは多分二年前。

祖父ちゃんとか刃牙にいちゃんとか薫にいちゃんとかが出場した、東京ドームの地下でやった試合での事。

ちょうど辰子らがウチで暮らし始める少し前だっけ？

小雪らを忠勝に任せて、祖父ちゃんのセコンドとして行った大会での事。

男と男、言葉を借りんなら超雄と超雄の戦い。

はつきり言って血が滾ったね。

のほほんと過ごしたい、まったりとした人生を歩みたいなんていつときながら。

俺って結構ひどいヤツなんだよ。

だってそうだろ？

小雪のことで武術を始めて、忠勝とか辰子とか天とか竜兵のことでもっと強くならんといかんと思って、亜巳さんのことでその思いはさらに増して、英雄の言葉で完璧に確立したなんて思ってた。

勝手に、俺が、心の中で。

自己完結させて、奥底にある別のモンにはしっかり蓋みたいなのをしてたんだ。

でもさ、違うんだよ。

小雪の為、忠勝の為、辰子の為、天の為、竜兵の為、亜巳さんの為、英雄の為。

そんな都合のイイこと言っちゃってさ。
見つとも無いったらありやしねえ。

人の為に強くなってるのか？

そう聞かれて俺はハイなんて即答できん。

爺ちゃんに似たような事聞かれた時も、内心結構焦ってたんだぜ。

切っ掛けは、間違いなくそうだった。

小雪の泣き顔を見て、こんな風に泣かせたくないって思った。

アニメか戦隊物か、なんかの影響かわかんねえけど俺は『ヒーロー』
つてのに憧れてたんだ。

そんで祖父ちゃんに聞いた。

『護身を極めれば危ないものには近付けない』って。

だから祖父ちゃんから柔術を習おうと思った、コイツは間違いない。

危ないものに近寄らせんで、危ないものを薙ぎ倒せるようになりた
い。

そんな風に思うようになって行っていたんだわ。

忠勝が本物の友達になってくれて、おこがましいかもしれんけど気
持ちは強くなってた。

辰子の家が大変だって聞いたときもその気持ちは膨らんでった。

天が、竜兵が、亜巳さんが、英雄が、俺と関わって、そのたびに気

持ちはどんどん大きくなってった。

でもそこでさ、いつの間にか生まれてたんだよ。
まったく違った、俺自身のホントに気持ちだ。

俺は強くなりたくなっただ。

誰にも負けなくらいの強さってのが、俺は欲しくなっただ。

祖父ちゃんに、爺ちゃんに人を転がす術を教わるたびに。

試したくなっただ、実際に立ち合った相手と。

俺はいつも爺ちゃんが連れてってくれたり呼んでくれる相手との模
擬戦を嫌がっただ。

でも内心はスゲーうれしかった。

試せる、目の前の相手に自分の強さを。

投げれる、絞めれる、捻上げれる、極めれる、突ける、踏み付け
れる。

『戦える』という事実が、『強くなってる』という実感が、俺をバ
カみたいに舞い上がらせてたんだ。

でも俺にはそんな想いを違っただって押し込める気持ちがいつだっ
て心の中にあっただわ。

『泣かせないために』、『まったりとした人生を送るために』、そ

う言って始めた武術。

なのに違う、まったく違う自分本位な我儘な理由で俺は武術をやり始めてる。

小雪の頭を撫でながら、忠勝と肩を組みながら、辰子に膝枕をしながら、天と騒ぎながら、竜兵とじゃれ合いながら、亜巳さんと茶を飲みながら、英雄とキャッチボールをしながら。

こんな日常がいつまでも続けばいいなんて思っときながら、反面俺を磨り潰してしまうくらい強いヤツに会いたくなってきたやがった。

俺ってばさ、やっぱり男の子なわけだ。

で、男ってのは素直になかなかなれねえ生きモンなんだよ。

男なら誰だって抱く願望、『最強』を目指したって何が悪いってんだ？

開き直れるなら、そうぶちまけりゃあ、どんだけ楽なんだってんだ。

けどよ、いつぺん啖呵切って、でも俺の勝手な思い出そいつをねじ曲げることなんざ、かっきわりーって出来やしねんだよ。

要は子供なんだ、俺が……さ。

のほんと生きて行きたいなんてみんなに声を大に、言ってたのだからってそう言えば収まると思ったからだぜイ。

気付いた俺の本質を、認めたくなかったんだよ。

アイツらは大切、これは間違いない。

のほほんと生きて行きたい、これも嘘じゃない。

嘘じゃない……けど、一番じゃなくなってきたるんだわ。

ハハッ、人間の気持ちなんて移ろいやすいもんだ。

だから今俺の心はかつて無く震えて、傾いてやがる。

そんなきつかけを俺にくれた、祖父ちゃんが転がされて頭に血が上った俺を、ぶん殴って吹き飛ばしてくれた、『ジャック・ハンマー』が目の前に居るんだからよう。

俺はどれだけ強くなっただろう？

俺の技はどれだけコイツに通用するんだろう？

俺はこの先どれだけ強くなれるんだろう？

そんな疑問を抱いて何が悪いってんだ、悪い事なんてありやしねえじゃねえか！！

俺は日常が好きだ、俺は非日常が好きだ。

俺は強い人が好きだ、俺は強い人が嫌いだ。

俺は武術が好きだ、俺は武術が嫌いだ。

俺は戦うのが好きだ、俺は戦うのが嫌いだ。

どちらも俺の、違いねえ本心だ。

矛盾してるわ、まったく反対の事を、その両方を心から望んでるってんだからさ。

いやゝ人の気持ちってのはよゝわからんもんだわな。

俺が俺をわかんねーんだから、人の気持ちなんてなおさらってヤツ？

でもさ、これだったら小雪とか辰子とかの気持ちの方がわかるってもんだぜイ。

……成程、俺が椎名だっけ？

翔一の友達の、軍師っぽい隣の隣にいるヤツ。
アイツを嫌いなわけ、わかっちゃまった。

俺とアイツはどこか……似てるん、だな。

軍師くんに依存してるアイツと俺が。

俺は依存してんだ、小雪に、忠勝に、辰子に、天に、竜兵に、亜巳さんに、英雄に。

俺のちっぽけな意地を、プライドを守るためにアイツらに括ってた。

もつとヒデエのか。

『アイツらの為』って言うときながら、その存在を利用してんだかんな。

HAHAHA、俺ってばただのクズじゃねえか。

クズ、救いようがないほどな真正のクズじゃねえの。

……謝る……いや、違うな。

誓うか？もういっぺん。

アイツらの前で、俺の本心をぶちまけっか。

ま、でも俺が今やる事は一つだ。

ウム、間違いない、こいつだけは正しいはずだ。

とりあえずその辺は後回しってヤツだな。

目の前の男を恨んでるわけでも憎んでるわけでもねえ。

言うなれば……感謝？

俺を、俺自身を気付かせてくれたんだもんさ。

だからこそ、感謝には礼儀を持って接しねえとな。

「……ほう」

右手と左手で拳を作って両腕を軽く前に伸ばす。

鬱陶しい靴を脱いで、裸足で地面を掴む。

右足が気持ち前で左足が気持ち後ろ、開くように立つ。

「ジャックさんや、俺といっちょ……闘ってくれね？」

「ガキが」

ペツと唾を地面に吐き捨てて、周囲にたくさん人がいる中で、ジャックは俺に向かって来た。

お、右拳、右ストレート。

てかおっくそ振りがぶってっし！

筋骨隆々だわな、血管も浮き出ちまってるら。

ドーピングしてんだっけ？

そいつもまた一つの手段だわな。

にしてもマジで速くて重くて痛そうなの俺の顔m

ツツ！？

ほはっ、俺ってば空飛んでんじゃね？

殴られて吹き飛ばされたんkってえゝ。

家か何かが壊れて出来た瓦礫に叩き付けられるたあ……中々ヘヴィだな。

やばっ、いたっ。

血が出てンよ、オイ。

殴られた頬も腫れ上がるだろうなア。

ロン中鉄の味で満たされちまった。

ガンガンするわ、頭が。

ガクガクするわ、膝が。

一発貰っただけってのにさ、スゲーや、マジで。

逃げてえな、土下座でもしたらやめてもらえるかね？

まァンな真似、しねエんだけどなツッ！！

傷みが気持ちイイわ、身体の重さが心地イイわ。

最ッ高にハイってヤツだわ。

嗚呼、やっぱり強いヤツと戦うって……イイもんだねエ。

「……認めてやる、ボウズ」

「あア！？」

「貴様は俺の聞いたクズじゃない……、貴様は格闘士……グラップラーだツッ！！」

うはっ、さっきと威圧感が段違いじゃねエの。

やっぱ軽く撫でた程度だったんかね？

ヤベエわ、緩み切ってんなア俺の顔。

ニタニタ楽しそうに笑ってんだろうねエ。

緩くこっちに近付いていて来たかと思えば腰をかがめて一気に接近。

両の腕で俺の腰を捉えるみたいに。

っていかんでしようよそいつでは！！

掴まれる前にジャックよりさらに低く腰をかがめて、伸びあがるように顎を力チ上げるツツ！？

！？上がりきらね……体勢が僅かに上がったくらいで、このままじや捉えられる。

……つかまったらヤベー事になりそうだなア。

背骨が折られつか……体格さ半端ねーっての！！

だったらそのまま顔を掴んで、地面を蹴って背中にツツ！？

顔振って来た！？叩きつけられるとこじゃねえか、地面に！！

手離して緊急回避ツツ！！

……おりよ？

今俺ってどこ、答えは空中。

下からアップパーカット！

擦じれ捻じれ身体をネジレ!!
ダメージを少しでも緩……わ出来ねエ。

……いてー。

落ち……たよ、吹き飛んだ先の結構な高さから。
全身打撲……じゃね？

でも……身体が熱い……なア。

ジャック……姿が見え……るじゃね……エか。

「か……アごオ……め」

じゃあ立……たねエとなア。

どう……だっけ？

祖父ちゃんに……習った……最初に……構え……。

来てる、わい……どう……こう？

……前……左足……後ろに右足で……。

「か……こ……め……」

右下左上、手は……握って？違いや、開いて……だっけ？

「かア……この……なア……かの」

狙い、どこ……来る、右、ストレート？

……かっきーなア……顔面、来る……当たる……。

「とオ……リイ……」

晃気の本質でのほん（後書き）

刃牙シリーズとの時間合わせは後々していくつもりです

犬耳でのほほん（前書き）

今回は特にないです

犬耳でのほほん

ハッ！ここは誰！？私はどこ！？

……なあんてお約束のポケをとりあえずかましといて。
どこだろ、ココ。

トタン屋根？バラック？簡単な作りっぽいな。

違うわ、コレ木か草かその類だ。

ってんなこと言ってるばやいじゃねえや。

イタツ！マジイタツ！！

俺のイケメンフェイスがグシャグシャに！？

……冗談ですよ。

ふつーだよふつー、イケメンさんなんかじゃねーっての。
言うなれば平々凡々？

忠勝も竜兵もイケメンの類だからなあ。

肩身狭いつての。

一応小雪も辰子も天も亜巳さんも美少女だしさ。

うはっ、俺だけ顔レベル下げてる？

鬱になりそーだわ。

あ、英雄がいた。

でもカツコ悪くはねえしな。

俺もそうなんだよ！！……多分。

ま、今は顔潰れてるから意味無いんですけどね！！

……置いて、とりあえず。

それよかここってマジどこだ？

確か……ウム、ジャック……にいちゃんに殴られて。

どうなったんだ？

なんか昔お袋殿に歌ってもらった子守唄が聞こえた気がしたんだがな。

昔過ぎて記憶なんてそれしかねえけどさ。

『かごめかごめ』だっけ？

祖父ちゃんも祖母ちゃんも歌ってくれた記憶があんな。

来たばっかで寝れなかった小雪には俺が歌ったんだよなあ。
こうやって伝統は引き継がれていくんです……ってか！！
なんかこーゆーのもイイもんだわな。

かごめかごめ

かごの中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀が滑った

後ろの正面だあれ

いやいや一番聞いた歌かもしれんな。

でも何か都市伝説とかいっぱいあるんだろ？

埋蔵金とか遊郭とか斬首とかさ。

どれにしたって俺の心の歌的な？
そいつは変わらんさ。
なんか俺……カッコイイこと言ってるね？

現実逃避はこの辺で、これからどうしよ。
ジャックにいちちゃん探るのが一番だよな、やっぱ。

しかし……滾ったね。
興奮したわ、ホンマ。
いやぁになっってくるわ、俺によ。

でもさ、楽しかったのはホントだしさ。

……ハア、なんか帰ってあいつらに会うのがツライぜい。

黙っとくつてのはなんかイヤだし。

カッコ悪いよな、ぜってーに。

男らしいのか晃気くんの売りですよー！！

……ふつ、今年のバレンタインは貰ったな。

今年は誰から貰えるかねえ。

例年道理だと小雪に辰子に天に亜巳さん、揚羽さんにちかぷーか。
いいinchよにも貰えつかね？楽しみだわ。

揚羽さんは去年貰えただけだしなあ。

でもんなこと言ったら辰子とかに貰ったのは二回だし、小雪もなん
だかんだ言って二回なんだよな。

亜巳さんが先導してくれなかったら貰えてなかっただろうし。

そう考えつと千花から一番貰えてんだな。

小二の時からだから……五回か。

ウム、ありがたいこつて。

ま、それ以外には梢江さんに一回貰ったことあるだけなんですけどねッ！！

忠勝は他の子にも貰ってたんですけどね！！

悔しかったから食い散らかしてやったわコノヤロー。

その時の忠勝の言葉、今でも忘れねえよ。

しかたねえな、欲しけりややるよ……だと……！！

あの時はマジで喧嘩したな。

殴ったさ、あらん限りの力で！

殴り返されたさ、おもつくそ！！

てか忠勝根性ありすぎだろ！

俺が大人げなく柔術使いだしてもまだ向かってくるし。

薫にいちゃんと千春にいちゃんどんなことしてんだ！？

あと、あの人も。

結局痛み分けで、一緒に風呂入って。

石鹼やらシャンプーやら傷に塗りたいくつてやって風呂場で二回戦始まったんだつたよな。

すぐさま竜兵が乱入して来て、小雪らがそれに続いて。

その後みんなで祖父ちゃんにフクロにされたのは懐かしい思いでだぜイ。

……帰りてえなあ、楽しんだ後に!!

今すぐなんてもつたいなさ過ぎっだろ!!

東南アジアを楽しむぜイ!!

てなわけできっと立って、何でか傍らにあった靴はいてGO!!

そんな俺が外に出たら褐色肌の眼帯ねーちゃんがいました。

「心配したんだよ！　よかった!!」

おふっ、おばおばが顔面に……。

今回は俺、すげーついてつかも。

こんにちは、みなさん。

今回は凄まじくついてる、そう思ってた俺がいました。

「ふわあ、料理上手なんだね」

そう言っで次々と食料を平らげているねーちゃんがあります。

アレ？これってみんなにあげるために持って来たんだよってさっき
声高らかに言っでなかったっけ？

そんなに食ってイイわけ？

どんどん減ってるんじゃない？他の人に飯がまわってなくね？てか皿
に出すたび消える勢いじゃね？

「ごちそうさま、おいしかったよー」

「……他の人のまで食ってなかったですかイ？」

「へっ？」

そう言ってくるくる辺りを見渡すねーちゃん。

飯の匂いで集まって来たやつらは拳振り上げてブーたれてんじゃねえか。

持って来た人がほとんど食うって何それ、怖い。

「あゝココが地元で、大変な人がいっぱいいるから飯持って来たって言っていましたっけ？」

「うん……」

「いざいっぱい持って来たけど料理が出来ない事に気付いたんでしたっけ？」

「うん……」

「で、料理できる人たちに手伝ってもらったことになったんですよ？」

「うん……」

「ほいで美味しそうだったからいっぱい食べちゃった、と」

「うっ……うん……」

うはっ、顔真っ赤に俯いてら。

ヤバー絶対に年上なのに年下っぽいわ。

いじりたくなるってヤツ？

んで何この周りの反応。

コイツだから仕方ない的な。

成程、こうなる事は予想してた人もいるわけね。

ビシビシ恰幅のイイおばちゃんから叩かれてるし。

「だっ、大丈夫だよ。 明日になったら大佐がもって持ってきてくれるって言ってたし！」

でもさあ、そーゆー問題じゃねえだろ。

お腹空かして集まってきたところに飯が来た、でも期待裏切られた。最悪のコンボだぜイ、なあ辰子。

どうすんの、どうすんのコレー！

と、思ってたらず新しい料理が出てきました。

再びの成程、無くなるだろうってわかってりゃあ出し方を考えるわな。

ねーちゃんも苦笑い。

「じゃあいただk「はいアウト！」ひっ、ひどいや！」

……おもしろい。

辰子以上の犬耳が見えるぜイ。

言っなれば忠勝相手の天か……俺相手の竜兵……。

くっ、悔しくなんて無いんだからねっ！
うんうん、割とマジで。

でもさ、とりあえず気絶してた俺を助けてくれた事には感謝しとこ。
『久遠寺』って家で働いてるらしいな。

日本の七浜にあるんだったら意外に会ってたりするかもしれん。

そだろ？『南斗星』さんとやら。

犬耳でのほほん（後書き）

新キャラ登場

さばき切れるか不安でたまらないです

プライドでのほほん（前書き）

少々遅れてしまつて申し訳ないです

プライドでのぼん

「じゃあこっちには旅行で来たんだ」

「まあそんなところですかね」

パスポートないんですけどねッッ!!

なんてことは呑みこんで、南斗星さんとおしゃべり中。

なんでもこの辺で昔あった災害で、家族を亡くしたそうなの。
今回の津波と同じようなモンで。

で、まあ色々あつて。

具体的に言えば落とした財布を拾った事で久遠寺家に雇われること
となったんだと。

「それでね、夢はね……」

夢つつーのはお仕えしてる久遠寺家の亡き御主人の娘の一人。
三姉妹の末娘らしいな。

その専属になつてんだからすげーってもんよ。

揚羽さんの小十郎にいちやんみたいなもんか？

あの人暑苦しいんだよな。

でもそこがなんかヒーロー見てえでかつきーとも思っけどさ。

にしても執事、か。

なんかお仕えするつてのもイイかもな。

人はべらすつてのはどうも俺の性に合つてなさそうだし……。

……およ？となれば主人は英雄！？
ないわゝ、マジないわゝ。

却下だな、間違いない。

「夢はね、私にとって大事な人なんだ」

しみじみってるねえ。

マジに大事に思ってたんだわな、ホントに。

拳握つて、誓つたような眼しちやつてさ。
 なんか騎士と姫っぽいぜい。

夢って人に是非に合ってみたいもんだわ。

……イヤイヤイヤ、ちよつと待て。

南斗星さんは女、だよな。

で、
だ。

夢って人も女。

女と女が好き同士。。。。。

うはっ！やめろ俺の頭！！

いやあああああッッ！！

なんか絡んでる！絡ませ合ってる！！

こう胸と胸を……おっぱが重なるうううううううううう！？

おかしくね！？おかしくね！？

だってどこでだって絡み合うのは男と女だろ！？

小説とかアニメとかだって、ドラマだってそうだろ！？

女と女とか、男と……男……とか。

イヤイヤ、アレは気のせいだな。

ともかくそれは無い！！

ふつーは男は女と！女は男と、だ！！

だから……ってなんか借りてきたビデオにあった気がする。

なんか女騎士と姫の物語っぽいヤツ。

どっかの薔薇と同じような絵だったヤツ。

いつやあああああああああああ！！

女と女なんてエ！女とウ女なアんでエツツ！！

……ちよつとイイかもって思っちまったのは俺とお前の秘密と言っ
事にしといてくれ。

HAHAHAHAHA！！

COOLだ、COOLになれ。

COOLなのが俺の売りだろ？

渋谷晃気はクールに去るぜ、みたいな？

ちよつと違っつて？

気にすんな気にすんな。

にしてもだ〜いぶ辺りも暗くなっちまったねえ。
とりあえず……寝よ。

外の探検？

そいつはまた明日起きてからってことでイイだろ。
明日には南斗星さんの知り合いも来るみてえだし。

ちよつと少なくて泣いてるおなかを押さえながら、
洪川晃気はクールに寝るぜ。

……なんかイイな。

布団はねえんだな。

ま、あつたかくて必要無いからいいけどさ。

下もちよつとやわらかくした感じでほとんど木。

なんかイイなあ。

こつ……なんつーか……冒険ぽいつーか。

帰ったら翔一のヤツに自慢したろ。

ギシツと床が鳴るぜイ。

知り合い？ジャックにいちゃん……は無いか。

「晃気くん……起きてる？」

「……まあ起きてますけど」

南斗星さん？

この俺に用があると言つのか……！

明日どうするかとかかね？

って抑え込まれた！？

まさか……じゃなくって刺客？

……Oh……。

おっ、俺の背中に双子山がああああああッ！！？？
何コレ何ノコノコ！？

天パッテンよーよっておっぱーーーーーい！！

何言ってるのか自分でもわかんね！！

今回叫んではつかじゃね！？

……今回……？……気のせいかな。

おっーぱい、おっーぱい。

ちっちちちおーぱいボインボイン！！

……あゝやわらけえゝ。

何コレ何コレ！？

ドッキリなのか！？サービスタイムなのか！？

せなかにあたるなとせさんのもっているふたつのおっぱいがおれの
せなかにあたってむにんむにとかたちをかえていますすこしまえに
はりだすみてえにでっぱってたのがまんじゅうみてえにむんにりへ
しゃげてすげーあったかいですぶらじゃあはつけてなくてせんた
んとつきもあたっててもうおれのむすこくんがやばいですいいにお

いでてまでまわってきてあったかといきがみみにあたってておれのりせいはもうやききれてしまいそうですあはなじでてきた。

色即是空空即是色天上天下唯我独尊焼肉定食弱肉強食晴耕雨読五十歩百歩！！

俺の煩惱が！！俺の煩惱が！！

間違い起しちゃう！間違い起しちゃう！！

期待込めた目で俺に訴えないでくれマイサン！！

負けるな晃気！頑張れ晃気！！

好きなあの娘の顔を思い出せ！！

……ってあの娘の顔が消えかかってるツツ！！

……これが……若さか……。

ってさあちよつと待ってくれ。

コレってアレだよな、俺のチェリーが食べられちゃうイベントだよな。

いやだってさ、向こうはノリノリじゃん？

ふっーさ、いきなりこうやって知り合った男に抱きついてきたりせんよな？

だったらここではきつと誘ってんだよ！！

……つとノツてくれる人がいないってさみしいね。

まあともかくだ。

……とりあえず……確かめてみよ。

イヤイヤイヤ、まーたくエロい想いとかないんですよ？
たださ、ホントに……ねえ。

アレなら俺って大人になれんじゃん？

南斗星さんスゲー美人だし。

……けどそしたら責任取らんといけんよな。
大丈夫だ、多分。

きつといい人だし、中学やめて執事になるってのもまたイイかもし
れんよな。

うん、そうしよ。

ハア？強くなる？

バカ言ってんじゃねえよ。

んなこといくら言ったって目の前の欲望に逆らえるほど俺は大人じ
やねえっての。

わかれよな、ほらさ。

てわけで。

……ゴキユリ……じゃなくってコホン。

今宵、2005年7月某日、渋川晃気は大人になります。

ってことで渋川晃気、行きm「大丈夫だからね」……何が？

「北斗みたいにはしない」

北斗？恋人？

違うか、弟くんだけ。

何したのよ。

「私がきつと晃気くんのこと守ってあげるから」

ハア！？

守って……あげる……？

ハハ……ははは……ハハハハハハハハハハハハ！！！！

「ふざけてンじゃねエぞ、コラ」

「^つ?」

寝転んでた体勢からだって関係ねえ。

この女の手首に手をかけて捻り上げるッ！！

「つたッ!？」

拘束が緩んだところで抜け出し立ち上がり、さらに女の手首を持って捻上げる。

転んだ状態からふわりと立ち上がる女。

祖父ちゃんには何度もやられてて、俺は一回も出来なかったんだが……初めての成功ってヤツ？

ケケケ、目え白黒してんじゃねえか。

あゝああ、すっかり治まっちゃまってさ。

ま、それでこそ俺の息子だわな。

「晃気くん……何を!?」

何を？

あひゃひゃひゃひゃ！

そんなわかりきったこと聞か無くっ たってイイのにさ。

「守る……たア何様のつもりだ？」

「でも！ だって晃気くんは!!」

「テメエの中の弟と!! この渋谷晃気様を重ねてンじゃねエぞコ
ラアッ!!」

正面で右手だけ掴まれたまま立っている女。

呆然とした表情で、少々泣きそうになつてら。

いやゝ俺も悪い男だね。

ま、イイけどさ。

人間の反射に付け入るように捻上げる事で相手を思うがままに投げ飛ばすってのがこのやり方。

むっちゃくっちゃですわ、いやマジで。

ちよっとただけだけど、出来るようになった俺も大概だけどさ。

持った手首を下に振り投げるように振るう。

それだけで目の前の女の身体はふわりと宙を舞い、受け身は取ってるみたいだけど頭から木の床目掛けてたたき落とされる。

……やっぱ新しく技が出来るってイイ気分だな。

痛む頭で動きが取れなくなった女の横を悠々俺は通っていくぜ。

「男ってさ、やっぱ譲れねエプライドってのがあるよな、ジャックにいちちゃん」

「……その性格は、俺好みだ……コウキ」

プライドでのほほん（後書き）

怒った理由などはまた次回に

ジャックの『気』でのぼん（前書き）

『のぼんと過ごす為に』を読んで下さった皆様、うしおなとらです。

言い訳はないです。

ただもしこの物語を楽しみにしてくださっていた読者様がいらっしやったなら、ただ謝罪の言葉しかありません。

本当に長い間放置という形を取ってしまい申し訳ありませんでした。これからは更新を行い、何とかして完結までもっていきたいと思っています。

こんなダメな作者でも良ければ、どうかお付き合いの方をこれからもよろしく願います。

ジャックの『気』でのほん

譲れぬモノがある。

男、女、子供、老人……関係ない。

譲れぬモノは、誰にでもある。

格闘技を手にし、己の肉体の身に頼り。

強くなるうと、地上最強となるうとするヤツならば。

枉げれない矜持がある。

「……やべー……女ア投げちまった……ヤバくね!? コレ!?
俺ってばどーなのよ!?!」

格闘士の世界は、広い様で狭い。

大衆の見世物になる為の表ではなく、強さの身を求める裏ならばなおさら。

限られる。

ただ頂点と、その付近のモノのみ。

それ以外は齒牙にかけない。

己よりもほんの少しだけ弱い人間を見つける。

己よりもほんの少しだけ強い人間を見つける。

手が届くかもしれない場所。

手を取られるかもしれない場所。

そんなモノを見る人間などただの凡夫。

決して上には至れない。

格闘士の世界は狭い。

裏世界ならばなおさら。

頂点の身を見る人間しか集まらない場所だからだ。

そこで、今噂になっっているガキがいる。

『達人』 渋川剛気の孫、渋川晃気。

「こつ、晃気くハッツ！？ 離れて、その男から！」

コウキに投げ飛ばされた眼帯の女。

俺の方を向き、構える。

又ラリとした、だが苛烈な威圧感が女から噴き出る。

「え、やだ」

「なんでさっ！？」

「なんでっつつて……俺がジャックにちゃんと一緒に居たいから？
それと、多分俺がここに来た理由がそれだからかねえ」

ニカリと、俺に向かって笑い掛ける。

……面白いガキだ。

十数時間前、鼻をへし折ってやった俺に向ける顔じゃない。

ここに来たのは、興味があつたから。

俺と戦った渋川剛気の孫に。

『柔の申し子』とまで噂される才気の持ち主に。

俺に潰された祖父を見て、何をするにも先に俺に殴りかかって来た

あのガキに。

「後さ、南斗星さんにやわるいけど、今は一緒に居たくないのさ」

ガキは女に向かう。

揺らがぬ瞳で。

「俺つてば、悲しいけど、格闘士なのよね……ホント悲しいけど！
！ 望んでなかったけど！ いや、望んでた気もするけど……！」

「でも……でも君は弱いじゃないか……！」

「かんけーねーや、俺が嫌なの。」

……重ねてんじゃねえよ、俺と弟さんをさ」

女は無言。

空間が歪む。

ゆらゆらと、陽炎のように。

両肘を開き腰より上に、手の平をコウキに向けるよう耳まで高く。

……ムエタイか。

そしてあの揺らぎは……。

「連れ戻す、危ないから、その男は危険だ」

「だからさ、俺はいらねえの」

「大丈夫、私が守ってあげるから」

「聞いてないですね、はいそうですね」

コウキがため息を一拍。

手を前に、構えようとした時、女の脚は晃気の顔を蹴り抜いていた。斜め下から掬い、薙ぎ払うように。

ボールのように、コウキは吹き飛ぶ。

「気絶させてでも」

「……や、ばく……ね？」

宙を飛ぶコウキに追い付き、追撃の肘は鳩尾の方へと滑りこんでいった。

意識を断つ為の一撃。

ソイツは……槍のように鋭いモノだった。

「ツツ!？」

「……『気』……ここまで使える者は実際に初めて見る」

「ああアッ!！」

脇腹に膝がめり込んだ。

文字通り、めり込んだ。

巨大な鉄の塊を叩きこまれたような力で。

「知ってたか、これでも俺はフェミニストなんだぜ？」

が、それがどうした？

顎を刈り取るような右フックが女に当たり、女はグラリと崩れ落ちる。

本気か、本気じゃねえのか。

何にしる、女なのがもったいねえぜ。

『気』と呼ばれる力がある。

女のみが本来扱える、男と対等に競り合う為の力。

貧弱なはずの筋肉。

流し、纏う事で、コンクリートを粉碎し、地面に穴を空ける。

身体能力を底上げし、あるはずのないモノを具現化し、放出する。

女に授けられた、神が与えた武器。

それが『気』。

イイ事だ。

強い女がいる。

男にも負けない、強い個体の女が。

『気』は女が持つ生命力に、潜在能力に比例する。

質の良い高密度な気を多量にその身に宿している。

極上の女の条件だ。

女なら誰もが持つが、誰もが扱えるという訳ではない。
最低限の器。

受け入れ壊れないだけの肉体を持つ女の身に、本来それは宿る。

だが男で、それを持つモノもいるらしい。

女の武器を男が使う。
何故かは知らん。
が、俺は、ゴメンだ。

ステロイドを行った。

骨延長を行った。

強くなる為に、何でも行った。

だが、そんなモノは俺じゃない。

俺が、俺の肉体で、掴む勝利では無い。

「ジャック、にいちゃん……ありがとう」

意識があるか。

鍛えられているな。

「行くぞ、コウキ」

「イヤ、俺まだ顔がいたってちよっ！　嘘だから！　嘘じゃねえけどちよい待って！！」

「……女……次に会う時は俺を殺しに来い。」

それでも俺を殺せなかったら、俺の子でも……産んでみるか？」

昨日でのほほん（前書き）

ジャックのキャラが……。

昨日でのほん

日本で俺がのべーつとしてた時。

んな時も二ユースで毎日毎日報道されてたんだが……。

なんつーの？

見ると聞くじゃ大違いってヤツ？

そんな感じかね。

所詮、テレビで幾ら言おうが、新聞でいくら見ようが。

可哀想だなんって同情しようが、力になればなんて募金してみようが。

そいつはテレビの先で、新聞の向こうで、外国の事で、世界の違った話。

現場を見ねえとわかりやしない。

現実を目の当たりにしなきゃあわかりやしない。

現状を知らなきゃあわかりやしない。

それが普通。

それが当たり前。

経験でも実際にしなきゃ、そんなもんだろ。

いやいや、俺はただ俺みてえな日本人はカッコのために可哀想って言うとは言わねーさ。

本当に、本気で、心から、純粹に。

助けたいなんて想いがあるからそう感じるわけで。

けども、もしその場に自分が叩き込まれたら。

テメエの身一つで力になりに行けなんざ言われたら。
代わってくれて泣きつかれたら。

そんな時さ、どー思う？

俺？ 俺は悪いが……ゴメンだね。

ヒーローになりてえとは思う。

自分を顧みず人の力になれるなんざ、ハンパなくかつきーしさ。
マジにすげーと思う。

でも、俺はイヤだわ。

こつちやこつちで友達とか出来るのかも知れんが……。

それが小雪や辰子や忠勝や、アイツらより大事になるとは思わねえ。
つーか今いる友達ほっぽりだして出来た友達なんざ、どんなにアイツらの誰より気があつたとしても。

俺は……仲良くなれそーにねえや。

HAHAHA、俺もまだまだ餓鬼だつて事だわ。
だつてみんなのこと……大好きだもん！ だもん！！

……と、まあその辺はとりあえず置いて。

顔が赤い？ 気のせいだろ、常識的に考えてな。

とにかく今俺が居んのはとある島。

東南アジアのとある島。

南斗星さんがいた島から少し離れたところにある島だな。

目の前の光景はスゲーぜ。

なんたって手足はがつりがりなのに腹だけ膨らんでる人間が大量に
いんだからさ。

栄養失調ってヤツ。

祖父ちゃんから聞いたことがある。

戦争経験者らしく、そんな人間を腐るほど見たって言ってたっけ。

栄養が身体に廻らず。

けど吸い込んだ空気だけが肺や、胃に溜まっちゃまって。

見ただけだったらちよいと腹いっぱいな感じだが……本質はまるで
違う、とくら。

ジャック兄ちゃんに連れられて来たんだが……何しに来たんだろね？

「……ここにいる人間は、皆スネに傷を持つ者ばかりだ」

「犯罪者？」

「数年前のそれを超えると言われる空前の大地震により、鎖に繋が
れていた獣どもは野に放たれた。

そいつらを連れ戻す為に、どうやら人間が動いているらしい……
ここにもまた、獣がいる」

木を隠すなら森の中ってヤツか？

犯罪者だらけの街に逃げ込んだ犯罪者は、自分がパクられねえよう
余所者をつてか？

………どここの映画、どここの漫画だよ。

マジにそんなところがあるたあ……ホント、驚きだわ。
いやゝまだまだ見識が狭いねえ、俺も。

って何コレ？

食い物？ バナナじゃん。

「……食ってイイ？」

「好きにしろ」

んじゃ遠慮なく……いただきまゝ……ってあぶね！？

石！？ 木！？

何か投げられてるんですけど！？

「食うに食えず、そこに餌を持ったガキがやって来る……見逃す人間がいるか？」

なるゝ……って俺じゃん！？

カモネギ！？ おしょう！？ 居合いして空でも飛んでるバーロー

！！

飛べねーよ！ わかってるよ！ でも刀って……やっぱかっきーよな。

とにかくんな危ねーとこで食えるか！

いらねいらね！ 散れ！！

……おゝ……鯉に餌やるのを思いだすっ！？

まだ飛びかかってくるヤツらいるんですけど！！

もうねえよ！ もうねえよ！ 何となく気持ちはわかるけどもうねえんだってさ！！

「執念」

ハア！？ 何だって！？

「飢え、苦しみ、今にも絶えそうな命。

それでも人間は生きようと足掻く。

明日の事など考えはしない、ただ今日を生きるため、その為ならば明日などいらぬ……そう考える人間の今日は重い」

……わああ、光りモノだして来てる奴いるんスけど。

何さ、コイツ？

「殺してでも奪い取り、無ければ貴様の肉を喰らうだろう」

「マジで？」

ってマジで来た！

錆び付いた蛮刀！？ 肉切り包丁！？

わからんが振りかざして来やがった！！

俺の腕、狙って振り下ろされてくる刃。

微塵の躊躇いなくなるなんざちよいと俺は聞いてませんよ！

今回の海外旅行はでんじゃあ過ぎねえか！！ なあ祖父ちゃんツ！！？

「俺は、現在しか見ない、今しかいない……何よりも、己が雄として地上最強になれるのならば」

……ジャック兄ちゃんの拳が、突っ込んできた現地住民に叩きこまれた。

皮膚が破れる、頬骨が砕ける、頭蓋骨が割れる。
脳漿が飛び散ってら……死んだ、んじゃない？

「童貞を捨てろ、襲い来るかもしれない化物から勝利をもぎ取る為に。」

生への、勝利への、執念を燃やせ」

……ハハッ。

そっか、ハハハッ。

祖父ちゃんに頼まれたのか、それとも爺ちゃんに頼まれたのか。
刃牙にいちちゃんが、薫兄ちゃんが頼んでくれたのか。
わかんねえけど……ホント……にさ。

「ジャックにいちちゃんは、優しいんだね」

「……………」

黒髪の怖い子、『川神百代』。

俺だつて、ちよいと武術かじって川神市に居ればその名前ぐれえ知ってるさ。

スゲー量の『気』を持った『武の化物』。

目を付けられてるって、祖父ちゃんが言ってくれたんだろうさ。

『武術家と格闘士は違う』。

己の肉体だけを頼りに、超常的力を使わない格闘士。
『気』というモノを身に纏い、超常的力を使う武術家。

まともな格闘士なら、武術家にや勝てねえ。
そもその出来うる事が違うんだからさ。
だから、武術家は格闘士を見下してる。
歯牙にも掛けちゃいねえ。

けど…… ホンモノは勝ってきた。
んな『気』なんざもんに惑わされなく。
祖父ちゃんも、爺ちゃんも。

……もしさ、俺は喧嘩売られたら負けようと思ってたんだわ。
負けて、地べた這いまわって、尻尾巻いて逃げようってさ。

でもさ……でも、そんな俺は、どっかで……。

「俺は負けねえさ」

「……………」

「童貞も捨てねえ、人なんざ殺さなくったって俺は負けねえ。」

ジャックにいちゃん……俺ってば、昔は明日の為なら今日はいら
ないなんて言ってたんだよ。

変わらねえ明日が来るなら、今日なんざ……」

でもよ、そんな阿呆なこと考えてっから。
結局小雪らを傷つけちゃった。

変わらねえ明日なんざ絶対来ねえ。
変わらねーもんなんざありやしねえ。
それを知らずに俺は……。

「俺、これでも俺なりに悩んだんだわ。

悩んで、悩んで、悩んで……俺は本気で欲しいもんが出来た」

襲い来る狂気。

つま先から足首、脹ら脛、膝、太股。
力を通し、一つの流れとして。
後ろに跳び、受け流す。

……てか見事に俺ばっかに来るな。

ま、あんなに見せられたら仕方ねー気もするが。

うは！ ジャックにいちやんの脚で頸椎が……。
完ぺき逝ってんじゃね？
勇者に敬礼ッ！！

「何が欲しくなった？」

Wao！ なんか普通に聞いてきたよ。
ま、答えるけどさ……。

ってか、それくらいしか思わねえ俺も大概だわ。

「昨日だぜい」

「ほう？」

「明日は変わる……だから昨日の事を振り返って、悔いも何も残さねー楽しい昨日にする。」

ああすれば良かったじゃなくて、ああして良かったって思える昨日にする……そのための今日だ」

ま、夢とか理想の類いだけどさ。

けども俺は頑張ってみらあ！

いつだってそう思えて生きたら、きつと俺はかっきく生きれっだろ？

「だから今日は現地の人らと稽古したっつー昨日にする。」

明日振り返ってそう思える昨日にする。

って事で俺は逃げる！！

撒いてくるから待っててなあ！」

「……クス……ああ、行つてこい」

晃気ターボ全開！！

……ノってくれるヤツがいねーって寂しいねえ……。

まあとつとと逃げて、帰って羊羹でも食いてえなあ。

……しかし、中国行った後帰ったらウチ、魔境になってたんだよな。

……帰りたくねえ気もするわ。

あずみのメイドでのほほん（前書き）

相変わらずグダグダ……。

あずみのメイドでのぼん

あぁっ！ あたいが憎い！！

あのクソガキ……九鬼の嫡男の友人だったと……そうならあん時
言えってんだ！

……イヤ、あたいが見逃してたのが拙かったのかい。

お蔭でヒュームの旦那にや殴られるわ……さんざんだよ。

まあ殺されなかっただけありがたいんだろうけどね。

しっかし……一人で見つけて、ちゃんと日本まで連れ帰れたあ面倒
な事になっちまったもんだ。

逃げ出した犯罪者捕まえ「……ぶっ殺すだけの簡単な仕事だったの
によ。

あ？ 殺す方が楽なんだよ、その何が悪い……？

なのにガキの子守り……ダリイ。

見つけたらとりあえず殴るか、確定だな。

……ま、あのガキもかわいそうっちゃかわいそうでもある。

九鬼財閥。

その嫡男と、長姉と知り合いなんだろう？

九鬼からは眼え付けられてる。

御曹司様はさぞあのガキを褒めてたからな。

あのガキ「洪川晃気ってのは気付かなかったが……出会いの場が擡

台でテロ現場なんだと。

あたいが迂闊だったさ、真剣でな。

九鬼の人間に限らねえが、バカでかい家や旧い家なんざは付き合う人間との関係にまで踏み込んでくる。

どこぞの馬の骨ともしれねえ相手と知り合って、悪い影響受けるのが嫌なんだろうさ。

九鬼の当主様はんなケツの穴のちいせえ人間じゃねえが。

としても、体裁を気にする人間はどこにだっているって事よ。

あのガキか？

九鬼の人間皆が諸手を挙げたって話だぜ。

九鬼財閥は、その厚い人材と豊富な財力を元に様々なジャンルの物事に手を出してる。

が、元は鉄鋼とそれに基づく軍事産業。

『強き人』、『強大な力を持つ者』。

そんな人間と親しくなるってのは、九鬼の家風的にドンと来いって感じなんだよ。

あたい、『忍足あずみ』だって元はと言えば流れの傭兵だった。

だが九鬼の人間にスカウトされて、今じゃメイドなんて形で九鬼家従者部隊に所属してるがな。

メイドつつつてもゲスイ豚どもが群がる生易しいもんじゃない。

血生ぐせえ戦場を渡り歩いてたようなヤツがゴロゴロいる武闘派。

主人が襲われたら、主人を護りつつ襲撃者を五寸刻みに出来る様なさ。

雇ってくれたつてのは感謝してる。
殺し以外に出来なかったあたいにいろんな技術叩き込んでくれたのも、九鬼だ。

勘当同然で里を追い出されたあたいに帰る場所をくれたのも、九鬼だ。

九鬼の人間を殺しにかかったあたいをデカイ器で許し受け入れてくれたのも、九鬼だ。

九鬼には返しきれねえ恩がある。

九鬼つつー傘に入れさせて貰ってる身として、あたいは……。

ま、とにかくそんな感じで強い人間つてのが九鬼は大好きらしいさ。それであのガキの話になるが…… トンデモねえな、ありゃあ。

本人云々より何より、血筋と、交友関係が。

渋川晃気。

199x年生まれの12歳。

川神市第三中学校1 B、出席番号7番。

両親とは本人が1歳になる前に死別。

現在は母方の祖父、渋川剛気の家で生活中。

祖母は近隣の駄菓子屋にて別居中、本人は知らず。

祖父の養子になった榊原小雪と8歳の頃より同居中。

また板垣亜巳、板垣辰子、板垣竜兵、板垣天使を保護という形で同居中。

祖父である渋川剛気は『武の体現』、『達人』と称される柔術家。幻の中の技術である『合気』を実戦で使いこなす超A級の格闘士であり、その教えを請っている。

更に中国格闘界の頂点に立つ郭海皇、『魔拳』烈海王、『喧嘩師』

花山薫、『地上最強のガキ』範馬刃牙、『武神』愚地独歩等々。
裏に潜った先の、超A級格闘士と広く交友関係を持つているってん
だから驚きだ。

『氣』を使うあたいら武術家と違って、格闘士はそれを是としない。
鍛えた技と肉体だけで、前に立つ存在を潰す。
それは九鬼の人間にや許されねえ。

それだけでは殺されてしまうかもしれないから。
それだけでは地べたを這わされるかもしれないから。

九鬼の人間は、『氣』を使う。

戦闘に携わる者はその大小に関わらず、必ずな。

だからこそ、九鬼はそれが素晴らしく見える。

『力』を信奉する九鬼だから、それでもそこに入れぬ九鬼だから。

格闘士は、九鬼にとって特別だ。

と・に・か・く！

あたいはあのガキを探さなきゃならねえんだ。
まだまだ死にてえなんて思わねえし。

目星は付いてる。

今いる島。

あたいがあのガキを最後にみた島から、少し離れたところにある島。

筋肉質の男と二人、そこに向かつてるつてのを目撃されてんだとよ。

うっし、とりあえずとっと探し出すk「あ、あずみさんちーっす」

……。

「ぬおっ！？ 無言で小太刀構えねえで！！ ビビるから！ マジビビるからー！！」

「……何で、アンタはそうのうのうと……」

「のうのう？ NONO?」

……まあいイ。

「……あつずみさくん、ちょっと聞いてイイすか？」

「何だい？」

「なあんでゆっくり、俺に近付いて来てんのかなあ……って」

「気にすんな、ハゲるぜ」

「ハゲてねえよ！」

……ハッ！

「見ないでエエツ！ そんな視線で俺を見ないでえエエツ！！」

「大した事ねーんじゃないかねえか……あたいは知らねえけど？」

「だよなだよな！　まあ、あずみんたらヒドいんだから……男の子はデリケートなんだずぶうる！？」

へえ……かわす。

軽くくとはいえ、気を纏ってたんだ。

流石はつてヤツだよ。

「イヤ！　ちよっ！　マジ何すんの！！」

「なあに、気にすんな……痛いのは最初だけ、すぐに良くなるさ」

「何が！　何がなの！？　晃気くんはまだ純粹なのよ！！」

丹田に力を込める。

「ちよっ！　聞いている！？　俺の話聞いている！？」

湧き出す清水のように、噴き出すマグマのように。

にゆるりと現れる『気』を身体に巡らせ、巡らせ、巡らせ、纏い…

…弾く。

「忍足流……『剛掌破』」

易々と、人が出せるはずの限界を超えて。

オリンピック100m金メダリストを鼻で笑うように。

水月に飛び込んでいったあたいの右掌。

「　　ッッ！」

本能からなのかね？

それとも受けた訓練から？

ちっせえ身体に刻んだ経験から？

ガキは身体を擦じった。

かわすように、急所から逸らすように。

……ま、あたいには関係ないんだけどさ。

「『式連』」

「……うそん」

左掌はガキの右脇腹に添える様に。

ズンと、もう一つ脚を進めて身体を加速させる。

肩を回し、さらに前へ前へ。

肘から手首、ガキへと伝わった力は叩き潰すように、貫くように打ち放つ。

526

あたいと会ってアバラを数本、軽い内臓損傷。
コレだけで済んだデメエの運に感謝しな。

「……『気』なんざ、でえっ嫌、いだ……」

とりあえず任務完了、と。

……帰りたくねえなあ……。

案の上だよ、クソツタレ。

ヒュームのジジイ！　よくもこのあたいを……ハア。

イヤ、わーってるよ。

何とかあのガキ見つけて日本まで連れ帰ったとはいえあたいが悪かった。

仕える家の嫡男の、情報を、状況を把握しきれなかったあたいが悪かった。

戦場じゃ死んでるぜ……ってヤツか？

……とにかく耐久組み手は死ぬ……イヤイヤ、割とマジで。ほぼ一か月、絶える事無しになんぞ。

とにかく、とつとと部屋あ行って、黒糖焼酎をひっかけてやらねえ
と「フハハハハハハ！　そこなメイド！」……ああ、あ！？

……ってマジかよ！！

「はい！　九鬼家従者部隊序列81位、忍足あずみです！　何か御用ですか、英雄様？」

……あゝ……一気にテンション引き上げんのダリイ……。

てかなんでこんな時に来るんだ、コイツは？

とつとと返せコラ、こちとら疲れてんだよ。

「不満そうであるな」

「いえいえ、そんな事ある訳ないじゃないですか」

顔に出てたか？

イヤ、んなこたあねえと思うが……。

「構わん、貴様がヒュームに絞られていた事は知っている……楽にせい」

「勿体無いお言葉であります!!」

「フハハハハハハ！ ヒーローである我は寛大であるからな!!」

「流石です、英雄様！ 素敵です、英雄様!!」

……マジ、ダリイ……。

「つと、そんな事を言いに来たのではなかった。

あずみとやら！ 誠に大義であつた、貴様の行動に我は心から感謝する……ありがとう」

……へ？

頭、下げ……イヤちよっ!!

「晃気から聞いたぞ」

あのガキ……イヤ、中々見所があるじゃねえか。

助けられたんだから、まアお礼をするのは当然だ。

これで給料でも上がったら、待遇でも優遇されたら少しは感謝してやんのもイイかもな。

「臀部に三つ、ほくろがあるらしいではないか!」

………は?

「我が友がネタには、おかずにはここ一月困っておらぬと喜んでおったわ。」

何でも一日三発は余裕だと……友が元気な事は素晴らしいことである!」

………は、あゝ………うん。

「英雄様?」

「なんだ?」

「是非その、素敵なお友達のところにも私も行きたいと思うのですが………」

「フハハハハハハ! よかろう! 我が友の下に貴様を招待してやる」

「はい! とくっても楽しみです!」

あずみのメイドでのほほん（後書き）

と、いう事で東南アジア編は終了。

次は晃気くんがいない間の他のメンバーの話を書こうかね、というところですよ。

小雪の病院でのほほん（前書き）

……ムズイ。

しっかり思考させていいものか、どうなのかが微妙だ。

ともかくもう少しちゃんとしたモノを……次からは。

小雪の病院でのほん

コウキは旅行！ コウキは旅行！

中国に旅行！ 中国に旅行……じゃなかった。

えと……東南アジア！

旅行、旅行、コウキは旅行！

小雪ちゃんはお留守番。

アミミンがお家に居てくれるけど、早く帰って来てくれないかなあ。

「おや、榊原さんではありませんか」

「おおお……誰？」

「忘れられているというのは寂しいですね」

色黒の、眼鏡の男の子。

僕と同じ年くらいかな？

でも色黒の知り合いはタダカツしかいないもん！
まっくろくろろ、くろろすけ。

「僕ですよ……葵冬馬、君たちと同じ中学に通う生徒です」

「知らな～い」

「やれやれ、何度か君とは合っているはずなんですがね」

「でも知らな～い」

「ふふふっ、さすがにそう断言されると悲しいモノがあります」

「だって興味ないもん」

「あははっ……あははははははっ！　そうですか、そうですか」

笑ってる。

僕、何か変な事言ったのかな？

でもねでもね、ホントに知らないんだよ。

どーでもイイ事だしね。

「……そう言えば、何時も付き添いで来ている渋谷くんがいないようです」

「コウキの事知ってるの？」

「ええまあ……昔から何度も何度も利用していただいてますし、僕と同じ年ですしね」

今日は病院。

僕はどこも悪くないと思うんだけど、病院に来て下さいって言われてるの。

いつもはコウキと一緒に来てるんだよ。

今日も来たの、診察する日だったから。

『今度はまた付添いの人と一緒に来て下さい』だって。
病院は好きくないのにね。

「それに……」

「？」

「目立ちますから。」

過去の話ですが小学生が、小学生を連れて精神科に入るような状況は。

「一応この院長の息子ですし、情報は入ってきますので」

「……ふん」

「おや、女性に対して失礼な事を言ってしまったようで……申し訳ありませんでした」

「……えへへへっ。」

「別に気にしてないよ」

「ですが……確かに言い過ぎたのは僕です」

僕は虐待された子。

僕はお母さんにとっついていない子。

僕はお父さんの顔も知らない子。

でもイイもん。

「精神科に行くという事……それは酷く重いモノです」

僕は虐められてた子。

僕は病原菌の子。

僕は誰からも好かれない子。

でもイイもん。

「しかしそんな事も気にならないほど、貴女は優秀です」

僕は壊れた子。

だから僕は病院に来てる。

でもイイもん。

「学年で二番目の成績を取る様な貴女は、普通の人ですものね」

えへへへっ。

「……コウキはね」

「はい？」

「コウキはね、僕の事を頭がおかしいってよく言うんだよ」

「……それは、何と言ったらイイか……さぞと」「勉強なんてクソ喰らえじゃー」って「……はあ、？」

「お風呂上がりパンツいっちょで牛乳飲む僕をおかしいって言うて怒るよ。」

英語の教科書すらすら訳す僕を狂ってるって文句を言うよ。

おじいちゃんとかおじちゃんたちからお菓子貰って食べてたら卑怯だって頭グリグリしてくるよ」

……ムムムっ、なんだかムカツとしてきたぞ。
帰って来たら蹴ってやるもんね！

「あの、何を言いたいのかいまいちb」あゝ、そろそろ帰って桜吹雪を録画しないと！」「……榊原さん？」

帰って来たら一緒に見るんだゝ。

『この桜吹雪が目に入らぬか』ってね！

お茶飲んでゝ、ヨウカン食べてゝ、マシユマロ食べてゝ。

風鈴が鳴る縁側でみんなとお昼寝、お昼寝。
あ、そうだ。

「キミがね、僕に何が言いたいのか僕にはわからないよ。

何で僕に話しかけて来たのかもわからないし」

「いえ、ただ僕はあゝ」でも！」「……」

「僕はコウキといて、みんなといて楽しいよ。

コウキは僕を見てくれるから、みんな僕を見てくれるから。

同じクラス？ だったらまた学校で会おうねゝ」

自動扉をぴよんと出て！

あ~~~~い~~~~ぞ~~~~!!

.....早く帰ってこない~~~~かな~~~~。

竜兵の愛でのぼん（前書き）

ガチホモ注意。

……小雪の誕生日に、俺は何をやってんだ……。

竜兵の愛でのほほん

……ああ……。

ああ……ああっ……あああっ！　あああああああああ
あっ――！

……鎮まらねえ。

俺の、滾りが！　俺の槍が！！　俺の想いが！！
鎮まらねエエエエエエエエエエエエエエツ――！

帰って来たあ。

一週間ぶりの、アイツの姿だ。

外国に晃気が行くのは長期の休みの恒例行事見てえなモノだ。
格闘士のお偉いさんのところに行ったりして、テメエ自身を鍛えて
るんだとよ。

のほほん、まったりと過ごすため。

危ない所に行かず、楽しく過ごすため。

アイツは強くなろうと、もがき、足掻いて帰ってくる。

実際問題、強くなっているらしい。

俺や忠勝なんざが『手合わせしねえか？』　つつたらアイツはすぐ
に逃げちまうが。

ジイちゃんとは稽古はしてる。

他にも遊びにくる刃牙さんや烈老師や、他の連中にも遊ばれてる。

俺は、小学生のころから老師に拳法を習ってる。

身になってるのかなってねえのかはわからねえが……まあ、それを

使える相手がタツ姉か忠勝か天かアミ姉か、もしくは老師ぐらいのモンだ。

中学で俺の事を目付き悪いなんざ言って絡んでくるヤツは、ただの拳一つで黙らせれる。

だからわからん。

正直なところ、身内相手にしか拳法を使った事がねえからな。

だがだからこそ、老師や刃牙さん、花山さんに愚地さんにジイちゃん、俺の立っているところから遙か外に居るってのはわかる。

ただ一撃で、俺は潰されるくれえに。

あの人たちは尋常じゃないほどの、格闘士だ。

そしてそんな人を相手に。

ジイちゃんとは一日に何十回と、他の人たちとも機会があれば何度も何度も。

手合わせをして、ふっ飛ばされても、叩き潰されても、ねじ転がされても。

向かって行ける……そんな晃気は強い……俺なんかよりずっと……それもわかる。

日に日に、アイツは遅しくなってる。

筋肉はたいした事ねえ様に見えるが……多少は付いてるらしいが、俺や忠勝とは比べ物になんねえくらい細い。

だが俺や忠勝よりでっかく見える。

毎日、毎日、膨張する様にアイツはでかくなっている気がする。つつつてもジイちゃんに言わせりやただのハナクソらしいがよ。

そんな晃気が……強くなっていく晃気が……でかくなっていく晃気

が……俺はたまらなく好きだ！ 愛してる！ 俺のケツはお前専用だ！！

わかるか！ この気持ちが！！

日に日に大きくなる！ 破裂してしまうんじゃないかねえかつつーくらいの想いが俺の中で暴れてる！ 滾ってる！！

…… ああッ！ クソがッ！ 俺は俺が嫌になる！！

このカスがッッ！ 俺はカスだッッ！！

ガキの頃は、小学生のころはもっと気が聞いた言葉をくれてやれた！！

なのに今はアイツの顔を見るだけで頭が熱くなって……気がつけば晃気に触れようと飛びかかることくらいしか出来やしねえ！！

純なこの想いが、俺を狂わせる！

もっと優しく！ もっと丁寧に！……出来るもんなら俺はアイツとジューズ片手に手を繋いで、町をのんびり歩いて。

ベンチで、アイツの肩によりかかって……木漏れ日の下で眠りたい。

俺はそんな付き合いがしたいんだ！！

なのに俺の想いは俺を踏みつけて暴走しやがる。

ただ飛びかかって、ただアイツに投げ飛ばされるくれえしか出来やしねえ！！

違うんだ晃気！

俺はもっと心の深いところで、お前が望むみたいなのほんまったりした繋がりを持ちたいんだ！！

なのに俺がまだまだ弱いから……クソがッッ！！

……まっ、まあ俺を投げてくれるお前はスゲー素敵だけだな。
お前がくれる痛みも、投げた後の蔑んだ眼も、俺の心を妖しく撫で
るぜ。

思いだしたら、それだけで俺はもう……。

晃気、お前が気付かせてくれたんだぜ。

実は俺がMだったのもさ……。

……しかし、今回帰って来た時は過去最高の男っぷりの上がり様だ
った。

九鬼のヤロウに連れられて帰って来たんだが。
ウチに着くなり土下座。

『お前らの事、利用してて悪かった』だってよ。

何でも晃気は強くなりたいたいんだと。
出来るもんなら誰よりも。
のほほん、まったりなんざ言っときながら。

言い訳に使ってて悪かった、自己満足のために使ってて悪かった。
そう言って晃気は謝った。

まあすぐさまユキに蹴り飛ばされてたがよ。

……気にしねえよ、そんなこと誰も。

俺も、ユキも、忠勝も、タツ姉も、アミ姉も、天も、九鬼も。
誰一人だって、んなこと気にするわけねえじゃねえか。

誰もが、お前のお蔭で立つことが出来た。

背筋伸ばして、真っ直ぐとはいかねえのかもしれない。
曲がって、よじれて、歪な形で立ってるのかもしれない。

でも、でもよ……立てたのは、お前のお蔭なんだぜ。

九鬼は事情を知らねえからわからんが。

地面向いて、自分でデカイ壁勝手に作ってた俺らを。

フラフラ現れて、勝手におちよくって、お節介焼いて
空向かせてくれたのはお前のお蔭なんだぜ？

晃気、お前は言ってたな。

『強くなりてえ』って。

強くなるんだろうよ、お前は。

芽があるから、それが育ってるから。

だからジイちゃんも、刃牙さんらも、お前のための訓練とか言って、
楽しそうにしてんだろ？

だから俺も強くなりたい。

いつか、お前は手に届かないくらいに強くなっちまいそんな気がする。

それは、嫌だ。

烈老師が言うに、俺には才能が無いらしい。

凡人に比べれば……というところだが、デカイ身体と持ち前の筋肉く
らいしかってとこだ。

ユキみてえな異常なまでの脚先の器用さや、タツ姉みてえな天性の
筋質とタフネスはどこにもねえ。

だが、それがどうした？

それでも俺は置いていかれたくない。

隣には立てなかったとしても、それでも俺は……。

ま、いつか隣に必ず立つて見せるけどよ！

アイツに纏わりつくヤツらは押し退けて、必ず！！ 必ず！！

ユキ！！ 晃気の背中を特等席にしているからって調子乗ってんじゃねえぞ！！

なーに考えてるかいまいわからねえが、どんな気持ちで晃気を見てるのかしらねえが。

俺はテメエを超える！ 覚悟しとけや。

タツ姉！！ 双子の姉だからってテメエも容赦しねエ。

俺が見た感じ、兄貴に甘えるみたいに、父親に甘えるみたいに晃気に接してるな。

それならイイが……踏み込んだならば蹴散らす！！

忠勝！！ 目下はテメエが目標だ！

少しばかり会うのが俺より早かったからって、図に乗ってる態度はいただけねえな。

いずれ這い蹲らせて、擦り潰してやるよ！！

アミ姉！！ 意外にアンタがアブねえんだよ。

晃気の利用者気取ってるが……ジジイ趣味は引っ込んでろ！！

俺の晃気に川神水飲んで、色目使ってんじゃねえよ！！

天！！……お前はイイさ。

兄貴に甘えてろ。

イイ妹演じて、俺の株を上げる。

九鬼！！ 何が我が友だ！！

テメエのその尊大な態度は気に入らねえ！！

俺らバカにしゃがって、何様だコルアツ！！

椅子から引きづり落とす！ 高いところにあるそこから……見とけ。

んで小笠原！！

幼馴染イ……そのステータス俺によこせ！！

今ならテメエの作ったマズイ飴、腐るほど舐めてやるからよ。

他は……委員長も、クマも、どっちでもイイが……九鬼のメイド！！

裸見せた！？ それがどうした！！

俺なんざ何時だってオールオッケーなんだよ！！

……ふん、大した事もねえ身体にくせによ。

後は……ああ。

ユキの行ってる病院の息子が、最近ちょっかい掛けて着てんだよな。

……まあ、ただの雑魚か。

晃気！ 俺はお前のために負けられん！

アイツら纏めて叩きのめし、お前の傍に俺は立つ！！

……その時は、お前にこれを渡すぜ。

俺の……お前への想いだ。

愛してるぜ、晃気。

くお前に届くだろうか

お前に届くか？

俺のこの気持ち、この滾り

俺がダイスキだって、お前の事がダイスキだってこの気持ち

気づいてくれるか？

会えば、毎日顔を合わせてるのに心がドキドキしてうまく話せない
気持ち

お前と一緒にいるだけで、俺は、俺は

だがお前は俺の気持ちに気づいてくれない

はやく気づいてくれ

……いや、必ず気付かせてやる

俺の気持ち

く板垣竜兵ポエム集『俺の愛』より抜粋く

雑魚寝でのぼん（前書き）

とりあえず第二部完！

雑魚寝でのぼん

人付き合いってのは難しいもんだ。

距離が近いと思ってても、何かの拍子に急に遠くなっちまう事もある。

距離が遠いと思ってても、何かの拍子に急に近くなっちまう事もある。

自分と、相手と。

上手に付き合ってるって感じてても、まるでそれは下手くそで。不器用に素っ気なく付き合ってるって感じてても、まるでそれは相手の心に届いて。

わからん。

相手の気持ち。

所詮人間誰しも自分のことしかわからねえんだ。

そう考える事がおこがましいのかもしれないけどさ。

だって自分で自分の気持ちがわからなくなる事もあるんだぜ？

自分探し〜とか言って旅に出る人がいるご時世だし。

けどさ、やっぱり自分が好意を持ってる相手とは仲良くしたいわな。

それが恋であれ、愛であれ、友情であれ、尊敬の念であれ。

そんな相手に嫌われたくないって思うわな。

「……あむ、にゅ〜……」

イイ顔で寝てら。

サラサラの白髪を畳に垂らして、とろけた様な顔して気持ちよさそうに。

かわいいもんだわ、ホント。

「寝ねえのか？」

ん？ おお、忠勝か。

がっちり天に裾掴まれちまってて……きゃー、忠勝くんのおにちくぶるっ！？

「何故に、枕……？」

「くだらねー予感がしたからな」

ヒデエ。

やれやれつつつてため息つかれて……真面目顔。

まあ、何か俺に言いたい事でもある訳？

こちらら帰って来てからは遊んで、遊んで、遊びまくってちよいと疲れてるんですよーっと。

その間も祖父ちゃんの稽古は休ませてくれんし。

今日だつてそうだわ。

朝起きたらセミがスゲー鳴いてて、『うるせえっ！』つつつて天がキレて。

んじゃ駆除でもすつかーって虫取り網片手に、虫カゴ片手に一日中近所を練り歩いたんだぜ？

お蔭で大量のセミ、セミ、セミ。

つつて工事現場が俺の腹に！？って勢いで鳴くから結局全部逃がして、グロッキーになっただけどさ。

まっ！ 刃牙にいちやんたち相手に稽古するよりずっと楽なんですけどねー！

アレ、思いだしたら目頭が熱く。

……俺ってば、どうしてこうなった？

「くだらねえ事を聞く、軽く流してくれてかまわねえ」

「ん、そか」

天の赤い髪をさらつと撫でて……。

まー、奥さんあの人自然にやっちゃってくれますわ。そんなんだからモテるんでしょうねー。

俺だつて出来るけどな！

小雪と辰子と天だけだけどなー！！

つと、まあ冗談は置いてこう。

しっかし辰子の髪もやわらけーな。

女と男は違う生きもんだね、間違いねーわ。

「晃気、テメエは強い」

「やん、褒めたってサービスはしないw」「ちやかすな、ちゃんと聞け」「フヒヒ、さーせん」

「強くなりたいてって気持ちはわからんでもねーよ。」

俺だつて男だ、薫さんそこ顔出させて貰ってる……それに……まあ、その気持ちは分からなくもねえ。

「だがよ、お前は十分に強いじゃねえか」

「あんまそんな気しねーんだけどなあ」

正直、これ俺の本音な。

祖父ちゃんとか、稽古付けてくれる人らが半端無さ過ぎて、なんつーか……ねえ？

「力、誰かに見せつけてえのか？」

「まーったく」

「誰かを、潰してえのか？」

「んにゃ、俺の夢はのほほんまったり過ごす事だぜい」

「だったら、イイじゃねえか。」

テメエの好きな漫画でもよく出てくるだろ……強くなったって虚しいだけだ、寂しいだけだって。

「今くれえで、もっと上にいかねえで、イイんじゃねえのか？」

「ありゃ、真剣な顔。」

「……珍しいってか、真剣で珍しいな。」

「なんでって、そりゃあ……俺g「下らん男の下らん言葉に答えるな、貴様の質が下がるぞ晃気」……あつと、なぜにテメーはいつも喧嘩腰な訳？」

フンって切って捨てやがった。
今日は珍しい事だらけだわ。

英雄はいつもは泊りにこねえ。

九鬼家で特別講習とかがあるんだとよ。

まあでもその激務を終わらせて、来てくれたんだから嬉しいもんだわな。

……そー考えるとセミ獲りて、セミ獲りて……楽しんでたみたいだけれどよ。
もちっとなんか氣い回してやりゃーよかったわ。

「九鬼、テメエ何様だ？」

「あー、何でホントお前ら毎度毎度喧嘩するんかね？」

「下らん人間を下らんと言って何が悪い？」

自分の下等さを、劣等感を我が友に押し付けるな」

「聞ってる？　　いらない子？　　いらない子なの俺？」

「んだとッ！」

「はいはい黙れ黙れ、俺ら以外みんな寝てんだぞ？」

今日は忠勝に英雄が遊びに来て、居間で雑魚寝。
泊らせれる部屋つつつたらここくらいしかないしさ、いつもの事なんだがよ。

明日も朝っぱらから稽古だし、そろそろ寝よかーって思ってたのに……寝れんじゃねーのよ。

風が涼しいぜ……扇風機で、窓も開けてるし夏は十分だよな。クーラーなんていらない子なんじゃ……グスツ。

「庶民、貴様の喚く理由を当ててやろう。

貴様は恐ろしいのだ……晃気が、ドンドンと、ドンドンと己を大きくしていく様が……貴様は恐ろしいのだろう？

自身の弱さすら、曝け出し呑み干してしまったこの男が……遥か彼方に行ってしまうようで」

イヤ、意味わからん。

たつしかにジャックにいちやんに会って、向こうの現状見て。

イイ経験したとは思ってたけどでかくはなってるねーだろ。

俺の我が儘、伝えて謝っただけだしさ……よーわからん。

「人には器がある……ひとつ言っておくが源忠勝、我は貴様が嫌いだ」

「はいどーん」英雄様に手を上げるのは許しませんよ」「はい……と見せかけてd「表に出ろや、クソガキ」……ごめんなさい」

えゝ、目の前にスゲー怒ってる風なメイドがいます。

何を隠そう英雄の専属メイドになったあずみさんでさあ。

お付きって事で、最近はいつもいつでも英雄にべったりだわ……大変だわな、マジで。

って感じで、手に持った小太刀で脅されながら俺は降参のポーズ。
二羽いる鶏は小屋の中に……明日も卵、しっかり産んでくれよ？

「安心しろ、俺もテメエが嫌いだ……その上から目線な態度、見て
だけで腹が立つ」

「ふはははははっ！ 小さい……小さいなあ、所詮今の貴様は街の
不良頭ほどの男よ。」

対等だと思っていた男が、男を上げ、それに己が敵わぬとどこか
で悟ったからこそ晃気を貴様の創った型にはめ込もうとする……愚
かで、矮小である」

……ああ、なる。

『今の』ってば……ガキの喧嘩だわ。
やだねー、子供って。

「何だか今あたいはモーレッツにテメエが言っなって言いたいんだが
……」

「クツチャクツチャクツチャ……気のせーじゃねえっすか？」

「真剣で刻むぞテメエ」

「フヒヒ、さーッって斬れる斬れるってマズ「うるさい！」ほぼい
っ！？」

こっ、小雪の膝が俺の鳩尾に……死ぬっ。

「デメエに俺の、何がわかるっ……………」

「わかりたくもないな……………貴様の気持ちなど」

「…………チッ」

これくらい？

そう、これくらいだよな？

んむ、あずみさんも合図してくれたしこれくらいだろ。

「あ……………忠勝、とりあえずお前の問いに答えるわ」

ゴロンと背中向けて、不貞寝してやがらあ。

ケケケ、貴重な姿だわさ。

「まあ帰って来た時言った通り、俺はのほほんまったり過ごしてえ……………これに偽りはない。」

烈のおっちゃんに拳法習うハメになってるが、小雪らを危ない目に合わせたくなえ……………これもホント」

これが俺の始まり。

ルーッってヤツ？

もし俺についてドキュメンタリー撮るならここは超重要な。

第一の山場ってか、避けては通れねえってか。

俺のギャラ、高いけどな。

ケーッケケケケケ。

「で、そんだけだと思ってたんだが、やっぱり俺も男の子なんよ。」

『強くなりたい』、出来るもんなら誰よりも……とまではいかな
えが、俺でさんざん遊んでくれた祖父ちゃんら転がせるくれえにさ」
男なら、最強目指して何が悪いってヤツ。
その願望がちよいと他人より強くて、ちよいと諦めが悪いらしいん
だわ。

「だから、俺はやる……やると言ったからにや、やり続けたる……
俺はそんだけ」

人付き合いは難しいもんだ。

些細な事で喧嘩になって、仲が拗れてうばあーな事態になっちまう。

けど、それでイイんじゃない？

俺らは中学生で、俺らはガキなんだから。

ガタガタブルブル、へったくそに付き合いえば、それでイイだろ。

俺はやりたい事が見つかった。

喫茶店のマスターになる前に、中小企業のサラリーマンになる前に、
主夫になる前に。

のほほんまったり過ごす日々を模索しながら、大事な友達の力にな
れるよう気張りながら。

俺は、俺の夢がも一つ見つかった。

人付き合いは大変なもんだ。

でもだからこそ、それに見合うだけのモノがあるんだって俺は思っ
ぞ。

「やりたいって気持ちになれたのも、欠かさず稽古に出れるのも、全部忠勝や英雄、ここにいるヤツらのお蔭だ……感謝してる。」

だから忠勝も、何悩んでんのか知らねーけど……俺はいつだって……」

そう、いつだって。

「ロリコンだって叫んでやっから安心しろおにちくx」「死ぬ」ケケッ、ケケケケケッ！」

く4月20日く 朝メシでのほほん（前書き）

原作突入であります。

アンケートに答えてくださった方々、ありがとうございます。

間をおかず、更新できるよう精進していきますので、これからも生温かく見守ってやってください。

く4月20日く 朝メシでのほん

2009年4月20日、午前7時30分。

誰もが逃げねえ恐ろしいヤツがやってたぜ！

その名は”月曜日”！！

朝練も飯の準備も済ませて畳の上、まどろみながらそのことを認識している……。

かけ布団がゆつくりと誰かによって剥がされちまった。

「おはようだ晃気、そして好き」

いきなりキスされそうになるがその手をしっかりと掴む。
若干頬を朱に染めてンじゃねエぞ……あア？

「毎朝……毎朝ア……キシヨわボケエツ！！！」

「お前の愛が痛いぞ！！！」

最近はこんなやり取りが増える気がする。

『ライバルが出来たからだ！』なんてホザいてやがったが……嬉しくねえなあ、嬉しくねえよ。

「だが、その痛みも心地よい……ゾクゾクする」

俺は竿の辺りがキュツとするな。

ケツ？ ああ、それはねーよ。

『俺はお前に責められたいぜ！』なんて言われてりゃ、まあその危険は気になんくなるし。

そこら辺はありがたいんだろうが……ってありがたくなえわなあ。

フツーに生きてて、ガチホモに求愛されるなんて事、まずねーしさ。

……ああ、うん、もう諦めてる。

実害がねえように、激し過ぎるスキンシップをさせないように、さつき来たみてーに向かつてきたら投げ飛ばす。それくらいか、俺に出来るのは。

「てか竜兵、着替えるから出てけ」

「制服、置いとくぞ。……着がえればいいだろ、早く」

パリッとした制服を差し出された。

イヤな、着替えるけどさ。

そう……じーっと見られながら、着替えたくないんだわさ。わかるか、この俺の気持ちか？

今日はいつもと変わらず朝から道場行って、汗だくになって祖父ちゃんと稽古して、風呂入って。

その後、俺の家着の甚平に着替えて朝飯の準備。

制服にや今日はまだ、袖を通してないって訳。

しかし甚平はいいぞ。

涼しいし、楽だし、俺は家ではいつもこれだな。

まあウチの女連中も真似して来てる事が多いんだが……恥じらいは持とう、なっ！

……しかし、頼んでもねえのにこの気配り。
って事は……アイツか。

かけ布団も俺、用意してなかったはずだもんなあ。

「やあ、お目覚めですか晃気」

褐色肌の眼鏡イケメンが、机を挟んだ向こう側に座ってた。

俺と同じ制服に身を包んで、机に肘を立ててニコニコしながら俺の方を見る。

「……なあ、俺の顔なんざ見てて楽しい？」

「はい、とつても」

さいですか、そうですか。

今日の朝はホモが二人ですか、そうですか。

冬馬の方は両刀だとか言ってたが……信用出来ねーよ。

それがホントなら、とつとと誰か女とくつついてくれねえかなあ。

……イヤイヤ、それもまた俺が惨めな感じがする。

彼女いない歴年齢ですが、何か？

ま、これもいつもの事だ。

俺は女の子が好きで、いちおー好きな子もいるって言ってんだが聞
きやしねえ。

『目覚めさせてやる』だとか、『何も考えずに僕のを使ってくれ
ばいいんですよ』だとか。

これが俺の、毎日の朝の光景なんだが……普通って、何なんだろう
ね？

教えて誰か……ズバツと、答えて欲しいもんだわ。

「俺、顔洗いに行くわ」

「布団は俺が全力を持って畳んでおいてやろう」

「いえいえ竜兵、そこは私がやりましょう」

「ハッ！ 冬馬のような貧弱な男には任せられんな！」

布団畳むのと、貧弱云々って関係ねえよな？

…… ああ、だよなだよな、俺がおかしくなったんかと思った。

と、アホ二人は置いといて。

寝起きで気付かんかったが、漂ってくんのはイイ匂い。

誰か俺の下ごしらえを形にしてくれてる訳か。

俺こと渋川晃気が住んでんのは実の祖父ちゃんの家。

道場が隣接してて…… ってか家の中にんなスペースがあつて、そこで毎朝毎日稽古してるんよ。

この家には俺と祖父ちゃん以外にも、何人か居候が暮らしてる。

無駄に広い家だからな、部屋も余ってるし、俺も祖父ちゃんも人が多くて騒々しいのは好きだし。

何よりもう家族みたいなもんだからさ。

で、ここの家にはまともに家事が出来るヤツが三人いる。

祖父ちゃんも一応できるが、まあ俺らがいる訳だし。

その内の一人が俺。

「おはよう晃気。相変わらず朝から若と竜兵は全開だな」

「死ねよ」

「朝起きたら居候先の友人に死ねと言われた……何言ってるかわからねえと（ry……）っていきなりそれは無いんじゃないの！俺が何をした、俺が何をしたってんだ！？」

「ちっ、うつせーな（反省してまーす）」

「逆っ！ 逆だからそれっ！ 謝る気まるでねえだろ！」

「あーあー、悪かった悪かった。折角改變して川神学園編から始めたのに、まだ女キャラー人も出てねーとか、出た男キャラの半分がホモとか……なっ、わかるだろ？」

「電波ーっ！ なんかここ来てるよっ！ 変なモノ受信してるよこの子っ！ メタはノオオオツー！！」

……ウム、ちよいと俺もおかしいみたいだ。

さんざん投げられて、少しまどろみに入った後だったからな。

顔洗お。

頭スツキリさせよ。

それから飯食お。

そしたら少しは華やかになるだろ。

メシはみんな一緒に、ってのは数少ない洪川家の決まりみたいなもんだからな。

朝は早起きな人間から順々に食ってってるけどさ。

さてと、やってきました洗面所。
俺と同じく甚平きたジジイがいるぜ。

……もうイイ、俺は諦めた。

「何じゃい、ワシの顔になんか付いとんのか？」

「イヤ、俺のイケメンが今朝の傷で崩れてねえかなって思ってたさ」

「安心せい、ぬしゃあ竜兵や冬馬と違ってフツメンじゃからの……
変わりやせんわ」

「実の孫に言う言葉じゃねえだろ！」

「ワシの遺伝子が薄いんかのう……いや、可愛いそうじゃい」

ケタケタ笑いながら祖父ちゃんの外に。

ケツ！ テメーだつて大した事ねえくせにさっ！

……グスッ。

顔も洗つて、居間に行けば白米となつとうにおしんこ、ノリに鮭、
具だくさんの味噌汁と卵焼きとほうれん草のおひたしが並べられて
る。

まあ俺が下ごしらえしたんだが……それでも、準がここに暮らすよ
うになってだいぶ楽になったのは間違いない。

それまで、もう一人家事が出来る人は警察の寮に入ってたから、ぜ
ーんぶ俺がやってた訳だし。

つと、その人も一緒になって準備してくれてるみたいだな。

「朝メシはしっかり食う、生活の基本だ。怠るんじゃないよ……つて、アンタらに言うまでもないか」

ショートカットの、気の強そうなおねえさんの声が飛ぶ。

『板垣亜巳』。

この家で、祖父ちゃん除けば一番年上の人。
もう社会人としてしっかり給料もらって、ここの家庭を助けてる。
まあ俺だってバイトしてるけどさ。

若い頃はちよいと危ない、世間様に顔向けでき名様な真似もしてたんだが……今じゃまるでそいつはどこかに置いて来て。

警察官として、川神市の交番に勤務してるってんだから驚きだわ。
目付きだけ見ればスゲー悪いし、面倒見はイイがガラだってスゲー悪いし……。

「晃気……アンタ今妙な事考えてなかったかい？」

「気のせいじゃね、気のせいだろ、気のせいだな、うん気のせい気のせい」

鋭っ！

この人って妙なところで勘がイイんだよなあ。
気を付けよ、うん、割と本気で。

「……まあイイさね。何かあったら、鳴かせてやるだけなんだからさ」

「晃気には指一本触れさせね×」朝っぱらから暴れてんじゃないよッ！」ぐぶるっ！　だっ、だがこれで好感度が上がったはずだっ！」

ねーよ。

急に立ち上がって、亜巳さんに向かってっただのが『板垣竜兵』。亜巳さんの弟で、今日の朝俺の上に覆いかぶさってたヤツな。

ああ、そうだよホモだよ。

コイツが性に目覚めた小学生の頃からもう幾年と、迫られ続けてるって訳。

コイツは特にいじめられてた訳でも、何でもなかった。ただ何故か、ある時ある日ある瞬間俺が気付いたら、既にコイツはホモだった。

何言ってるのか俺自身もよくわからんが、一つだけわかるのは……俺はこいつに靡かないって事だな。

「アイラブユー」

正直、言われても困る。

好かれてるってのは無条件で嬉しいが……やっぱなあ、俺男だし女が好きなんさ。

だから全力で断ってる。

惚れられてるが……んな都合知るかボケ。

「竜兵はガツつき過ぎなんですよ。もう少しおしとやかにいかないと」

イヤイヤ、そーゆー問題じゃねえから。
畳に座った俺に、気が付く人アピールみたいに茶を煎れられても困るだけだから。

そんなヤツが『葵冬馬』。
一番新しい居候その一。

中学の、二年の終わりくらいからここで住んでるな。

まあ……色々あつたんだわ。
その結果惚れられた。

何故に男？ 俺ってば男ホイホイ？ 嬉しくねーよ！！
どーせなら女がよかったよチキショーツ！！

「相変わらず愛されてるな」

「変わるか？」

「謹んで遠慮しておこう」

そう、次々ご飯やらみそ汁やらを運んでくるのが『井上準』。
新しい居候その二。

常識人で、ツツコミも中タイイ感じで……いてくれてよかった。
マジで俺が楽になる。

「さあて、じゃあメシでも食うかいねえ」

「待たねーの？」

「ベケヤロー、メシの時間に遅れるんが悪いんじゃないろうが」

「ま、それもそうか。そろそろアイツらも降りてくるだろうし」

そう言つて、喜々として鮭に醤油をかけ出したのが俺の祖父ちゃん『渋川剛気』。

曰く『武の体現』とか『達人』とか色々言われてるすげージジイ。俺は祖父ちゃんにガキの頃から柔術を、ちよいとばかり習つてんだが……。

「おほつ、イイ焼き具合でい」

普段見てると、まるでそうは見えねーんだよなあ。ただの好々爺だし。

それがあないにつえーんだから……ホント、人間なんざわかんねえもんよ。

「おはようコウキ。ご飯だぞーっ！」

「イヤイヤ、俺もう食つてるからね」

「うおっ、ちよつと寝坊した……つてリュウ！ カマの所はウチがいつも食つてんだぞっ！」

「ハッ、そんなもんは知らんな！ 天が俺より先に起きなかったのが悪いんだろうが」

ドーンと、俺の横の席に飛び込んで来たのが『榊原小雪』。このウチの居候第一号だわさ。

「いったただっきまーす。むしゃむしゃむしゃ」

ニコニコしながら口に卵焼きを運んでるが、それでも昔は虐められてて……うん。

それでもコイツはニコニコしてたっけ。

まあ懐かしい、在りし日の思い出ってヤツ。

結局イジメの標的から外されて、なんやかんやあってえの、今に至る、と。

「寄越せつつってんだろぅがっ！ リュウにやメザシがお似合いなんだよ！」

「負け犬があ……いちいち喚くなッ！」

竜兵の、身体にあつたデカイ拳が小さな天の顔面に向かってく。

「竜兵っ！ 天ちゃんに手を上げようたあい度胸じゃねえかあッ！！！」

と、それに斜め下から延びた拳が突き当たり、目標から外れたところへ侵攻していく竜兵の拳。

「邪魔をするなハg「死に晒せリュウッ！」ツチ！？」

机を跨ぐように飛び込み、蹴りを入れるツインテールが『板垣天使』。

板垣四兄弟の末っ子で、亜巳さんと竜兵の妹になるんだっけか？

コイツも気がつえー、爆竹みたいなのがあるからな。

取り扱い要注意ってか？

ま、こうまで簡単ににキレたりすんのは竜兵相手が多いから、俺ら

は楽なんだがさ。

亜巳さんと、俺と、もう一人の言う事はよく聞くし……そんな時の天は、ちよいと犬っぱいんだよな。

「オラアッ！」

力を込めて、胸板で蹴りを受ける竜兵。

反動で下がろうとする天に向かって、上から下に、竜兵は拳を振り下ろした。

「デメエ……愛らしい天ちゃんに真剣で何してくれてんですかコルアッ！」

竜兵の、鉄塊みたいな拳を腕を交差させて受ける。

が、やっぱり竜兵の力はツエーみたいで、空中の天は机に向かって叩きつけられた。

メシリ、と鈍い音。

プラスチックっぽい台と、安っぽい鉄の管で出来た机は、真ん中からへし折れた。

……あ？ メシ？

回収してんに決まってんじゃん。

パツと自分らのモノは取り去って、口に運ぶぜうんウマイ。

「この卵焼きもウマイが、ワシにはちと合わんの」

「渋川老は醤油入りが好きだからねえ」

「準の卵焼きは出し巻きですから、仕方ないかと思われますね」

「僕はどっちでもイイ。うまうまー」

「小雪ってば好き嫌い少なくて、俺は嬉しいぜい」

「えへーっ」

な、見事に無視して談笑。

まあ天が早起きできなかった日にや必ず起こる恒例イベントみたいなもんだから、みんなもう慣れちまった訳よ。

だから準の鋭そうな左フックが竜兵の脇腹に突き刺さっても、弾幕みたいな拳が準に向かって張られても、天が壊れた机の脚を両手に持って向かってつても。

「今日の僕の占い三位ーっ！」

「アタシは四位か……それなりだねえ」

「私は十位ですか。何かあったら守ってくださいね、晃気」

んな感じの、占い見た後の、下らねー冬馬の言葉くらいに無視できるんさ。

俺？ 俺は十二位だったぞ。

祖父ちゃんと同じく、な。

俺は占いなんて気にしねーからどうでもいいけどよ！！

「おはよーみんな。コウちゃんなんで起こしてくれなかったのー？」

「起こしに言ったけど起きなかった。仕方ねえだろ、それだったら」

「うう、今日はお弁当作って行って渡そうとうと思ったのにーっ」

寝ぼけ眼で入って来たのがウチにいる最後の居候、『板垣辰子』。

竜兵の双子の姉で……ってか、毎回思うが似てねえよなあ。

遣伝子の神秘ってヤツだな。

ロマンを感じるぜい。

「ま、イヤ。明日また頑張るからね、起こしてよー」

「ヘイヘイ」

「今日は三人喧嘩してる日なんだ……私のご飯は？」

「僕が取っておいてあげたよ。はい海苔ッ！」

「俺はみそ汁となっとうな」

「私は非力なのでお茶だけです」

「ワシは卵焼きでい」

「白米だ、今だけあれば辰も充分だろ？」

「うん、ありがとねー」

のーんびりした性格。

ホント亜巳さんと兄弟とは思えねえわ。

イヤイヤ、悪い意味では無くて。

ま、そんな辰子には好きな男がいて。

アプローチしようとしてたりするんだが……いやはやまだまだな。

ちなみに辰子も家事は出来る。

が、寝るのが滅茶苦茶好きでさ。

用事任せたらいつになるかって事が多かったりするんさ。

で、実質的に使えるのが俺含めて三人って訳。

まあ他のヤツらにも手伝いはしっかりして貰ってるんだがよ。

これがウチの日常風景。

昨日も、その前も、全部違ってるがスゲー楽しい感じの毎日。

そんなヤツらにこれから出会ってくヤツらも含めて。

のんびりのほほん。

まったりとした人生を過ごすのが俺の夢。

あ？ ジジクセエって？

イイだろうが別に。

……オチ？

ねーさ、元々これはそんな小説だぜい。

軸がブレねえ様に頑張らねえと……って、また電波かコノヤロー。

く4月20日く 朝メシでのほん（後書き）

冬馬、準が居候し始めた理由も後々に。

のほとんど人物設定　　三章突入時まで　（前書き）

原作と少し違うところも。

まあその辺りは晃気くんの介入により、と考えていただければ。

のほほんと人物設定　　三章突入時まで

　　↓ 渋谷　晃気　（しぶかわ　こうき）　↓

身長　　　　　163cm

血液型　　　　AB型

誕生日　　　　9月9日

一人称　　　　俺

あだ名　　　　コウキ、コウちゃん、コウ兄

武器又は武術　渋谷流+

職業　　　　　川神学園2-E

家庭　　　　　祖父+居候数名

好きな食べ物　羊羹

好きな飲み物　緑茶

趣味　　　　　アニメや漫画やヒーロー物の鑑賞

特技　　　　　家事全般

大切なもの　　のほほんとした日常とそれを取り巻く人物

苦手なもの　　すげー強そうな人

尊敬する人　　渋谷剛気　ジャック・ハンマー

大アルカナ　　？・運命の輪

「緑茶、羊羹、縁側、これぞ俺の絶対領域……あふつ、幸せ」

本作の主人公でまったりののほほんと過ごす人生を夢見る老生青年。
まだまだ先ある若者なのに将来の夢を『中堅企業のサラリーマン』
と『主夫』に『ちっちゃな料理屋経営』と、ちっぽけなものを狙っ
ている。

『まったりとした人生』を目指し、できるだけのにびりした空気を
維持しようとする。

といつても本人はのほほんとした性格なわけではなくどこにでもいる普通の青年で、アニメや漫画やヒーロー物が好き。

ノリがよく調子に乗りやすいボケとツツコミの両刀使いで、思春期の男の子らしく異性相手に興味深々。

おっぱい、おっぱい。

個人を個人として見れるちよつとすごいヤツで、小学生の時から一人海外なんのそのである結構な自由人。

その性格と行動力ゆえか、友人が学園やその外にも意外に多い。

居候の世話をしてきたので兄貴属性を持っており、渋川家の家事全般をほぼ一手に引き受ける存在。

渋川家ヒエラルキーの頂点にして最底辺に位置する。

警視庁にて逮捕術の指導をこなす祖父『渋川剛気』の家で生活中。両親とは死別、祖母は近くの駄菓子屋にて別居中。

『達人』、『武の体現』と呼ばれる祖父から柔術を習っている。

曰く『反射神経と動体視力、洞察力のバケモノ』で才能は中々のモノらしい。

また、祖父の友人である超A級の格闘士相手に組み手という名の私刑を受け続けて来たため、それなりの実力を有している。

先も述べた様にのほほんまったりとした人生を望むが、本質的には闘う事が大好きな生粋の格闘士。

だが、普段はそんな性質を見せる必要もないと思っているので、基本的に危機が近づいた時は全力で逃げる。

いつもは戦略的撤退。

でも俺は俺より強い奴に会いに行くぜ（・・・）キリッ

く 榊原 小雪 (さかきばら こゆき) く

身長 165cm

血液型 A型

誕生日 7月1日

一人称 僕

あだ名 ユキ

武器又は武術 中国拳法く烈式脚術く

職業 川神学園2-E

家庭 母は獄中、父は行方知れずのため渋川家にて生活中

好きな食べ物 マシユマロ

好きな飲み物 緑茶

趣味 雲を眺めながらまつたりのほほん

特技 脚で箸を使えること

大切なもの 家族と友達

苦手なもの 一人ぼっち

尊敬する人 渋川晃気

大アルカナ ？？・塔

「緑茶、マシユマロ、コウキの背中！ これぞ僕の絶対領域！」

電波系のほほんヒロイン。

突拍子もない行動をとる不思議ちゃんで初対面相手には扱いづらい。

小雪、フリーダム……行きますっ！

ボーっとしていることが多いくせに成績は学年トップクラスだから性質が悪い。

親しい相手にはくっついてるのが好き。

一番のお気に入りには晃気の背中、彼の暇なときはおんぶで移動。

祖父の友人である烈海王から武術を習っており脚先の器用さは目を見張るものがある。

また小雪たつての希望により腕を一切使わず、脚技のみを習う形となっている。

母親の顔色を見て育ったためか勘が鋭く、本能的に人の本質を捉える事が出来る。

晃気など彼女の大切な存在相手では、時には本人も驚くような本心を突く事もある。

幼少期実の母親から虐待を受け続けていたが母のことを嫌いになれきれず、どうしてよいかわからずに前に進めなくなっていた。

小学三年生のころまでは普通に友人もいたが、どこからともなくアウチな母親のことが伝わり友達には皆はなれいじめられっ子になってしまう。

そこでも変わらず、気にせず話しかけてくれた晃気と友人となり、いつもつるむ様になり、いつの間になら彼の家に帰るように。

一方母親はそのことを知り激怒、晃気の家へ乗り込むが渋川老によりあっさり確保。

そのまま晴れて渋川老の養女となっており、戸籍上では晃気の伯母にあたる。

榊原の性は母親の旧姓で渋川老の養女になった時も、彼女の意見によつてそのままとなった。

（源 忠勝 （みなもと ただかつ））

身長 181cm

血液型 O型

誕生日	1月30日
一人称	俺
あだ名	タダカツ、ゲンさん、タダ兄
武器又は武術	???
職業	川神学園2-E
家庭	島津寮にて生活
好きな食べ物	ご飯と納豆
好きな飲み物	味噌汁
趣味	料理、裁縫
特技	運動全般
大切なもの	孤児院の皆がくれた寄せ書き、友人
苦手なもの	一直線で向かってくる感情
尊敬する人	渋川晃気 宇佐美巨人 花山薫
大アルカナ	??・悪魔

「煩わしい……俺の前で面倒起こすなって言っただろうが」

ツンデレ。

表面上は否定しているが、一番の友人である晃気にはデレの割合が普通の人より多いって別にテメーのためじゃねえかな。

ツツコミ時々ボケ、だがボケの時は少々恥ずかしいらしく頬を染める。

兄貴属性持ちで高い責任感を持っており、いろんなことに『気が付く』すげーヤツ。

口ではなんとなく一緒にいるだけ、と憎まれ口を叩くが晃気周りの人間を大切に思っている。

何の色眼鏡もなく自分に接してくれた晃気の事を尊敬しているらしい。

小学五年生の時より花山組二代目組長『花山薫』の舎弟として週三

で奔走していた。

さらに目付きが悪く、口が悪く、生い立ちも親に捨てられた孤児院育ちと真つ当なモノではないため、周囲の人間には不良扱いされており、晃気ら以外の友人はあまり多くない。

川神一子と同じ孤児院出身で、『風間ファミリー』とも親交があり『メンバーにならないか?』と誘われていたりもしたが、『面倒を見るのはアイツらで十分だ』との言葉により、拒否し続けている。

板垣 辰子 (いたがき たつこ)

身長	178cm
血液型	A B型
誕生日	8月27日
一人称	私
あだ名	タツコ、辰、タツ姉
武器又は武術	形意拳
職業	川神学園2-E
家庭	父母ともに行方知れずのため渋川家に居候中
好きな食べ物	メロン
好きな飲み物	メロンソーダ
趣味	大事な人の傍で寝ること
特技	3秒で寝られる
大切なもの	家族と友達
苦手なもの	睡眠を妨げるモノ
尊敬する人	渋川晃気 板垣亜巳
大アルカナ	??・星

「みんな一緒にお昼寝しよー」

のんびり系のほんヒロイン。

寝るのが大好きで、三度の飯より好きかもしれない。

炊事洗濯と家事もできる子だが、途中で寝てしまう事があるため晃気に『誰かがいない時は家事をしないように』と忠告されている。本来なら姉属性持ちだが晃気存在により妹属性が芽生え始めた。しかし前者もたまに顔を出し、『ほとばしる私のおねーさんパワーが……』とか急に言いだし、好きな人が出来た報告を渋川家の居間でぶちまけた。

その時、某達人の眼は一切の光を宿していなかったらしい。

小雪と同じく烈海王から武術を習っており、辰子の場合は中国四大武術のひとつ『形意拳』。

尋常ならぬ耐久力と、天性の筋肉の質を持っており、根が真面目らしく着実に実力をつけていつている。

ちなみに『好きな人が出来た』と報告した時、某魔拳は川を渡らんばかりの勢いで駆け出したらしい。

その辰子から熱い思いを受けているのは『直江大和』という少年。

『もれ出す弟オーラが素敵なんだよー』とのこと。

（板垣 亜巳 （いたがき あみ））

身長 168cm

血液型 A型

誕生日 10月7日

一人称	アタシ
あだ名	アミ姉、アミミン
武器又は武術	棒術
職業	川神市交番勤務の警察官
家庭	両親が行方知れずのため弟妹と洪川家に居候中
好きな食べ物	チョコバナナ
好きな飲み物	辛口純米酒
趣味	利き酒
特技	人の本質がSかMかを見極めること
大切なもの	自分と、それを取り巻く人間
苦手なもの	洪川晃気
尊敬する人	洪川剛気 洪川晃気
大アルカナ	？・女帝

「アンタら、このまましょっ引いてブタ箱にぶち込んでやってもイイんだよ？」

板垣兄弟の長女。

唯一の姉属性で懐の深さも持っているが基本Sなお姉様。
豚のように啼いてみせなっ！

中学生の頃は両親不在のため年齢を誤魔化し、弟妹を養うために働いていた。
学校にも行けないほどの労働を自分に課し、疲労とストレスによって本当に潰れかける。
そのためもつと楽に金を稼ぐため流れ込んできた合法ドラッグ『ユートピア』の売買に手を染めていた。
が、おっかないジーさんとニーさんにバレて、泥の中からこんにちわ。

闇なんてゴミ箱にボツシュートで、真っ当な道に引きづり出された。

中学を卒業後、警察学校に進学。
現在では川神市を守る、名物美人婦警ってんだから驚きである。

炊事洗濯とひと通り、そこらの主婦顔負けのレベルでこなす家事スキルを持つ。

弟妹を持つだけあって面倒見もよく、エロ本やAVに理解を示すくらいには性に寛容。

だがその実、まだ男と手をとってうわっ！何をすくあwせdrf tgyふじこ1p:@.....。

嫁にするならお勧めなのは彼女かもしれない。

く板垣 天使 (いたがき えんじえる) く

身長 153cm

血液型 B型

誕生日 5月1日

一人称 ウチ

あだ名 天、天ちゃん

武器又は武術 双剣術、蹴脚

職業 川神学園1-C

家庭 父母ともに行方知れずのため洪川家に居候中

好きな食べ物 何でも食う

好きな飲み物 何でも飲む

趣味 ゲーム全般

特技 度胸試し

大切なもの 一緒に飯を食いたい人

苦手なもの 食事を邪魔されること

尊敬する人 源忠勝、板垣亜巳

大アルカナ ？？・月

「しゃーねえなあ……ウチのからあげ、一口食うか？」

DQNネーム。

本人もこの名前が嫌いで、呼ばれるとキレたりする。
が、とある一人には呼んで欲しいらしい。

沸点が低く、アウトローな発言も目立つが本人は少し快樂主義なだけ。

人懐っこく、感情がすぐ表に出るため慣れれば可愛い。

猫のように気分屋の一面もあるので、扱うのは要注意。

が、とある一人と＋の言うことはよく聞くので、その三人の前では犬っぽい。

ゲーム好きで、渋川家のハードやソフトは彼女が晃気の希望により増えることがほとんど。

シューティングは少し苦手らしく、画面に向かって唸りながら頑張るその姿は国の宝だと、誰かが言っていた気がする。

忠勝に惚れている。

兄としてか、異性としてか、その辺りの感情はまだ曖昧。
であるが、一番一緒にいたい異性は彼らしい。

それを聞いたとあるハゲは、忠勝と死闘を繰り広げたそうだ。

く板垣 竜兵 （いたがき りゅうへい）く

身長	183cm
血液型	B型
誕生日	8月27日
一人称	俺
あだ名	リュウ
武器又は武術	翻子拳
職業	川神学園2-E
家庭	父母ともに行方知れずのため洪川家に居候中
好きな食べ物	甘いもの
好きな飲み物	甘いジュース
趣味	愛のポエム作成
特技	即興ポエム
大切なもの	洪川家の住人と幾名か（特に晃気）
苦手なもの	煩わしい女
尊敬する人	^{ガチ} 洪川晃気
大アルカナ	?・戦車

「お前が俺の一番星だ」

ガチホモ。

紛ごうこと無きガチホモ。

ケツの穴に、何時か晃気が突っ込んでくれると信じて今日も愛をささやくガチホモ。

イケメン四天王に匹敵するほどに顔立ちが整っているため、彼にはいつも腐った女たちからの視線が降り注ぐ。

晃気からは適当にあしらわれているが、純な気持ちでいつもいつでも想いを伝えている。

そのため境遇が少しだけ、ホーンの少しだけ似ている『椎名京』と

は、ある種のシンパシーを感じているらしい。

実は『椎名京』のメールアドレスと携帯の番号を『風間ファミリー』以外の男子で、唯一知る男。

メールや電話のやり取りなんかもあるっぽい。

甘いものが好きで、ポエムを書くのが趣味と雄々しい外見とは裏腹に女っぽいところもある。

だからといって晃気くんは靡かないけどねっ！

く九鬼 英雄 （くき ひでお）く

身長 175cm

血液型 B型

誕生日 8月7日

一人称 我

あだ名 ヒデオ

武器又は武術 『王たる我は下々に向ける拳を持たぬ』………ということで、念の為に護身術は習っているが特になし

職業 川神学園2-E

家庭 父母、姉妹ともに健在

好きな食べ物 あずみの作った弁当、晃気の握ったおにぎり

好きな飲み物 あずみ汁（あずみの調合した飲み物）

趣味 制圧、支配

特技 自己顯示

大切なもの 九鬼財閥、友

苦手なもの テロ

尊敬する人 自分自身、渋川晃気、川神一子

大アルカナ ?・皇帝

「フハハハハハッ！ 我は王足るべくして日々邁進しておるぞっ
！！」

九鬼財閥の御曹司。

超絶俺様主義であり、庶民たちを見下しているのではなく支配者として慈しんでいるらしい。

人力車登校、黄金色の制服などと突き抜けている。

よって『こいつはこんなヤツ』として、学園の人間からは見られ、受け入れられている。

九鬼家の嫡男らしく、すべてに高い能力を持つ。
が、何故か特別クラスであるSクラスではなくCクラスに在籍している。

『庶民の、中流の人間の気持ちを知るためだ』と言っているが、その実とある人物と同じクラスがよかったため。
これもまた一つのツンデレ……なのか？

小学生の頃、訪れた中国の武术大会の会場でテロに見舞われる。
その現場で晃気と知り合い、以来何かと彼に懐いている。
よって晃気の言うことは聞く……っけ？

イヤイヤ少し、ほんの少し、雀の涙くらいは……うん、微妙。

（忍足 あずみ （おしたり あずみ））

身長 158 cm

血液型 AB型

誕生日	5月27日
一人称	私／あたい
あだ名	メイド、アズミ
武器又は武術	小太刀二刀流
職業	九鬼家メイド長（序列1位） 川神学園2-E
家庭	どこかの隠れ里に肉親はいるらしい
好きな食べ物	イベリコブタのプロシユート
好きな飲み物	黒糖焼酎ロック
趣味	飲酒
特技	演技
大切なもの	九鬼英雄、次いで自分
苦手なもの	うるさいガキ、特に渋谷川晃気
尊敬する人	九鬼英雄
大アルカナ	？・魔術師

「さあて、あたいはあたいの仕事をこなすとするか」

九鬼英雄に仕えるメイド。

『メイドモード』と『通常モード』を使い分け、前者はデレッデレなメイドさん。

後者は……黒い。

黒豆よりも、黒砂糖よりも、猪狩も吃驚なくらいに、驚くほどに……黒っ。

10代は過去の遺物。

昔は戦場を渡り歩いていた傭兵で、『女王蜂』との二つ名を持っていた。

が、九鬼家にスカウトされ、なんやかんやで従者の中でそれなりの序列に上り詰め。

英雄付きのメイドになってからはメキリメキリと力を伸ばして、今

では序列1位に。

年齢が他の相手よりも近いためか、亜巳と仲が良い。
酒片手に、英雄がいない状態で二人に語らせたらしめれるモノは…
…多分いない。

〔葵 冬馬 (あおい とうま)〕

身長	175cm
血液型	A型
誕生日	12月25日
一人称	私
あだ名	トーマ
武器又は武術	頭脳
職業	川神学園2-E
家庭	色々あつて、とりあえず渋川家に居候中
好きな食べ物	誰かが作ってくれたもの
好きな飲み物	誰かが淹れてくれたコーヒ―
趣味	人間観察
特技	ナンパ
大切なもの	準と晃気たち友人
苦手なもの	自分の弱さ
尊敬する人	渋川晃気
大アルカナ	??・死神

「私は両刀なんですが……少なくとも今は彼一択ですね」

学年一位の学力を誇る、葵紋病院院長の一人息子。

外国人とのハーフで、女子人気は学園一番とも。
が、現在はガチホモ状態。

色々、まあなんやかんやあつて惚れた晃氣に首つたけとなっている。
優しくねつとりと、晃氣を見守るのが今日の日課。
そんな彼を周りの女子は、その光景を悲しむとともにどこか恍惚と
して見ている。

普段は知的で、紳士的であるが……うん、残念だ。
2 - Eの軍師的存在で、2 - Fの『直江大和』とはライバルの様な
関係。

く井上 準（いのうえ じゅん）く

身長	185cm
血液型	A型
誕生日	10月7日
一人称	俺
あだ名	ハゲ、ジユン
武器又は武術	拳闘
職業	川神学園2 - E
家庭	色々あつて、とりあえず渋川家に居候中
好きな食べ物	和食全般
好きな飲み物	お茶
趣味	子供と遊ぶこと
特技	料理をはじめとした家事
大切なもの	葵冬馬、その他友人幾名
苦手なもの	大人
尊敬する人	父親
大アルカナ	??・死神

「俺は、小さい女の子と遊びたいだけだ……やましい気持ちなど微塵もない、純な気持ちでだ」

ロリコン。

そしてツツコミ。

文武両道で家事もでき、彼が渋川家に居候することになってから晃気の負担はかなり軽減した。

ハゲとのからかいにも、笑って対応してくれる心の広いヤツ。

天使と『甘粕真与』のことを遠目から微笑ましく見ているが……實際のところはどーなんだろ？

渋川家で喧嘩があつた時、ほぼ無条件で彼は天使の側に付く。

例え天使が悪かったとしても……愛故に……そう、愛故につ……！

だから忠勝の事は嫌い。

嫌いじゃないが、嫌いでムカつく。

ウチの天ちゃんは今アンタなんかには渡しませんよっ！！

のほほんと人物設定　↳三章突入時まで（後書き）

……しかし、まあオリ主な晃気くんがいるからとはいえ……ちょっとやり過ぎたか？　な感じもある。

まあこんなもんかなあと思ったり、どうなのかなあと思ったり。

良いにせよ悪いにせよ、一人一人が物語に大きく介入するって事は、スゲー事なんだなあと改めて感じますね。

2011/7/10　クラスをCからEに変更。

理由：体育の時にF組と絡ませるため。

2011/7/14　大アルカナ追加。

理由：まゆっちルートをやりなおして、何となく。

く4月20日く 変態の橋でのほほん(前書き)

三日連続更新ッ!!

息切れ? まあどっちにしてもテストが近いんで、更新できる間に
いう事で。

く4月20日く 変態の橋でのほほん

俺らが通う『川神学園』に行くにや、一つの橋を渡らなきゃなんねえ。

それが多馬大橋、通称『変態の橋』。

理由？ 奇抜な輩が相当な数、通過してくからだな。

東京側だし更に進めば色々あるんだが、この時間……八時過ぎくらい。

制服着てるヤツらでって限定すれば……まあ、川神学園の人間なわけで。

奇抜な人間が制服のに多い訳で……。

詰まるところ、川神学園には奇抜な輩が大量にいるってことなんだが、俺らにや関係ないさ。

「コウキターボON！」

「朝っぱらから走ってたまるか」

「ぶーぶー」

「文句言っなら降ろすぞ」

「シーン」

「口で言っな、口で」

例えばの話か？

顕著な例で言えば……そうだな。

イヤ、つつても奇抜なヤツらはどいつもこいつも飛び抜けてるしなあ。

「……zzz」

「タツ姉、相変わらず寝たまま歩いてるよ。ウチには出来ねえ芸当だぜ」

「天ちゃんはそんな事がしたいのか？」

「あたりめえ！ そしたら学校なんざいつの間にか終わってるじゃねえか！ 遊びとか飯とか、好きな事だけ出来るなんてサイッコーだぜ！！」

「フフフツ、そうだねー……寝たまま歩いていては川に落ちるかもしれない。だがそうはさせねえ！ 何故かつ？ 俺がいるからだ！ 小さくて細くって白くってやわらかくって、そんな天使の天ちゃんのおててを手にとって、俺の隣を天ちゃんが朱いツインテールをふりふりー、ふりふりーと揺らしながらゆつくり歩いていく……至福の時だっ！！」

ああ、でもその中でも、特に目の付く集団つてのはある。

もうアイツらは……スゲーよ。

学園中の奇人変人を、更に凝縮して選別した奇人変人が集まってるって感じ。

オレノマワリニヤソンナヒトハイナイカラナー、マルデワカンナイカラナー。

「制服の上からでもわかる、絞まったケツ……想像するだけでヤバいな」

「私は残念ながらそんな眼力はありませんので。個人的には剥き出しになっているうなじが素敵だと思いますよ」

「ああ、それもイイ。身長からして細いかと思われがちだが、さすがジジイの稽古を受けてるだけあって意外に太い。だが太すぎず、細すぎず……」

「適度に焼けた肌と、うつすらと生える産毛……。私はひと月は戦えます」

「アア、ソノシユウダン？」

「ソウダナー、イマハトクニナニカヤッテルカナー」。

「オオ、アレダミロミロ」。

「ナンカヒトダカリデキテルダロ」。

「フハハハハハハハッ！！」

「アノチュウシンニ、ガクエンイチノヘンジンシュウダンガイルノサ」。

「フハハハハハハハハッ！！」

「ツトワルイ、ソノマエニトモダチガキタゼ」。

「ダレカツテ？」

「ケケケ、ダレダトオモウヨ？」

「おはよう、晃気！！ フハハハハハハハッ！！ 我、参上ッ！！」

「おーっ、ぱちぱちぱちー」

「素敵です、英雄様っ!!」

「おー、はよー」

「元気が無いぞ晃気！ 我が友の一人が、それではイカン!!」

「んな事言ったって朝からテンション上がんね×「英雄様が挨拶してんだ……それ相応で対応しろ、刻むぜ（ボソツ」悪いな英雄、今日ちよっち祖父ちゃん相手に気張りすぎたからさ」

「ホウ……フハハハハハハッ！ 今日も今日とて己を高めようと精進しておるか！ その姿、実に我が友に相応しい!!」

「ツチ」

「フハハハ、テンションが上がって来たぞーっ!!」

……わかってる。
自覚してる。

みなまで言っな、俺はしつかりとわかってる。

俺が、小雪背負って学園に行ってる時点で、諦めてるってわかってくれ。

囲まれてるってか、遠巻きに見られてるっばいのは俺らなんですけどねってか!!

奇人変人集団だよ……学園で一、二を争う有名集団だよ。

実は俺もその一員なんじゃね？ 没個性してねえんじゃね？ ってのが最近の悩みだったりするんだが……。

前者は認める。

俺と同じ家から出てるヤツらだっていっぱいいるし。その上今やって来た、学園指定の制服とはひでー離れた金の制服の男と、メイド服のおねーさんだって。

俺の知り合いで、俺の友達で、俺のクラスメイトで、俺がいつもつるんでるヤツな訳だし。

別に、俺は『のほほんまったりした人生を送りたい』とは思ってるが。

『目立ちたくない』とか、『植物の心のような人生を送りたい』とかは思ってるねえさ。

激しい喜びだつて欲しいし、深い絶望は欲しくはねえが……まあもし起きたなら仕方ないたあ思うし。

ともかく、『のほほんまったりした人生』ってのは平坦で起伏の無い人生つてのとは少し違う訳ね。

言葉では表しにくいが、なんてか……まあ、アレよ。

今、俺は俺と俺の周りに不服とか不満なんざねえ、それだけは確かだ。

ちょっと自重して欲しいとは思っけどねっ！ 特に竜兵と冬馬！！

「あずみつ、人力車発しん」あり？ 人力車で行くのか？」……晃気よ、貴様がどうしても、というなら歩いて一緒に行つてやらんでもないぞ？」

「あーはいはい、どーしてm「フハハハハハハッ！ それならば仕方あるまい！ 往くぞッ、王の行進だッッ！！」……めんどくさっ」

意気揚々、人力車から降りて俺の前をズンズン歩いてくのは『九鬼

英雄』。

世界に名高い九鬼財閥の御曹司で、俺の友達かね。

なんか、帝王教育？ 帝王学ってアレ。

マジに真面目に受けてるんだから……スゲーわ。

まあいずれ日本の経済界を動かしてくかもしんねー訳だし、仕方ないっちゃ仕方ないんかもさ。

実は英雄に頼めばいい感じの会社に捻じ込んでくれんじゃね？ っ
て思ったのは秘密だ。

何かそれだと一生頭上からん気がするし。

第一そーゆーのは、なんての……男の子のちっぽけなプライドが、さ。

「お供いたします、英雄様っ！！」

その後を忠犬みたいに付いてってんのが『忍足あずみ』。

英雄付きのメイド。

いやゝ、お盛んな中学時代にはホントお世話になりました。

何につて？

ゲヘヘヘヘッ……フヒヒッ……それはおもて「オイ、くだらねー
こと考えてねえでとつととテメエも付いてこねえか。裸に向いて後
ろの二人と同じ部屋に監禁すっぞ」

「心読んでんじゃねーよっ！ つーか嫌な事が生々し過ぎるだろ！
！」

「ハッ、知るか」

「ム、どうかしたかあずみ？」

「晃気さんの襟元が曲がっていたのでお直ししておりました」

「フハハハハハッ！　よい心がけだ！！」

「僕も直す」

このメイド、二面性。

英雄がいるところ、見てる前じゃ分厚い猫の皮かぶってんのな。
本当のコイツはスゲー腹黒い。

まあ傭兵やってたみたいだし、それがその世界だったら普通かも知れんがさ。

ちなみに亜巳さんと仲がイイ。

年齢が俺らよりも近いからかね？

よく酒一緒に飲んでるよ。

亜巳さん？

仕事だからメシ食って、とつと行っちゃったさ。

勤務先の交番は商店街の近くにあるんよ。

……そいや、入学式のときは応援みたいな感じで川神学園まで来てたっけ。

「それよか小雪さんや」

「なにー？」

「俺の襟がグシャグシャなんだが……？」

「僕は一向に構わんツツ!!」

構わんツツ……じゃねーよ。

……ま、別にイイけどさ。

俺の襟直そうと前に手を伸ばして、小雪のたわわに実ったおっぱいが俺の背中にむににんだし。

小雪に欲情はしねえ……だがおっぱいはおっぱいだツツ!!

たゆんだゆんで、やわらかい……走れば揺れる重量感たつぷりのおっぱいだ! 二つの素敵な果实だ!!

俺は一向に構わんツツ!!

「なに真剣な顔してんだ、テメエは?」

「忠勝うう×」飛びついてくんな、キモい」ぺるぽっ!」?

「後ろ回り受け身」

殴られてよろける俺から、さつと飛びのく小雪。

回転してダメージを0にするとは……さすがってヤツだな。

烈のおっさんから武術習ってるだけはあるさ。

下着はごつつあんです。

今日はスパツツみたいだけどさ。

守りたいんだ……誰よりも速く……。

誰よりも速く……君の下に駆け付けて……って、コイツはアイツが言う方が似合ってるな。

大地ってすばらしい……。

「今日も相変わらず濃いメンツだな」

「どこが？」

HAHAHA！

俺と、俺の周りが濃いだって？

まーったく持つて意味不明だぜ。

HIジャック、日本ではアメリカンジョークが流行ってんだな。
帰ってジェーンに教えてやらねえとさ。

「タダ兄おはようだぜっ！！」

「死ねよ、爆発しろよ、モゲ果てろよ」

「刮目せよ我が友、忠勝！ 我の行進であるぞ！！」

「英雄様が通りまゝす。今この道を英雄様が通っています」

「殴られてる姿もまた素敵だ……俺は投げられたいが」

「私は……そうですね、あの時の平手打ちが忘れられませんよ」

「……ZZZ、コウちゃんのおい……」

「辰子、寄りかかってくんない……どこがだっ！！」

「ああ、悪かった」

……グスッ、ありがと。

「てか、今日も待っててくれたんな」

「偶々だ。飯食って寮出たらこの時間になったただけだ。俺はデメエらなんざ待ってねえ……そこだけは勘違いすんな」

照れちゃって……かゝわゝいゝいゝ

目付きが悪くって、言動も不良くせえのにツンデレなんて誰得よ？俺？ 見てて楽しいから好きだぞ。

もちろん友達としてだがなっ！！

そんなコイツは『源忠勝』。

ガキの頃からの友人で……まあ、こんな感じのヤツだ。居てくれると英雄の負担が少しばかりだが減るし、俺としちゃ万々歳よ。

俺、小雪、忠勝、辰子、天、竜兵、英雄、あずみさん、冬馬、準。

この10人がいつも一緒なメンツかね。

今考えりゃ相当な大所帯……作者の技量で捌ききれんのかってまた電波か？

奇人変人多いが……イイさね。

今年は全員一緒のクラスで！ 一緒のクラスで！ 大事な事だから二回言ったよ！！

ともかく楽しく青春してら。

さてはて、今日は何が起きるんかねえ……って天は一年だから違うクラスだったわ。

ゝ4月20日ゝ

テトリスでのほほん(前書き)

四日連続ツッ!!

く4月20日　　テトリスでのほん

「よー、後輩」

「ちわつす、先輩」

有名人ってのはどこにだっている。

学校でも、職場でも、地域でも、県でも、国でも、世界でも。

飛び抜けた何かを持っている人は、他人から大量に関心を向けられて。

結果として、そいつがイイ方向なのか悪い方向なのかは置いといて、有名人になる訳だ。

「今日も後輩たちは仲良しだな」

「H A H A H A、先輩たちには負けまさあ」

俺らが通う私立『川神学園』、川神市の代表的な学園のそこにも有名人がいる。

……へ？　俺ら？　ああ、まあ俺らだって結構な有名人だとは思うが……『学園一か？』って聞かれりゃそれはノーだ。

「まあ長い付き合いだからな」

「俺らもですわ」

とりあえずは川神学園について考えてみるかね。

奇人変人が多い川神学園は個性を重んじるらしく、自由な校風とユニークな授業や行事が多い。

学力レベル？ それなりなんじゃね？

まあ俺や、辰子や、竜兵や天が頑張って勉強したら入れるくらいだわ。

「そいやー……今日、翔一はいないんすか？」

「ふふふん、なんだか無理矢理に見つけて来た話題みたいだな」

勉強は、もうしたくないね。

英語なんざ不要なんだよ！ ボディーランゲージで伝わるんだよ！

人間を舐めるんじゃないっ！！

国語？ この時の作者の気持ちだあ！？

んなもん知るか！ 作者に聞け！ 勝手に考えてんじゃないやねえよ！

国語教師妄想乙！！

「気のせいっすな、間違いない」

「まあそうゆーことにしといてやろう。寛大な先輩の心に感謝しろよ？」

社会はそれなり。

地理はなあ、覚えてねえとヤバいからなあ。

歴史は好きだぜ？ ロマンがある……戦国とか、三国志の辺とかが
イイね。

三国志は授業でしないけどさ、俺は日本史です。

……呂布がかつきーつつつたら、竜兵照れてたのは何でだろ？

「そして後ろのかわいい女の子たちを差し出せば、先輩は更に上機嫌になるぞ」

「先輩はもう、女の子なのに女の子のハーレム作ってるじゃねえっすか。羨ましい、羨望の光が俺の眼からボロボロと……先輩ステキ、俺にもわけてっ」

理科は……生物そこそこ、物理は余裕、化学？ 何それ食えんの？ 物理はつてか力学か、祖父ちゃんにガキの頃から教えられてさ。

『理論をバカにしちゃいけない』ってよ。

そんなこんなで物理は入りが出来てたからかね？ ムズイと思ったことが無いわ。

模試で全国一位もとったことあんぜー！

化学？ 何それ食えんの？

「自分で見つけて自分で作れ。……ああ、甲斐性は身に付けとけよ！。ちつぽけな男はモテないからなー、やさしー先輩からの助言だぞ」

「そこら辺はよゆーでさあ。太平洋をすっぱりと飲み込む今世紀最後の大器たあ俺のこと……」

数学？ 物理に必要なだからそれなりにはな。

「はははっ、彼女出来た事ない男の惨めな虚構の自信も、そこまでいくと逆にすがすがしいな」

「出来なかったんじゃないんだもん！ 作らなかったただけだもん！」

……ああ、で、川神学園の話だったか。
生徒数は多い。

中間テストはなしで、期末が勝負。

土日休みでバイトも大丈夫、と。

「ふうん……ま、どっちでもいいさ。後輩の恋愛事情に私は大して興味が無いからな」

「そいつは奇遇ですな。俺もあんま先輩の恋愛事情には興味ないっすわ」

他で言えば……まあ『決闘システム』なんてもんがある。

制服についてるワッペンとワッペンを重ね合わせることで双方が決闘を受理したって事になる。

んで、単純にリアルファイトとか、頭使った勝負とか……まあいろんな勝負を繰り広げるわけよ。

「ほう……それはいかな、不能か？ 後輩のように、ふつーな男の顔ならばともかく私のようにぼん、きゅ、ぼんの超絶美少女に恋心を抱かないとは……貝を食え、亜鉛を取れよ」

「一日一発、しっかり大丈夫なんでその辺は。ま、アレっす、自分の程度をわかってるってか……」

そんでもって最初に戻る、と。

「『俺には無理だ』か？ いかんな、最近の男はどいつもこいつも軟弱で。草食系男子か？ だから私が女に走るんだ。漢だったらもつと野心を燃やして、ガッツリ来なきやいかんだろう」

「へ？ 俺ならイケるんすか？ そのステキなおっぱいが俺のもん……に！？」

確か有名人の話だったな。

川神学園にも勿論のように、有名人はいる。
その知名度はマジですば抜けてて…… 武術家さんたちの間では、世界中に名が知られてる。

「まあお前は有り得んがな、渋川晃気後輩」

「ですよー、川神百代先輩」

『川神百代』。

日本の武術の総本山とされてる『川神院』の娘で、跡取り。
公式での、『世界最強の存在』。

イヤ、この人の祖父ちゃんもいるから……でもまあ、そんな感じのお人。

「……………」

「どーした、後輩？」

『最強』、『世界最強』、『地上最強』……かあ。
ん、ないな。
無い無い無いぜ。

「私の美貌に見惚れたか？」

「ステキ、カッコいい、抱いて、俺に毎朝みそ汁を作らせて下さい」

「駄目だ、却下だ、魂が籠っていない。それよりも仮に男なら、『抱かせる』だの『みそ汁を作ってくれ』だの言ってみろ」

「かつ、漢だ……」

ま、そんな感じで学園一の有名人はこの人。

強さだけじゃなくて、容姿やらスタイルなんざも学園一。

だが強過ぎて、敬遠する男連中が多いみたいだな。

なんたつて手からコロニーレーザー撃ったつっ話だってあるんだぜ？

「それよりも後輩」

「なんすか先輩」

ちなみにこの俺、渋川晃気。

「私と真剣勝負しないか？」

目を付けられてる。

おう、周囲がざわついてら。

そりゃそうか。

学園一の有名人と、学園一、二を争う変人集団の一人が勝負するってんだから。

話題性は十分過ぎるくらいに、ってか？

目を付けられてる理由？

簡単、俺が祖父ちゃんの孫だから。

「時間、ヤバくねえっすか？」

「なあに、すぐ済むさ」

……俺が負けるって事で？

まあこの先輩、自分が強いと思ってるみたいだし。いつつも逃げて、のらりくらりかわしてる俺が自分より強いとは思ってないみたいだし。

だが、もしかしたらがあるかもしれない。

『最強』を志して、先輩に群がってくる蟻とは違って。

もしかしたら、螻蛄くらいの強さはあるかもしれないってな。

ああ、勿論のように刃牙にいちやんが出てくるイメージの、人間の螻蛄じゃなくて、既存のちっちゃな螻蛄なんだろうが……。

「お前のジジイはかの有名な洪川剛気。凄まじく高い位にいる格闘士だと聞く……後輩はその孫だ。楽しめるかもしれないだろう？」

祖父ちゃんは、中々に有名な柔術家。

格闘士の間ではもちろん、武術家たちにも名前は知られてるほどに。

……正直、この言動にはイラッとする。

完全に、格闘士を見下してる。

多分、先輩もそれが魂胆でこんな風に言ってるだろうが……。

けど実際のところ、武術家と格闘士の間には激しい隔りがある。

格闘士の中で一、二を争うつつつても良いパワーの持ち主であるオリバのおっさん。

おっさんが殴れば、コンクリートの壁を数枚はぶっ壊せる。でも、そこまで。

どう足掻いても、蹴った衝撃で竜巻なんざ起こせねえ。

だが武術家は、起こせる。

ある程度まで鍛え上げられた武術家は、それを起こせる。

格闘士はアナログなのさ。

武術家はデジタル。

補佐してくれる、自分を押し上げてくれる『氣』ってモノはあまりにデカい。

「やーですね。世界最強の武術家に、日本の一部でちょっとだけ名前の知れた柔術家の孫風情が敵うわけねーじゃねえっすか」

だからやらねーの。

勝てねえからじゃねえよ？ 俺ってばフェミニストだからさ。

……なあって、言ってみても負け犬の言い訳にしか聞こえんが……。

「それよりマジで遅刻、遅刻。橋でのんびりなんて、してる場合じゃねえでねーっすか」

時間を見れば、HRまであと10分。

こりゃちよいと急がねえとさ。

てことで、てかてか歩く。

小雪が付いて来て、忠勝が付いて来て、みんなが付いて来て。

「……逃げるのか、後輩？」

先輩の声が、背中にかかる。

「思えば後輩はいつも逃げてばかりだな。私と初めて会った、小学生の時だったか？ 鵬龍堂幻佐なんて変な名前を使って逃げて、それから顔を見れば逃げ出して」

ガキの時に会ってた、黒髪のおつかない子。

実は先輩のことだったんだよなあ。

いやはや、俺ってばなかなかの危機察知能力をちびい時から。

だって今なんざ、先輩のいる方にスゲーもんが見えるんだもんよ。

『侍』。

古今無双の名刀を持った、天下無敵の侍。

俺に向けて抜き身で切っ先付きつけて、さらに鋭い眼力と闘気が俺を刺してる。

崖なんざより、馬鹿デカイ鋼鉄の扉なんざより、よっぽどこえーっての！

「中学生になって、引いた腰と重い脚を引きづって私の近くへとやって来たな。あの時の度胸はどうした？」

接近した理由？

辰子の為な。

アイツってば、中学の時に好きなヤツが出来ただけだよ。

よりにもよって先輩のいるグループの、『直江大和』ってヤツだった訳で。

できれば俺は、先輩らってか先輩に、関わり合いたくなかった。なんでってそりゃ、すげー強そうだから。

俺、怖いもんから逃げるために柔術習い始めたんよ？

なのになんでわざわざ……って、話だった訳で。

ジャックにいちゃんに会って、強くなりたいとは思った。
強く、強く、より強くなりたい。

男の子らしく、懂れた。

どっちも俺の本心で。

でもどっちかって天秤差し出されたら前者な訳で。

だから『危ないかも』ってわかってる人間に接近するのは気が引けた。

けど、さ……仕方ねえじゃん。

俺、辰子の兄貴分なんだもんさ。

そんな俺の下らん感情で、辰子の思いを踏みにじりたくなかった。

そんな俺の下らん思考で、辰子の繋がりを断つことなんざしたくなかった。

だから、率先して接近した。

幸い先輩が苦手で、直江大和つてのと椎名京つてのが苦手なだけで、そのグループには知り合いも居て。

近付くのは、難しくなかった。

でも……これ以上はイイだろ？

「さあ？ それよかマジで遅刻しちまいますよーっと」

平穩に、平凡に暮らしたいって望む訳じゃねえ。

格闘士の血を受けて、格闘士として育てられて、真っ当な普通は望

んじやいねえ。

でも……超強力な人間爆弾と触れ合うのは、一日30分以内でもイイだろ？

く4月22日く 朝礼でのほほん（前書き）

恐らく、あと一回更新したら一週間ほどはストップするかと。

く4月22日　朝礼でのほん

川神学園では、毎週水曜日に朝礼がある。
学園長である『川神鉄心』。

その爺さんから、ありがたーいご説法を聞けるわけよ。

「眠そうなのが多いの……まあ朝早くからこんな年寄りの話を聞くために、わざわざ御苦労じゃった」

飄々と、腰の低い感じに口を開く。

だがま、実際のところこの爺さんは……祖父ちゃんや爺ちゃんと同じニオイがする。

とどのつまり、そーゆーことだな。

「コウキ、見て見てチヨウチヨ飛んでる」

「そかー、なら後で虫取りにでも行くかー、だから今は黙ってよーなー」

「はーいつ」

と、まあとりあえず小雪を黙らせて。

……二、三年はこの爺さんの本性を知ってるから口をしっかり閉じてるな。

一年？　タルイ朝礼に連れて来られて、学長の話なんざもんがこれから繰り広げられると思つて。

静かーにするのは、半分くらいのもんだろ。

……おつ、ありゃ天か？

教えてやったのに、ペラペラ楽しそうに喋ってら。
同じクラスで友達できたみたいだなあ。

確か、聞いた話によれば……あの後ろで髪を結んでんのが『大和田伊予』だったわけ？

どっかの野球チームの熱狂的ファン。

『今度試合観戦行くから金くれって言われてさ』……俺の、樋口さんが……。

まあ妹分の為だ、悲しくなんてないんだからねっ！

で、も一人が……ああ、『剣聖』の娘さんな。

ハハッ……連れてかれたよ、祖父ちゃんに。

北陸の方だったか……懐かしい思い出だぜイ。

きゅーに、『二人で旅行に行かないか？』なんて言われて。
その時点で妖しさ満点だったんだけどさ、初めてのことだったし俺は意気揚々で行った訳ね。

……パネエ、真剣でパネエおっさんだった。

独歩のおっちゃんや、祖父ちゃんもそうだが、やっぱ『十段』ってのはスゲーや。

『段位』ってのはどれもそうだが、ただ強いだけじゃいけねえ。

イヤイヤ、勿論強いって事も非常に大事な訳だが。

積み重ねた練磨の年月、それがスゲー重要になってくる。

だから年若くして『十段』になるってことは、それだけ圧倒的实力と周囲が見て誰もが納得する練磨の証を見せなきゃならんってことで……。

独歩のおっちゃんも、ウチの祖父ちゃんも、剣聖さんも、『十段』

に上り詰めたのは40代前半の頃。

つまりはまあ……そーゆーことだな。

ちなみに祖父ちゃんと、剣聖さんは『十段』を越えてたりする。

……まあ、うん、そーゆーことだわ。

『本物の、武器使いに会う』。

んな感じの名目で連れてかれた剣聖さんの道場、そこで『黛由紀江』ちゃんには知り合っただんさ。

何でも剣聖さんの、実の娘さんなんだとさ。

……あ、こっち気付いた。

天ちゃんや、手とか振らなくてイイから。

大和田ちゃんも、由紀江ちゃんも、振らなくてイイから。

そして小雪、お前も全力で振り返さなくてイイから！！

目え付けられたらヤバいのは去年経験しただろう……だろう……だろう、俺は学園長の爺さんに見られてるだろう。

……オワタ。

「なんて言うと思ったか！ たるんどる！ 喝つつつつ！！！」

文字通り空気が振動した。

爆竹耳に突っ込まれて、火い点けられたみてえに。

あいつ、変わらずスゲー声だな、この爺さん。

まあ『第二次世界大戦に介入したら、勝敗は分からなかった』つつって言われるくらいだからな。

半端ねーさ。

さすがは先輩の祖父ちゃん、現川神院ご当主様ってとこかね。

「えー、とりあえずお主ら勉強はせんでもよいぞ。一度しかない学園生活、節度だけ守って楽しんで過ごせや」

自由な校風。

そこでハングリー精神を育てること。

この川神学園の根本はそこにある。

なんつてつたつて、決闘なんてもんもあるし、その為に武器やらなんやらを持ちこんだつて校則違反じゃねえつて話だし。

……時代錯誤っちゃ、時代錯誤だよな。

「ただお主ら、腹は減っておらんか？ 名誉や金に飢えておらんか？ 男や女は？ 欲望を持つこと、それは正しい。奪い取り、掴みとる為に努力しなさい。競い合い、切磋琢磨しなさい」

勝つことは楽しい。

負けることは悔しい。

柔術やつてるせい、それはよーわかる。

だから学園長の爺さんの言葉は、おおむね正しいと思える。

「じゃがただ飢えるだけでは獣と変わらん。理性と本能を両立させ、楽しい人生を送ってくれることを願うぞい。なーんも飢えとらんと平凡平穏がイイと言うヤツはそれでもよい……精神が腐りそう、ワシはご免じゃがの」

平凡平穏、か。

先輩みたいな爆弾と、必要以上に付き合いたくないってのは平凡平

穏を望んでるってことになるのかねえ……。

「イヤイヤ、俺は危ないもんに出来るだけ触れさせたくないとは思っ
が。」

それでも、強いヤツとは闘いたいっ！ たあ純粹に想うし……。

「願わくば、みなが何かしら野心を、夢を、願望を叶えるための野
心を持った飢えた若者たちであることを祈るぞ」

強くなってつえーヤツと闘うこと。

必要以上に危ないもんに近付かないようにすること。

これは俺の両輪で、両方俺の、言葉を借りんなら野心みたいなもん
だ。

間違いない、それは本心だ。

……先輩から逃げるのは、俺が弱いからかね？

俺が、弱いから。

世界最強の武術家に、格闘士の俺が敵わないって思ってるから。
だから勝負を挑もうとしないのかね？

折角あんな美人から、素敵なデートに誘われてるってのに。

……けど、俺は……。

学園長の爺さんと、もし『闘え』つつって祖父ちゃんに強要され
たら、俺やイヤイヤ泣きながら、でも結局闘う気がする。

ルー先生も、同様だと思う。

自分から勝負吹っ掛けるってのは有り得ねーがさ。

なんたって、俺は中学の時、北陸で剣聖さんと立ち合ってる訳だし。

そのあと由紀江ちゃんとも、立ち合いをさせられた訳だし。

バカみたいな『気』を秘めて、真剣を手にした兩名と。

当り前みたいにボ口雑巾にされちまったけどなwwwwwwwwww

だったらますますなんでだろ？

何で俺は、先輩とは死んでも勝負を拒否しようって思っただろ？

……うゝむ、わからん。

うら若き男の子の心は、本人もわからないことではいっぱいってか？

「終わったー、お腹空いたー」

「朝メシちゃんと食ったろーが」

「そう言えば、F組に転校生が来るらしいな」

「へえ、男？ 女？」

「俺が知るか」

「まあそらそうか、隣のクラスのことだし」

「そんな晃気にお知らせがあるぞおッ！！」

と、赤いバンダナ男が飛び込んで来た。

「よう翔一、相変わらず元気だねえ」

『風間翔一』。

学園一の有名人、先輩が所属するグループ『風間ファミリー』のリーダー。

小学生の頃から何だかんだで気があって、偶に一緒に遊んだりしてるんよ。

バイト先が一緒になる事も、結構あったりするし。

「おうよっ！ それより晃気、今度海いかね？」

「海イ？ 何でまた？ 穴場でも見つけたんか？」

「今寿司屋で宅配のバイトしてるんだけどさ、今度の週末に船だして釣りに行くらしいんだよ！ それに俺も連れてってくれることになつてさ！」

週末かぁ……予定は、無かったはず。

祖父ちゃんに金曜と、帰って来てからの稽古を増やして貰って、朝から出れば……何とかなるか？

「おっし、俺行くわ」

「おうっ！ じゃあまた携帯で連絡するからよ、楽しみにしてるぜえっ！」

そう言つて、翔一は風のように去つていって「ああ、忘れるとこだった」

？ 何をだ？

俺は今、土曜の晩飯何作るーかと頭がいっぱいなんですぜ。

……まあ手抜きしたいし、鍋でいっか。

春だし余裕で出来るだろ。

「俺のクラス、今度転校生が来るらしいんだがさ、男が来るか女が来るか賭けてみねえか？」

「お前が胴元？」

「まあな、小遣い稼ぎ出来るし、イイだろ？」

……ウム、最近金欠だし。
ちよいとやってみるとするかね。

「何時まで？」

「明後日来るらしいから、明日までならイイぞ」

「了解、んじゃまあ明日にな」

「おうっ」

……今度こそ、行っちゃったな。
さて、簡単なギャンプルだけど、金をドブに捨てるってんは嫌だしなあ。

俺が汗水たらして稼いだお金だしさ。
バイトは原付免許持つてるから配達か、もしくは祖父ちゃん紹介の土木系が多いなあ

ケツ！ 小雪や辰子や天にや、警察から簡単に高給のバイト取ってくるくせによっ！

職権乱用し過ぎだろ！ 孫に対する態度が違い過ぎるっての！ ア

イツらにはあるのに男連中には小遣い無しだしさあっ！！

……まあイイヤ。

祖父ちゃんの孫バカ、女限定は今に始まったことでねえし。

「で、テメエはどっちに賭けるんだ？」

「小雪、どっちがイイと思う？」

「ん〜とねえ……女かなっ、かなっ」

「じゃあ俺も女で」

「……相変わらず安直過ぎるだろ」

ほっとけ。

イインだよ、小雪つてば異様に勘が鋭い時もあるし。

その可能性に俺は賭けたってか？

「大丈夫ですよ忠勝。その辺りは賭け全体も含め、私が後付けを取りましょう。準、手伝ってくれますか？」

「あいよ、若の御命令とあらば。竜兵も手伝え……暇だろ、どうせ？」

「ハッ、仕方あるまい。今日は夜に電話をする日だ、手早く済ませるよ？」

竜兵、冬馬、準。

意外にこの三人も、仲がイイ。

まあ昔っから、揉めてたところが一部あったがそこも解消されて、今じゃみんな仲良しだもんな。

だから仲イイっつーか……よくつるむってとこか？
なんかそれも違う気がするが。

「英雄はどーすんだ？」

「王たる我は、庶民の小さな楽しみになど関与せん。我が介入し、莫大な力で蹂躪してしまつては娯楽が潰れ、つまらんだろっ？」

「自分の大きさをわかつておられる！ その上みなさん方に配慮する心配り……このあずみ、感服いたしました！！」

ちっちゃい金額は賭けそうにねえしなあ……静観して貰うのが一番なんだろうね。

「辰子は？」

「私もコウちゃんと一緒に賭けといて。勝てたらみんなで行こうよ」

ああ、それもイイかもしれねえな。

そのためにもこの賭け、勝つとかねえと。

頼むぜ！ 小雪の運！！

……へ？ 俺は関与してねえじゃんって？

金は俺のдар、十分だろっさ。

く4月23日く 身長でのほほん（前書き）

話がまるで変わるので、二つの話に一つを分割。
後半はまたのちに。

く4月23日く 身長でのほほん

「要するに全部、仕組まれているということなんです」

「ちよつ、待て冬馬……しんつ、身長は……幾つだ忠勝!？」

「163だな。俺と20cm近く違う」

[illegible]

「いきなりデカイ声出してるんじゃないですねえですっての！ビックリするじゃないですかっコノヤロー！」

「何を悲観している晃気、去年と比べて5cmも伸びておるではないか？」

「大方、ユキにでも身長負けたんだろう。だが晃気……小さいお前も、ステキだぜ？」

エツグ、グスツ……。

男連中には、全員に身長負けてるってわかってたよ。

辰子にだって、亜巳さんにだって、負けてるってわかってたよ！

だからせめて……せめて小雪には勝たねーとって、去年から牛乳飲んで、飲んで、飲んで、魚食って、食って、食って……身長伸ばそうと努力し続けたのに！！

これで十年連続で！ 十「ピー」歳になった今の今までずっと小雪よりチビとか！ チビとか……チビとか……グスッ……。

…… あア？ 今日？ んでもイイだろうが、俺らが何してようとか
…… ケツ。

だが教えてやるよ。

勘違いすんな、ただ忠勝の真似がしたかったただだからな。

今日は人間力測定。

ま、身体検査とスポーツ測定を合わせたような代物だわ。

体育で一緒になつて隣のクラス、F組と合同でやってるんさ。

「そのE組男子！ フム、九鬼たちか……握力を測定しろ」

…… 何も言うな。

なんで『渋川たち』じゃなくて『九鬼たち』って呼ばれたかだろ？

仕方ねーじゃん、英雄一番濃いし、ウチのクラスの委員長だし。

俺なんざ路傍の石なのさ、ふふんふん。

声をかけて来てくれたのは、スーツ姿が素敵な『小島梅子』先生。

隣のクラス、翔一らんとこの担任だな。

『教育的指導』ってことで鞭を使うんだが……何故か問題にならねえ。

不思議じゃねえけどさ、亜巳さんとちよいと同じニオイがするぜ。

ちなみにこの人も、歴史ある武家の出身で、『氣』と鞭を使う武術家だな。

「……それよか冬馬、さっきのはどーゆー意味だ？」

「ええ、風間くんが持ちかけて来た賭けのことですよ」

おおっ、転入生が男か女かってヤツだよな？
俺ってば男だと思うんよ。

何でって？ そりゃクラスのヤツらも、別のクラスのヤツらも男だ
って言うてたしさ。

小雪の勘？ んなもん当てになるわきゃねーだろうっ！

「どうやら女性の方らしいですね……それも二人」

「小雪っ！ 真剣スマン！ 今日はお前の好物作ってやつからな！
！」

……ん？ 二人、とな？

「二人？ そりゃおかしくねえか？」

普通、転入生来るとしても一人だろJK。
二人来るとしたら違うクラスに割り振られるのが普通なはずで、同
じクラスに配属されるのはおかしなはずで。

「権力者？」

「ええ、ドイツのリューベックから来るようです。軍の中将の娘さ
んで、お目付役の軍人さんを一人同じクラスに捻じ込んだらしいで
すね」

「H A H A H A H A……英雄か、S組の不死川心みたいなもん
か」

「まあそんなところです」

英雄、それとS組の『不死川心』。

二人とも、学園に来る服装がありえねえ。

一応この川神学園、制服が支給されてるんさ。

白を基調としたブレザーと、黒を基調としたズボン……パンツじゃなくてズボン！

パンツはズボンの下に履くもんで、それを勘違いしちゃいけねえよ。べつ、別に俺にファッションセンスが無い訳じゃないんだからねっ！！

お気に入りのTシャツは『土星人』って、正面にプリントされてるヤツだけど、それだつて素敵なんだからねっ！
今日だつて着てきたし……ブレザーの下は、一応シャツがあるけど基本自由なんだよな。

ま、んな感じで制服があるわけよ。

女子も女子で、白を基調としたヤツが当然のように。

だが英雄は金だ。

あずみさんはメイド服だ。

不死川は着物だ。

全員が全員、実家が金持ちか、もしくはそれに属する人間だ。

つまりは……多額の寄付をしてりゃ、多少の融通が出来るって話なんだよな。

俺らが同じクラスになったのも、英雄の影響があるとかないとか、そんな話もあるくらいだしさ。

学園経営も大変ってわけさ。

……しかし、何でもまた今年同じクラスにしたんだろ？
去年も英雄の力がありゃ、出来たってのにさ。

「おおおおっ！ 我は72だっ！」

「英雄にや負けるかああああっ！ 75だぜえ！！ 忠勝！ 竜兵！ お前らは！？」

「弱過ぎるな、この握力計」

「まったくだ、100kg上限は弱過ぎる」

スゲーな、アイツら相変わらず。

俺？ 無理無理、50ちよいつてとこさね。
冬馬はちなみに40前後くらいな。

「で、何が仕組まれてたんよ？」

「はい、何でも学園全体だと『男子が転入してくる』、という話が蔓延しているようでして。その出元を探てみると、F組の直江大和くんに突き当たった訳です」

「……ああ、なるほど。噂流して、自分らは丸儲けしようって話だった訳な」

「まあそんなところです」

『直江大和』。

先輩や翔一らのグループ『風間ファミリ』の軍師的立場。

人付き合いも上手く、話題も多く、要領がイイみたいで人脈も広い。
俺もアドレスと電話番号知ってるし。

「辰子さんの思い人が、そんな風に狡猾な人間で嫌になりましたか？」

「いや、まーったく」

「おやおや」

「勝てる時は勝つ、勝てない時は逃げる、勝つためには全力で、過程はクソで残るのは最後の結果、負けは負け、どんなに足掻いても喚いても負けは負け、だからどんな手段を使っても勝つ……そんな姿勢は、俺は好きだぞ。祖父ちゃんらにもならったし」

そんな事を、俺は祖父ちゃんらに習った。

人としてどうなの！？ みたいなのもあるんですけどねーっ。

ま、いんでね？

自分の持てる力のすべてを出し尽くすってことはスゲー大事な訳ですしね。

ちなみに辰子の好きな人。

弟オーラねえ……俺にやわからんわイ。

「てつきり私は、彼のことを晃気は嫌いだと思っていたのですが……」

……」

「俺？ 嫌いじゃねえよ、好きでもねえが。向こうもそうみたいだし、それでイイだろ」

と、言ってみたものの実は嫌い寄りなんだよな、直江のこと。なんてか、普通に話すのは問題ねえんだが、普通に接するにや問題ねえんだが、それ以上は踏み込もうと思えねえ。

アイツ、『風間ファミリー』と『それ以外』つつつて明確に隔たりを作ってっからな。

他の、ある一人を除いた奴らはそんな節もあんまり見られんのんだが、アイツともう一人はそれが顕著過ぎる。

だから、『ああ、そーゆーヤツなんだ』ってことで付き合ってる。……そう考えると、『嫌い』ってか『辰子が受け入れてもらえるのか』。

そこがスゲー心配ってことなんだよな。

付き合って俺らの中で初めて大人になるのも、フラれて泣いちゃうのも。

それは個人的にやどっちでもイイ。

前者なら全力で祝福するし、後者なら全開で慰めるし。

ただ……『食い物にされる』……そうだけは、なって欲しくねえ。

俺も、結構考えてるんだ「よし、測り終えたならばグラウンドに行け。既に身体測定を終えた女子に続いてスポーツ測定を行え」

「ヒヤッハー！ 一番乗りだぜエエエエツツ……！」

「晃気は欲望に忠実ですねえ……私はいつ襲われてもいいように、準備をしておきますか」

く4月23日く 好感度でのほん(前書き)

分割した後編を投下。

クリスマス転入前で区切りもイイし、ここでとりあえず更新ストップ。
次は来週か、再来週になるかと思われます。

く4月23日く 好感度でのほん

「遅せえぞ晃気！ 俺なんかもう写真、撮りまくっちゃったもんね」

「後で回せやつ！」

「オイ見ろヨンパチ、晃気！ あそこの女子どもの食いこみがたまんねえッ！」

「やっぱり晃気もいる……好きだねえ三人とも」

上から『福本育郎』、俺、『島津岳人』、『師岡卓也』。

とりあえず友達だ！

男の説明？ んな事してる暇はねえーつつーの！！

エロ！ 筋肉！ パソオタ！ これで十分！！

何でって？

なんたつて今は……女子がスポーツ測定中だからな！！

汗……飛び散る汗っ！

体操着……穢れ無き純白っ！

そしてブルマ……伝説の、失われた神器ブルマッ！！

ブルマの何が素晴らしいって？

魅力的に、男心を誘うように見えるヒップライン……それもイイ。

脇から少し、顔をのぞかせるパンティー……それもイイ。

触れられるべきではない、禁断のデルタ……それもイイ。

すらりと、やわらかさと白さを際立てて伸びる太もも……それもイイ。

滑るように、輪郭を描く食い込み……それもイイ。

だがそれ以上に俺が素晴らしいと想うのは……ブルマを履いている女子の恥じらいだ！

ほんのりと頬染め、嫌々ながらも仕方なく脚を通した一年生の頃。恥じらいと、体育での勝利の比重が均衡し、葛藤が生み出される二年生の頃。

慣れ親しんだそれで全力を尽くし、ふと周りの視線に気付き恥じらう三年生の頃。

どれも素敵だ……甲乙付けがたい……。

恥じらいこそが、俺の若い情熱を掻き立てる一番の存在。

AVも好きだ、エロ本も好きだ。

だがそのどちらもパンチラには敵わない！！

見せつけているのも好きだ。

が見られたかもしれないと、周囲を見渡す心配そうな瞳を宿した顔が好きだ！！

だからこそ、俺は小雪と辰子に欲情しない。

アイツらはオープン過ぎる。

正直に言おう。

身体つき、顔つき、どれをとっても小雪と辰子は俺にとってドストライクだ。

だが欲情はしねえ。

役得だとは思うが、恋愛対象には至らねえ。

天はまだガキなところがあるから、体型も含めてともかくどっちにせよだが。

小雪と辰子は俺に対してオープン過ぎる。

朝起きて、甚平肌蹴て重力に逆らう双子山や谷間やサクランボがちらちら見えているってのに、アイツらはどうとも反応しねえ。

俺が目の前にいるってのに、アイツらは躊躇わずに着替えだす……

『パンツやブラジャーとって』なんて言ってくるのは当たり前。

登校時、俺の背中に小雪がのっかかていどうするのは週に二、三度。その時滑らかな太腿に俺の手が触れてるってのに、何の感慨も示さねえ。

寧ろ俺自身が、小雪のスカートの中を見ようと後ろに陣取る野郎どもからガードしてやらんといかんくらいだ。

辰子もたまにおんぶで登校、その時も同様だな。

家でくつろいでる時もそう。

スカートだろうが、短いズボンだろうが、お構いなしにアイツらはゴロゴロ。

恥じらい持てやつ！　って、なーんで俺が女相手に説教しなきゃいかんのでしょうかねえ。

風呂上がり、バスタオル一枚で俺の部屋にやってくる。

アホかつ！　せめてパンツくらい履け！

『興奮した？』……しねーよブオケツ！！　テメーラの頭ん中の心配するわ！！

夜、偶に布団にもぐりこんでくる。

……もうね、もう諦めてる。

コイツらに、俺を異性として意識しろってのが無理な話なんだよ。ちなみに竜兵や冬馬も……死ねっ！ 氏ねじゃなくて死ねっ！！何がうれしゅーって男なんぞと……くそったれがーっ！

……ハア。

忠勝や、竜兵や、英雄や、冬馬や準には多少なのかもしれんがその姿が見受けられる。

アイツらは俺にとって、マジで異性じゃないらしい。

父親か、兄貴か。

まあそんな感じだから、俺も小雪や辰子、天もそうだが娘か、妹に接する感じでこれまで過ごしてきた。

正直、嬉しい。

そこまで俺のことを信頼してくれてる訳だし。

『依存されてるのか？』とかもたまに考えたりするが、俺以外とも普通に接して友達もいるし、外国行ってもなんのそのっばいし。多分だが、大丈夫だとは思う。

うら若き乙女の姿を、魅力を体感できるってのもまたイイが……反面、やっぱなあって気持ちгда力くなってくる。

んな感じで、俺の好きな性癖？ と相まって、アイツらには欲情出来ない訳よ。

何年も何年も、そんな姿見せられてたらなあって話。

やっぱ女だったら、亜巳さんみたいのが好きだわ。

洗濯の時は必ず自分の下着類は別で洗って処理してるし。

部屋にもしっかり鍵かけて着替えやらなんやらやってるみたいだし。朝、偶に起こしに行くと、パジャマの裾からはだけた柔肌見られるのに気付いてぶん殴ってくるし。

ウム、素敵だ。

その方がより一層エロく感じるしなあ……やっぱりいいわいな。

それよりブルマだ！ それよりブルマだ！！ それよりブルマだ！！！！

「にしてもE組もF組もレベル高いよなあ」

「まったくだ」

「京っ、走りで私と勝負よっ！」

「エントリーNO.1、川神一子。身長159cm、3サイズが上から77、54、79。女っぽくないが快活なスポーティ娘で話していると楽しい。男子人気も高いんだが……まあ姉である川神百代の存在が大きくて、言い寄る男は無しとの現状」

この福本育郎という男、見ただけで女子の体型が一瞬でわかるというスゲー眼を持つてる。

俺も祖父ちゃんに褒められるくらいで眼はいいんだが……まだまだ。誤魔化しっての？ その辺をまだまだ見抜けないんさ。

「ワン子人気あんの？ 面白いヤツだが女としては……」

「貴様、島津岳人オッ！！ 我の想い人である一子殿をそのように……蹂躪し、肅清してくれるわっ！！！」

「ちよつ、まつ！ 九鬼がもう来てるなんて俺聞いてねえよっ！
ゲンさん、助けてっ！！」

「知るか」

ちなみにさつき育郎が言つてた『川神一子』、通称ワン子のことを英雄は好きらしいさ。

何でも……耳にタコが出来くらい聞かされたんだが、『夢に向かい、己が未熟さを跳ね除け一心不乱に努力する姿が我の思春期の心をつかんで離さない』らしい。

よく多馬川の土手とかでタイヤ引いて走ってるのが目撃されてるな。俺も偶に走らされたりするから、結構話したりしてそれなりに仲が
イイ。

純粹な、イイヤツだぜ。

「しょーもな、まあイイけどね」

「続きましてエントリーNO.2、椎名京。身長155cm、3サイズ84 / 59 / 83。F組というより学園最高級の美形で、実は胸もある。クールすぎて人を寄せ付けないが……それ以前にどう見ても大和の女」

「俺の女ではない、誰の女でも無い。それより竜h「俺は貴様とそんな慣れ合った記憶はない」……嫌われてるなあ、俺。じゃあ板垣、京とメールとか電話してるっばいけど、アイツってどんな感じだ？」

「別にどうだってイイだろうが。何故、そんな事を貴様に話さんといかんのだ？」

「あははははっ……そう」

竜兵は直江のことが嫌いらしい。

なんでかって？ そりゃアイツがシスコンだから。

双子の姉の気持ちを奪っちまった、直江が憎いんだろうさ。

ちなみに『椎名京』とメル友らしいな、竜兵は。

なんだかよーわからんが、『同じシンパシーを感じた』とか、『妙に気があつた』とか言うのがアイツの弁。

まあなんにせよ、交友関係広がんのはいいからいんじゃない？

「おひさまばかばか……zzz」

「まだまだ行くぜ？ エントリーNO.3、板垣辰子。身長178cm、3サイズ89/59/89。学園最高級のグラマラスボディの持ち主で、のほほんのんびりのおねえさん系。昼寝が好きらしくよく寝ている姿が目撃されている。だがどう見ても大和に惚れてる晃気の娘」

「お父さん、娘さんを僕に下さい！」

「帰れいっ！ ウチの娘は貴様にはやらん！」

……こんな感じの掛け合いは普通にできるんだがな。

何ともまあ、何と言いますか……。

お父さんは、無防備な娘を見ると心配でたまりません……ってことだな。

ホント、直江はどう思ってるのか……。

偶に作って渡してる弁当は受け取ってるみたいだし、露骨に嫌がっ

たり、もしくは玩具にしようと思ったり。

そんな節は見られんが……それでも、真剣な辰子の思いにコイツがどう答えるか。

スゲー重要だよなあ、それってば。

「あわわわわっ、辰子さん！　こんなところで寝ちゃめーっ！　ですよっ！」

「お次はエントリーNO.4、甘粕真与。身長149cm、3サイズ74、52、73。頑張り屋の委員長で話してると和む。その体型ゆえ、特定の人に崇められている」

「小動物系だよな、委員長って」

「いいんちよう。うふふふっ、こっち見てー。そうやって頑張ってる君はとっても素敵だよーっ。辰子っ！　イイぞイイぞイイ感じだぞ！　もっとダメな子を演じろ！　そうして必死に背伸びする委員長の、手を伸ばそうとーんっ、うーんっ……って唸る委員長の姿をつー！」

「……うわー、危ない人がいる。これって通報した方がイイのかな？」

委員長こと『甘粕真与』とは中学以来の知り合い。

同じ中学で、クラスも一緒になった事もあつてそれなりに仲良しさんさ。

個人的にやあの子が同じクラスだったら、小雪や辰子と仲良くしてくれて嬉しかったんだが……。

違うクラスになったってことは、新しい友達作れてことなんだろうよ。

準？ アレは病気だからイイの。

「……チツ、何であたいがこんなことを……ガキの海にいるのは疲れるぜ」

「更に行くぜ。エントリーNO.5、忍足あずみ。身長158cm、3サイズ80、60、80。なんでいんだ？ メイドだからイイんだ！ って感じのメイド。まあ九鬼のお付きみたいだし、いないところでは気性がヤバいし、触れない神に祟り無しってスタンスがお勧めだな」

あずみさんはな、英雄がいないと酷いもんよ。

恐怖を前提とした政治でウチのクラスを牛耳ってんのさ。

英雄がいたら、イイ感じのメイドなのになあ……もってーねーよ。

「エントリーNO.6、榊原小雪。身長165cm、3サイズ88、59、87。抜群のスタイルにシミ一つない純白の肌。幼く、儚げで幻想的な雰囲気がそれとミスマツチして……男子人気は半端無い」

「あつ！ コウキーっ！！」

げえ！ 小雪いつ！！

「身長何センチだった？ ねえ何センチだった？ 僕はメールしたけど165cmだったよ？ ねえ何センチだった？」

「……163」

「あつはっはっはっはっはっ！ チビチビーっ、コウキのチビ

[illegible]

「だが、こう言うのもなんだが少々電波。どっからどうみても晃気
の娘で、凄まじいくらいのファザコン」

「あっはっはっはっはっはっはっはっ！！」

「とまあレベルの高い6人を上げてみたが、周囲の環境や体型的、雰囲気的な問題から中々突撃出来ない訳。んで、結果アレに集中する訳。小笠原千花」

「身長157cm、3サイズ82/60/81。誕生日は7月20日、血液型はB型、現在は付き合っている男なし。付き合いたい女&やりたい女NO.1の二冠!」

646

冬馬の追撃。

俺は死んだ、スイーツ（笑）

「ああ……お前も大変だな。今度の宴でイヤツを優先的に回してやるからさ、元気出せ」

すまねえ、すまねえっ……！

と、まあ俺復活。

『小笠原千花』とは小雪より前、俺が小一くらいの時からの知り合い。

行きつけの和菓子屋の娘でさ、祖父ちゃん同士が知り合いだったんだ。

あの時はなあ……色々あった。

まあ色々あつて、沈んでた時だったんだが……今は元気です！！

「それにしてもヨンパチは女にくわしいね」

「まあな。3サイズ以外にも好感度までわかるぜ。大和のは今……こんな感じかね」

好感度：直江大和の場合

・三年

川神百代：5 0 ' 2 0

・二年

川神一子：5 0 ' 1 0

椎名京：5 0 ' 7 0

甘粕真与：2 3 ' 1 4

小笠原千花：2 8 ' 1 8

榊原小雪：1 0 ' 3

板垣辰子：3 2 ' 3 8

忍足あずみ：5 ' - 1 0

・一年

黛由紀江：5 ' 5

板垣天使：3 ' 0

大和田伊予：3 ' 5

・教師＋外部

小島梅子：3 ' 2 0

板垣亜巳：5 ' 1

「ちなみに左が友情、右が愛情で両方とも上限が50な」

……限界突破してんのがあるじゃねーか。
パネエなあ、直江のヤツ。

「クッ、ソツがねえところが癪に障るぜ」

岳人、復活したんだな。

「んで、これが晃気なの」

く好感度：渋谷晃気の場合く

・三年

川神百代：28 / 10

・二年

川神一子：26 / 5

椎名京：5 / 0

甘粕真与：27 / 11

小笠原千花：31 / 24

榊原小雪：50 / 45

板垣辰子：46 / 42

忍足あずみ：21 / 15

・一年

黛由紀江：28 / 20

板垣天使：41 / 32

大和田伊予：12 / 7

・教師＋外部

小島梅子：3 / 16

板垣亜巳：39 / 36

「フハハハハハッ！　さすが我が友！　我も誇らしいぞ！」

「大和以上にソツがないね」

「晃気は意外に俺らとも遊んでたしな。モモ先輩のことは苦手っぽかったけどさ」

「というよりこれ、俺より辰子さんの好感度が高いんだけど……」

「ああ、それは家族としての愛情ってヤツ。渋川家の娘さんたちはファザコンな訳よ」

なんとも嬉しいけどさ。

……家族の愛情も嬉しいが、俺は早く彼女が欲しいぜ。

中々上手くはいきませんなあって思うのは、贅沢なのかいね？

く4月23日く 好感度でのほん（後書き）

好感度表に一年勢や亜巳さんがいるのは仕様です。

く4月27日く 丁半でのほほん（前書き）

勉強 疲れた 休憩 小説書く 筆がノる 何時の間にこんな時間
！？ の、パターン。

まだ10日……10日はある……っ！！

く4月27日　丁半でのぼん

『ハングリー精神を養う』なんざ公言してるだけあって、川神学園にや賭場も存在する。

放課後やら昼休みやら、しっかり金を賭けて勝負をしてる訳なのさ。今日は俺も暇だから、小遣い稼ぎも兼ねて賭場へ参加。

「さあ張った張った！　丁、半、どちらに賭ける！？」

壺振りとして。

いやーね、俺ってば昔から祖父ちゃんなんかに稽古付けられて来てるから、結構身体中に傷がある訳ね。

それが『雰囲気が出る』ってことで、よく呼ばれてるんよ。

こんな場でのイカサマは、なんつーの？　侠が廃る？　んな感じだから俺はやらねーのよ。

「丁、丁、丁、半、半、丁、半だーっ」

「お前で仕舞いだな……では、丁半出揃いました」

小雪と忠勝が、大抵の時は手伝ってくれる。

ニコニコ小雪が座ってるのもまた雰囲気から外れてイイらしく。

目付きのちよいと悪い忠勝が、ぶすつとした顔で隣に座ってるのもまた雰囲気かにあつててイイらしく。

何だかんだで結構人が集まる。

ちなみに胴元は俺らじゃない他の人。

俺らは食券きっかり5枚づつで雇われてるって感じかね。

30分か一時間か、それくらいの時間だからイイ稼ぎのバイトだわ。今のところあんまり赤字は胴元の人からも出してないみたいだしねえ。

「では……グシの半つ」

喜び半数、哀しみ半数。

こーゆー姿を見るってのも、意外に楽しい。

丁半博打は、多分博打の中では最も簡単な部類に入る。

ただ壺の中で二つのサイコロを転がし、それが丁か半か、つまり偶数が奇数かつてのを当てるだけなんだからさ。

イカサマを抜きにすればきっかり当たる確率が半々で、誰でも出来るくらいに簡単な博打。

そいつが丁半博打。

時代劇でよくやってるアレだな。

……へ？ クリス？ 転入生？

ああ、イイだろ別に描写しなくったって。

どーせ他の作者さんたちが書いてくださってるいろんなマジ恋小説で描写されてる訳だし。

わざわざこのへボ作者が書かなくったってさ、原作と同じだし。

……おう、そうそう、馬で乗り込んで来たよ。

あーっと、『クリスティアーネ・フリードリヒ』、父親がドイツ軍の中將らしいね。

それと一緒に『マルギッテ・エーベルバッハ』、フリードリヒの姉貴分で軍人さんらしいわ。

個人的にや後者が好きだな、おっぱいおっぱい。

……決闘？ やってたやってた。

川神が吹っ掛けて、久々に行われた『武力的な意味』での決闘だった。

どっちが勝つかってまた賭けが起きてさ。

いやー、フリードリヒに賭けたんだがしっかり勝ってくれて良かったわ。

転入生は男か、女か。

それと合わせて結構な小金が生まれたし。

辰子の提案通り、GWにでもどっかに旅行すっかねえ。

……あ？ 何でんなに冷めてるかって？

そりゃクラスは隣だけど違うし、体育の時間くらいしか接点ないだろうし。

どうしても『どっちかを俺の女にしたい』……なんて願望は起きなかったし。

ホラ、俺って好きな人一応いるからさ。

ま、そんな感じで育ち、もとい童帝様からマルギツテさんの写真を横流しして貰えねえかなあ、と思うだけよ。

次の宴じゃ、絶対あの人のを買うつもりなんだけどさ。

てことで、俺は今日も平和にサイを転がすう。

ころころころろ、ころろってk「フム、ここが賭場か。自分はあまり賭け事は好かないんだがな……」

「じゃあ何で来たんだよって話だぞ」

「ああ、ここで実に日本的な事をやっているとか犬から聞いてだ」

「お嬢様、恐らくアレではないでしょうか？」

……直江が入って来た。

後ろに育郎連れてるから、多分さっき負けてたやつの仇討ってヤツかね？

不死川がちよいと、調子に乗って麻雀で勝ちまくってたみたいだし。

その隣に金髪が綺麗な、転入生が付いて来てる。

アレがフリードリヒで、後ろの眼帯軍服がマルギッテさんけ。

「おつ、おおおつ！ チョウハンバクチ！ 時代劇でよく見たぞ！
それに壺振りも傷だらけで雰囲気が出てる……！」

「ええ、それ相応に鍛え込まれてると思われます。褒めましょう。
そこの貴方、誇りなさい」

俺の周り、丁半博打やってた面子がしーんと黙る。

……ああ。

成程、この人らそーゆー感じの人だった訳か。

なんで川神学園の美人は一癖も、二癖もあるのばっかなのかねえ？

とりあえず一言。

お嬢ちゃん、初対面の人にそーゆーこと言うのはよろしくねえよ、
おい、フリードリヒ」

「ん……ああ、お前は確か源だったか？ 寮が同じの」

忠勝は、今現在巨人のおっさんのとこをでて一人暮らししてる。
つつても寮暮らしだがさ。

ちなみに寮は『島津寮』。

『風間ファミリー』の皆さんが住んでるところ。

『宇佐美巨人』ってのは忠勝の養父さん。

孤児だった忠勝を引き取ってくれたらしく、『親父』なんて呼んで慕ってるみたいだわな。

ガキの頃、宇宙人が何かかと思ってたのは懐かしい思い出だぜ。

「テメエ、何様だ？」

つていきなり絡みやがったーっ！？

ちよっ！ 待て何してんの！ 後ろの軍人さん、マルギツテさんスゲー眼でお前のこと睨んでんぞ！！

睨みかえしてんじゃねえよ！！

「？ 何がだ？」

「初対面の人間を、いきなり『傷だらけですな貴方は』、か？ 常識的に考える」

「貴様こそ、誰に向かってそんな口を聞いているか気付きなさい」

ほれみるお！ 変な事になっちまったじゃねーの！！

誰のせい！ 誰のせい！ んなもんちよいと常識のねえ留学生二人だけどさあ！！

男なら大器になろうぜ、忠勝！！

祖父ちゃんが言っていた、ちっばけな事でいさかいは起こすなっつ！

……ゴメン、この前ウチの祖父ちゃん不良狩りしてた。

「はいはいはーいつ！俺は気にしてないからね！おねーさんも矛を収めてね！ちゃんと謝らせるからねっ！」

超怖いんですけどっ！

前のマルギツテさんも、後ろの忠勝も三白眼で、有り得ん目付きで睨みあってるんですけど！！

……あ、そいや俺も三白眼だ。
ってんなの関係ねえってのっ！！

「ラウンドワーン、ふあいとうー！！」

小雪イ……テメーは帰ったらグリグリローリングサンダーの刑だ。
手加減はしねえ……悶えろ、苦しめや……ケケケッ。

脳天ぶち割ってやんよっ！！

「いや、そうだな。すまなかった。初対面の人間に言うべき言葉では無かった。謝罪する」

「へ……イヤイヤイヤ、俺は気にしてねえから頭上げなって」

素直に悪かったものは悪かったって言えるタイプな訳ね。

いやー、この子真っ直ぐ！

眩しくて見てらんねーくらいだわ。

周りの空気も大分落ち着いてきたか。

直江と育郎も、自分の用事を片付けにかかっているみたいだし。

「で、フリードリヒであってたよな？」

「ウム、自分は『クリステイアーネ・フリードリヒ』だ。クリスと呼んでくれ」

「うつし、じゃあクリス。時代劇好きなんだろ？ いっちょやってるか？」

「……構わないのか？」

「もちろん。そっちのおねーさんもやらねーか？」

「お嬢様がやるならば私もお供しましょう。『マルギッテ・エーベルバッハ』です。畏敬の念を込めてマルギッテさんと呼びなさい。そして勝たせなさい」

……ああ、こっちは本質からこーゆー人ね。

忠勝もピクピクしてるし。

イラついてんなあ……抑えてくれよ、なんとか丸く収まってんだから。

そーとーに危ういけどさ。

「で、幾ら賭ける？ ここの丁半博打は結構低レートからあるぜ。ちなみに最低は食券一枚か、百円札の五枚買いからな」

「賭け事は嫌いだ」

ちよっ、おまつー！！

「イイイヤあのね、ここ賭場、丁半博打これからやるの、OK？」

「ああ。だがやはり博打は好かん」

「……マルギツテさんは軍人さんだろ？ 賭けとかやるだろ？」

「ポーカーやチェスなどを嗜みます」

「じゃあクリスを説得さ」ですがお嬢様はそれを好まない正々堂々とした気質。合わせなさい」……さいですか」

あーあーあーあーつ。

そんな事言うから周りのメンツが抜けてく、抜けてく。

胴元さんまで『後は頼んだ』、だとさ。

……イヤマアね、俺もそっちの立場だったら面倒事押し付けて逃げるかもだけどさあ……ねえ。

人情とか仁義とかが、あるじゃん。

国際交流みたいな場になってた訳だしさ。

結局俺と、小雪と忠勝と、転入生さんが二人か。

寒いぜ……さっきまで熱気あふれてたはずなのに、妙に寒いぜ……。

「タダカツ、僕わかったよ。この人たち我が儘さんなんだねー」

小雪……っ！

屋上行こうぜ、久々に……キレちまった。

……ハア、また険悪なムードがジワジワと。

俺が收拾する訳ですね、わかります。

「『郷に入れば郷に従え』ってことわざ知ってっか？」

「ああ。日本のことわざも、祖国のことわざも、ためになるモノが

多い。確か『新しい場所に赴けば、その場所の習慣、生活、風土に合わせる』という意味だったはずだ」

「そうそうその通り。よー知ってるな」

「無論だ。しっかりと日本については学んで来たからな」

ちよいと自慢気。

あらやだ奥さんこの子かわいい。
天に通じるところがあるねえ。

「ここは賭場。今からやるのは博打。その場所で『賭けたくはありません、でも博打はやらせて下さい』ってのはおかしいだろ？」

「……うん、それはわかるぞ。だが自分h「まーまー、最後まで聞きたまえよクリス君」……ん、なんだ？」

「だからよ、今回は初めてってことで、何か……そうだな、食い物とか持つてないか？」

「食べ物ならイナリがあるぞ。日本料理はどれも素晴らしいが、自分分は特にイナリが好きだ」

「お前が負けたらそれを一つ差し出せ。俺が負けたら最高に美味しい羊羹を喰わせてやろう」

「わーい、負けちまえコウキー！」

「小雪、マシユマロ三日抜き」

「ぶーぶー、横暴だー、不当だー」

小雪はとりあえず黙らせて。

「ふがふが……ガジッ」

「噛んでんじゃねえよー!」

忠勝とマルギツテさんは……まだちよいと睨みあい。

クリスマスに意見してる俺を睨むマルギツテさんを、忠勝が牽制してる
ってとこかね？

ありがたいこつて。

後でお礼言つとくか……ツンデレで返されると思っけどさ。

「羊羹か……うん。だがやはり、賭け事になるのではないのか？」

そう来るとは思ってたんで……。

つてかコイツ、真剣で頭カタいわ。

我が道に行く！ みたいのが周りに多かつたせいか、コイツは新鮮。
イヤまあ、これもしっかり我が道を行ってる気はするが……。

正々堂々？ 清く正しく？ 清廉潔白？

そんな感じかね。

「んじゃ俺の名前は渋谷晃気。川神学園2-E所属のうら若き十
ピー」歳。特技は家事全般で、趣味はウチの縁側で緑茶飲みながら
のほほんまったりすること。まあよろしく」

「ああ、よろしく頼む」

「ってことで、俺らこれから友達な。友達ってことで、ゲームをしよう。そのゲームの一環で、偶には奢り奢られようぜい」

……ちよいと強引だったか？

まあ最初だし、こんなモンでいいだろ。

「……ふふっ、なんだそれは」

「テメツ！ バカにしゃがったな！？」

「イヤイヤ、気を悪くしたならば謝罪しよう。何と言つか……自分のクラスのキャップと雰囲気がよく似ていたものでな」

「翔一とか？ まあよく遊ぶし、そんなところもあるかもしれないな。んで、どうするよクリス？ 仲良くなる為の一環として、ちよいと勝負しようじゃねーか」

「……ああ、それならばまだ納得できる。友として、その勝負受けて立とうー！」

ふいいつ、何とか矛を納めれたんかいね？

純粹で、真っ直ぐで、清く正しく……まあ苦勞はしそのだが、見て楽しいだろうさ。

「では、ピンゾロにて入ります」

サイコロの一の目を、クリスとマルギツテさんに向けて壺の中へ。そしてもってパツと、壺を場の上へ。

じーっと壺を見つめるクリスに向けて、一言。

「さあ、張った張ったっ！」

「そつえば貴方、渋川晃気と名乗りましたか？」

「おう、そうだが……何か？」

「やはり……米国の、キャプテン・ストライダムより話を聞いたことがあります。今度私と手合わせしなさい」

……何か眼え付けられた。

これは……喜んでイイのか？

く4月28日　由紀江の二筆でのほほん（前書き）

懲りない男、それがうしおなとら。

……今日だってそれなりに頑張ったし、これから頑張るからイイのさ！

く4月28日　由紀江の一筆でのほほん

早足に桜の季節も過ぎて、つつじが美しく咲く頃となりましたが、皆様お変わりございませんか。

由紀江にも、『友』と呼べるような方々が出来ました。今日はその方々を紹介しますね。

「イエーイ！　大ニュース持って来てやったぜイ！」

ドンと、遠慮なく私の机に腰をおろしたのは『板垣天使』さん。

『天使』って名前は嫌いなそうなので、私は『天さん』って呼んでいます。

「え、えとっ！　どうかされたんですか天さん！」

「天さんじゃねえし！　ウチハゲでも三つ目でもねえし！！！」

「あうあうあうっ」

でも、そうやって呼ぶと怒られてしまいますので次からは『天ちゃん』って、頑張って呼んでみようと思います。

「イけるイける、まゆっちならイける！　気合入れろ、腹に力込めろ、北陸のダークホースと呼ばれたオラが保障する！」

「ギャハハッ！　またストラップと話してるとかキモッ！」

「あわわわわわわーっ!?」

……ズバツと、自分の思うことを言う人です。

そのせいか、天ちゃんさんのことをあまりよく思っていらっしゃらない方もクラスにはいるみたいです。

小学校の時からここ、川神で大きくなって、昔から天ちゃんさんを知る人もいるみたいです。

そんな周りの風評なんて、気にしない強い人です。

北陸から、そこでは友達が出来ないからって逃げて来た私とはまるで違います。

刀を持って、表情が怖くて、ストラップに話しかけている私にも臆することなく話しかけてくれた天ちゃんさんは……とても尊敬できる、私の初めての友達です。

「あーっ、でもウチんちにはロリコンとかホモとか変態とか色々いるからな。まゆっち程度じゃキャラ薄過ぎて消えちまうぜえ」

偶にフォローもしてくれます。

……偶に、ですけど。

「じゃあ私だったらどうかかな？」

「イヨは濃いから消えねえさ。野球オタクだしな」

「そこまでじゃないよ！ まゆっちもそう思うでしょ！？」

「えとーっ、えとーっ……テレビ壊すのはやり過ぎだと思います！」

「はううっ！」

こちらが『大和田伊予』さん。

七浜ベ이스ターズの大ファンで、以前行ったお泊り会……。

……申し訳ありません。

つい、感極まって涙が……由紀江もお友達とお泊りをしましたよ！！

コホン、そこで見た七浜ベ이스ターズのナイトゲームで、興奮してテレビをゆすって台から落として……。

そんな感じでした。

その節は大変申し訳ないことをした、と思います。

『日常茶飯事だから』と、笑って許してくださって本当にありがとうございました。

「それよりそれより！ 天ちゃん大ニユースって何かな？」

「オウ。なんかウチの家の居候がさ、決闘するんだってよ。見に行こうぜーっ！」

……アレ？ 天ちゃんさんは居候だと聞いた覚えがあるのですが……
……気のせいだったのでしょうか？

と、言う訳で放課後の屋上です。

天ちゃんさんの言う大二ニュースは、なんでも『2年F組の方と、2年E組の方が決闘をする』と言うことでした。それぞれのクラスの人たちが集まっていました。中心には、二人の男の人がいます。

「やつぱりお前が出てくる訳ね、葵冬馬」

一人は直江大和さん。

同じ島津寮で暮らしている、一つ年上の先輩です。

私と違って友達がたくさんいます。

穏やかに接するので、みんなから好印象で、勿論私も好印象です。

「はい。不死川さんがどうしても、とお願して来るものでして」

一人は葵冬馬さん。

天ちゃんさんの家で暮らしている、一つ年上の先輩です。

冬馬さんも穏やかで、友達がたくさんいる様ですので羨ましい限りです。

初めてお話を聞いた時はどんな人か……と、思っていたのですが、とてもいい人でした。

「……まあそれは冗談として」

「冗談とはどーゆー事じゃー!!」

？ 着物姿の人がいます。

知り合い、でしょうか？

立ち振る舞いがとても優美で、洗礼されていると思います。

「個人的に直江くんには興味がありました。風間ファミリーの軍師

的存在と聞き及んでいますので、私としては是非……その程度を、一度確かめたいと思っていました」

「じゃあ俺は、イイ機会を与えちゃったってことかな？」

「はい、この話を持ちこんでくれた不死川さんにもとても感謝いたします」

「……むう……まあよい。此方は誇り高き名家の血筋。いちいち選民となる唯一の機会を蹴った者の言葉には耳を傾けん」

「うわっ、ウチはアイツ嫌いだわ」

「天ちゃん、聞こえちゃうからっ！」

……やはり天ちゃんさんはスゴイな、と改めて思います。

「で、何で決着付ける？ 肉弾戦なら代役が行くぞ」

「大和の剣、川神一子！ 大和の敵を打ち払う！」

ポニーテールの方は川神一子さん。

何時も向上心を持ち稽古に励んでいる、努力の天才だと思えます。好戦的なので偶に勝負を仕掛けられてしまいますが……。

「大和の鞘、椎名京！ 大和の剣を受け入れる！」

椎名京さん、弓の名手です。

とても、仲間との繋がりを大切にしているように見えます。

大和さんのことが大好きで……でも、偶に変な事を言って大和さん

に突っ込まれています。

……はわわわっ！？ 鞘で突っ込むからってそう言う事じゃありませんよ！

由紀江はわわわわ、っと、そんな、そんな事は全く知りませんから！！

「私自身も肉体、と言うより頭を使うタイプですから……もしそうならば代役を出しましょう」

「若の盾、井上準ですよっと。危害加えるってんなら……容赦しねえよ？」

井上準さん。

天ちゃんさんの家の居候さんです。

小さい女の子をとて慈愛あふれる眼で見つめられていたところを見た事があります。

きつとイイお父さんになるのだろっと、由紀江は思います。

「……………」

「……………目で訴えんな」

「……………」

「わーった、わーったって！ ……冬馬の剣、渋川晃気ですよっと」

「是非、私を鞘にして欲しいですね」

「そら見ろやれ見ろ！ こーなるなんざわかってたんだよ！！」

兄上です。

三年か、四年ほど前に北陸の実家の方へ来ていただきました。以来『兄上』と、呼ばせて貰っていて……ありがとうございます。

兄上は、有名な格闘士である渋川剛気さんのお孫さんで。

父上が褒め、認めるほどに、誇り高い格闘士です。

『氣』を決して使わず、迫りくる真剣の恐怖と父上の威圧感を、上回る闘争心で喰らい尽くし向かって行った。

私も、父に薦められ一度手合わせしていただいたのですが……心と、技を育てるうえでとてもよい経験になりました。

ちなみに家族以外でメールアドレスと電話番号の交換を始めてした人でもあります。

長い長いメールを、何度も何度も繰り返し送ってしまいまして、申し訳ありませんでした。

その経験は天ちゃんさんや、伊予ちゃんとのメール交換でとても役に立っています。

「晃気の鞆、板垣竜h「捻じ込んで来てんじゃねえ！」 照れるな……俺も照れるだろう……？」

板垣竜兵さん。

天ちゃんさんのお兄さんで、兄上のことが好きみたいです。

よく『ホモで気持ち悪い』と、天ちゃんさんは言っていますが、その時はいつも笑っていますので。

本当は天ちゃんさんも竜兵さんのことが大切に思っていると、私は感じています。

「頼染めるとか……おうえっ！ キシヨイゼリユウ！」

「ああ、！？ 天か……てめえ何様だゴルアツ！！」

「チツ、煩わしい。家ならともかく人前で喧嘩してんじゃねーよ」

源忠勝さん。

同じ寮で暮らしている方で、よく私のこと気にかけてくれます。兄上が言うにツンデレなそうですが……由紀江はそちらにはあまり聴くないので、よくわかりません。

ですが口は少しだけ乱暴ですが、とても優しい方だと思います。

「大和くん、トーマくんならやつちやつてもイイからね」

板垣辰子さん。

天ちゃんさんのおねえさんで、竜兵さんとは双子の姉弟らしいです。いつも眠そうにしている、寝てたりしたところも見つた事があります。ですが、底しれない『何か』を由紀江は辰子さんから感じます。

「女の子から声援か……大和は羨ましいよ」

師岡卓也さんです。

ネットや漫画に詳しい人で、いつも面白いものを教えて貰ったりしています。

優しい、穏やかな人です。

……そう言えば今度、『秘密基地』なるモノに招待してもらうことに由紀江はなっています。

今から、とても楽しみです。

「顔なのか！ 体型なのか！ 時代はひよろひよろ系なのか！？」

島津岳人さんです。

握力計を破壊できるだけの腕力を持っているそうです。なんというか……少し、父上に似ている気が由紀江はします。その辺りは、どう思われるでしょうか？

「勝負の方は、どんな形でいくよ？」

「そうですね……ギャラリーも多いですし、トランプなどではわかりにくいでしょうし。何か大きく皆さんに結果を見せつけられるモノがイイですね」

「じゃあ大和、俺を勝負に使ってくれよ」

風間翔一さん。

同じ寮の人で、つい先日『風間ファミリー』と言うモノに入れていただきました。

そのグループのリーダーさんで、キャップさんと呼ばれています。人を引き付ける魅力を持った方で、何と言つか……任せれば何でもやってのけそうな、そんな雰囲気を持った方です。少し、兄上に似ている気がします。

「勝負しようぜ、晃気」

「俺？」

「ああ。お前と俺がせっかく別チームにいるんだ。ここらで一つ白黒つけようじゃねーか」

キャップさんは、一歩前に出ます。

「……いや、今日はめんどいんで俺は遠慮しておk」とりゃーっ
って押すなボケェ！」

「おっし前に出た！ 勝負勝負、俺と勝負だーっ！」

「……こゝゆゝきゝっ」

「けたけたけたーっ」

榊原小雪さん。

いつもにこにこしてる……ちょっと変わった方です。

兄上はいつも、小雪さんに対して文句ばかり言っています。

でもいつも、見れば小雪さんと仲良くじゃれ合っているので……少し、羨ましいなと感じてしまいます。

って！ 今のは忘れてください！

何時もよくしていただいていますし、私は何一つ不満はありません
ので……！！

「イイだろ、大和？」

「ああ、勿論だ」

「……俺は？」

「頑張ってくださいね、晃気」

「ですよねゝっ。で、何で勝負する？」

「……そうだな、足で勝負とかはどうだ？ 昔はよくやっただろ」

「イイねえ、それも。んじゃ、ここからスタートして校門まで先に着いた方が勝ちってことで」

「おっし、燃えるぜえっ！」

「イイイヤながら受けたもんだが……翔一との久々の勝負、いっちょ勝たせて貰うぜい」

キャップさんからメラメラと、闘気が膨れ上がっていくのが感じられます。

一方兄上は、いつもと変わらず小さな気ですが、ふつつつと湧き上っている気がします。

『今よりB棟屋上で、決闘が行われます。種目はB棟屋上から校門までの競争です。進路にいる生徒は、至急道を空けてください』

校内アナウンスが響きます。
ギヤラリーが騒ぎたて、場の熱気が高まっています。

「それでは位置について、よいい……どん!!」

どちらが先に、出入り口に飛び込んでいくか。

……そう、固唾を飲んで見守っていたのですが……二人とも、スタート位置から動いていません

「いけないのか、晃気？」

「まあ……多分だが翔一がどこに行くかは予想付くし、なっ！」

兄上の声を皮切りに、二人は走り出しました。

出入口口とは逆方向に。

「まさか……」

「おやおや、さすがですね」

「俺は飛ぶぜっ！！！」

「無限の彼方にさあ行こう！！！」

躊躇い無く、二人は屋上のフェンスを乗り越えて。

皆が下を覗き込むと、兄上とキャップさんは一番高い木をスルスルと滑り下りていました。

そして大きく、一、二、三と踏み出し、全速力で二人は校門の方へ。恐らくほぼ同着。

そのまま校門を過ぎて、二人はどこかへと行ってしまいました。

あの後、大和さんと冬馬さんが陸上部の方を使ってレースを行い、冬馬さんの勝ちという形で今回は終わりました。

またリベンジをすると、大和さんは燃えていました。

他にも、私と同時期に『風間ファミリー』に入られたクリスマスさんやマルギッテさん。

最強と謳われている川神百代さん。

九鬼財閥の御曹司である九鬼英雄さんや、そのメイドさんの忍足あずみさんともお話ができ、徐々に仲良くなれていっていると思います。

こんな風に由紀江は楽しい方々に囲まれて、学園生活を行っています。

よりよい学園生活を送るため、更に友人作りに精を出したいと考えています。

最後になりましたが、また兄上の家にお泊りに言ってもよいでしょうか？

その時は北陸の幸をふんだんに使い、料理をふるまいたいと思っています。

悪筆ですので、ご判読下さい。

あらかしこ。

「……なあ、忠勝」

「ん？　なんだ」

「明日とかさ、ウチに泊りにこねえか？」

「別に俺は構わんが、急だな」

「まあ金曜とかは忙しそうだし」

「俺はそっちの方がいいんだが」

「オメーじゃねえよ。最後に出来た妹分が、さ」

く5月2日く 電車でのほん(前書き)

テスト近くで息抜き一つ。

ってことで短いです。

過去問はそれなりに出来たし、くぐり抜けられればいいなあ。

く5月2日く 電車でのぼん

「ホギョアアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ!

『俺は旅行に来たと思ったらいつの間にか、デカいサルに咆えられてた』。

な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

なんてな。

「おひさ、J r。元氣してたか?」

「ホキユ、キユイ」

2 mは立てば軽く超えてつかね?

黒い毛皮と、隆々した筋肉の鎧で覆われたデカイ猿。

『天下取るなら飛騨に行つてこ 夜叉の大猿天下第一』。

この辺り、飛騨のとある地方の童謡にも歌われてる伝説の生物つてヤツ？

古の武芸者はこいつの先祖に挑んで、負けて食われてつから末路がわからないんだとき。

ま、日本にこんな猿がいるつてのは都市伝説みたいなもんだよな。

実際に見て、知つて、仲良くなつた俺はなんなんだつて話なんだけだよwwwwwwww

んじゃ俺つてば伝説の勇者？ 照れるッ！

「コウキー、おサルさんとお友達？」

「おう。刃牙にいちゃんに紹介してもらつて仲良くなつた、伝説の『夜叉猿』さんだわ」

「ホッ、ホッ、ホキユアアッ！」

「しゅっしゅっぽっぽー、しゅっぽっぽー」

GW初日の今日、辰子の提案通り俺らは旅行。

場所は飛驒！ 刃牙にいちゃんに紹介してもらった知り合いがいてさ。

前にも二回か三回行ったことあるんだけどよ、空気も水も上手くてスゲー素敵なんよ。

川神から飛驒までは電車に乗って五、六時間くらい。

……長いと言っな。

行きがけの電車が楽しーんだろっが！

帰りには英雄が合流してるはずだから、アイツんとこのへりで帰れるから良いんだよ。

ではでは、今回の旅行メンバーを紹介しようではないか！

……つつてもいつもと変わらんのだが。

英雄は外せない用事が入ったみたいで後から合流、あずみさんは英雄に付いて。

冬馬は病院の手伝いで、準もそうだな。

由紀江ちゃんとか大和田ちゃんも誘ったんだがさ。

前者は『風間ファミリー』の面々と旅行に行くんだと。

後者は七浜ベイスターズの外せないゲームがあるらしく、さ。

……しかし、意外な事があったもんで。

あの『風間ファミリー』が新メンバーを入れたんだもんな、しかも三人。

なんでも椎名の辺りが反対して中々新メンバーが入るって事もなかったらしいが。

翔一はあんな性格だし、『新しい人入れねえ？』って話は前に何回

か上がってたっぽい。

でも『入る』までは至らなかった。

それがどーゆー意味を持ってるのか……って、考えても仕方ねーか。アイツらはアイツらで、なんかあってメンバーを増やしてた訳だし。

……今年は、なんかありそうな年になりそうだなあ。

新メンバーか？

由紀江ちゃんとクリスとマルギツテさんみたいだな。

『怒られて、少し喧嘩して、メンバーに入れてもらえました』って由紀江ちゃんからメール来てたし。

まあ、あの娘の兄貴分としちゃ交友関係広がって嬉しい限りなんだがさ。

「小雪い、みつともないからやめな」

「しゅ？ ……ぽっp」そろそろやめとけっ！ ウザイ！！」ぽっ、ぷう……」

「まったく、ガキだねえ」

かわりに休みが取れた亜巳さんが同行。

ってことでメンバーは俺と小雪と忠勝と、板垣四兄弟だな。

……しっかし。

「駅弁、駅弁」

「んなもん買う金ないよ。弁当作って来てやったんだ、こっちを喰

いな」

「でもさあ……旅行は駅弁が醍醐味じゃん！　いつつも喰ってるア
ニ姉のメシはなあ……」

「そう、じゃあアンタは喰うな」

「へっ？」

「私と晃気と、忠勝がせつかく早起きして作って来た弁当を……駅
弁でも何でも一人で喰ってる」

「ちよっ！　タダ兄が作ってるなんてウチ聞いてねえよ！　ゴメン
つてば！　ウチも弁当がイイ！」

なんつーか。

「晃気、俺の膝の上に座らないか」

「あら、そう言っリユウは私の膝の上に座らない？」

「いつ！？」

「遠慮しなくてもいいのよ。ホラ、おねーちゃんに甘えてごらんな
さい」

「イヤイヤ、遠慮しとくぜ。後が怖すぎる……それとアニ姉、猫な
で声はキモいぞ」おっと、手が滑った「ほぼぽっ！？」

ホントに。

「えへへへー」

「タツ、珍しくアンタは寝てないねえ」

「うん、久しぶりの旅行だもん。ちっちゃい頃みたいでね、楽しくってねー」

「……そうかい、そりゃいいこつたねえ」

「でもちよつと眠いかもだから、何かゲームしようよー」

「そうだね、それもいいさね」

……うん。

「楽だな」

「まったくだ。英雄やあのメイド、それと冬馬がいなくてのもあるんだろうがよ」

「準？ アイツは基本ツツコミだから楽。」

「んじゃゲームやろうぜ、狩りゲー！ ウチの双剣で刻みつくすぜ！」

「俺は槍だ。貫くぜ、俺の想い」

「私はねー、大剣っ」

「仕方ないねえ……豚どもは私のハンマーで潰してやるさ。足手まといになるんじゃないよっ!!」

楽しそうだな、四人とも。

「……兄弟つてのは、イイもんだな」

「ただかつおにーちゃん」死ね」酷いわタダくんっ!」

「普通の反応だ。妙な事期待してんじゃないよ」

……まア『弟よ』とか言つて返されてもどーもなつて感じたし、インだけどさ。

あとね、亜巳さん。

「コウキー、僕もゲームゲーム」

コイツも引つ張つてつてくれたら良かったのにねえ。

「ヘイヘイ、何するよ?」

「柿鉄」

「さらつと友情破壊ゲーを持つてくるあたりがスゲーよ、小雪さん」

「で、やるのか? やらねーのか?」

HAHAHAHA、冗談きついで忠勝さんよう。

「やるに決まつてんだろ? 閉じ込めてやんよ!!」

「挟まれた!？」

「ばきゅーむカードもぶつとんでけカードも持って無かったよな、
デメエは」

「っちょ!」

「うんちゅっ!」

「おっ、お前らの血は何色だーっ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7920m/>

のほほんとして過ごすために

2011年8月5日05時26分発行